明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可　明治四十一年九月一日発行(毎月一回一日発行)

女學世界

第八巻第十一號





時間の狂はぬ時計!!
流行に魁せる指環!!

最も氣の利いた時計と最も品格の良い指環を
最も廉く最も便利に御求め遊ばさるゝには?

三越呉服店發行「時計と指環」と題する寫眞版の美麗なる冊子を御一覧被下度候。時計の取扱法より其種類流行はいふも更なり、指環の撰擇法に至るまで、悉しく記して漏す所なし。本誌讀者諸君に限り御一報次第御送付可申上候。

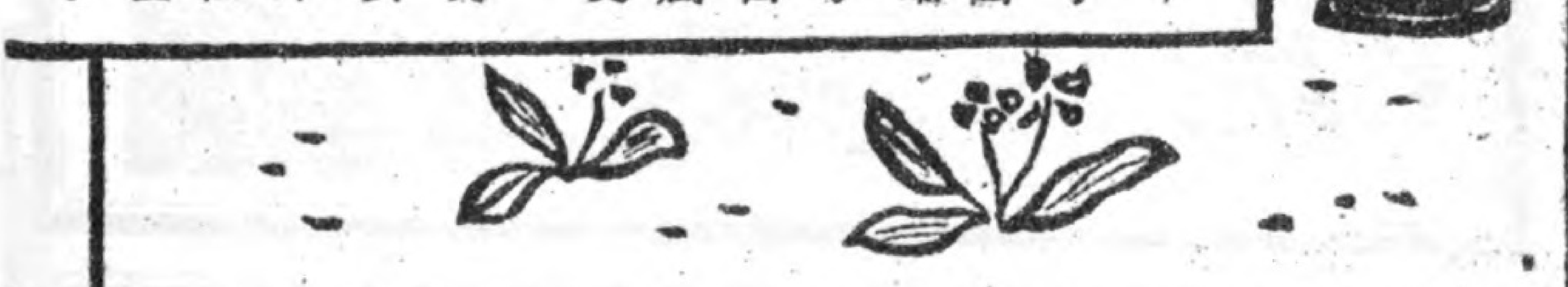
鞄及旅行具目録
靴及付屬品目録
製本出來仕候御一報次第御送付可申上候

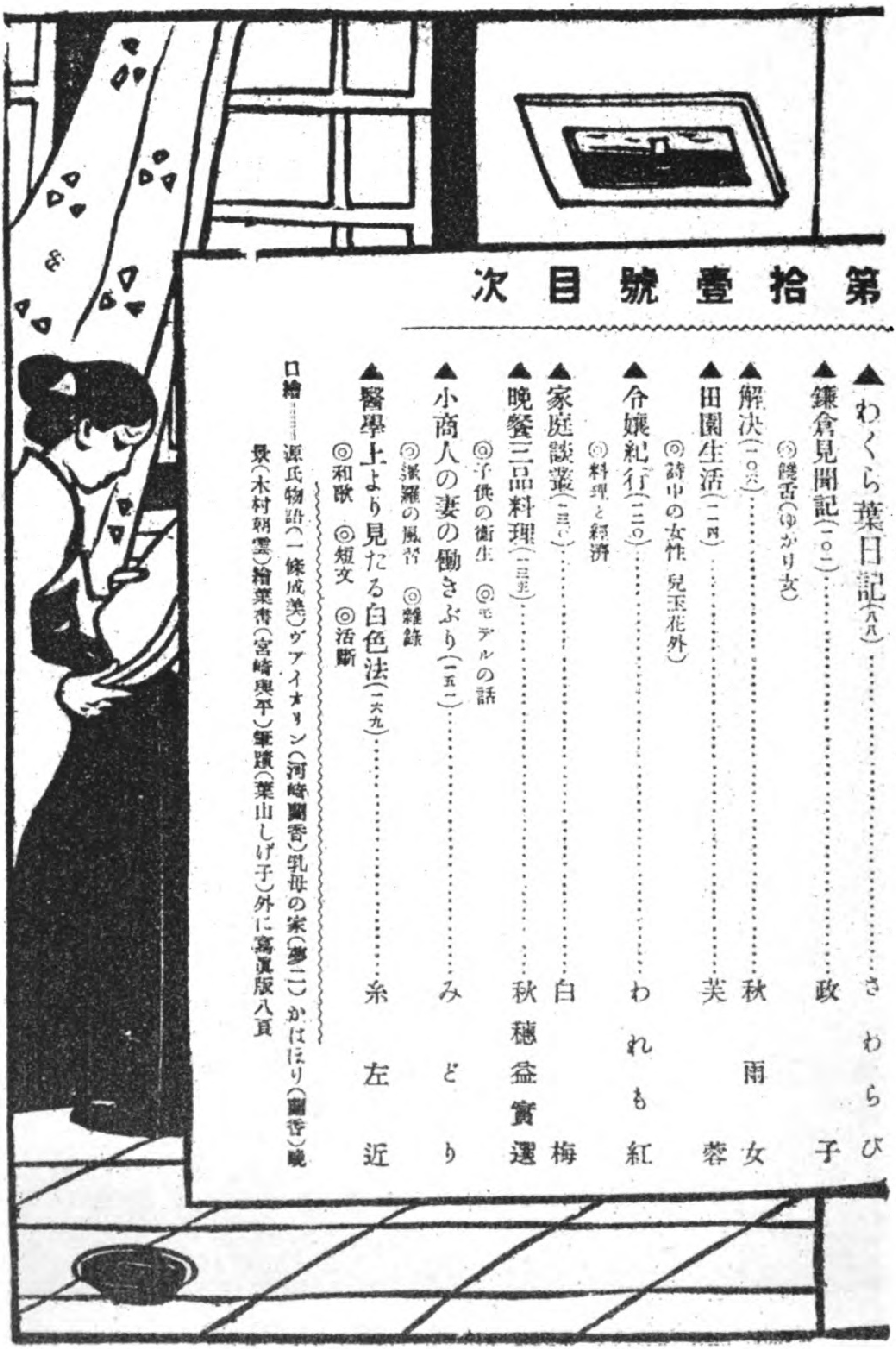
東京日本橋
三越呉服店
(振替貯金口座番號三〇〇番)



女學世界第八卷



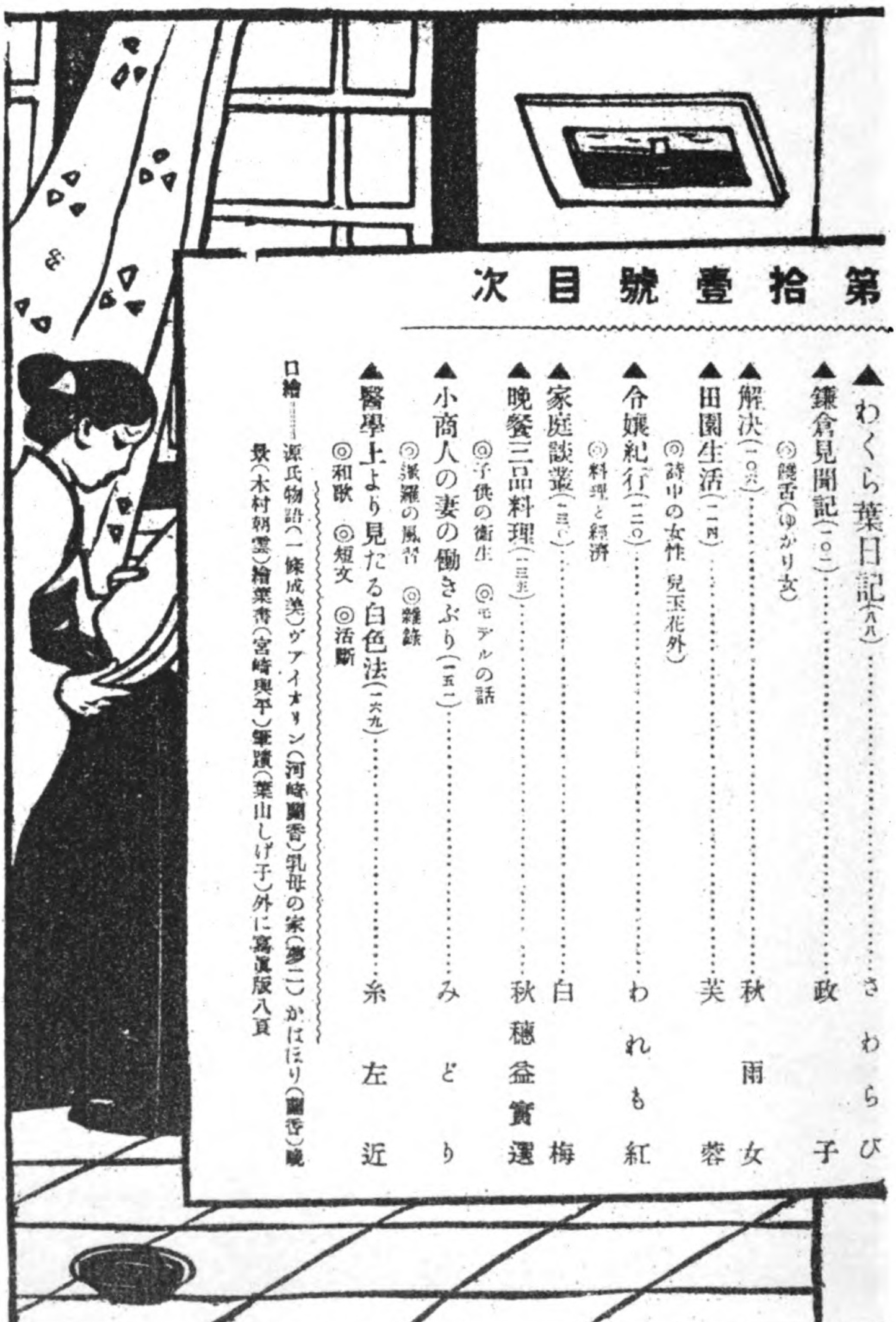




第拾壹號目次

女學世界第八巻





第拾壹號目次

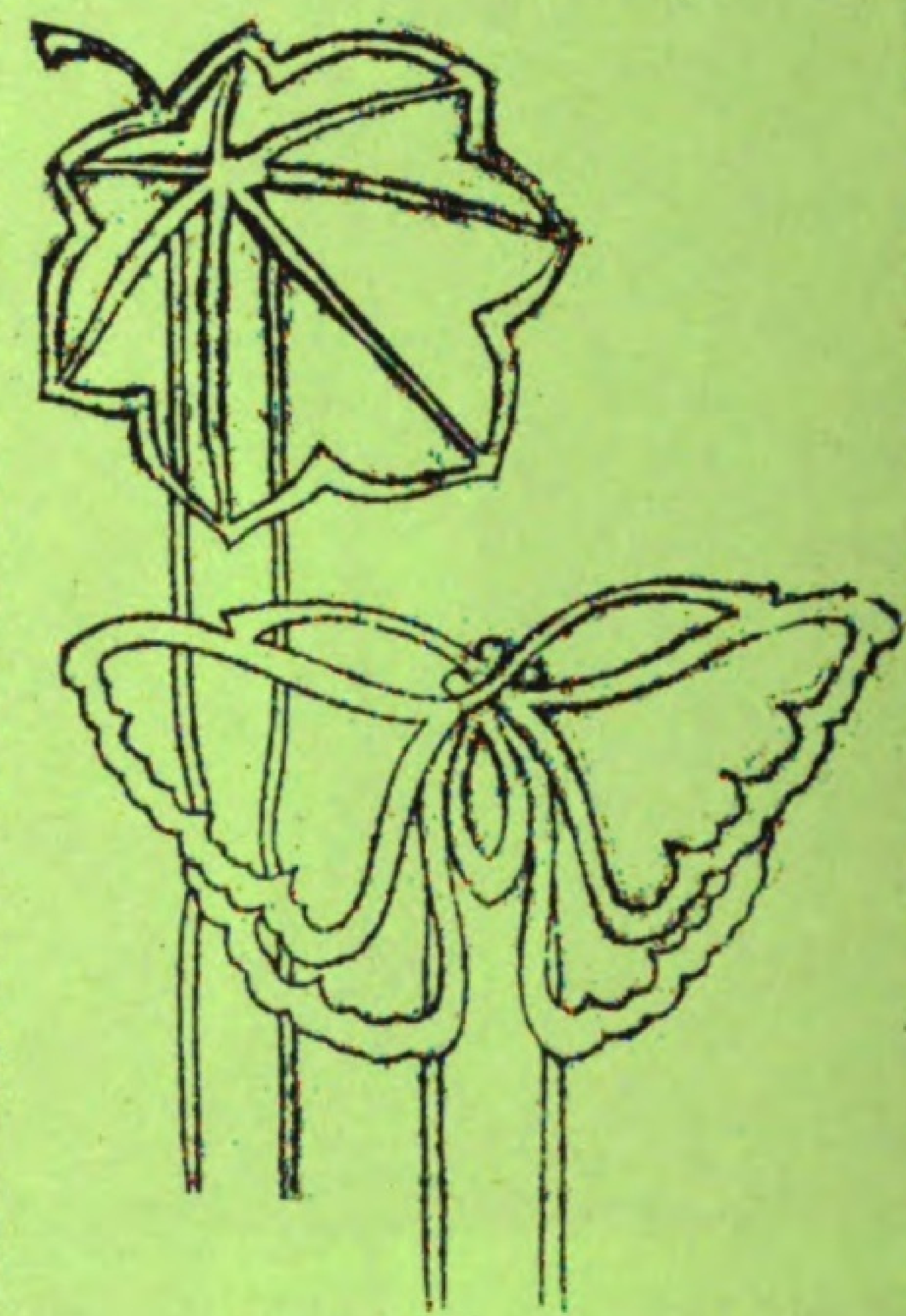


大阪　伊藤仁壽堂製

大西白牡丹

東京橋區傳馬町　小間物小賣大商店

九月一日より二十五日まで
東京名手髪の結びぶり
寫眞陳列會開催仕候
髪の結方研究の爲め豫て募集の寫眞全部を弊店三階へ陳列仕候間御誘合され御遊覽奉願上候



新形透し彫銀製簪

殘んの暑さ薄らぎて女郎花も露の玉を鏤せり今嬢方若奥様の秋涼しき装ひにかざす新案の簪は圖の如き銀製のすかし彫りにて模樣は楓銀杏重ねの蝶其他種々出來致居候間何卒御高覽の上御需用奉願上候

價參圓より六圓まで數種



女(いの一)

曇りなき鏡はクラブ洗粉愛用者の高尚なる素顔を



寫して第一に其特色を示す

文（その三）

永く使ふほど素顔の
美しさを増すはク
ラブ洗粉
の大なる
特色なり



女(いの三)


THE GEM
ゼム
衛生家必携
懐中良薬
やり水、風鈴の音、涼しき風
一日の事終りし夕暮の窓
静かに「ゼム」の玉含む紅の唇
書読む人の美しきかな
繙く書の面白きかな
◉気分を爽にす ◉悪疫を豫防す
◉聲を美くす ◉消化を良くす
◉頭痛眩暈 ◉気鬱胸痞 ◉食傷水傷
◉口熱口臭 ◉眠気宿酔 ◉煙草害毒
◉急切渇 ◉時候傷 ◉船車酔
ゼム七十五粒入十錢 四百粒入五十錢 容器ゼム
定價百六十粒入廿錢 ヶ百粒入一圓二十錢
日本發賣一手 東京馬喰町二丁目愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

紅葉賀

物思ふと立ち舞ふへくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや



花の宴

いつれそと露の宿りをわかむ間に小笹か原に風もこそ吹け



女(ろの一)

根治確證

わきが

新治療藥 ピヨミン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ
丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

原名 ベヘクネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

色の白くなる

品名 ハンドコロン液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくきらい

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢少包料拾貳錢

電話下谷二五三五
專賣 東京神田小川町三十九 オリエンタル藥舘



造花用染料

品質純良
着色堅牢
色澤鮮美

赤、黄、青、樺、鼠、茶、綠、紫、
各濃淡色數種宛て美麗なる箱入となす

各職業學校及女學校御用

發賣元 東京市本所區茅場町三丁目六番地 宮崎金藏

女(ろの二)

日本女子大學教授 白井規矩郎先生編

新選 五十進行曲集

本書は從來の類書と其選を異にし、緩徐、中庸、急速等に區分して、如何なる運動遊戲等にも適用し得る樣に組織せられたるものなり、殊に嶄新壯快なる曲數五十何れも歐米最近の作にして未だ他書に抄錄せられざるもののみなるは、弊房の私かに誇て好樂の諸君に一奏を薦むる所以なり、又本書は高等女學校及び男女師範學校等の教科書に適し又家庭の娛樂として演奏するに適す。

四六倍版 美本全一冊 定價金六拾錢 郵稅金六錢

發兌 東京市神田區上白壁町九 振替貯金口座三四〇九番 一松堂書房

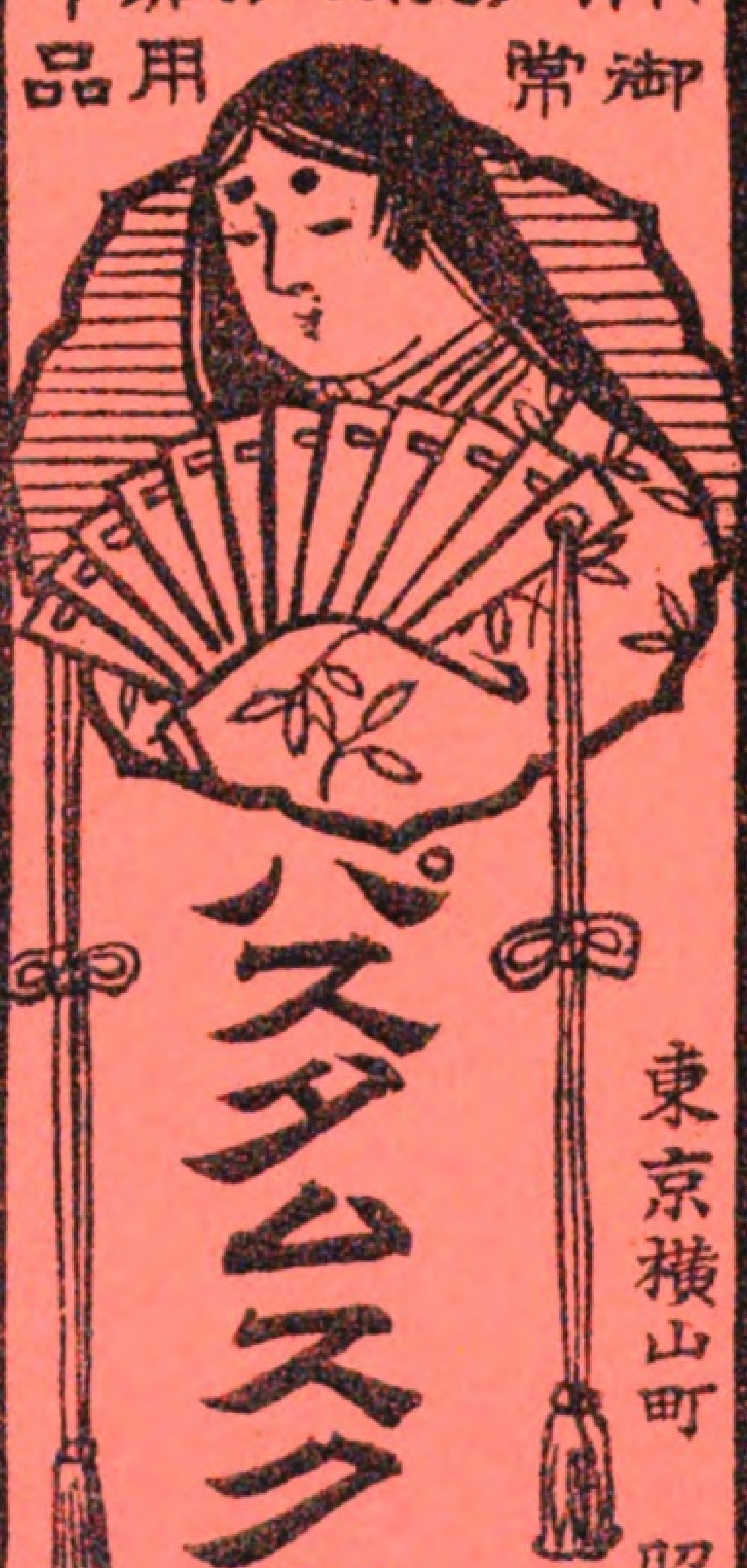
ドクトル 寺島喜三郎先生校閱 水島華月先生著

結婚の前後

價廿五錢 郵稅四錢

◉結婚は人生の最も大事也◉人生の大禮なり◉本書は未婚者の大教訓◉已婚者の大福音讀め未婚の青年男女◉看よ已婚の紳士淑女◉

麻布 兩內親王殿下 御常用品



パスタムスク石鹸

東京横山町 脇田製

作文通信教授

懇切に添削批評す● 規則書希望者は郵券貳錢送れ

東京市京橋區越前堀一ノ十 文章研習會

女(ろの三)



御料
畏き邉りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
洋風化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
洗顔
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
高等香水油
御園香油
高等洋香水
御園香水
高等はみがき
御園歯磨

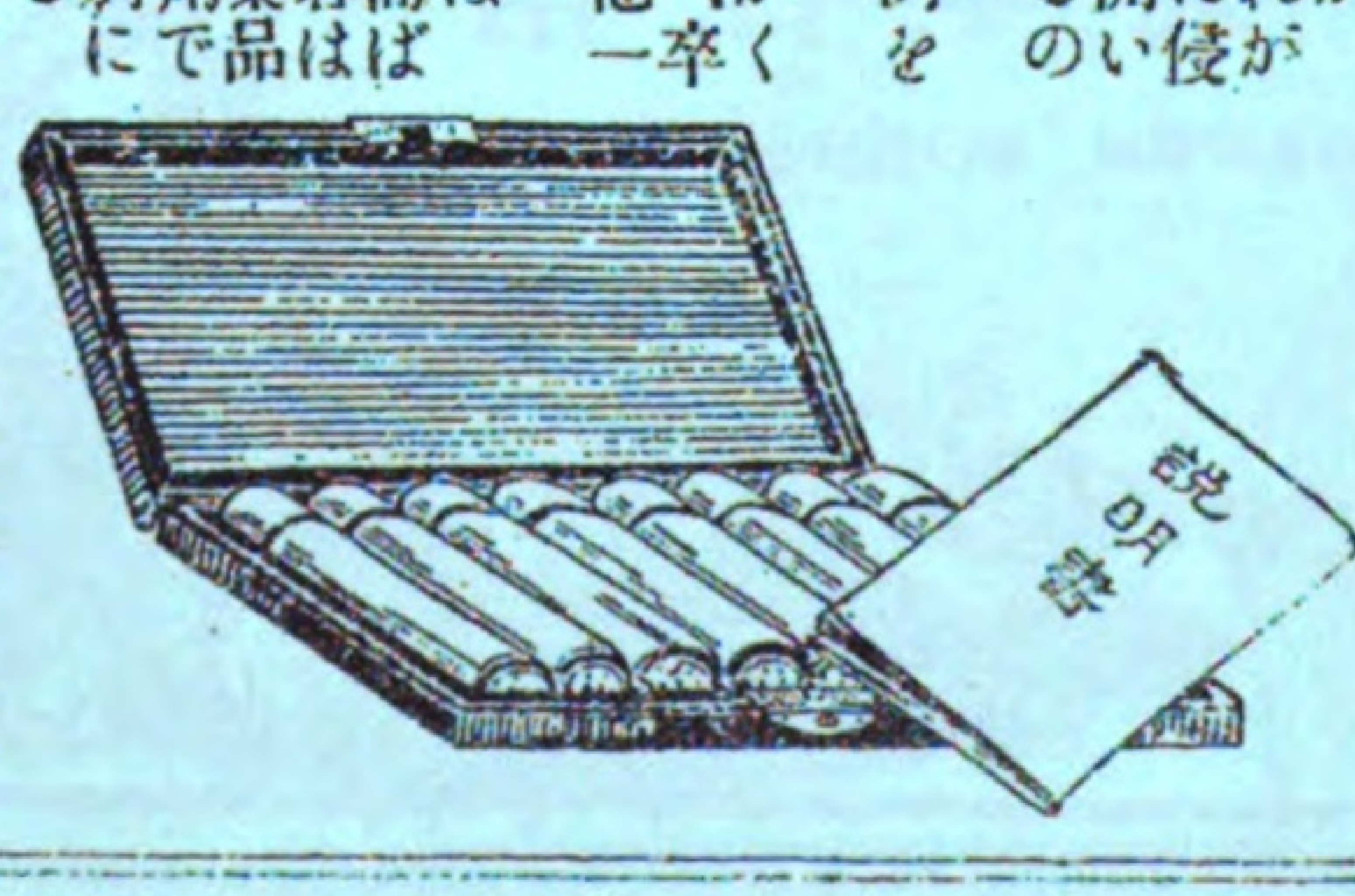
(ろの四)

バイオリン



川崎蘭香筆


千代田
白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新原料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり
白粉 大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢
香油 大瓶卅五錢 小瓶廿五錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三


說明書

女(はら一)


◎東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◎山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）
◎鈴木製ヴァイオリン（金貳圓以上）
◎獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）
オルガン（金參百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器
絃樂器各種
◎舶來樂譜
◎獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は御申越次第直に御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九番

女（はの三）

新刊書

中等音樂教科書卷の參發行

定價金四拾五錢
郵稅金六錢

新選

ヴァイオリン曲集

北村季晴
北村初子 共編

第壹集 定價金參拾錢 郵稅金八錢
第貳集……………………近刊

現下音樂の流行頗る盛んにして中にもヴァイオリン學習者の最も多きは世の均しく認むる處而して之れが教科書として獨乙ホーマン氏のヴァイオリン、シユーレは最も一般に用ひらるゝ所なり編者北村女史は斯道の教授に從事すること既に久しく其間の經驗に依りホーマン氏の教理と相俟ち相交へて學習するに適すべき頗る興味ある樂曲を選み集めてこゝに本書を公にせらる世の青年淑女諸君本書に依り速にヴァイオリン學習上の利便と興味とを收められよ。

懸賞當選
文部省檢定濟

發明唱歌

定價金五錢
郵稅四冊迄金貳錢

山葉風琴。山葉洋琴。鈴木ヴァイオリン

關東一手販賣所

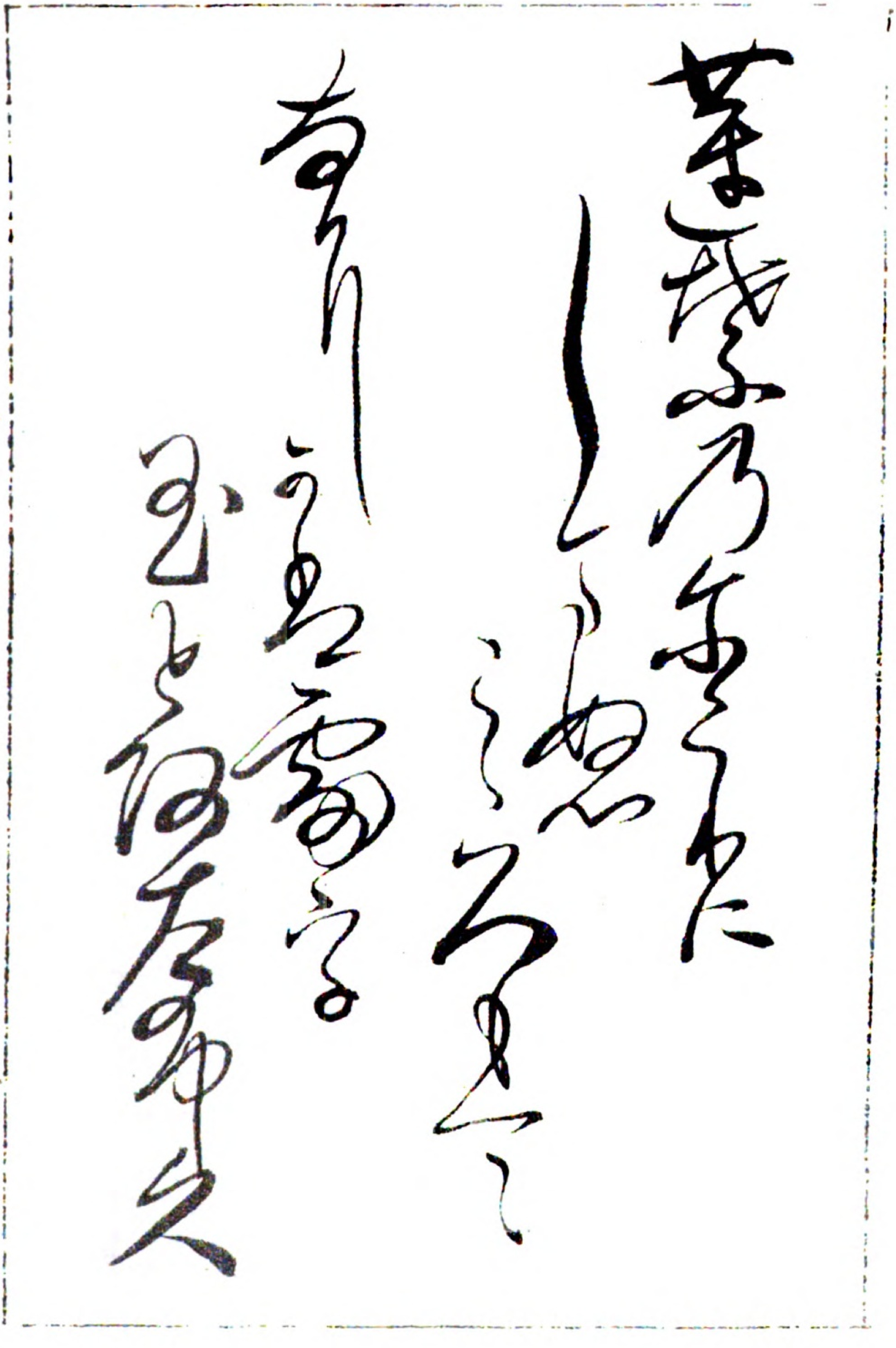
東京市京橋區竹川町十二番地 合資會社 共益商社樂器店 電話新橋五二九 振替貯金壹五八〇

(は 四)

かはほり



川崎蘭香筆



葉山志げ子

造花原料

ハ東京市九段坂

吉住商店ニ限ル

営業種目

造花器具

造花材料

造花及半製品

造花用葉類

造花装飾用達

摘細工材料

新店の特色

待客ニ親切

品質善良

價格低廉

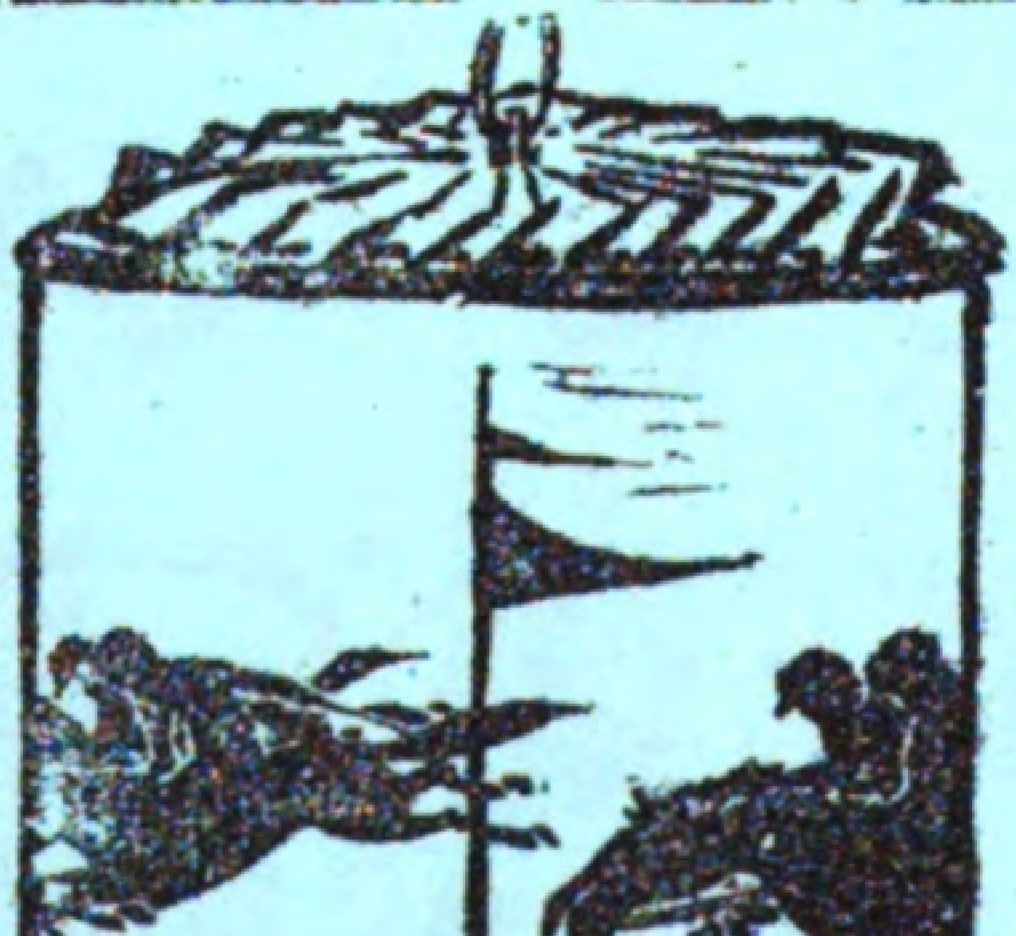
出荷迅速

営業用銀行入用の方ハ東京市九段坂吉住商店宛申込まるべし

日本人むき

ケーバ香油

本品は日本特有の椿の油を搾りたるまゝ佛國へ輸出しこれを以て日本人に適する樣精製せしめ加ふるに芳香馥郁たるローズの香料を以て種々研究したる結果再び輸入せし品なれば和洋香油数十種中最も進歩したる日本人向唯一の香油なり





【特色】

縮毛を延ばし赤毛も漆の如き艶を出し皮膚を滑らかならしめ毛髪を延びよくす

化粧品直輸入商

東京日本橋橘町二

竹間商店

女(にの一)

下田歌子女史題歌

東京道花教習所主幹 塚本鑛吉氏著

最新造花術

▲▲洋装頗優美▲菊判上下巻二冊

▲▲定價各金五拾錢▲郵税金八錢

本書は著者が多年の實驗により案出せしものにして、誰にも分り易く、且面白く學び得る様に述べたもので、啻に獨習用ばかりでなく、教師及學生には無類の良参考書です。

本書の特色

一 趣味と實益 — 花に關する詩歌、表情及内外の興味ある話等を述べて無量の趣味を喚起せしめ、自ら花の形態及特性等を知得せしむるなど實益鴻大。

二 最新の技術 — 新案の方法で和洋の花卉につき精新且完全なる切形、染め方、器具使ひ方及巧妙なる仕組み方等を顯る手順よく圖解を示して親切周到

三 實地に適用 — 斬新なる花簪、婦人帽飾花、欧米新式な豁消せる花束、花輪、香水入り花、電燈花の造り方、花瓶の盛り方、室内装飾其他の應用法。

口繪 美術着色版 一葉 光澤寫眞版 三葉

挿繪 切形 五十枚 圖案 廿五枚

紙質 優等印刷鮮明

斯様に内容が豊富で、取材が多方面ですから、一般家庭に備へて頗る重寶です、殊に同好の人は、時勢に後れない為に必ず本書を繙かれよ。

發行所 東京京橋區南傳馬町 振替貯金二八〇九番 目黒書店

最新寶石入指環



(1) K18 ダイヤモンド入 四百五拾圓

(2) K18 ダイヤモンド貳 中央眞珠壹個入 六拾五圓

(3) K18 ルビー貳エメラルド壹眞珠拾貳 參拾七圓

(4) K18 眞珠入 貳拾五圓

(5) K18 眞珠五個入 拾六圓

(6) K18 中央ルビー壹入 兩端眞珠二個入 拾六圓

(7) K18 ルビー眞珠入 拾貳圓半 エメラルドルビー入 拾四圓

(8) K18 エメラルド又ハルビー眞珠 甲拾參圓 乙拾壹圓 丙拾圓

東京市神田區鍛冶町 白牡丹中西

電話本局二〇四〇番 振替口座一五二一四番

當今一番よくきく月ざらへは何か

●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滞りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに従來の月ざらへは其原理を極めず各々大同小異にて殊効ある良薬なし本剤は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く**特効薬**を蒐集し直接**大醫**に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滞りを子宮も痛めず快よく下す妙薬也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥

改良月ざらへ

女月丸



藥價		特製		送料
一週分	六十錢	四週分	二圓廿錢	各四錢宛
二週分	一圓十錢	六週分	三圓卅錢	

●本剤は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

調劑本舗 東京々橋區東仲通 中橋和泉町一番地 **小宮愛生堂**

懸賞文學雜誌



●毎月壹日定期發行 増刊四回臨時二回

●口繪彩色寫眞外誌友面影數頁皆美麗

▲大判百廿頁挿畫澤山挿入

▲**安い**と

天下に敵なし

價 一冊送共拾壹錢 半年分壹圓五錢 壹年分金貳圓

●臨時増刊に限り例號二倍

●**第四年十二號** ▲▲▲九月一日發兌▲▲▲

內容

○美文○お伽噺○脚本○和歌○小説○日記文○新體詩○新論文○短文○俳句○實用文○新歌謡○文壇餘興○學校生活（以上懸賞募集）其他名家短篇及び英文○女醫顧問○誌友倶樂部

詳細は本誌に就て御覧下さい●最寄の雜誌店になくば本社へ申込んで下さい

發行 東京京橋大鋸町 振替壹七貳九番 **女子文壇社**

大賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 上田屋 至誠堂 良明堂

女(二の四)



竹久夢二筆

晩景



木村朝雲筆



美術造花材料
發賣御案内
ATLAS・SHEARS
北米合衆國、アトラス會社製
總ニッケル鋏數種新着
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衞
特電・浪花一六四三番
電信略號（アマウ）
振替口座四九七〇番
美術造花材料商
營業案内御入用の方は郵券四錢封入本欄切り取り御申込みを乞ふ

文のほの（二）

世界唯一

麻滅（りんめつ）

麻病消渇の根治確證新藥

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治療藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して麻病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず醫より根底根治する事を確證す但し彼の藥式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者努め之を諒せよ藥價壹劑金四圓六拾錢特別製弐劑合壹郵券代用弐割増しの事

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効藥なり。故に梅毒及落淋に罹りて續發する諸症（即ちばいどく、ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。いれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても**誓つて根治**することを確證す從來醫藥賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ　藥價壹劑分壹圓拾錢弐劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢皆々次第送藥す郵便切手代用弐割増しの事

奏効確實 美容新劑

やせる藥

本劑（藥名ボートチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等の如く肥滿質を血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく脂量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸賢は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢弐劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢皆金即刻送藥す

世界無比　最新發明藥

あざ

入墨は廿日　ほくろ　そばかす、なまず　いぼは拾日　目に見らず美麗に除去

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず**保險附**にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來簡者へ**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし、實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれば其症に適應する藥を送付すべし價は各壹劑分壹圓拾錢參劑分弐圓六拾錢六劑分五圓拾錢拾弐劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用弐割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

以上四藥　**專賣元**　東京神田區五軒町拾九番地　**日新館藥房**

白色特効

ペーアス石鹼

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々賛辭を要せず爾だ單に其主たる特効の一二を揚げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色を白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香稍部として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て他人を眩着する内國製の粗惡品と玉石混同視することなかれ（昨年輸入の五萬個は既に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上弐圓參拾錢

輸入一手　**專賣元**　東京神田區五軒町拾九番地　**日新館藥房**

女（ほの二）

大發展大飛躍の本誌には如何なる記事があるか

常識修養

婦人世界

婦人の友

九月一日發行　毎月一回一日發行

第十號　一冊拾五錢　郵稅一錢五厘　六冊郵稅共九十錢　十二冊一圓七十五錢

△嫁と姑は何故に仲惡きか……村井弦齋

△我家に於ける育兒實驗　加藤醫學博士

△古今文藝談　本號より掲出の新案大文字

△鼻を治療して眼病全治したる實驗

新案懸賞

日本服には何處へ隱袋を附けたら宜きか

毎號新懸賞數種あり婦人は何人も投稿せらるべし詳細本誌

△女學生が友達より感化を受けし實例……東京女學館講師　藤崎常子

△先妻を離別して持參金と結婚せし軍人……女子大學講師　戸川殘花

△私が三十歳の青年ならば如何なる妻を望むか……佐治實然

△私が新婚旅行に依りて得たる利益……平出辯護士婦人　平出禮子

△二尺八寸の布で前掛の裁縫法（磯村春子）

△他家を訪問して不快に思ふ事

△初めて西洋風の結婚式を擧げたる人…

△私の讀書法　岡田八千代子

△小兒の齒は如何に注意すべきか……

△弦齋夫人の茄子料理談

△我子のために如何なる嫁を求むるか……鳩山春子

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番）賣捌全國書店

女(ほの三)

女子高等師範の媬母講習會



（佐藤華江氏撮影）

田舍道





女(への三)

女（への四）

轟の瀧



巳前播野平泉附近

和装せる米國女學生



米國女學生の一行が三越呉服店にて日本服を着用なせし處なり（修學旅行の爲め遙に本邦へ渡航せし、）

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黒き男女にても特別製貳 純白色に變化 し驚異の感となるを劑を用ゆれば忽ち肉體確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製 清血劑 にして頑強なる皮膚病、猛悪の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の 惡血毒血 惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を 純白艶美 ならしむる奇効顯著の内服水劑なり色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり(注意 從來種々の外用塗布的化粧水及諸大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

● 眞正舶來 最優等香水

佛國パリー及英國大會社製造の眞正舶來香水を直接輸入販賣す、彼の外製及レッテル等を舶來品に模倣し中味は和製品を詰むる模製贋造物とは價幾分か不廉なれども其香氣の優秀佳良なる點と一滴たらせば確實に一週間以上も能く其愛すべき芳香を保存せる點とを比較せらるれば寧ろ頗る經濟的の輸入香水なりといふ一度御試用の上御好評續々愛用賜らんことを

價一瓶二圓半以上拾圓迄數種有之候

● 毛の必ずはゑる確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髮發生藥なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髮及はゑぎわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人本劑特製を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生すること確證す本劑は世にありふれたる種々雜多の毛生藥とは其効眞に天地月鼈の大差あるに付玉石混同視する勿れ藥價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち 快通流下 する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び 血塊 にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及 惡血毒血 を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて 確實顯著 なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の 大盛 を羨み近時續々怪しき無効な 類似僞藥 顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療實驗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても 誓て根治 し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割増のこと

以上六種 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房 (電話下谷五四六番)

女(との二)

懐妊避妊自由自在

子なき人は本書を讀みて懐妊の法を知るべく又子が出來て困る人は避妊の法を知るべく實に本書は懐妊避妊を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割増

全壹册 拾五錢 送料貮錢

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井 川名助次郎

らい病

此のらい病藥は獨利の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當舗主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐いて其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする營利主義の賣藥に非ず

ザノサール 一ヶ月分 貮圓

複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

醫師は癩病者を診察せば届出る規則あれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

博文館發行圖書陳列所（館内に設けあり）

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書書類數十百枚を印刷し得べし

本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

●定價 二オンス堅罎入送料共 金參拾錢 郵券代用壹割増

東京神田松富町十二番地 中村屋商店

どもり

聲悪き人返信郵券差附あれば余が全治せしハーエル博士の吃音必治療法を教へ升

東京礫川指ヶ谷町 櫻井

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑 河奈とめ女

女（その三）



最も高尚なる御洋裝

▲材料の精選、技術の精巧、價格の低廉は本店の特色なり
▲男女洋服及び小兒服の調製は勿論、其他一切の附屬品を取揃へあり
▲嬰兒洋裝に對する必要品を取揃へ一箱となしたるベビースボツクスあり

秋高く、正に交際の季節に入れり、此時にあたり、貴女紳士令孃令息方の御愛顧に報ゆるため、本店はこゝに一大發展をなし、從來の東京出張所を左の箇所に轉じ、最も新形にして最も高尚なる御洋裝を調進せんとす、何卒繁御用命を伏して希ふ、

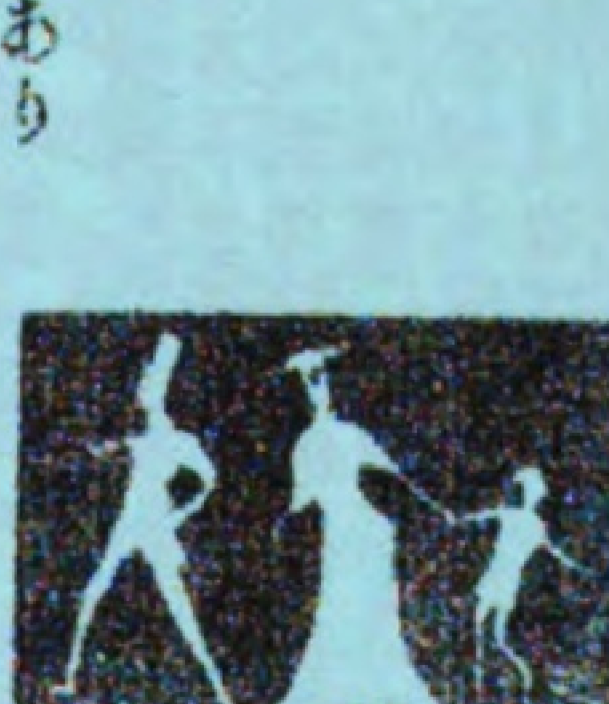
▲男女小兒洋服の最新流行の出來合ひ品澤山あり
▲京濱市內は御一報次第直に店員參向す
▲御遠方の御方には御申越次第御注文に就ての寸法の取方其他い注意書を進呈



横濱市辨天通四丁目八十番地
電話三四四番
中野屋洋服店

東京市神田區鍛冶町二十七番地
電話本局二千九百〇一番
同出張所

韓國京城
同出張所

裁縫女學校卒業生



（日本橋區濱町に在り）

◎毛髪を美くする最新劑◎

如何なチジレ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美しく出來ても髪の毛が惡くては遂にお化粧の目的は達し得られません殊に近頃は髪の毛の黑きを好む日本人に不向きな香油を毎度見受ますが是れは一面から言ひますと國粹破壞であつて嘆はしき次第と云はねばなりません

茲に於て當研究所は常々其の弊を思ひ多年の實地經驗を重ね調製したものが「高砂白毛染」で……此の液は白髮赤毛を染むるに最も完全なるは勿論どんなチジレ毛も一劑で必ず美くしくなります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重寳品として頗る高評を博して居ります

尚又該液は在來品の如く御使用後手拭なぞを冠ぶる不便なく極めて輕便簡單なる液體で衛生に關しては特に醫學博士の無害證明を有します

◎ちぢれ毛直し白毛赤毛染 **高砂**

大壜四十錢
小壜二十錢

送料大小壜共一個四錢

東京市神田區橋本町三丁目四番地（電話浪花千百五十二番）

東京化學化粧品研究所

女 5の二

女(ぢの二)

美形隆鼻術

（はなをたかくうつくしくするじゅつ）

本術は唯一回の注射に依て低き鼻を隆くし見事美形ならしめ終身凹むことなく身體に害を及ぼさゞる安全確實の文明的手術なることを保証す

施術 午後三時より夜迄

大學醫院辭職開業

神田區今川小路二丁目十一番地（九段坂下節操教會裏通）

和田耳鼻咽喉醫院

和田昌訓

●婦人科
●小兒科 **專門**

午前宅診　午後往診

▲入院を許す▼

東京市麹町區飯田町四丁目九番地

女醫 **鷲山彌生**

電話番町七八四番乙

造花材料

器具並半製品

●刺繍用器具 並に材料

●袋物器具 並に材料

●摘ミ細工材料 塌細工

●造果用材料 並に木型

東京本郷區弓町二丁目

倉持商店

切取線

○此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す

（○女學世界 九月號）

女（ちの三）

新案特許出願

やまと指環

(印材入指環)

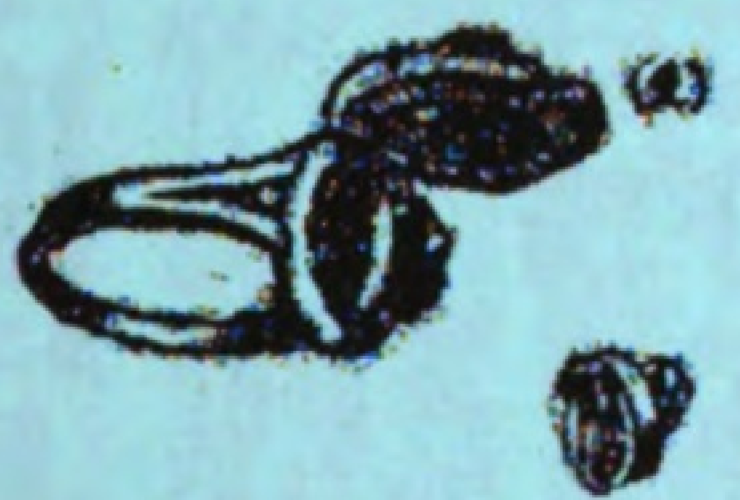
十八金 彫刻翁面

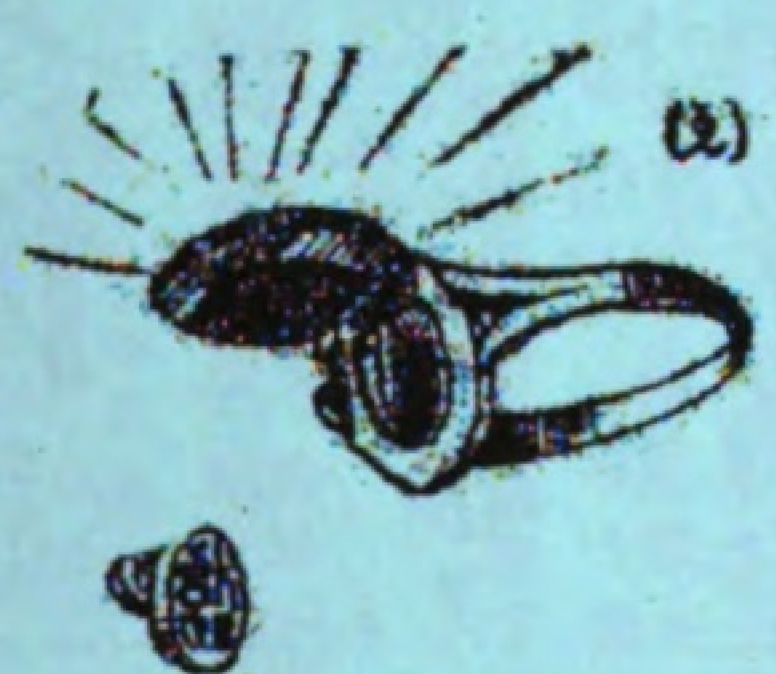




定價十七圓五十錢

十八金 寶石入





定價十七圓五十錢

1圖は指環の表面

2圖は表面の蓋を開け内部より印材を取り出したる圖

彫刻、寶石入、澤山取揃申候

意匠御好に應じ調製仕候

四季流行の魁美術貴

金屬袋物帯しめ

治

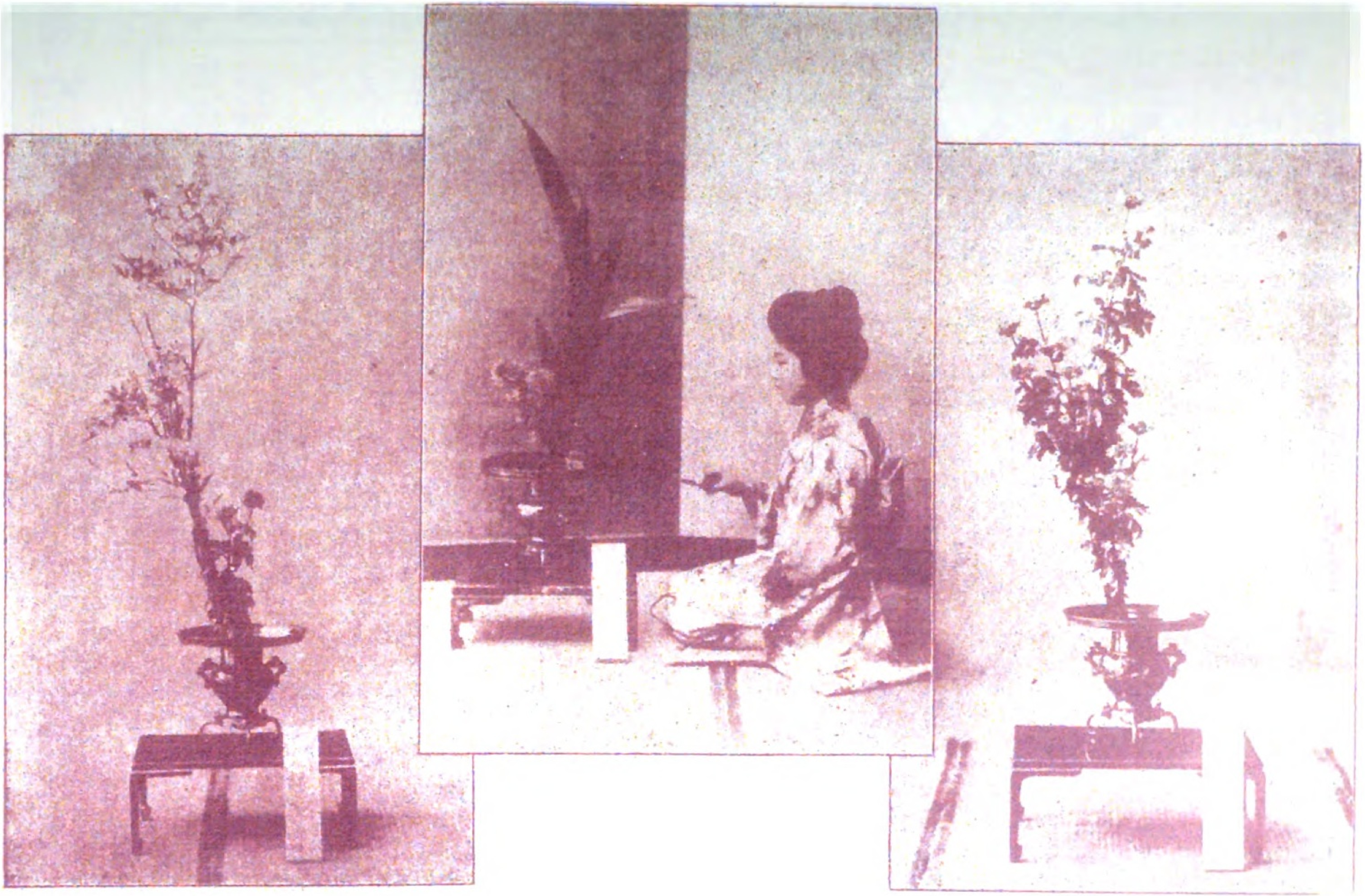
東京日本橋人形町通り

澤田治助

長電話浪花二五六九番

振替口座一一三七三番

挿花の稽古



女(りの一)

幼年畫報 第三卷第十二號 增刊

虫合戰

小波君作　古玨君畫

九月十五日發行

全一册洋裝菊判石版數度刷十六頁
本文活字二度刷十六頁寫眞版挿畫四頁
鮮麗比なし
正價金拾錢郵税(本號に限り)二錢

東京本町　博文館發行

ひイろい〳〵秋の野で、虫の戰がはじまつた、東の大將大ヤンマ、小隊長には赤卒參謀長には緋縅蝶、軍旗は赤や白い花、西の大將は熊蟬で、これに續くはカナカナやミン〳〵ジイ〳〵油蟬、また鈴虫やきりぎりす、笛と太皷で征めかける、砲彈運ぶはカナブンで、負傷者運ぶは蟻の役、勝利は東かはた西か、また〳〵戰は酣で、たゞがや〳〵と云ふばかり、詳しい公報知りたくば、皆さん御覽よ『虫の合戰』



ちぢれもくせも　二大奇法
毛はへうけあい

披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆様の進めにより御

女髮師　東京麹町區飯田町四ノ十六　安部歌子

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤毅著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵劵二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町　衛生書院

●佛國土產の最新白色新劑



色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何にり其効能の神秘なる論より證據郵劵二錢送れ美容のしるべ呈て教ゆ

東京市東兩國小泉町二十七番地　愛隣藥院

第五卷第九號九月一日發行

日本唯一青年雜誌

ハガキ文學

△本誌は青年文藝家の好誌友なり

每月懸賞募集

○短篇小說……………………町山花袋選
○普通文……………………沼波瓊音選
○新體詩……………………兒玉花外選
○はがき文……………………橋本春郊選
○和歌……………………大田みづほのや選
○新川柳……………………窪田而笑子選
○新俗謠……………………桑田春風選
○俳句……………………內藤鳴雪選
○スケツチ……………………太田三郎選
○漫畫……………………同選
○繪葉書圖案……………………同選
投稿は何人に不拘大歡迎

定價　一冊郵送料共　金拾壹錢　七冊前金　金七拾五錢

△郵便切手代用の節は必ず一割增のこと
△振替貯金口座番號『貳八參八』へ御拂込被下べく候
△凡て前金に非ざれば送本仕らず候

發行所　東京市小石川區久堅町　日本葉書會

……●●●賣捌日本全國各書林●●●……

女りめ（三）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亮嘗丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣藥にて効なきとて落膽せず、是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ、陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

本舖　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●

東京市本郷六丁目赤門前　瓜生藥局
麴町區紀尾井町三　齋藤藥局
日本橋區檜物町十八　龜田藥局
京橋區八官町八　野田藥局
神田淡路町二の四　森田藥局
芝田町四の一二の二　加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二　岩本支店
赤坂田町四の一　竹内藥局
同青山北町五　四井藥局
本所吉岡町廿五　小島藥局
四ッ谷大傳馬町二　永野藥局
高松市片原町　新明藥局
堺市大寺南門東入　一色藥局
京都市下京區寺町通り石藥師角　福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り　安江洋反物店

大阪市平野町二　丹平商會
丸龜市本町　櫻井藥局
名古屋京町三丁目　飯田藤七
同　同　荒川長太郎
同　鐵砲町三丁目　谷田藥局
神戸元町一丁目　西村關東堂
廣島市橋本町　萬代藥局
神奈川青木七軒町　水崎藥店
仙臺市新傳馬町　櫻井藥局
岡山市橋本町　加藤藥店
弘前市下土手町角　菊地藥店
大津市菱屋町　磯崎藥局

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醬油

宮內省御用達

千葉縣　田中玄蕃釀造　銚子港

音樂生の夏期講習會



東京音樂傳習所飯田町二丁目

そよと吹く
冷風は活動を促さる時、
御婦人方に趣味と
實益とを與ふるものは
シンガーミシンの
外にありません

特減即金販賣
廉價月賦販賣
無料出張教授
無料機械修繕

明細書 御申越次第無代送呈す



横濱市山下町六十一番館
シンガー裁縫機械會社

東京銀座店
仙臺國分町店
札幌西六條店
長崎舟大工町店
大阪心齋橋店
神戸元町店
名古屋玉屋町店
廣島猿屋町店

女(おの二)

明治四十一年度入學試驗問題詳解

算術ト代數學

△全一册洋製菊判　紙數約百卅頁　正價拾五錢郵稅(本號ニ限)四錢▽

附錄　明治四拾年高等學校大學豫科入學者選拔試驗報告

試驗なるものは夫れ砲戰の如きか、砲戰に於ては敵の位置を知り距離を確め、而して後照準を定め速力を度り一發以て的否を試むるものなり。入學試驗に合格せんとする豈之れと異ならんや、問題の難易を探り自己の實力に對比す、是れ位置を知り距離を確むる者に非らずや、豫習を爲し學力を鍊る是れ照準を定め速力を度る者に非らずや、而り然して一試忽ち合格せんか其感何ぞ砲戰に於ける命中と撰む所あらんや。本號は明治四十一年度高等學校入學試驗問題中算術と代數とに詳解を付し、加ふるに試驗委員の講評を以てす、恰も戰況報告の如く演習戰評に似たり、後の砲術を學ぶもの否數學受驗者は本號を精研實修し所謂位置と距離とを度り照準と速力の算出との習錬を爲さば、未來の實戰に於て一の逸れ彈なく、見ごと登第の月桂冠を戴くを得べし。

代數に於ける評論

同　講師　板橋盛俊君
第一高等學校教授　友田鎭吉君
東京帝國大學理科大學助教授　中川銓吉君

算術に於ける評論

第七高等學校教授　村上春太郎君
第四高等學校教授　田中鐵吉君
第三高等學校教授　渡邊庸君

△數學世界　第二卷第拾壹號　臨時增刊▽　九月十日發行

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

文(その二)

女（ぬの四）

秋日和　(新らしき・家のよそほひ)



(横濱中野屋洋服店案)

女（るの一）

次(ろの二)

伊國フローレンツ大學教授醫學博士 パウル、マンテガッツァ氏著

在醫科大學 秋吉無聲氏譯

醫學上の戀愛觀

近刊

全一册洋装並製四六判紙數二百餘頁

正價金三拾錢 郵稅六錢

歐羅巴各文明國の教養ある男女間に極めて質實なる眞面目なる研究として空前絶後の好評を博したるマンテガッツァ博士の戀愛論は今や秋吉無聲氏の忠實なる譯筆によりて錦上更に一段の光彩を添へて著はれたり。戀愛といふ人生の大問題の解決を得て神身の性的自然性を圓滿に發揮せしめんとする男女の必讀の良書は本書を措いて他に求め得られざるべし

東京本町 博文館

萬朝報掲載好評小說

大塚楠緒子作 滿谷國四郎畫

露

價六十錢 送料八錢

閨秀作家として現今の文壇を風靡せる大塚楠緒子女史が心血を濺げる本書は精細なる女學生の描寫山墮して「露」と云ふは女學生の理想が「露」の如く果敢なきを意味するか或は其操行の「露」の如く美はしく輝けるを意味するか將た彼導は敢築に則らずして到底存在し得ざる信仰を持てるを意味するか之を知らんと欲せば本書を見よ

小說 木下尚江著

乞食

好評四版發行 定價卅五錢 送料六錢

●著者の序文自ら食る所の生が眞の生に非ることを知る自ら恐るい所の死が眞の死に非ることを知り之を知りて且つ、常に迷ふ、明の知らざるが爲めと雖も、質に志う前きに閃る也記してれら賤つ。

合本 好評三版 發賣

小說 松本雲舟譯

何處ニ往ク

總クロース菊判美裝 挿畫四葉紙數五百頁

定價壹圓廿錢 送料拾貳錢

ポーランドの大文豪シエンキヰツチの世界的傑作近世文壇の大產物『クオヷヂス』の譯

東京本郷弓町 昭文堂 振替七六七四番

女(その三)

女學部新設

新學期開始

第一號十月五日發行

九月三十日迄 **入會金免除**の特典あり目下入會の最好機なり。

新設趣旨

本會は中學講義錄の發行に從ふ事既に五年進歩せる通信教授法は自宅獨習の目的を達せしめ得べきことを信じ今回更に女學部を新設して實用女學講義錄を發行し女學校に入ること能はざる人の爲に女子必須の學科を遺憾なく講習せしめんとす

講義錄

女子唯一の目的は家庭の主婦たるに在り本會講義錄は高等女學校令に準據するは勿論勉めて實用に重きを置き以て圓滿なる家庭の主婦を作ることを期す▲講述最も**平易**にして懇切、總ふり假名の**談話體**なれば何人も解し難き憂なきことを信ず

實用女學講義錄

規則書 申込次第直に進呈す

學科組織

本會は多年の經驗により短かき時間と少き學費とを以て修了せしむべき組織とせり即ち講習全期を一ヶ年半となし之を三學期に分ち毎月講義錄二冊を發行す講師は皆各科專門の大家のみ也。會費は最も低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に卒業するを得べし

女學雜誌進呈

本會々員は講義錄を受くるの外毎月女學雜誌『姫百合』を無料進呈せらるゝ大特典あり『姫百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說及び純潔なる家庭小說を收むるの外會員諸孃の文章和歌等を斯道各家の選評を經て掲載すべし。

東京神田駿河臺
電本局三千四番

大日本國民中學會女學部

女(その四)



九月（長月）

行事——上旬に二百十日とて農家の大厄日あり。二十六夜待も亦上旬にあり。高丘に登りて月出を待つ。九日重陽菊の節句と称し栗飯を炊く。下旬に十五夜の月見あり。薄団子、枝豆なますを捧げて観月の宴を張る。

季節——「白露」。「秋分」。金風颯々気温稍々降下して秋涼を催ふし、南風は徐々に北風を交ふ。此月の下旬北海道に初霜現はれ、富士山に初雪を見るを常とす。

家事——残暑酷しき時節なれば、摂生に注意すべし。又水浴せんと欲する人は此の頃より始むべし。其他秋の用意いろいろあり。瓜、茄子の塩漬、梅干の土用乾、紫蘇の塩押等孤れ虫の季節に於てす。下旬は移りかへなれば衣服其外いろいろ手入をなすべし。

食品——蓮根のくるみあえ、栗のうま煮、銀杏のひらきよせ、鮎の甘露煮、ぼら、かます、鯖、鰯、鯛。

遊楽——見るに月、蓮、秋の七艸あり。聴くに松虫、こうろぎ、鈴虫ありて、そゞろあるき最も妙なり。観月によきは江州の石山寺、京都の鴨川、嵐山、東都の隅田川、愛宕山。蓮によきは亀井戸、麻布仙花園。七艸は向島百花園。虫の音は道灌山。

三日曜——六日、十三日、二十日、二十七日。（二十三日秋季皇霊祭。）





生存の困難に處する道

世間には隨分血で血を洗ふ骨肉の爭はある事ですが、其の茲に至る所由はと言ふと例の「金錢の前には親子も他人」と言はるゝ利害問題です。固より世間が恁ういふ傾向になりゆくのは種々な原因のある事でせう。儒教の消滅、武士道氣質の衰微、忠孝思想の稀薄、個人主義の跋扈——いろ〳〵の個條が數へられませうが、其の重なるものは生活難の壓迫です。何と言つても人は生きてをる工夫が第一の問題ですから、勢ひ大抵の人——富裕ならぬ人——に取つては第一も生活、第二も生活、第三も生活。で、是に頭腦を占領されて了つて不覺骨肉の情も其方除の形になる。これが事實です。

恁う考へて來れば日に〳〵進む生存の困難といふものが、人の心情品性に甚麼影響を及ぼすか、從つて又其の人が何ういふ運命を背負うてゆくかは、今更に考ふべき問題だと思ひます。

△品性の消失

何年の卒業か、兎も角も高等なる某女學校の卒業生なるは確かな事實ですが、花羞かしき美貌に婦人同士を

さへ恍惚たらしめ、湧くが如き才辯は泉に映る月影の爽やかさ、と言つたやうな一婦人、然も之れが自活しながら遣り抜いたのであるにも拘らず、平常の服裝も流行の先驅、一歩も人に讓らぬといふ華美贅澤、知人の一人が不思議に思つて或時尋ねて見ました處が、其の婦人は西洋小間物の行商をするのでした。行商と言つても詰らない田舍廻りをするのではなく、東京横濱——中にも横濱——の西洋人を對手なので、例の美貌と才辯とが大いに役立つたのでせう、非常によく賣れるので、一西洋館を訪れゝば歸りには必ず意外な多額の金を得て門を立出でる例だと話したさうです。「その代り隨分厭な思ひをする事もありませうね」と訊くと、其の婦人が——凄い程美しい顏に冷然たる笑を浮べて、「それは貴女最う接吻される、手を握られる位は當然の事ですよ」と言つたさうです。何しろ辣腕なものだと知る人は皆舌を捲いてをるのですが、さて其の辣腕は幸か不幸か。かゝる辣腕を養ひ成したと共に一面品性其の他に受けた影響は何麼物でせう。思へば一種の悲劇ではありますまいか。然もこの悲劇の根底はやはり生存の困難に外ならぬのです。誰か滿ち足りた學資があれば其の樣な事を好みませう。

敏腕と立てられ全盛と唄はるゝ藝妓などの輝かしい噂を聞く毎に又悲劇といふ感が起ります。彼等の中には隨分惠まれたる天分才能を持つてゐる者がある。もし之が生活難——かの冷酷なる生活難といふものに壓迫されないで發達したならばと痛ましく思ふ。「久しうして其の臭を知らず」で、後には彼等自身も平氣の平左になりませうが、其の初めはさすがに一滴の涙があつたに相違ありません。私は曾て裸體畫のモデルになつてる婦人の涙ながらの述懷談を聽いて、又しても生存難の怖ろしさに戰慄した事があります。

女子大學を出た何處を出たと言つても、生活難は遠慮なく彼等を襲ひます。現に女子の最高の或る學校を出てゐる婦人で、小使にも足らぬ給料の女事務員でうろ〳〵してゐるのを澤山に知つて居ります。最高の教育を

受け乍ら此現象は寧ろ驚くべきであるが、けれども是は事實です。

でも是等は未だ幸な方で、燃ゆるやうな希望を抱いてゐながら、不如意のために望む修業も學問も出來ず空しく世を暗い窓から眺めて厭世悲觀に落ちる婦人は何程あることでせう。男子とても其の通りで、中學にも入り得ぬ、或は中學以上には迚も行かれぬといふ樣な事情の爲に、青春紅顔の時代から早くも生活難の苦い味を嘗めるものは澤山にあります。

して見れば「今の青年男女は餘りに早く生活などにくよ／＼する」と能く世人が申しますが、然しそれは止むを得ぬ情勢。無理もない事。從つて悲觀的に傾く人の滔々として生ずるのも寧ろ同情に堪へぬ譯です。

然しながら世の中は唯泣顔を掻いてゐたとて何うなるものでもありません。

△生活難の縮圖

更に申せば此の生存難の日に月に進んでゆくのは厭然たる大勢で如何ともし難いのです。人々の自意識の進歩、欲望の擴大、奢侈贅澤の傾向は、たとへ物質界の進歩が著るしいにもせよ、到底此等の急進には追付けぬので、この點だけでも常に焼石に水幾滴の觀を免れぬのに、更に經濟組織の不完全から來る貧富の懸隔金融の逼迫があります。イヤ這麼理屈を長々と申すにも及ばぬこと。三越、白木の花やかな大賣出しは滿都の士女を惹き付けて了つて、場末の呉服店では番頭が淋しさうな顔にペロリ閑としてゐる姿は、取りも直さず小資本家が大資本家に兼併さるゝ形勢の縮圖でせうさては官吏に就て見るも、判任官最下級の十二圓が十五圓になつた位の違ひで、現今の俸給令といふものは詰り明治八九年頃の制定を略ぼ其儘と言つてもよい。處が物價は明治初年に比べては三倍にも五倍にも飛上つてゐるので、詰り月給取りの收入は年々に段々少なくなつてゆくも同然、これは又取りも直さず一般世人の收入から極て薄い利益分配を受けてゐる雛形とも見做されます。イヤ此の樣な事を幾千數へても詮のない

事。生存難の進みゆくが爭はれぬ大勢ならば、寧ろこれに處する道を考へるが上乘策でございませう。避けられぬ生存難の趨勢ならば、潔く之と戰ふべきです。

いかにして之と戰ふべきか。經濟組織の不完全といふ樣な事は一個人の如何ともし難い事。これは其道の人に任せて我々はたゞ「天は自から助くる者を助く」、「よく精勵する者はよく餘裕を作る」、「稼ぐに追付く貧乏なし」を以つて旗印としなければなりません。眞理は竟に平凡の理にあるといふ事は、疑もなく眞理です。經濟界救濟策として一代の財政家井上侯の唱導せられたのは何であつたか。曰く開闢以來言ひ古された「勤儉」の二字であります。

△妄想の募り

併し茲に特に開いておきたい暗雲があります。之を妄想生活難とでも申しませうか。それは世の大勢は上來申す通りにせよ、まだ自身は唯今生存難に陷つてゐると言ふのでもないのに、今それが襲つて來はせぬか來はせぬかと、後から始終追驅けられてゐるやうに妄想する事です。暗夜に曲り角で大きな犬を見て、さて其れが後から飛び蒐つて來はせぬか〳〵と怕々もので辿る樣な心地で生活難に怖へてゐる人が隨分多いではありますまいか。

怖ぢて見れば薄も幽靈。殊に智識的なる現代人の弊として、目前の小事故を小事故として見過す事が出來ずに、すぐ物を極端まで推究めて考へたがります。かうなつたら流に浮ぶ泡沫の一つ〳〵も却々に重大な意味を持つてきて、それが一々に頭腦を刺戟する種になります。些と咳が出る。ハテこれが進めば肺病になる。或は既う犯されてはゐないか知らん。些と一時の支拂に間に合はぬ事がある。ハテ斯ういふ姿で推進んだら何うしよう。まづ金の棄場所に困るやうな人でない限りは、斯う考へて來る以上は何時か生活難に頭腦が我知らず囚はれて了ひます。

斯く妄想生活難に囚はれて了ふと、諺にも言ふ「魔が魔を呼んで」、却つて實際の生活難に見舞はれるやう

な仕誼にもなります。頭腦が之に囚はれて惱む爲めに冥々の裡に元氣を殺ぎ精力を消耗する事は實に莫大なもので、これが爲に家庭を暗くしたり、外での活動を十分にしなかつたり、却つて種々の損失を招きます。心配ほど身體の毒になるものは無いとは、昔から證明されてをる所です。

然るに人は存外無益な心配を致します。低氣壓が起つたと聽いて直ぐ最う暴風雨に襲はれるかと怕付くの愚は笑ひながらも、然も自分は如何でせう。良緣でもあつて、夫たるべき人の人物も才幹も健康も血統も申分は無いなど〻惚れ込みながら、「唯收入が少ない、將來が心配だ」、など〻言つて、可惜好運を取逃がしたりする事は尠なからぬ樣に承ります。「夫の技倆が幾干あつても、それだけでは若し夫に病まれたら最う困るから」など〻取越苦勞をする人もある。それなら大財産があつても若し一朝に破産したらと、同じ樣な心配も湧ひて來る筈。さう先から先へ心配し出したら際限はありません。地震が、海嘯がで、陸にも海にも居られなくなりませう。おまけに天が落ちて來たら、とまで心配したら、それこそ正眞正銘の杞憂になります。然うなつたら天に跼り地に蹐つてゐるより外はなくなります。然も這麼風に生活難の幻影に追立てられ〳〵て、一日も心の安まらぬ人は何うしたら宜いでせう。

△いかに解脱すべきか

茲に於て「けふ一日」主義が今更に味深く思はれます。先の事にはくよ〳〵せぬ。唯けふの一日の務めを果す。自分の安心立命はこれで得られると思ひます。「けふ一日」主義、言ひ換へれば「今日主義」です。然ういふと今日主義とは怪しからぬ。「遠き慮なき者は近き憂ひあり」と言ふではないかと、これは起るべき疑問です。けれども今日主義にも自から惡魔のと神のと二つあると思ひます。所謂宵越しの錢は持たぬ的なのは是れ惡魔の今日主義で、目前の欲や感情のま〻にして更にそれ以上を考へないのですが、神の今日主義は一面に永遠を考へながらのそれですから、相距ら

る事千里だと思ひます。「明日の事を憂慮ふなかれ、一日の苦勞は一日にて足れり」。あゝ一日の苦勞は一日にて足る。神經過敏な、氣病み患者の多い現代に取つては實にこれ天來の福音である。神の今日主義は正にこれ妄想生活難の神經病者を療す清涼劑ではありますまいか。

然も神の今日主義には裏に永遠といふ事を含んでをる。其の切符の表面の文字は「今日」で、裏面の文字は「永遠」なのです。近い例が奥村五百子で、刀自が「けふ一日」主義を以てぐん／＼と活動された其れは何事であつたかと言へば、人も知る愛國婦人會の事業でした。十年百年の計畫、希望を持つた愛國婦人會の事業を「今日主義」で働いた。面白味は偏へに其處にあると思ひます。此間の兼合が人生の秘訣かも知れません。「人は盗賊、明日は雨」。斯うばかり考へた日には例の跼天蹐地とくよ／＼で始終怖へて居らねばならぬさりとて「其の日／＼の風次第」と餘りなる鼻唄的の今日主義になつては大變です。

昔から大人の悟りは矢張此の間の兼合にあつたらしく思はれます。「鞠躬して力を盡し死して後已む、成敗は豫じめ知り難い」とか、「成敗は天なり。人事を盡して之を俟つのみ」とか申すのも皆奥村流の「けふ一日」主義ではありますまいか。澁澤氏のお話だといふのを先日拜見しました處が「私は餘り心配せぬ方だ。然し放慢にはせぬ。物事には自然の成行といふものがある。盡すことを盡せば後は天命に任すのだ」とありました。これも亦同じ意味かと思はれます。（風草）





學校出の嫁さんに對する希望

棚橋絢子

▲一家に於ける趣味の中心

人の嗜好と云ふものは、各人の顔の形が異つて居るのと同一やうに、銘々異つて居ますから、良人は、謡曲が好きでも、妻は嫌ひ、妻が樂器が好きで、樂しんで居ても、良人は喧騒しいから止せ、と云ふやうな事は能くある例で厶いますが、斯の如に、一家中の者が、各自に嗜好を異にして居るやうでは、決して圓滿なる家庭を作る事は出來ません。家庭の圓滿快樂を求めようとするには、何うしても其處に嗜好に就ての標準を立てねばなりません。然らばそれを何う云ふやうに立てるかと申しますと、一家の主權者の嗜好を標準として、皆が其れに從がふ樣にしなければなりません。若しさうで無くして、姑は琴を彈き、嫁は三味線を彈き、良人は謡曲をやつて、互に他の好む處を斥けたならば、家庭と云ふものは、決して滿足に和合して行くものではありません。

▲化せられて化す事

主人が謡曲が好きならば、家内の者は此の嗜好に化せられると云ふ事が必要であります。人は自分の嗜好と異つたものだと、それに化せられる處ではなく、却つて反抗したがるものですが、其處を眤と耐へる事が大切です。嫁ならば、たとへ自分は異つた嗜好があつても、良人と姑に化せらるゝやうに心掛けて居れば、初めは嫌ひであつても、終には趣味を持つやうになり

ます。又姑も嫁や伜に化せらるゝやうに心掛け、良人も妻や姑に化せらるゝやうに努めれば、一家は福德圓滿實に樂しく暮す事が出來ます。斯樣に他に化せられ樣とするには、お互に辛棒が大切です。嫌で嫌で耐へられない樂器の音も、辛棒すれば好きになります。そして一方には自分の好む處を、人に及ぼす樣にするのが、最も好い方法かと思ひます。つまり、化せられて化す、と云ふ樣にするのであります。

▲女學生上りの若奧樣

所謂女學生上りの若奧樣に就て見ますと、私が申す樣に、化せられて化す、と云ふ方は少ない樣で厶います。例へば自分はピアノが好きだからと云つて、他の嫌がるのや、迷惑がるのを頓と顧みないで、自分丈け滿足を得て居る方が多いので厶いますが、是れでは家庭の快樂を共にすると云ふ事は出來ません。そこへ行くと女學校などを卒業しない、漸く小學校を卒業したか、しない位の婦人は感心で厶います。自分は學問が無い、智が足りないと、思つて、姑や良人に服從する念が强う厶いますから、たとへ琴が好きでも、ヴァイオリンが好きでも、他人に構はず彈くと云ふやうな不作法な事は致しません。

一體學校教育を受けた方は、自分を示して他を導かねばならぬのです。然るに何故此の樣に學問も智も無い方に敗を取のでせう。これは詰り學問に醉はされて、良人や姑を輕視するからで厶いませう。

併し幾ら良人や姑の嗜好に化せらるゝやうに心掛けるとは云へ、又一方に自信力と云ふものが大切で厶います。是れは嗜好に化せられると云ふ事と、根本から問題が別になります。確い信念を持つて居て、良人であらうと、姑であらうと、間違つた行動や、不正な行爲が有りましたならば、それを感化すると云ふ事と、又それに惡感化せられないやうにする心掛とが肝要で厶います。良人や姑の嗜好に化せられよと言つても、何でも彼でも、と云ふのではないので、此の點は特に注意を願ひます。

以上は單に家庭の快樂を共にすると云ふ事に就て述べたのですが、更らに私は現今の學校出の若い夫人の缺點として、一日の仕事の配り方に就て申しませう。

▲時間の使用法

一年の計は元日にあり、一日の事は朝にありと云ふ諺は、昔から能く引用されて居りますが、何時になつても此の諺は眞に金言であると思ひます。一日の仕事は、朝の間に、彼れを仕舞つたなら彼れをしよう、是れをしたなら彼れをしようと云ふやうに、キチンと極めて置いて、そしてそれを正しくするのが、家庭整理の眼目であります。それをダラ〳〵として、一向に秩序が無つたならば、第一時間が不經濟になるばかりで無く、整理もキチンと付きません。

人は金錢上の負債を恐るべき事として居りますが、時間の負債も恐れなければなりません、「時是れ金」と云ふ事から申せば、時の負債は即ち金の負債であります。此の負債を免れるには仕事をする秩序を立てゝ、それに依つて正しく動くと云ふやうにしなければなりません。

▲花嫁の自墮落

學校に行つて居る時には、登校時間は何時、終業時間が何時と規則的に定められてありますから、幾ら自墮落な方でも、いや應無しに、それを遵守しますが、いざ一家の人となつては、兎角不規則に流れて、朝は五時に起きようと思ひましても、少し眠いから、三十分ばかり寢て居ようと云ふやうに氣儘になります。一家の主婦が此の樣な有樣では、決して、家庭を秩序正しく整理して行く事はできません。たとへ日曜日や大祭日でも、主人が出勤しないからと云つて子供の添乳を種にして、朝寢をするなどゝ云ふ事は、以ての外の不心得であります。よし主人が朝寢をして居りましても、自分は早く起きて、書生や女中に、キチンと一日の仕事を配つて申付け、襷掛けで臺處から座敷の掃除をし、朝飯の膳をキチンと揃へて、主人の起る時分には、最

う朝の仕事を繕つて居らねばなりません。

それを自墮落な風をして、手當り次第に仕事をし、女中や書生にも、秩序無く仕事を云ひ付けましたならば、决して整理は出來ません。私は今迄私共の嫁や、他樣のお嫁樣などに就きまして、實見して居るのでムいますが、女は男よりも、仕事の秩序、時間の經濟と云ふ事を確く守らぬ風があります。例へば此の着物は何時迄でに、此の足袋は何時迄でに縫ふて置いて下さいと云ひ付けはましても、其期日になつて、出來て居るかと思つて訊いて見ますと、種々他に用事が出來ましたものですから、と云ふ口實の下に出來上つて居らぬと申します。是れらは詰り仕事に就て秩序と云ふものが無いから、臨時に用事が出來ると、その爲めに手後れになるのでムいます。

一家の事は學校のやうに、さう規則的に行くものではありませんが、併し人の妻となつても尙學校に居た積りになつて、規則的に遣つて行く樣に心掛ける事が肝要であると思ひます。其の點に掛けては、男子の方が確に正しく行つて居ります。女は幾ら言つても亂れ勝になります。之を十分矯正しなければ今後複雜な世の中に在つて、複雜な用務が多くなる家庭を、秩序正しく整理して行と云ふ事が六ケ敷からうと思ひます。





子供の教育に就ての我が家風

三宅花圃

學校の教育は、ホンの形式丈け教へるのでムいますから、子供はいざ世の中へ出るとしてもまだ却々實際の役には立ちません、其れ故親達は家で學校以外の課程を修めさせて、其れを活用さするやうに心掛ければなりません。世の中の事が、學校教育のやうに、キチンと形にはまるやうだつたら、何の譯も無いのでムいますが、どうしてそんな譯にまゐるものではムいません。それで私の宅では、子供の時から、學校より、寧ろ家庭の教育に重きを置いて子女を教育致して居りますが、併し又他家樣とは些と趣を異に致して居るかとも思ひます。

▲懸け離れし交際

第一は世間の人と交際を致させるのでムいます。常に親戚の者や、又は御懇意な方などが御出の時は、其席に出しまして、私共と一緒に話もさせ、又は話を聞せもするのでムいます。尤も是れは學校へ參るやうになつてからで、その以前は他家樣のお子達と遊ばせるのでムいます。世間には餘り自分の家庭と掛け離れた境遇の家庭の子供と、遊ばせぬやうに致して居られる方もある樣ですが、私共では決してそのやうな、狹い事は致しませんで、車夫の子供とも遊ばせ、華族の子供とも遊ばせるやうに致して居ります。さう致しますと、子供乍らも、矢張人を觀察致しまして、從つて又自然好い刺激をも受けるのでムいます。境遇の異つた家庭の子供と、遊ばせたり、世間の人と交際をさしたりしました處で、其親達が注意をして居さへすれば、決して、惡感化は受けまいと存じます。現に私の宅で

も只今の處では別段結果が惡いと云ふやうな事もありません。斯う云ふ事を致させますのは、善いか、惡いか、は存じませんが、それ兎に角私共では斯う云ふやうに致て居ります。

▲觀察力の練習

先頃の事でムいました、或る會がありまして學者や華族方の御夫人やお子樣などゝ御一緒に東京近在へ散歩を致しましたので、歸つてから宅の子供に先樣のお子樣を觀察した事を訊いて見ましたが、子供は子供で矢張り子供らしい觀察を致して居りました



此の時私は學者の子供は何處かに悠暢な處があり、華族の子供は、兎角こせこせつくやうな傾きがありはせぬかと思ましたが、此の風などでも雙方の子供を共に遊ばせるやうに致せば、互に其子供の將來に刺激を受けて追々に靡りませうから、

大に利する處があらうと存じます。

▲單純なる頭腦の人

今日のやうに複雜な世の中では、單純な頭腦の人は迚も生存競爭に勝を制して行く事は出來ません。それですから、未だ小學校に居ります時から、世間と云ふものは、斯う云ふものである、と云ふ事を知らせますれば、人生と云ふ事に就ての考へも、深くなつて、處世上大に利する處があらうと存じます。

東京の名有る某女學校では、學校以外に於ては、たとへ同じ學校の生徒でも、交際する事を嚴禁して居るさうでムいますが、何の爲めにそのやうな事にしてあるか、餘りに狹い考へであらうと存じます。成程さう云ふ事を致しますれば、惡友と交ると云ふ事も無ければ、又惡い事を見習ふと云ふやうな事もムいませんから、まことに實直至極な、所謂お坊ちやん的の人物が出來ようと思ひますが、斯う云ふ人物は今後益々生存競爭が激しくなる世の中に、獨立自治の行動を取つて、行く事が六ツ敷からうと存じます。

尤も私共のやうな敎育方法は、一歩誤れば、或は出來損ねの人間ができるかも知れませんが、併し餘り大事を取り過ぎましても、如何かと存じます。一利有れば一害有りで、是れは致方の無い事でムいますから少しは冒險的の分子があつても、此の方が寧ろ其の子の將來の爲めに、宜しからうと存じます。

それから、物品に就ての觀察を致させるのでムいます。衣服であれば、仕立樣の巧拙から、品質の見分け方、と云ふやうな事は、世間へ出た場合に、實際必要でムいますから、努めて之を致させて居ります。

▲制限的の放任

之を要するに子供をして、見聞を廣くさせるのでムいます。ですから、私共では徒らに交際を禁するとか。或は嚴格な規定を設けて外出を制限するとか、云ふやうな事は斷じて致しません。

子供の日常の行爲に就きましても、程度を極めて置

きまして、其範圍内ならば、多少の不都合も大目に見て徒らに叱るとか、小言を云ふとかは決して致しません。餘り子供の行爲に干渉を致しては、變にこじけて、自分の意志通り物事を行ふと云ふ樣な強い人間が出來ません。

▲理想の破壞者

何れのお宅でも、お經驗の有る事でムいませうが、私共が折角斯うして理想の敎育を致して居りますのに、動もすると其れを破壞しようとする者がありますそれは始終家庭に居る下婢でムいます、是れは使へるなど、思ふと、子供に種々な事を言ふとか、或は種々な事を爲てからかふのでムいます。殆んど無敎育な下婢でムいますから。實にお話にならぬ事を致します。此のからかふと云ふ事は人に不安の念を抱かせますから私共では非常に困つて居るのでムいます。之れも皆樣と共に考へて見たいと思ひます。

學校教育の誤解

安部磯雄

女子には、高等敎育の必要がある。若し學資に差支がなければ男子と同樣に高等敎育を受くべき筈で、今女學校程度の敎育を以て滿足するが如きは大なる考へ違ひであらうと思ふ。一體今の世は學校敎育の目的を誤解して居るものが少くない樣である。學校は決して充分な知識を授くる所ではない、單に知識を得る方法を敎ゆるのであるから。學校を出た後に學校で學んだ方法を應用して大に知識を得ねばならぬのである。それで學校さへ卒業すればえらいものになれる樣に考へるのは大なる心得違である、學校敎育は單に專門の事ばかりではなく如何なる知識に就ても一通り敎授せねばならぬから、高等なる普通敎育を授くることが必要である。されば私共が學校を出た後に各方面の知識を得んとするには、先づ學校に於て充分に普通敎育を受けて置かねばならぬ。天文學とか地質學とか、或は哲學

とか社會學とかいふ如きものは學校で一通り學んで置けば可なり了解も出來るけれども、さもなければ學校卒業後に於て獨修することは隨分困難だらうと考へる女子は男子の如く學校卒業後に於て勉學の暇を有たないと言ふ人があるかも知れないが、男子も職業といふものゝ爲に多くの時間を奪はれるから靜に勉學する時間は極めて少ないのである。女子でも學問の嗜好さへあれば毎日一二時間を讀書の爲に費すことの、出來ぬ筈はない、殊に女子は男子の如く活動社會に立ちて實地の學問を爲す機會が少ないから、常に讀書を以て其不足を補はねばならぬ、斯く考へて來ると高等女學校程度の敎育のみでは卒業後獨修せしむるだけの事は出來まいと思ふのである。折角習ひかけた外國語も餘り役には立つまい。まして哲學や社會學や經濟學などを了解するだけの腦力もあるまい。言ひ換ゆれば高等女學校卒業生では獨立して學問するだけの實力がないだらうと氣遣ふのである。然らば今日多數の女子は生活にも學問にも獨立が出來ないといふ有樣であるから、矢張り男子に輕んぜられて居るのも無理はないのである。然るに或人々は女子に手藝などを敎へて滿足し、高等女學校の敎育などは少しく過分であるなどゝ言つて居るものがあるが、隨分驚いた話ではないか、私の立場から言へば、高等女學校の敎育などは單に讀み書きを敎ゆる藝術敎育で、決して女子の見識を廣くし、且つ高くするといふ程のものではないのである、若し學問が一生涯を照す光であるとすれば、あんな小い光では誠に心細い次第である。女子には哲學を修むる必要がありませんか、哲學は女子を厭世的にならしむるから宜しくないといふ敎育家もあるが、實に詰らないことである。女子には科學の必要がありませんか。動植物の如き、天文地質の如き何れも女子の思想を開發するに大なる効力がある、私は女子に經濟學の思想を與へたいのである。亦社會學の知識をも授くる必要があると思ふのである。啻にこればかりでなく、私は女子が何故に政治とかけ離れて居るのであるかを怪んで居る位である。



家庭を蹂躙する個人主義

中村鈴子

▲警戒すべき婦人の處世法

社會の進歩は貴賤の階級を打ち破り、單だ强弱ばかりが人物評價の標準となつて參りました。而して其强弱と申すことが、人格如何に關らず、財産の所有高で決すると云ふ風になつて參りました。ソコで成功とは財産を得たることを意味し、失敗とは財産を失ひたるを意味する次第ですから、親兄弟に對して不人情を働いても、親族朋友に對して不義理をしても、財産を作りさへ致せば、成功に相違ないと早合點する手合が多くなつて參りました。斯る趨勢で御座いますので、今日の社會を側面から觀ますと、生存競爭の爲めに家庭の和樂を蹂躪しつゝあり、親族朋友の交情を蹂躪しつゝあり、餓虎が食を爭ふて目も視えず耳も聴えぬと云ふに類した慘狀を呈して居ります。如何しい個人主義が家庭に侵入して、跳梁跋扈しつゝあるは、實に餘儀ない次第と申さねばなりません。

▲強慾親を滅す

大義親を滅すと申すことは、過去の我國に流行致した言葉で、親兄弟が主君に叛いた場合、己れ主君側に立てば、如何しても大義親を滅する運命になるのでした。親兄弟は其仕ふる主君に忠義を致す場合に於ても其主君が　天皇陛下に叛いた者であり、己れ錦旗を奉じて征討の役目に就て居れば、是れ又大義親を滅する運命で御座いました。それですから大義親を滅すると申すとは、實に凄壯な崇高な大悲劇で、自ら其運命に遭

過した武士の胸中は、實に萬斛の熱涙で御座いました。斯樣な大悲劇の味ひは、學校で歷史受持の敎師から說明を聽かれたばかりの方に、シンミリと深く解し難い所も御座いませう。前世紀式の老婆の方が、斯樣な大悲劇の味ひを嚙みしめて居ります。さて大義親を滅すの方は、深いけれども其例少く、强慾親を滅すの方は淺いけれども今日到る處に其實例を見るので御座います。私共は甚だ寡聞ですが、二三の實例を擧げて、聊か其救濟方法をも述べて見ませう。

▲兄を窘逐せし弟

或家の兄弟は實に仲善くて親孝行であつたのが、弟が妻を迎へてから一家に風波が絕えなくなりました。其原因を何かと申しますと、兄が三十歲にもなつて獨身で居るのに、弟が二十五歲で妻帶したのは、早婚の方であると親類の一人が申したのを、弟は乾度兄さんが親類に賴んで斯樣いふことを言はせるのだと邪推し、ひどく癇癪を起して、「成程兄さんが三十で獨身なるに、私が二十五で妻帶したのは、比較的早婚に相違ない、去りながら兄が結婚せぬうちは、弟が結婚してはならぬと云ふ理屈は無い。兄さんだつて結婚しようと思へば、二十四の時でも二十五の時でも出來た筈のを、自分の都合上で結婚せずに居つたのだ。私も兄さんの樣な職業ならば、放浪生活の方が氣樂で都合が好いから、三十までも三十五までも獨身で居るかも知れない、私の今の職業では、如何しても妻帶して居なければ都合が好くないから、妻帶したので、これは兄さんも承知の上の事だ、何も私の獨斷でした事では無いのである。それとも私が妻帶しながら、此家に同居してるのが惡いと云ふなら早速別居しませう。其代り別居すれば、二十圓ぐらゐは家賃に費へて了ふから、お父さんと妹の食料は出す譯に參りません。これは無論承諾して下さるでせうね」と、何處までも皮肉に出たので御座います。斯う言はれると、平生一世の文豪を

以つて責任して居らるゝ兄さんが、御友達や弟子に向つては、何時も大氣焔を吐かるゝに似もやらず、ブル〳〵唇を顫はせながら、默つて了ひなさるのは、實に御氣の毒とも何とも申し樣が御座いません。其後箸の上げ下しに弟さんが兄さんを遣り込めたので、兄さんは終に行方不明となつて了ひました。それで近所では弟夫婦を鬼夫婦と綽號して、本名を申しませず、高がミシン職の分際で居ながら、多少世の中に名の賣れて居る、兄さんをイビリ出さなくても宜さ相なものだと言つて居りました。



▲妻を虐待する夫

人生婦人の身と作ること勿れ、百年の苦樂他人に依るとは、實に能く穿つたもので御座います。多少の敎育があらうが、持參金があらうが、一たび人の妻となつて了へば宛然捕虜同樣なのが幾らもあるから耐りません。持參金は何とか彼とか口實を設けて卷き上げて了ひ、其上、妻の里方へお金の無心を申し込み、快く承諾すれば宜し、さもなくば酷く當る夫が隨分御座います。學校に

居る方々の考へから申せば、其樣な家に居るよりは、早速離婚した方が宜いと云ふものですが、女の一身と申すものは、却々以て其樣單純に輕卒に解決の付くもので無く、一旦離婚すれば、終生拭ふことの出來ない汚點が付きますから、厭だ〳〵と思ひつゝ離婚せずに居る者が到る處に御座いませう。妻にして一たび此弱點を見拔かれた以上は、夫は幾度でも妻の里方へ無心を申し込みます。それを里の方で拒絶すれば、直に我儘だとか、不貞だとか有りもせぬ惡名を付けて、出て行けがしに取扱ふのですから耐りません。ですから、最初縁談の申し込まれた際、父母なり自身なりが、最も聰明な注意を拂ふて、輕々しく惡性男子と結婚せぬやうに致すのが、何よりも、肝腎な事で御座います。

▲夫を虐待せし妻

某縣知事の娘が、父の友人の息子と結婚しました所父の地位と夫の地位とが懸隔して居ると云ふので、直に持前の我儘根性増長し夫を脅迫して父母と別居させました。さて姑と同居してる時は、姑を下女扱ひにして飯まで炊かせて居ましたが、別居して見ると、夫婦限りで下女を置くほどの身分ではないから直に不自由を感じ、苟も勅任官の娘でありながら、腰辨の妻となつて飯炊や拭掃除を自分でする人が何處の世界に在りませう。私は父上樣に下女の給金と食料を出して戴いて一人置きますとて、トウ〳〵勝手に下女を雇ひ、鯛の干物を食べては、是れは父上樣から送つて戴いたのだとて夫に分たず、石決明の粕漬を食べては、是れは學校の御友達が江島から買つて來て呉れたのだとて夫に分たず、夫には煮豆や梅干や鹿角菜ばかり食べさせて、汗臭い浴衣も滅多に洗つて遣らなかつた、終には飯櫃を空にして置いて、業務に疲れて歸つた夫に向ひ、『蕎麥でも食べて來なさい』と云ふ調子になつたので、一年も經たぬうちに離婚されて了ひました。其夫の方は立派な美術家になりましたが、我儘女は零落して行方不明で御座います。

▲里方の衰微を顧みぬ女



里方の景氣の好いうちは、夫婦打ち連れて泊り懸けに來遊し、無心を申込むことさへ毎々あつたのに引換へ、里方の一朝衰運に傾きしより、婿は措置き、實の娘までが、親の落ち目、兄の落ち目を見限つて、振り向かぬと云ふは世間に有り勝ちで御座います。成程結婚して十年も經過して見れば、結婚當時のやうに閑暇でない、子供が三人もあつて見れば、可なり忙しいであらう。併し商業や工業の家でないから、女中二人と車夫とを置いて居れば、年に二度や三度里方へ來られぬと云ふ道理は無い。多分

これは無心でも言はれてはならぬと防禦線を張つて居るのだらう」とは、好人物の父兄さへ、往々僻んで口にする所で御座います。

▲親を怨む子

親爺は仁義忠孝を口癖の樣に言つて居るけれども、自分の子女を敎育する事さへ知らない。我輩が學士になつたのは、或先輩が我輩を見込んで學資を出して呉れたので、少しも親爺の與る所でない。然るに親爺は我輩を生んで小學校へ入れた丈の事で、サモ／＼大恩を施した樣に思ひ、漸く學士になつたばかりの我輩を月給の口にあり付かせて、收入の半額を家へ入れさせようと掛つて居るのだ、前世紀式も甚しいぢや無いか。とは某法學士が友人に話した所なので、一應理屈らしく聞ゆる點も御座いますが、親の貧乏して居るのも構はず、學士になつてから直に收入を得ようともせず、只管大器晩成を期して居るなどは、餘り利己的で御座います。併し之を顚倒して「十二三で丁稚奉公に出された人でさへ、紳商とも爲り名士ともなつて立派に孝養を盡して居るのに、先輩に見込まれて學資を出して貰つたほどの秀才が、學士と爲つた曉に、親に小費錢の不自由をさせるとは、何たる甲斐性なしだらう、斯樣な學士は、淺間の焦熱地獄へでも、華嚴の無間地獄へでも身を投げ棄てるが宜い」などと申すのは、餘り事情に迂濶な議論かと存じます。

▲簡易生活と克己復禮

如何しい極端の個人主義が家庭に跋扈致すのは、所謂新智識を以て自ら許せる子弟の方に、其色彩の濃かなるとは申す迄も御座いませんが、父兄側に於て「斯樣な不人情な奴なら、高等の學校に入れるで無かつた」と愚痴を溢すのも、矢張り利己心を暴露したもので御座います。要するに人間が物質の壓迫を受けて、毫も餘裕が無い樣になつて居るのですから、父兄ばかりを責むる譯にも、子弟ばかりを責むる譯にも參りませんこれが救濟法は私共が申す迄もなく、昔の聖人が克己

復禮と云ふことを說いて居られます。これを今日に當嵌れば、利己心を制して人道を行へとの意味に外ならぬので御座います。人間は無論衣食なくして生存し得る者で御座いません、成るべく簡易生活を致せば、物質の壓迫を感ずる度が輕いから、利己心を制して人道を行ふことが出來るので御座います。救濟方法としては餘り簡單ですが、克己復禮の四字は、他の千言萬語に優ることと存じます。

韓國婦人の交際振り

◎住居――韓國で最も眼に着くものは見るもの總てが穢いことです下流社會の住家は元より上流社會の邸宅も日本人の住居とは全然趣が違つてゐます。室も四疊半位から廣いのはないやうで、廣い家になると其狹苦しい間が澤山あると云ふに過ぎない、從つて邸宅の構造も彼國の貴族方が丁度日本の中位の華族と云つた位のもので、起居までが誠にお手輕なものです。

◎食物――然し食物は却々御馳走があります、先づ肉食が重で野菜や魚肉もあればお米なども日本のよりは味が好い樣です。其から町中を散歩しますと東京で云ふ繩暖簾と云ふやうな家があつて萬年スープなどを賣つてゐます。

◎社交――女は女同志ならば隨分交際もします交際するのは重に日本人で外國婦人とは餘り往來しない、其代り一度交際しようものなら先方はのべつに訪問に來る、然し男子の出る席には決して出て來ない、私の宅などで會を致しても、女同志の會なれば澤山來ますが夜會舞踏會など云ふ男子の出る處には婦人は滅多に來ません、然し婦人達は交際の仕方が大變上手でお世辭の甘いことゝ云つたら昔支那の戰國時代に各國の使臣が辭令に巧であつたやうに物を貰つた時の禮なんども如何にも有難くて堪らないやうなことを申します。中には英語や佛語を巧妙に操つる樣な却々ハイカラな奧さんもあります。全體韓國人は日本人よりも語學の進步が早いやうです。又韓國婦人は日本婦人のやうに情に厚いと云ふ質ではなく何方かと云ふと智惠の勝つた方かも知れません。

◎教育――別に學校がないから自宅で千字文や、四書五經を漸次に覺えて行きます其を敎へるのは、中流以下は兩親か親交かですが、少し名門の家になると食客と云ふものが其家の長屋に住んで居て書物を敎へるのであります。

◎地位――其から奧さん方が交際をするのに大變地位出身を嚴重に致して、出身の賤しい者とは餘り交際はないのです、だから交際事にも奧さんは奧さん、お妾はお妾同志に往來せられる樣です。（目賀田男爵夫人の話）



誤解せられたる淀殿

山路愛山

（一）

淀殿と云へば何やら男まさりの女丈夫のやうにも思ふ人も多く、近頃は其趣に淀殿を書きたる所謂歴史小說なども出で、日本で悍婦の部類に編入すべきものは平政子、其から淀殿と相場の極りたる樣なれども我等は左樣には思はず。淀殿は尋常一樣の愚痴なる婦人なりしかとも存ずるなり。抑も豐太閤は女に掛けては隨分浮名を流したる人なり。明人の書きし兩朝平攘錄に太閤は京都の富民の妻の艶色を見て、奪て妾となし、豐後王の妻の甚だ美しきを聞き京都に招き寄せんとしたるに、其妻義を守りて往かざりしかば、其王に命じて朝鮮に往かしめ他の故を以て之を殺し貞女の操を破らしめたりなど記せり。其頃は西洋人も日本に居り、唐人も諸所に住みたれば明人も太閤の行儀宜からず由を聞傳へて扨こそ斯樣には記したるなるべけれ。日本西教史などには太閤の婦人に對する行儀の不埒なりしことを記したりと覺えたれども、其書只今手許になければ引證に由なし。德富蘇峰君の說に立花宗茂の妻は太閤と云々の事ありて、其が爲めに離緣となり、久しく肥後國何の里とやらに蟄居したりとの傳說ありと聞きたり。我等に所見なけれども恐らくは肥筑の間に傳へられし傳說ならん。何れの點より見るも太閤は女に掛けてはまめなる男なり。されば死後にも所々の評判を殘したり。たとへば蒲生氏鄉の後室は信長の息女にて、類なき美人の聞えありければ、太閤忍び〳〵に參らるべき由、召しけれども、それをうき事として自ら飾をおろし尼になられたるを太閤安からぬことに思はれ、それが原因となりて氏鄉の子息秀行朝臣は會

津百二十萬石より宇都宮十二萬石に貶されたりとの說もあり。(藩翰譜)。本願寺門跡顯如上人の後室も美婦なりしかば太閤大きに惑溺し、顯如の長子敎如上人を無理に隱居させ、かの美婦の生みたる弟の准如上人を以て門流を繼がしめければ、一向宗は東西の二に分かれたりとも云ひ、(關原記大全。關原合戰誌)。信長の舍弟、信包の嫡女を太閤寵愛したりしかば信包の室之を憤り、屋敷に留置きて返さゞりし。其怨にて太閤は此時まで伊賀上野にて十二萬石を領し居りし信包を近江の小藩に移したりとも云ひ、武藏國の大名成田氏長の妹某、北條沒落の後、兄と共に會津に身を寄せてありしに、岡本淸五郞、其美人にて、しかも忍の籠城の時、母と共に甲斐々々しき働きありし噂しければ太閤、それを小山の陣中に召し假寢の契を交はせ、其年十二月都に召して寵愛淺からず。氏長も妹の蔭にて再び世に出づるを得たりとも云ふなり。(二事出所今忘れたり)。勿論斯樣の傳說は今ならば三面雜報の類にて悉く眞實の報道なりとも云ふべからず。殊に蒲生家の宇都宮轉封は外に餘儀なき譯もありと聞えたるのみならず。(蒲原家記)。後室云々の事は他書に並べ證すべきものなければ、或は嘘なるやも知るべからず。本願寺の東西に分れたるも、顯如上人後室の愛憎に依れるには非ず。敎如上人は石山合戰の砌より父上人とは意見を異にし、東西の分れも其根本は實は其爲なりとも見えたれば、是亦太閤が顯如の後室に惑溺したる結果なりとも云ひ難し。されば此二事は太閤に取つては或は寃罪なるやも知るべからず。さりながら、斯樣に太閤に女の噂多きことは少くとも太閤は女好きなりし女に掛けては頗る弱きものなりしと云ふことだけを證すべきものなり。左樣の意氣地なき男を手中に飜弄して女ながらも淺井備前守長政の息女なりとあつて日本歷史の幕に一狂言打たらば隨分面白き見物なりしなるべけれども、淀君は左樣に働のある女にあらず。深慮も、野心もなき平凡の女なりしかば一生の傳記も餘り花々しからざりしが如し。

（二）

太閤の正室杉原氏は世に高臺寺政所、又公月尼公とも稱す、幼名禰々御料人。此婦人は今の世まで評判善く、すなほにて大人しく、而も福相ありし賢婦人の如く想像せらる。さりながら此人の太閤に於ける勢力は却々偉大なるものありしと見えたり。そは太閤五奉行の上首と聞えたる淺野彈正長政の室は其妹なり。若狭少將勝俊、筑前の金吾中納言秀秋は其姪なり。加藤淸正、福島正則は其鄕人にして而もつゝき合と見えたるにて知らるゝなり。其外太閤の親臣宿將、此婦人に緣を引くもの多し。古より外戚の盛んなる、此の如きは多く其例を見ざる所なり。たとへば之を德川秀忠公の實母西鄕氏一族の微力なりしに比べ見よ。高臺夫人の勢力は却々に大なりしと謂つべし、されば此婦人はたとひ大人しき婦人なりしにせよ。其實力は決して乏しからず威望も亦尋常ならざりしと思はる。此婦人寬永元年七十六にて歿したれば太閤には十三歲の年少者なり。淀殿は幼名茶々御料人、太閤薨後大佳院と稱す太閤記には太閤別妻とあり。其頃の大名は正室らしきものを二人も三人も持ちしものも無きに非ざれば淀殿の太閤に於ける位置も今の世の妾と云ふものとは別にてそれ程正室より品下りたるものにはあらざらん。淀殿は淺井備前守長政の長女にて母は其頃天下第一の美人と聞えし長政の室おイチ御料人、即ち信長公の妹なり。されば淀殿は正しく信長の姪女にて身分を云ふも太閤には主筋なれば太閤も之を見ること人並の妾の類の如くにはせざりしなるべし。されば太閤記に別妻とあるは最も事實に適したる名なるべき歟。淀殿の年齡は夏冬戰記に元和元年三十九とあれども是は誤なり。そは天正元年淀殿の父長政の死したる時より數ふるも元和元年までは四十三年にて三十九とするは長政の子と云ふに當らねばなり。されば淀殿が長政の子にして而も二人の妹の姉なりしことを思へば天正元年には是非とも七八歲になり居るべき筈なれば、元和元年には五十歲前後とするを適當とす。假に淀殿の齡を以

て元和元年五十歳なりとする時は太閤には二十一の年少者、高臺夫人には八歳の妹なり。其外松丸殿と云ふは京極高次の姉にして若狭の武田孫八郎元明の後室なり。太閤其美を聞き、妾として伏見城松丸に置く、弟の京極高次は太閤より二十七歳の年少者なれば其姉として假に弟より五歳の年上とすれば太閤よりは二十二歳の年下なり。先は淀殿と年齢に於て大差なかるべき歟。三條殿



と云ふは蒲生賢秀の女にして氏郷の姉妹なり。年齢を推測するに是亦淀殿と伯叔の間ならん歟。是皆世に知られたる太閤の妻妾なり。其中にて淀殿は家柄も善く而も太閤の寵愛淺からざりしは天正十八年、小田原陣の時太閤が陣中より高臺夫人に與へし書に「そもじに

つゞきては淀のもの我等氣に合ひこまかに仕はれ候」とあり。又同し時に、長陣の退屈を慰めんとて淀殿を小田原まで呼寄せ、高麗征伐の時も名護屋の陣中まで淀殿を携へたるにて知らるゝなり。其上太閤妻室何れも子なかりしに淀殿のみ天正十七年に鶴松麻呂を生み同十九年三歳にて夭したれども、文祿二年更に秀頼を生みたるにて其寵愛も一方ならざりしを想ふに足る、さりながら淀殿斯く太閤の寵を受けたるが故に、それを鼻に掛けて高臺夫人を蔑視し、夫人と權勢を爭ひたりしなど思はゞ誤解なり。我等は信ずべき記錄に淀殿と高臺夫人の間に面白からぬ關係ありしことを發見せざるのみならず。當時の文書に據るに高臺夫人は諸事淀殿を後見し、秀頼の生れし時なども高臺夫人より色色世話を燒きしが如し。思ふに秀吉に子なきは高臺夫人も共に憂ふる所なりしかば淀殿に子ありしは夫人も太閤と慶を同ふしたりしならん。我等の知る限にては淀殿も亦高臺夫人の言ふ所は善く聽きたるやうに思はる。たとへば慶長十六年、秀頼が京都に行きて家康公に會見したる時の如きも淀殿は女氣の心細くて、是非を決する能はざりしに、高臺夫人さま〴〵に敎訓したりしかば淀殿も意解けて秀頼の入京に同意したりと云ふ。(烈祖成績)。平生反目する世間妻妾の類ならば高臺夫人の敎訓がかゝる場合に淀殿を動かし得べきや。却て淀殿の心を頑くするに過ぎざりしなるべし。さるを秀頼一生の大事とも云ふべき場合に高臺夫人の善く淀殿をして其心を翻へせしめたるを見れば我等は高臺夫人の德を思ふよりも寧ろ淀殿の高臺夫人に對する尊敬の心の篤かりしを察せざるを得ず。さるを何ものゝ好事者ぞ淀殿を以て野心深く、自負心强き、策略家とし、高臺夫人に盾突きたる悍妻とせんとはする。別に之を證すべき材料なき限りは我等は、淀殿の寃を訴へざるを得ざるなり。

(三)

いや〳〵左樣には云ふべからず。淀殿の野心家たるは掩ふべからず。そは關白秀次の末路にて知らるゝな

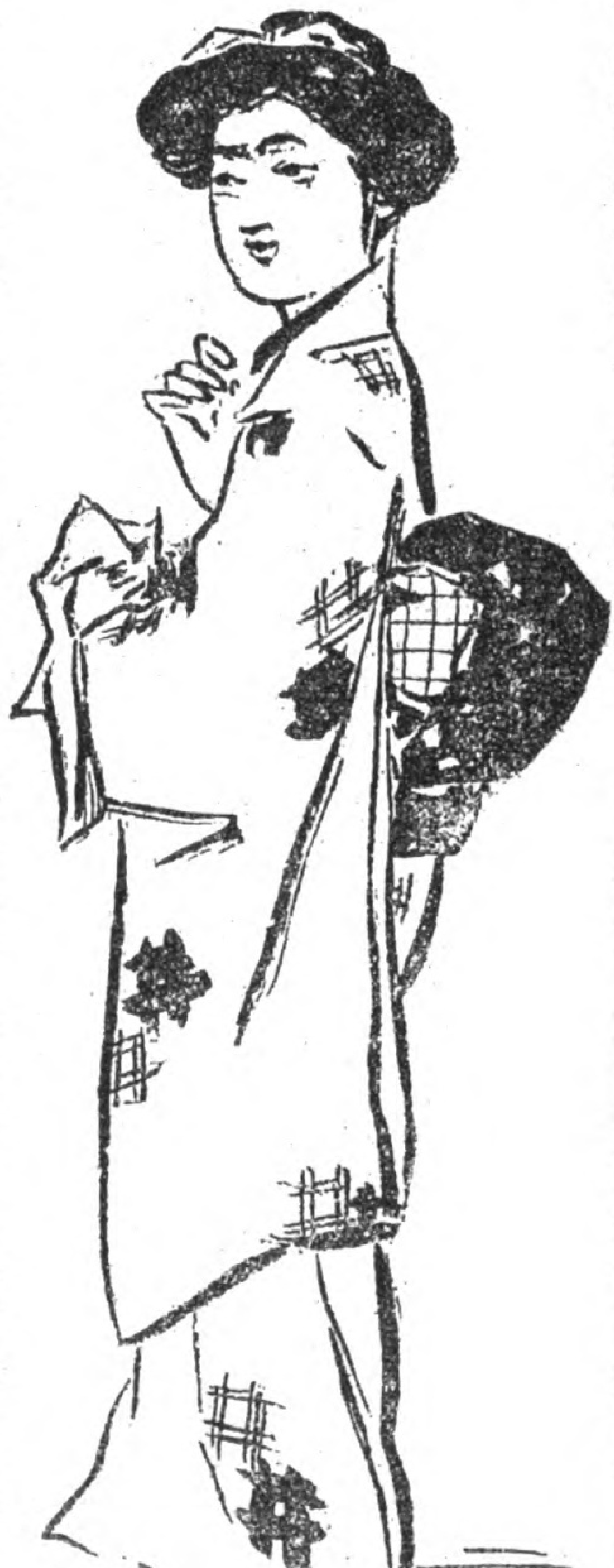
り。淀殿に其子を立てんとする野心ありたればこそ、石田三成、増田長盛の徒、淀殿と内外心を合せて讒構を逞ふし、遂に秀次をして高野の露と消へしめたるに非ずやと云ふものもあるべし。されど是れ想像のみ淀殿が奉行等と心を合せて秀次を殺したりと云ふ證據は少しも無し。其上秀次の死を以て全く石田増田の讒構に出でたりとするも根據なき妄説なり。按ずるに秀次の人と爲りは決して太閤記に云ふが如き愚人に非ず尾州の大守たりしとき既に名聲あり。秀吉の代官として東奥に下向の時も足利學校の教頭三要を親近し、足利學校、金澤文庫などの文書を數多齎し歸りしこと、陣中にても軍監淺野長政の專斷を責めて少しも假貸せざりしことなどを併せ考ふる時は其平凡の人物に非ることを知るべし。さりながら其人と爲りの平凡に非りしは是れやがて禍を招きし所以にして、秀頼既に生れ太閤偏に之を愛して其覇業を傳ふるの志あるに至ては秀次の位置は早くも困難に陷りたり。されば秀頼誕生の時、上中下に至るまで目出たしと賀したる中に、心あるものは關白殿滅亡の端現れたりなどゝは申せしなり。(落穂雜談一言集)。此時に方りて秀次の爲すべき所は唯だ謙遜にして太閤の心のまゝに身を處するを上策とすべきに、秀次も並の人物ならねば卑々屈々として太閤の歡心を買ひ居る譯にも行かず。其上位既に人臣の榮を極め、假りにも關白の名あるからには秀次の家臣も其儘仙人の心持にはなられぬものと見え、色々隱謀の事などもありしと聞えたり。毛利家の記録には文祿三年の春、秀次より白江備後守を藝州に下し、誓紙案文を輝元に示して之を求め、同四年五月にも同人を大阪の毛利屋敷まで遣はし内意を輝元に傳へたりとあり。(吉田物語)。こは毛利家には限るべからず、他の諸侯にも同樣の事ありし歟。其外(一)棄金と名づけ金銀を諸大名に貸したること、(二)太閤との間、次第に嶮しくなりしとき德川の世子を奪つて質と爲さんと欲したることなどを合せ考ふる時は秀次に自立の志ありしは掩ふべからざる歟。されば家康公などは文祿四年の正月には早くも既に秀吉、秀次の間に事あるべ

しと稱したり。太閤も此樣子を見ては斷然たる處置に及ばざるを得ざりしならん。されど文祿三年までは表面には何事も無くて止みしに翌年四月に至て大和中納言秀保遽かに薨去ありて其家は自ら亡びたり。此秀保は秀次の實弟なれば秀次に取りては其頓死は有力なる援助を失ひたるものなり。されば大和中納言家の滅亡も其家臣の離散するに及んで太閤は遂に秀次の罪狀を鞠問し、死を賜ふには及びたり。其間の委曲は詳かならねども秀次に十分なる弱點ありて申開なり難かりし歟。高臺夫人黨たるべき人々にも前後秀次誅死の事に就きては異言ありしを聞かざれば、たとひ其刑の慘酷なるは太閤の傳記に汚點を與ふべきものなりとも、あながちに石田、增田の讒構、淀君の陰計なりなど云ふべからざる歟。畢竟するに無證據の推測に過ぎずと謂つべし。まして石田は淀殿の意中の人なりきなど云ふは、德川時代の淨瑠璃、芝居の類を以て古人を律する愚にも付かぬ想像說にて取るに足らぬものなること勿論なり。

（四）

淀殿は長政の女、信長の姪女なり。長政、信長共に尋常の人に非ず。淀殿の妹德川秀忠公の室崇源院殿は秀忠公も憚り給ひしほどの強き婦人なりき。此系圖を以て考ふれば淀殿は何さま大人き婦人なりとは思はれずとの論もあらん。成程系圖にては其通なり。さりながら信長の子息にも常眞の如き凡骨あり。姉妹にても妹のおてんば。姉の内氣、花紅柳綠、それ〴〵に品かはれるが多し。親子兄弟の氣質が其通り移りたりと想像するのみにて外に證據なきに直ちに其人物を論ずるは速了の甚しきものと謂つべし。我等の見る所にては淀殿は左樣に手強き女に非ず。隨分すなほの質と見えたり。そは細川家家傳錄・松榮記事などに依るに大閤の薨後、大阪の奉行、相談して淀殿を利家の奥方とし若君の養父に擬せんとて既に其仕度までしたるに利家病死したれば其事行はれざりきとあり。淀殿に自信あり、自負ありと知りたらば奉行なども斯樣の相談はす

まじきなり。片桐東市正が淀殿を關東に人質とせんと計畫したるも淀殿は左樣の注文も豐臣家の爲めとあらば素直に聽き入るべしと想像したるが爲めならん。家康公などは早くより淀殿の弱き人なるを看破したれば冬役和議の時、鐵砲の名人を召寄せ、大阪本丸の天守を打たせば天主の柱を一本打切り酉の方へ傾かせたれば淀君は大きに仰天し早早和談に及びたりと云ふ。(慶長見聞書)。之を平政子の略もあり、膽もあるに比すれば淀殿は眞に平凡の婦人のみ。それを何かやかましき女の樣に思ふは全く系圖と位置とより買蒙りたる後人の想像なり。抑も則天武君と云ひ、平政子と云ひ、膽力經綸、男子の英雄豪傑を凌ぐ婦人は決して淀殿の如き模型のものに非ず。凡そ太閤死後大阪落城に至るまで淀殿の爲す所を見るに果して何の深謀遠慮ありや。何の英雄的の手段ありや。我等の見る所にては其擧動は唯だ愚痴の老女の常態のみ。庚子の役に淀殿が石田と謀を合せて乾坤一擲の賭博を試みたるに非ず。全く傍觀者の位置に在りしは、淀殿の妹の夫京極高次が徳川方なりしに依るも、淀殿の乳母大藏局の子、大野治房が始終東軍に屬したるにても知らる。



されば石田の孤忠も淀殿には痛痒の感なかりしならん石田敗れて德川氏の天下となりし後は淀殿の爲せし所は唯だ神社佛閣の修繕のみ。(創業記)。唯だ秀頼の爲めに神佛に其開運を祈請したるのみ、碌々十五年、何の仕出來したることも無く、其左右には大藏局。二位局。尼正榮。右京太夫。阿茶局。饗庭局。阿古局。玉局など云ふ婦人ありて柔弱なる上方上﨟の風を深宮の中に養ひたるのみ。是豈日本唯一の英雄豐太閤の配として日本全國を敵とし、天下分目の戰爭を爲すべき資格あるものならんや。但し淀君も最後には少々英氣を出したりと見え、大阪陣覺書には大藏局正榮尼駿府より大阪に歸り、片桐且元、駿府へ心を合、淀殿を大御所の御臺に仕候はん企圖仕候由讒言せしかば淀殿大に怒り、信長公の姪にて淺井長政の娘の身、太閤へ見へ奉るさへ口惜思ひつるに、又家康へとあらん事は無念の至なり。却々人質に關東へ下まじく候。片桐着候はゞ御誅伐可有と被仰出とあり。家康公にても五十の老婆は何ぼうば櫻とは云へ餘り珍重せらるまじければ是もうそ話なれども冬夏兩陣には淀君も少しは奮發したる樣子なり。さりながら是れは關東の威勢にじり〱攻付られて致方なく、諺に云ふおびへ時を作りたるものに過ぎざれば窮鼠の猫を嚙みしものなり。猫を嚙しが故に窮鼠の勇を稱するは愚なり。但し淀殿は愚痴なる平凡の婦人なりし故、庚子の役後十五年間、大阪は猶ほ命脈を繋ぎたり。淀殿をして若し政子、武君の類ならしめば其關東との衝突は更に早くして其悲劇は更に一層慘烈なりしものありしならん歟。然らば則ち淀殿猶ほ豐臣氏に功ありと謂つべき歟。非歟。





貴婦人の半面

晴嵐

貴婦人とは何ぞ、夫の金を浪費して、鐵棒を曳き歩くものとは、才氣溢るゝ元祿姐さんの下せし定義なんめり。定義や條規がさう／＼玩具になるものならば、篦で腹切る判官樣が檜舞臺を踏んで、何か二十世紀式のセリフを御聽かせ下さるに相違なしと、樂んで待つて居らるゝ次第になんありける。貴婦人の半面なぞと、大それた看板懸け候ても、七夕樣の星や涼しき愛嬌溢るゝ眼元のみ描くこともありなん。湯上りの赤味を帶びて艶やかなる耳朶のみ描くこともありなん。たゞしは大天狗小天狗の鼻の尖のみ描くこともありなん。去りながら甘酒屋の看板にある美人の鼻ばかりは、ゆめ／＼描き申すまじ。何卒々々御心安う御覽のほど偏に／＼祈り上げ／＼

▲大山公爵夫人捨松子

大ハイカラと想はるゝ公爵夫人、案外眞率なあつさりした應接振り。ベルも鳴らし給はず、わざ／＼段階子の上へ來て、オイ／＼と手を拍き給ふ。書生も女中も皆この調子にて呼び給へば、何れも心安う仕へ侍る。去りながら、この夫人に極めてハイカラ式の點あり、小説を讀み耽り給へる折、「奥樣お午の御菜を何に致しませう」なぞと女中に問はるゝが痛う御嫌ひ。

▲千家男爵夫人俊子

前司法大臣男爵千家尊福朝臣は、如何なる人とも折合よく、絶て衝突なぞし給はぬ社交的天才と承はり候。さるほどに似た者夫婦の俚諺に漏れず、奥方も矢張り天成の交際家と申し上ぐべし。良人を三位が／＼と仰せらるゝ事あり、又老爺が／＼とも仰せらる。三位と

は公人としての良人を喚せらるゝ時の稱呼、老爺とは私人としての良人を喚せらるゝ場合の稱呼。

▲谷子爵夫人玖滿子

熊本籠城の昔より名高きこの夫人は、實に磊落なる話し振りの方にぞ侍る。貴婦人としては聊か磊落過ぎずやと思はるゝ節なきにしもあらず。去りながら、下様にては此夫人の御話によりて、高輪御殿の内親王殿下が御養蠶の傍ら繃帯卷を遊ばされし時、消毒藥の香にて蠶が腐敗せしと云ふ畏れ多き事實をも承知致し、山内侯爵幼時の淸書が、谷子爵家の紙帳や敷蒲團に用ゐられし事實をも承知仕りぬ。

▲岡部子爵夫人坻子

司法大臣子爵岡部長職朝臣の夫人は、加賀宰相様の姫君として生れ給ひ、天の成せる麗質は、東都十美人の選に入らせ給ひし事あり。その窈艶たる御風姿は、校書社會の一粒選をも、慚色あらしむべく、市川萬庵の書を習ひ給ふて出藍の譽あるゆゑ、蛾眉男子と雖も夫人の筆蹟を拜見して逡巡するもの、十中八九に居ることと言ふまでも無し。

▲後藤男爵夫人和子

遞信大臣男爵後藤新平氏夫人は、安場男爵の令孃として生れ給ひ、幼時より武士的教育を受けられしゆゑ精神上の修養は至れり盡せりと謂ふも可なり。加之、近來は參禪せらるゝ事もあれば、滔々たる流俗婦人の如く、良人對賤業婦などの問題に頭腦を惱まし給ふこと無かるべし。この夫人が良人を大切にせらるゝことは申す迄もなく、良人も亦案外謹嚴なりと云ふにあらずや。

▲金子子爵夫人彌壽子

皇后陛下が葉山御用邸へ行啓あらせられし折、金子子爵の別莊へ御立寄遊ばされ、銀のノベの御煙管を御用ゐ遊ばされしより、子爵夫人は湯わかしでも茶臺でも銀に限ると仰しやるとの事なり。夫人は打見たるところ、唯だ優しい柔和一點張の方の如くなれど、嘗て招魂社で見せものとして居た猿が羈絆を脫して子爵邸へ暴れ込みし時、良人が聊か狼狽せられしに似ず、夫

人は毫も騒がず、ピストルに丸を込めて書生に渡されしと、夫人が氣性の一班を推し得べし。

◆東郷伯爵夫人鐵子

三十七八年戰役中、東郷大將の心痛は一方ならず、夫人も此心痛の幾分かを負擔されしゆゑ、今日に於て大勳位伯爵の夫人として仰がれ給ふは偶然にあらず。夫人は戰役中に於ける良人の身上に小說の如き逸話を附け加へて出版する者多きを笑ひ給ひし事あり、殆ど秘密など無きかの如く、スラ〱と話さるれど、而も秘密は秘密として留保せられ、毫も痕迹なきところ、一種の天才と申すべし。

◆黒木伯爵夫人百子

黒木大將は赫々たる名聲を世界に轟かし給ひしも、家に在りては、令孃のリボンを心配せられ、鷄の病氣を心配せられ、水甕の栓までも拵へ給ふほどなり。夫人は良人ほど平民的ならねども、平時は毎日良人が用ゐらるゝ熱粥を拵へ給ひ、戰時は赤十字病院へ精勤せらる。夫人は謙讓にして直覺の聰明なる方なれば幾分か批評的態度に傾き給ふあり、隨つて千家、谷、松平、柳谷、諸夫人の如く活動的、實行的ならねども大山、岩倉諸夫人と同じく、人の上に立たるゝ器局あり。

◆平田男爵夫人辰子

岩倉公爵夫人が婦人界の總理大臣ならば、大山公爵夫人が外務大臣、黒木伯爵夫人が内務大臣、平田男爵夫人が大藏大臣なり。夫人は前遞信大臣、山縣伊三郎氏の令妹にして故品川子爵の養女なるが、頗る家政に長じ如何に紊亂せる家政にても、われに任せば三日間に整理して見せると仰しやる位なり。夫人をして斯くまで家政の達人たらしめたる原因は多かるべきも、嘗て平田家に病人の絶えざりしことありて、費用も嵩みしが、借金嫌ひの男爵夫婦は、家政を頗る精細に調査せられしが、主なる原因なるべし。

◆山脇玄氏夫人房子

學問は三輪田眞佐子刀自、下田歌子女史に及び給はぬが、名公鉅卿の夫人、母堂などに取り入り給ふ事、女

學校を經營し給ふ事などは、跡見、下田の兩女史と鼎立せらる、天晴才女の標本と申すべし。餘り才氣に任さず、根氣強く、規模大きく、天下女子を持てる父母を安心せしむるやう教育し給はんを切望す。

▲鳩山博士夫人春子

識見と氣魄の優りたる婦人なり。然も奥村五百子の如き女豪傑にあらず、良人に仕へては貞順、子女を薫育しては寛嚴宜しきを得。この夫人を蓬薬視するが如きは沒眼の徒のみ。

賢母のかゝみ

東伏見宮御用掛從六位上野幾子刀自は八月十二日病を以て歿せられたり、刀自は靜岡縣士族八木岡清三郎氏の長女にして安政三年に生れ本年五十五歳なり、明治三年上野家へ嫁し同六年夫景範氏が公使として英國倫敦在勤中呼寄られて同九月單身渡英したるが、當時の外交官夫人としては出色の聞え高く、斯くて在英七年明治十二年七月歸朝後皇后陛下に拜謁仰付けられ、在英中夫景範氏を扶けて功勞少からざるを嘉せられ、優渥なる御令旨に料紙硯及び金二千圓を下賜せられ面目を施したり、越えて十五年四月景範氏の公使として澳國に赴任するや又も同行して任地維也納に赴き在澳四年にして同十八年歸朝し爾來家庭に在て專ら子女の教育に孜め居られしが夫景範氏の死後同廿一年小松大宮妃殿下の御用掛を拜し深く妃殿下の御寵遇を受け大宮殿下の薨去後更めて東伏見宮妃殿下の御用掛となり、內外に妃殿下を御指導申上げ、日本赤十字社特別看護婦會の創立に際し擧げられて幹事となり、廿七八年若くは卅七八年の戰役に際し妃殿下の旨を承じ廣島佐世保等に傷病者を慰藉する等功績著しかりしかば、平和克復の後勳四等に叙し寶冠章を賜る等異數の恩命に浴しぬ。刀自病を得て赤十字病院に入院の事天聽に達するや、畏くも位階を陞叙せられ　國母陛下より特に御見舞品を賜る等皇室の覺え目出度他の羨む處なりしが終に午後五時三十分易簀したるなり、家庭は三男二女ありて嗣子景明氏は夙に工科大學を卒業し目下大阪鑛山監督署に技師として在勤し二男四郎三男次郎何れも將來有望の地位に在り長女るい次女春子等何れも良緣ありて夫々嫁し居れりと云ふ、刀自は嗜好として特記すべきものなきも長く英國の生活に慣れ居られたれど平素深く英國家庭の善美を賞揚し子女も爲めに其感化を受け居れりと。

英國女子の學生々活

長谷川きた子

日本の女學生と英國の女學生との、思想や趣味を比較致しますと、彼方の女學生は非常に自由を尙び乍らそれを濫用しないのに反して日本の女學生は假に自由を許すとすれば直ぐ我儘になり、また男女の交際にも恥はしい風評を立てるやうで御座います。それは餘程違ふ所で英國では何の學校も皆男子と席を同じうして勉强もし、交際も親しく致して居りますが、決してそんな事はありません、從つて思想も自由に發達する樣で御座います。

趣味なども日本の女子は大概文學、技藝、家政などが重で、理科、數學などは二の次、又人類學とか地質學とかいふものになると、殆ど絕無で御座いますが、英國では隨分女に似つかぬ事に趣味を持つて研究致します。私の友人(英國人)などは地質學を研究して、此の鑛山からは金が出るとか銅が出るとかと言つて、本當に男子のするやうな事を致して居ります。然し女子がさう多方面に趣味を持て居るのは、一つは英國には女子にも何でも研究が爲得る樣な階段が出來て居るからで御座います。日本では植物學が好きだから研究して見たいと思ひましても、女子大學あたりに僅な手引があるばかりで、蘊奧まで研究することが出來ませんが、英國では女子にも男子同等の智識の發達を許してあつて、オックスフォードでもケンブリッヂでも、學力さへあれば勝手に入學が出來て、男子と肩を並べて、同樣の講義を聞く事が出來ますから、何を研究しようと自由です。

牛津には女生徒は三百人ばかりです、十七八歲位から入學を許して、三年か四年で卒業します。

まづ高等學校を出て後入學試驗を受けるのですが、その高等學校と云ふのは日本の高等女學校よりも程度が餘程高う御座います。日本にも女學校に專修科といふのがあるやうに、向ふにも矢張り一年なり二年なりの專門學の研究科がありますから、或は豫備にそこで

勉強して置いて大學に入學する人もあります。
大學では新しく女子も男子同樣の講義は聞かれますが卒業しても男子の樣に學位は授けられません。と云ふのは詰り米國など丶違つて一體に保守的だからで御座いませう。

御存じの通り英國ではオックスフォードでもケンブリッヂでも、有名な學校は皆私立ですが、それ等の創立者は非常の榮譽として永久に尊敬されます。さうして創立者は自分の學校に對して、一の規則を作りますが、それには何人も永久に服從して、榮譽ある創立者の意志に背くまいといふ保守的觀念が非常に强う御座います。ですから十二三世紀時代の人が立案した規則で時代の變遷につれて守られなくなる場合も隨分ありますが、後で僅に補缺してゆく位に止めて、全然創立者の意志を覆すやうな變更は決して致しません。

日本では小學校でも高等女學校でも仰々しく卒業式を擧行ますが、英國では一向そんな事はありません。卒業式を致しますのは大學校だけで御座います。こゝは最高の學校で、或る意味に於ては月桂冠を得た譯になるからでせう。大學を出た女子は敎育家になる者もあり、主婦になる者もありますが、中には事務的の頭があつて、名士貴顯の秘書役になる者もあります。女が男の御用を勤めるなど丶日本人が訊くと如何にも妙で御座いますが、それは澤山あります。

英國が現今のやうに學校敎育が盛になりましたのは最近の事で、今までは大概家庭敎育によつたものです家庭敎育は却々完備して居まして、中流以上は勿論、其他も大抵は家庭敎師を招聘して、隨分成人くなるまで自宅で勉强させて、直ぐハイスクールの六年位へ這入る者があります。ですから小學校などは日本のやうに盛ではありません、小學校は公立で、家庭敎師も招へない貧民の爲に政府が慈善的に敎育するので、良家の小兒の行く處ではないやうになつて居ります。尤もカレージには、恰度日本の女子大學のやうに幼稚園からずつと上までありますが、私が參觀したところでは矢張り幼稚園などは盛ではありません。日本のやうに

暑中休暇には必ず山や海に遊びにゆくといふ決定はありません、中には休暇中に佛蘭西とか伊太利とかに大旅行をする人もありますが、それとて單に無意味に遊びに行くのでは御座いません、日本では一年中勉強した骨休めとして、此暑中を悠々と過さうといふ意味がありますが、英國では決してそんな考へではないのです彼等は平素は講義ばかり聞かされて居ますので、落々自ら研究する事も讀書する事も暇がなくて出來ませんのを、この時期を利用して讀書とか研究とかに費すやうに考へて居ります。故に旅行をしても研究の材料を得るといふ目的なのです。そうして英國は日本のやうに堪られない熱さもないですから避暑にも及ばないのです。ロンドンなどの繁華な巷に住む人は、いつでも土曜日から月曜の朝まで圖書館に參りますが、大概は自宅に引籠つて讀書をするやうです。

兎も角も日本の女學生は何も彼も教師が世話を燒いて遣るといふ仕末ですが、英國では生徒同士で色々と研究會や娛樂會のやうなものを立派に組織して遣つて居りますから、智識の發達なども非常に相違があります。

パイの皮

材料

メリケン粉　一合入茶碗二杯
鹽　小匙半杯
焼粉　小匙二杯
ラード(豚の油)又はバタ大匙二杯

粉と焼粉と鹽とを一緒に混ぜて篩でふるひ、其中へラードを入れ、手にてよく揉み、混化したる後冷水を入れて手頃に捏ね、別に板の上に粉を振り撒き、其上にて麺棒で一分位に延べ、其れをパイ焼皿の形に切つて皿の底に敷き、其中へ南瓜或は林檎等の材料を入れて焼くのです。

前記材料の中へ砂糖を小匙一杯位入れてもよし。

MILK AND BREAD.

$\frac{1}{2}$ cup boiled milk.

2 tablespoonfuls stale bread

a very little sugar.

Crumble the bread into the boiled milk, sweeten, and when cool enough, feed to the child with a spoon.

パン乳

材料

煮立ちたる牛乳一合入コツプ半杯
固きパンを砕きたる屑大匙二杯
砂糖少量

沸騰したる牛乳の中へパン屑を入れて甘味をつけ、其の充分に冷えたる時に匙にて子供に與へるのです。

BATTER PUDDING, BAKED.

$1\frac{1}{2}$ pint of milk.

4 tablespoonful of flour.

1 tablespoonful butter.

3 eggs.

a little salt.

Mix the flour with a small quantity of cold milk; make the remainder hot, and pour it on to the flour, kiping the mixture well stirred; add the butter, eggs and salt; beat the whole well and put the pudding into a buttered pie-dish; bake for $\frac{3}{4}$ hour, and serve wine sauce or stewed fruit. Baked in small cups, very pretty little pudding may be made.

むし焼菓子プツデイング

材料

牛乳　一杯半
粉　大匙四杯
バタ　大匙一杯
玉子　三個
鹽　少し

冷き牛乳少しを以て粉を解き、殘りの牛乳を煮立てゝ其粉の上へよく攪き廻しながら注ぎ掛け、其れへバタ、玉子、鹽を加へ、又よく交ぜ、それをバタを引きたるパイ皿に入れて四十五分間焼くのです。食する時に葡萄酒にて作りたるソース(次に説く)をかけるか、又は煮たる果物(ジヤミにてもよろし)を添へて出します。之れは小さい茶碗に入れて一人前宛焼く事もできます。

WINE SAUCE.

$\frac{1}{3}$ cup butter.

1 cup powdered sugar.

3 tablespoonfuls wine.

grating nutmeg.

Cream the butter, add sugar gradually, and wine slowly; pile on grass dish, and sprinkle with grated nutmeg.

葡萄ソース

材料

バタ　半杯
砂糖　一杯
葡萄酒　大匙三杯

バタをよく煉り交ぜ、それへ砂糖を少しづゝ加へ、又葡萄酒を徐々に交ぜ込み、後ち皿に盛つてナツトメツグの粉をふりかけるのです。

簡易家政術

櫻井ちか子

TO MAKE JELLY.

Cover the fruit with water and boil slowly until broken; strain a small portion at a time through coarse bags-salt sacks are good for this purpose. Too much squeezing makes cloudy jelly. To every Cup of juce allow one cup of gronulated sugar. Boil from ten to twenty mimites, to keep glasses from breaking, wrap with a wet cloth, or stand a silver spoon in them when filling. Make jelly on a bright day. Putting the grasses to cool in the sun will make the jelly more solid.

ジエレー

果物（桃、杏子、葡萄等何にてもよし）を丁度被ふ位水を入れ、皮の破るゝ迄文火で煮て、それを目のあらき布の袋にて少しづゝ漉し、（餘り強く絞ればつゆが濁るゆゑ成るべく自然にたらす）其搾り汁一杯につき砂糖一杯位を和し、更に十分乃至廿分間煮て、ガラスコツプの中へ入れて冷やすのです。之を入れる時は器物の破れない用心として濡れた布で其外部を被ふか、或は其中に銀の匙を立てゝ置きます。

又晴天の日に作つて日光面にコツプを置いて冷せば、ジエレーは一層固くなります。

SQUASH PIE.

2 cups stewed squash, pressed through a sieve.
2 eggs-whites and yolks beeten seperatly.
1 Cup milk.
1 teaspoonful sinnamon, and the same of nutmeg.
1 ½ cup white sugar, or very light brown.

Beat all well togather, and bake in crust without cover.

南瓜のパイ

材料

南瓜（皮をむき、うでゝ、裏濾にしたるもの）	二杯
玉子（白味黄味を別々に泡立たるもの）	二杯
牛乳	一杯
粉肉桂	茶匙半杯
ナツトメツグ	茶匙半杯
白砂糖	一杯半

以上の品々を一緒によく攪き交ぜ、パイの皮（次に説く）に入れて蓋を作らずに燒くのです。

序に林檎のパイの作り方を述べませう。之れは先づ林檎の皮をむき、實を取り、極く細く刻み、白砂糖を適宜にふりかけ、よく交ぜて、矢張りパイの皮に入れて燒くのです。尤も此のパイは蓋を作つて燒きます。そして蓋の上に玉子の黄味或は牛乳を塗つて燒けば光澤がよくなります。

BAKING POWDER PIE CRUST.

Two cups of flour, one half teaspoonful of salt, two teaspoonfuls of baking pouder, two heaping tablespoonfuls lard rubbed in the flour; mix with a little cold water.



癖に囚はれたる婦人

紅涙女史

女の欠點は那邊にあるか

◎嫌味と思はるゝ奥樣

御年の程は三十路餘り、田舍に生れて相當に暮されしも、幼い時からまゝしい母の手に育つたと云ふ御話、凡てが十八世紀式に出來て居て、他所ゆきの御着物召しても品こそ當世物ながら、その柄と云ひ、お粧りと云ひ……お背の低いのに巾廣の帶を輪の樣に大きくお太鼓にしめてお歩きなさる後から拜見すると、ブカブカ〳〵〳〵おみ帶が運動して居ると云ふ體、さりながらお世帶萬端行屆いて、却々のお仕末家、尤旦那樣御養子の事とて一日も二日もおき給へば、他所外の旦那殿の樣に、何だ此の菜は、毎日々々同じ樣なもの計り食せて、も少しは何とか出來さうなもんだ。なんて口汚なく叱り飛ばされる氣づかひは更になく、萬事皆奥樣次第。

『宿は牛肉が大好きで御座いますので、毎晩肉と極めて居ります。』

この御言葉に、さても〳〵御根氣の強い事や、いくらお好きにしろ毎日同じ物では、御料理の仕方にもお困りだらうに、一體どんな風にして旦那樣を滿足おさせ遊ばすか、後學の爲めに伺つて置きませうと申すと何の毎晩お葱と一緒にグツ〳〵云はせて召上るのですとか、つく〴〵と御主人公のおとなしく入らせられるに感服せざるを得ませんでした。併し一寸奥樣には御内々で、ちつと計りそこらの八釜しやの御主人樣の御爪の垢でも煎じて飲せて上げたい……などゝ意地の惡い考も出ますする。

此の御人、長らく御附合申しても更々打ち解くると云ふ事なく、女同志の事ですもの、少し長く、お附合ひすると、もう世帯の愚痴やら、子供等の着物の柄の事迄も御相談仕合ふのが、普通の女の人情で御座いませうのに、さても〳〵おつゝしみの深いことやもし此方から『大そう此頃は物價が上つて參りました事ね、こう鰻上りにだん〳〵上られましては、ほんに困つて仕舞ひ升事。』

などゝ申上げても妙にニタ〳〵御笑ひなされて、

『まアンナ事を、御笑談計り、貴女方の處でお困り遊ばす事が御座いますものか、それは貴女手前共の樣な者の申す事で。』



グッと癪に障つて默つて居ると、又先方から仰やり出す一言々々が氣障で穩やかで無い。

『アノ、先日のお子の七つの祝にと存じまして縮緬の紋附をこしらへて遣はしましたら、呉服屋で貴女紋を間違へまして書き替へに直ぐ遣はしましたが、とうとう間に合ひませんので、仕方なしに大急ぎで綿服の紋附を私が仕立てゝ、間に合せました。』

と仰やる、ハテ面妖な、綿服の御紋附は此間私が仕立物をさせるおとき婆の家に行つた時に

「奥様△△様の御嬢様ので御座います。」
と云つて見せましたが、アレより外に又お拵らへになつたのかと思つて居ると、
「御覧下さいまし。」とお持ち出しになつたのは、笑止や、おとき婆の許で見たそれと同じ模様、同じ色。
日頃から縫物自慢の御方なりしが、一寸他人の力で角力取らうと遊ばしたのでせうが、奥様さうとは知らぬが佛の御自慢顔、お可笑のをグッ堪へて、
「まアよくお仕立て上りでした事、此の褄のお格好のおよろしい事。」
と素知らぬ顔で褒め奉つておくと、奥様大得意で此れを糸口に、チツリ／＼と御主人公の事より、御坊様、嬢様の御賢明に渡らせられる由を、ツケ／＼と御自慢遊ばす。何、他人から見れば不思議でも何でもない、幾ら私達の様なもの丶子供でも、満更の馬鹿持たぬ限りは、御自慢の種になる位の事は年中の事、ソレを何ぞや、ヘン面白くもない、御自分は宜しからうが、マア聞く身にもなつて御覧じませ、生欠伸嚙みつぶして痺切らして、
「ハア／＼マアさうで御座いますか。」
も好い加減な御役目で御座います、マア俗に云ふ子ツチリとした意地の悪い御性質で、別に心チヤ／＼おしやべり遊ばすのでもないですが、さうかと云つて決して溫和しい人ではない、陰へ廻つて一寸々々と人の仲をつゝいて見る、一寸甘い事を云ふ、中傷する、第一人を褒めると云ふ事が大のお嫌ひ、どうも長く交はつて見るに御自分の欠點には御氣がつかれぬ様だ、それと僻みが強いから、外の若い人達の新進の様子がやけてやけてならぬ、自分を袖にして仕舞ひはせぬか、外の人の方が評判が好かないかと氣を揉れる、遂こう云ふ風の人とて自然足が遠のくとサア事です。
「マア貴女大層御見限りでした子、私だつてさう御嫌ひなさらなくともお宜しいでせう、もう些と御出で下さいましな、此間島崎さんや吉野さんの奥様方と何處へ御出掛になりました私も御誘ひ下されば、参るので御座んしたのに。」

マア嫌だ、探偵でも御抱へなされたか、よく人の一擧一動を御存じだこと、尤これもほんの座興の笑談の樣に輕く出られたのなら、お互に笑談に云ふ事故、よし探偵を入れてお探りなさつたにしろ、後めたからぬ我々ども何條いとひ申べき、此方からも御茶らかして、アハ、オホ、で睦じく御附合でも出來樣ものを、殘念ながら萬事此の樣では、よしやシコタマ嫌味辛味を聞されようとも、近よらぬが得策だと皆樣御一樣に申されます。



大々的放任主義

◎極端の物臭なる奧樣

御生れは海てふもの知らぬ山國とやらんにて、柄大きうてお色白う、目鼻立尋常に美しき御人なれども、何時上つても〱御掃除の惡い事〱、うつかりそこらへ坐らうものなら大變、第一御子樣が縞目も分らぬ程に汚れくさつた、片一方は二寸、片一方は四寸五分とお袖付の寸法も違つたお召物に、細帶姿でお肩のあたりに觀音樣二つ三つ、青洟汁たらして、お顏も拭い

てお上げなさらねば垢まぶれ、奥様に似て愛らしい御人形顔のお顔なれどもお可愛想にお愛嬌にも抱いて上げられぬと云ふ仕末、萬事はお子様の此の一事にても知れまする、ましてや奥様の御姿は、お袖口よりはつづれの錦ぶら下り、おみ帯の端よりも同じく錦の房下りて、ほころびは切れ放題、丈長くしてうつくしかりし翠の御髪は何時お櫛の齒を入れ給ひけん、海布の樣に亂れて、お手の筋には炭をば摑み取り仕給ふと見えて、眞黒に汚れて居れども、更に御本人お氣にも留め給はず、平氣にてお茶も其の手、お菓子もその御手でおつまみなさる、そんなら此のお家貧しいかと申すとどうして〳〵人様の風評には奥様の御内職は高利とやらを遊ばすさうな、お子様方のお躾けは放任主義の誤解か、駄々のこね放題、不行儀の仕方題、たまに上るに、お土産がもしお菓子でない時には實に此方が赤面する樣で御座います、お土産さし上ると御子樣が、

母さんお呉れよう、よう開けて頂戴よう〳〵

と母様の肩へ上る、こづく、引つ張る、少し位お叱りなされても日頃もう其の手はお子様の方が上手で、邪二無二開けさせて、わしお菓子でなかつた時は、

菓子おくれよう、こんなもの嫌だアい

と御向様に轉くり返つて足をドン〳〵、お土産持つて來てヤレ〳〵何てまア御氣の毒した事やらと思ひもしますが、又御子さんとは云へ、餘りの事に呆れて仕舞ひます。お茶が出る、お菓子が出る、お子さんには先づ先きにお上げなさると、自分の飲みさしの御茶を急須に入れる、お菓子を摑み取りする、どうも餘りの御亂暴に御話も落々出來ませぬ。

折々に御馳走などになつた時、お臺所へお膳を下げに行きますと、何時でも〳〵足の踏み立て場もあらばこそ、彼方の隅に澤庵の切ッぱし、此方の隅に煤まぶれの穴の明いた古鍋、足の取れた眞黒な俎板の上にはほこりが眞白、庖丁を迂つかり持つと何やら正體の知れないものがベツトリ、バケツは青苔に色どられて古色を帶び、中には御飯粒の屍が白くぼやけた樣に沈んで居る、醬油が溢れて板の間に染みついて、お釜には

何年あとからのか御飯の吹きこぼれたあとがもうこげ茶色にこびりついて居る。といふ有樣に、暫時は呆然と佇ずまねばならぬ、その癖御茶の湯の御名手にて、時々御招き下さる事があれども、お茶席の赤さん例の御姿で這々しておいでなされ、汚ないものお失敗なされば、傍の襤褓を取つてゴシ〳〵とお拭きになつて、其の御手お洗ひもなさらずに直に又御手前、如何程の御銘茶でも飲みかけてダーッと込み上げてくる、けれども目をつぶつて辛抱して飲み下す辛さ、併し此の御人汚ない事御構ひなき事には、ほと〳〵弱れど、決して人の蔭口を云ひ給はず氣輕な附合し安き人とて、皆樣汚ないと承知で好く親密にお附合なされます。此の奥樣の御持論には、私共も反對、私などは一つ身でも一と冬に三度位は洗つて縫ひ替へますが、それが此の方は大不贊成――其の仰やるのに一つ身なんか縫ひ込みも何もないものを、忙しい思して手間かけて縫なほす丈のものはない、私なんか一度縫ふて切れるまで着せて仕舞ふ、汚れて穢ないと思へば丸洗すれば好い、そして新らしい物買つた方が益だと、云ふ御說、それ故御自分の物は元より一冬々々にも洗ひ張なさるといふ事なく、切れる迄召してそして見切物でも買つて來て新らしく仕立てゝお召しなさるといふ風です、サア何方が好いのやらそれは矢張人々の思ひ〳〵でがな御座いませう。

丸で世間を見ぬ女

◎利己心の强き奥樣

年來の戀を結婚てふ名目のもとに解決すべければ、妁人と云ふ大役を引き受よとの依賴を重返事に受合つて、ほんの世話なし、他日の苦情などは知らぬ顏の半兵衛さんにて名丈の大役を承はり兎も角も一寸お盃丈させて上げる役を私が盡した新夫人が、あると思召せ。そのお年はまだやつと十八の美しざかり、右の次第で當世風に開け切つたお人、却々結婚の翌る日じやとて赤い顏してウジ〳〵と口も利き得ぬなど云ふ樣な事もなく、此妁人樣を傍に置いてむつまじいお戯れ

言など遊ばして、大に安心させ給ふといふ樣な調子、田舍も田舍、山中の生れながら、高等女學校の卒業生と云ふので左程珍らしくもなけれど田舍で始終かつぎ上げられた癖がついたと見えて、一にも學校、二にも學校と毎日々々の御料理から一切萬端學校を擔ぎ上げ給へど、世間は學校で習つた通りに行くものでなし、いくら御怜悧でもまだ〳〵お齡の行かぬ事とて、たまたまの經驗のある人が親切心で御注意申して見る事もあれど却々どうしてウンとは仰やらぬ、學校で習つた西洋料理をとて始終おこしらへなされしも時には人樣の事ながらお可笑事がありまする、何時でしたか婚禮して間のない時の事でした私の參つた時旦那樣の仰やるには、『ビフテキをちッとも喰せません、何故喰せんかと云ふと學校で習はなんだといふ、イヤあれを教へん筈はなからうと思ふが貴女どう思ひます。』と仰やるので、サア何と申して好いかと躊躇つて居ると、

『本當ですよ習ひませんのですもの、噓なんか申しませんよ。』

つて目に角立てゝ仰やれば旦那樣笑ひながら、『サア、左樣ならイヽワ習はんにしておくさ、そして奧樣に伺ふが好い。』

と仰やれど御氣色大に惡しうて、ツンと澄して物も仰やらぬに旦那樣氣の毒がつて、

『オイ怒つたのか、ハヽヽ奧樣の居らッしやるに花嫁さんが何の事だ、子奧樣教へてやつて下さいそして伺つて今夜一つ御馳走してくれ、子奧樣六ッかしいものですか。』

と申さるゝに默つてる譯にも行かず、

『エヽ〳〵ほんの貴方燒の加減丈で甘くも不味もなるので御座いますよ、それさへ分れば何でも御座いませんのですよ。』

と申上ても奧樣さして訊うとも仕給はぬに、負惜しみの强い性の人なんだらうと其のまゝにして歸つて仕舞ひましたが又機嫌さへ好くば、彼方から立てつゞけに白々しいお愛想を仰やつて、御口數の多い中には遂こ

んな事も仰やる。

「此間蟹のフライを致しましたのよ。」

「さうですか、それは嘸お美味う御座いましたらうネ、蟹もおいしいけれども面倒ですからネ、アノ一一肉をむしりますのが世話ですネ。」

と申すと目を圓くして、

「ア、肉を挘つてすれば好う御座んしたネ。」

つて仰やるから、

「エ、挘らなくつてはいけますまいヽ貴女どうなさつて。」

と伺ふと少し極り惡る氣に、



「アノ儘まで揚ましたの、そしたら何だか骨つぽくつて面倒だつて申しますから、お甘しいものをこしらへて上げて不足を仰やるつて私怒つてやつたのですの。」

プッと吹き出したかかつたが餘り眞面目なので堪へて居ました強情なれどまだまだ世間見ずの事とて何處か可愛らしい處もある、併し之は不完全な學校料理から來た弊でせう。も一つの倹約を履ちがへて、吝い事〱どう忠告したとて却々聞かないのです、結婚時にも何分風評の高かつた婚禮とて随分中には關

嫌も交つたでせうが、祝物の來た事おびたゞしい、それに舊式かも知れませんが普通の禮儀だからと例の配り物の事を幾度注意したかも知れませんが。

『エ、、ですけれど祝ふて貰ふのは當り前の事ですから、私共も此度又頂いた先で御子樣でも生れるか、死んだ人でもあつた時に上げますから。』

つて仰るから、

『成程世の中が進んで皆樣が皆さう開けて下さればそれは好い事でせうが、却々まだそれ程迄に開けては居ませず、ましてそれは人の前に何か事あらばと目をつけて居るやうなものですから、昔から仕來たつた習慣丈は幾何もかゝるものではなし、なるつたけ方が好う御座んせう。』

と何程すゝめても承知なさらない、旦那樣も始めは私し共と一緒にすゝめてゝしたが、戀女房の意志堅くて、遂にお流れとなりました。私とて、それは何方でもかまひませぬが、兎に角名計にもせよ妁人した間柄、人樣から惡く云れなさるのを聞いて、面白いとは思はれず、要らぬ世話ではあるけれど、ほんの老婆心に忠告したのでしたが、案の條隨分樣々に惡く云れましたが、御本人それこそ澄したもの、これには年功の私はとほと意地の强固なのに敬服いたしました。サアこうなると何も彼も儉約々々で、或時などは固めて買ふと安いとの一言に、牛肉を三斤買ひ込んで丁度暑い盛りの事とて、遂々大部分腐らかして仕舞つて、折角の儉約が不儉約になつた事もあります。かういふ次第ですから始めは隨分學校で習つた例の西洋料理で、他の獨身者などに振舞れたなれど、一朝念頭に浮びし此二字の爲に親密にして居た者が行ても茶一つ快く出さぬ極端なる仕末に、終には尋ねる人も無くなつて、夫人は結句物費りがせぬとて喜ばれたれど、其餘波引いて御主人の務に關係し、どうも萬事が不都合になつて、お終ひは一時休職にといふ事になられた、が、今は去る田舍に行かれたさうです。其後此お妁人も、此の二字の爲めに參上仕るを扣へた仲間で、先方から葉書一枚下さらねば此方からも負惜しみで、出しませぬ。此處に

結婚當時から儉約時代にかけて三ヶ月程實家からついて來て居た老婆の話しに。

「お里も、仕末家では御座いますが、奥樣も却々しつかり者で御座います。始めて里歸りにとて二タ月程過ぎた頃、はる〲御實家へお出なされた時、實母樣から私にお土產だと仰やつてそれもまだ、そんな事仰やらねばよいのに何もなかつたので仰やつたのでせうが、柏餠の石の樣なのを五つ頂きました、私は齒が惡うて迚も頂けませぬと申しましたら、そんなら勿體ないからとて御自分で召上つておしまひなさいました。」



と暗に吝いと不平を云ふた事がありました。又此御夫婦は、隨分旦那樣お鼻の下長く遊して御出での樣なれど、時々に野郎叫りして姫御前のあられもない摑み合ひをなさる事があつたとやら、兎角人には憎まれてもお金は貯りませうが、萬事萬端旦那樣結婚前に夢見給ひし甘い香はさてどうで御座いませうか。

模範的の整理家

◎忠實なる奥樣

お附合したのはまだ漸と三年位なれど、何時上つても奥樣簡袖姿甲斐々々しく下女促してセツ〳〵と御働きなされ、板の間でも何でもテカ〳〵と光る樣に拭き込んで、見るからにサバ〳〵と心地好く、奥樣の御氣質もサツパリとして丁度竹を割つた樣なお方、御話しに上つても少しも不快な感じが起らず、何時も樂しませて御歸しになる、此の方の御主人程の地位の夫人になると、ソレ愛國婦人會の、赤十字社のとあらゆる口實のもとに出歩き給へど、此の奥樣は更に去る處へは顏出しもなさらず誘ふ人があれば、

「私の樣な用の多い身體はとても皆樣と御一緒には出來ません、どうか貴女私の分迄もよろしく。」

と愛嬌振りまいて出費丈は快くなされども、決して御自分は派手な處へは御出向きになりませず、專心につとめ給へば、よし火事よそれ何よと不時の大事があッても、我々の樣に荷物などにあわてふためく樣な事もなく、何時もキチンと處を極めて、何時何時を明けて見られても、ちつとも恥かしからぬ御仕末の好さ、旦那樣への當りも好く、私などが長坐して話込んで居る時にお歸りになると、

「一寸失禮を。」

と仰やつて御召物お着かへ遊ばしながら、色々と御留守中の御話を愉快にお話し遊ばします。ほんに旦那樣とても我が家に歸つてもふくれッ面の女房の顏見るより笑顏で迎へられたなら、どんなに心地の好い事で御座んせう。いくら怒りつぽい方でも、手の出し樣がありますまい、とても我々など、眞似の出來ぬ事と感心致します。それにこれ程調つて居られても、遂ぞ一言御自慢などなされた事なく、仰やらずとも自然にさう見えるので御座います。下女などにも御優しいと見えて、ついぞ出代る事もなく、他人にも又御親切で、何時でしたか私が下女と二人の留守中に、眞夜中宅の裏の家から出火して、どう爲ようかと思つて騒ぐ中に、

一番先に駈けつけて下さつたは十數丁も離れて住んで居られた此奧様、切つて廻して、荷物をば出して頂いたのです、大助かりをしましたが、日頃親類同様に附き合ふて居る人でさへ真逆の時には、こうは行かぬものそれが毎日往來するといふ程でもない中を、本統に感心なと、其時つくづく身にしみて嬉しう思ひました。こういふ事は私計りでなく、幾何も同感の方が御座いました、常にはそんなにも思ひませぬが、サアとなると極力盡して下さるのです。只此



の方の缺點とも見るは、餘りに衛生に焦心して冬はさうでも御座んせぬが、夏は御門をくゞるともう石炭酸の匂プーンと鼻をつく事で、丁度病院の門でも這入つた様な心持ちがします。これは拭掃除一切を石炭酸で遊ばすので、それも日に三度は必ずなさいますさうな、野菜は南瓜なども消化が悪いとて中の心計り召上る、それで八百屋がお甘い處をお捨てなさるとて勿體ながつて居りました。併しこれは些少な缺點で、兎に角もこれ程に家を整理して、猶その

餘暇には時勢におくれぬ樣にと、御勉強怠りなしとの事で御座います。論より證據、此の家の御子樣方を見ますれば、日頃の奥樣の御心懸けが分ります、少しも壓制してお育てなさるではなく、放任主義のお育て方なれど、折目正しい御召物に、御足袋は細かに美しくついであるし、夏ならば毎日糊のシャンとしたのに召し替へさせて、何時もお腰には御手拭が下つて居ります。

天眞爛熳の標本

◎塵の外に暮す奥樣

都育ち、御齢の程廿歳許り、稀に見る美しさ、けれどそれを鼻にかけると云ふ樣な氣振は少しもなく、捌け切つた快活な質の人で、殊に八釜しい姑などはなし、財産は充分あるし、お小さいのもなし、ほんのお二人お差向ひで、下女も二人御遣ひなされて、お氣樂此の上なしの幸福者、お二人ともに鳴物が大好きなのと、人樣集めて賑やかに騷ぐのがお道樂、好きこそ物の上手なれで、三味であれ・琴であれ、奥樣御手に入つたもので、旦那樣御自宅の時でもさうなれど、御不在の時などには淋しいのが嫌ひだとて、此の道の好きもの集めて朝からチヤン〳〵〳〵賑しい大騷ぎ、はげしい時には鼓太鼓までも這入ると云ふ大陽氣、御夫婦仲は餘所目にも羨ましい位むつまじいが、それもその理、旦那樣は大の御酒好きで、晩酌にも一升位は召上るとか、……それを他處の奥樣方の樣に、澁い顏見せ給はず、何時の間にやら大分飲み習はし給ひて、白魚の樣なうつくしい指先きに、一寸お盃を摘んで、今頃なら破れ麻の葉か何かのお浴衣に、白地羽二重に雲龍か何かの思ひ切つた柄の帶をシャンと小粋氣に結んで、美しう結び上げた丸髷のびんのほつれ二すぢ三筋お目の縁をほんのりとさせて。

『ネ一寸貴方ヤボな事云はないでたつたお一つネ、好いぢや御座いませんか、ネ、お一つだけ。』

つて首かしげ給ふお顏のあどけなさ旦那樣ならずとも恍とりとして仕舞ひます。こんな事爲るのを決し

て好いとは思ひません、隨分片腹痛く思ふ事もありますが、さう云ふものか此の人の御顔を見ると何一言仰やらないでも、何だか引つけられる樣に思はれて、我も人も足繁く出這入りをする、こんな風である上に、やりつぱなしの、誰彼の差別もなく、男でも女でも、若くても老人でも、別に隔てなく打ち解けて、しんみりと御附合ひなさるので、老人達などは、

「お若いのに老人を嫌ひもなさらずにお優しい、本當に好い方だ、宅の嫁があの樣にやさしかつたら。」

なんて大分老人連にも評判が好い。が又一方では本人少しも浮いた氣もなく、清い考へでなさる事ですけれど、深く知らない者は樣子がそれ彼樣な風だものですから、一寸それ者の果かしらなど〻、怪しみもするし、又此の人の人望家であるのと美しいのと、御夫妻中の好いのと、お金持なのとを燒く人間も、多い中にあつて、つまらん事を針小棒大に、隨分怪しかる風評を立てる事もある、罪の無い無邪氣な人の事とて、何だか可愛想であんまり、派手な騷ぎや何かなさらぬ樣に忠告して上ようと思ふ事もありますがさて行つて見るとアノ人形の樣な、そして品のよい、姿ならお顏なら、莞爾々々した邪氣の無い樣子で、チヨコ〳〵と小走りに走り出で、

「マアよく來らつしやつてネ、私淋しくて仕方が無かつたのよ、本當に貴女は氣が利いて入つしやるわ、ア……、きとつ虫が知らせるつて云ふのですネ。」

なんて私の手を取つて握りしめたり重ねたり、妙な癖で嬉しい時とか、一生懸命御話に身が這入つた時とかには、誰にでも必となさるので、女同志だから好い樣なもの〻、もし若い青春の血の燃ゆる殿方であつたら……無心でなさる事ながら、美しい此の人のする事、どう思ひ違ひをなさらぬとも……旦那樣も此のお癖にお氣がつかれたと見えて、

「よく、人の手を引張る奴だナ、どうも奥樣彼れはちつと手癖が惡い樣で。」

などゝ笑談を仰やる事もあります、嬉しがつていいそいそとお待遇をされると一寸口から何も出なくなつて

仕兼ふけれど、思ひ切つてかう〳〵と風評の一部分もお話して、御懇意の中故とおことわりしてお悪い處を御注意申上ると、もう情に激し易い人の常とて、涙にお身體も盡るかと思ふ位、泣て〳〵泣きぬかれる、併し忠告は又喜んで御自分も注意をなさるが、他人の話でも直き自分の事の様に同情の涙にくれ給ふといふ有様故、何の彼のと又他から誘はれるとつひとその氣になつて元よりお好きな事とて。騒いで見て後では悪い事した怒らずに居て下さいよなんて何度も私に仰有るのです。兎に角小さい時から父様なしなれど、やさしい女親の手に温かく苦勞知らずに育つた愛娘の事とて、人と云ふものゝ恐ろしといふ事は夢にも御存じなく、皆自分の様な考の者と計り思つて秘し事をなさらず、思ひのまゝにキビ〳〵とした事を情にまかせてなさるから、縦一時にしろ誤解を招く御本人も今じや大分自分の缺點を御存じの様子で、餘程改めるつもりと見えて何時か私に、

「まア私これでも母ちやんになつたら少しはなほりませうか。」

と云れた事があつた、幸福と旦那様が能く此の奥様の心裏を知つてお出なので、人が何と云はうが旦那様の心は塵ほども動かず家内は羨ましいほどであります、情の人なのが缺點でもあらうが、又此の人の美點でもあらうと私は信じます。だがどう思つても此の人塵の中に交つて暮して居る人とは私には思はれないので、何だか、可憐様な氣がしてなりません。





内所で書いた嫁の日記

月待女

別れ

明夜式を擧ぐるようにと、今夜の終列車で出立すること〻成つた。嫁ぐ先は東京である、家内はまるで市が立つたやうだ。私は只彼方にうろ〳〵此方にうろうろ、お母様は兎も角顏をそつて置かうと仰るので、明かるい窓の下に坐る。二十年が間手塩にかけたが、今日限りだと涙ぐんで居らつしやるので、私も堪え切れず、泣き出しました。丁度軒端の桐の葉がちら〳〵落ちるので、猶更心細く、背戸の柿の木には烏が時を得顏にほしいま〻に實を啄いて居る。毎日々々學校から歸るや否、包みを拋り出して捥とつては食べ〳〵して、咽喉の乾きを醫したのに。

ふる里に今年斗りの柿の味

手早く着物きかへて親類や、心易き人の許にお暇乞ひに行く、今日斗りは走る車も〻どかしいやうで、家に歸つたのは早夕方の、此門くゞるのも〻う一度ぎり。垣根の樫の木の、圓く欝もりと格好のよいのは、そのむかし松茸狩りの時、拾ふた實を蒔いて置いたのが、もう一昔になる。明日からは氣を留めて見てくれる人もあるまい。勝手元で水汲むのはお風呂の支度かしら。ア、これも今晩限り。お顏をきれいに洗はねば、お正月が逃げて行きますよとお母様にいはれたのも未だ昨日のやうに思はれる。

家に歸へると、妹がまあ遅かつたことねと、皆から急かれて、湯に這入る、そこ〳〵にして出た。座敷にはチヤンとお膳が並で居て、私の好な物斗り。

こうして、睦じく話し合ふのも今日ぎりと思ふと胸が一ぱいに成つて何も食べられない。父様の高砂の謠

ひに、母様のお歌で、私が琴、妹がヴワイオリンで、萬歳を芽出たく終つた時、早車がガラ／＼と來て梶棒を卸した。父様に母様に私の分、玄關には妹と叔母さん達、私は御機嫌ようも口の内、後振返へり見る勇氣もなく夢心地で停車場の待合室に着いた。お父様にさらばの御あいさつ申せとお母様から御催促されても、それさへ言はれず涙で顔も上げられぬ位。お父様も怺えかねてか電報がけて來るよといつて出ておしまひなすつた。其内時間が來て汽車に乘る。お父様はと捜しても見えず。秋雨シト／＼と、電燈の光斗りが眩ゆい。

婚夜の翌日

こゝは離れの八疊敷である。有明の影幽かに、勝手の方では早やガタ／＼と音がする。時計を見るともう六時、今更のやうにあちこちと見廻はすと、床には美しく花が活つてあつて、掛物は唐様の立派な物がかゝつてゐる。部屋も飾つたよりかなか／＼結構であるので今更に嬉しい心持がした。お母様から着よと仰つた八丈に、紫のお被布着て、さて第一に何といふて口を利かうかと考へながら、廊下づたひに主家に行く、お庭も奇麗に手入が出來てゐる。緣側などは滑り相だ。茶の間に這入ると早もうお姑様が起きて居らした。何だか顏見られるのがきまり惡い、不束者ですがどうぞ宜しく／＼と口の内で御あいさつ申す。お手水はこちらでございますと、女中に導かれて湯殿に行つた。何だか總てがテキパキとして上方の田舍に呑氣に育つた私には始めから叱られて居るやうである、お波々／＼と呼び捨てにされたので、何だか急に人格を落されたやうな氣がして厭であつた、里ではお父様もお母様も波子々／＼と仰つたし。兄様は波さんと呼んで下すつた。それが、私の耳懷かしい習慣となつてゐるの今それが急に破れたのである。

御飯といはれて茶の間に行くと、良人はお膳の前で煙草を喫つて居らつしやる。お早う御座いますと申上る。私のお膳が良人のと並べてあるので、急に又きまりが惡いが、仕方もない。小くなつて隣へ坐る。里の

兄様は、嫂様の嫁らした時、翌朝も、お晝も、夕食の時も、それから二三日の後も食事ごとに、嫂様にサア御上りと仰つたのに、今良人は何とも仰つて下さらないので、少々物足らぬ心地がした。

妹の玉子様は、成程其の名の通り玉のやうに美しい。マーガレットに藤色の巾廣のリボンを懸けて目がさめるやうだ。之れが本統のハイカラといふのであらう。

「今朝のお汁の實はなあに？……イヤあ要らないワ」

私は驚いた。今までは里でお父様の甘い乾物好きに、兄様の御酒上がるのに、いつも



同じ物で、私たちが好物だからとて、南瓜の煮たのや、お薩の天麩羅やが附いても、誰一人小言いふものもなかつた。只香の物だけはお母様のお歯が惡いので霰の樣に別に小さく切つて上げた。そしてお母様のお盛りが丁度よくて、殘したり剩したりするものもなかつた。實に愉快であつた。今頃は皆樂しく食事をして居らつしやるかしら、妹の無邪氣な夢のお話で皆が笑つて居らつしやるだらう。ふと氣がつくとお給仕の女中が私の顔ばかり、穴のあく程見て居るので、どう食べたやら辨らずに終ふ。

暫く良人の新聞讀んで居らつしやるのを聞いて居たが、お勝手で女中の跡仕舞の手傳ひでもして來ようかと思ふ、けれど出過た者と思はれても厭だと、思つて差し扣へて、其内何とか仰つて下さるかと待つて居たが、餘り手持不沙汰なのでお掃除でも致しませうかとお姑様に伺ふと、まア宜しいよと仰るので、又一倍氣づまりな樣である。

其内良人が一寸友達の許まで行つて來るとて部屋に入らしたから、私も後につゝいてお召かへのお手傳ひする。良人が餘りお背が高いのに、私が小女で、お肩までやつと手がとゞく位。お顏を今始めて見た、何だか寫眞の方が立派なやうである。お出かけにお姑様のお前でチヤンとお手をついて、御挨拶をなされたのに深く感心した。此人の妹にどうして玉子樣のやうな方がお在んなさるかと不思議に思つた。今一人社用で旅行して居るといふ弟はどんな人だらうかと思ふ。

髮結が來て鏡の前に坐る。丸まげにして見ろとお姑樣が仰る。まげの出來る時思はずハンケチで顏を掩たので、お姑様や髮結から笑はれた。親類の人の來る每に嫁の髷を見て呉れと仰る。餘程よく出來たものと見える。何だかうれしいやうな心地。午後はお姑様につれられ親類廻りをする。どこへ行つても出て來る人の手の荒てひどい事、そして活潑なこと。此の一族の風かしら。シヤナリシヤナリとした人は一人もない。夕方家に歸つて、ランプが點たので、里の癖で直ぐ雨戸を繰りにかゝつたら、未早いと仰るので、又閉けた。伺つてからすれば宜かつたのにと思つた。

夜は近所の地藏樣の植木店を見に行かうと良人の發言で玉子樣と三人出掛けた。時々良人が後ふり返つて御覽なさるのできまりが惡い。會ふ人も〳〵私の髷を見る樣な氣がする。早いものだ。一日のちがひで奥樣といはれる。不思議なものだ。とつく〴〵思つた。

新嫁の境界

一ケ月斗り經つて、もう大抵馴れたらうからとて下女はさげられた。今迄は心掛けて養生して居つたから



これといふ病氣はしなかつたが、一體に纖弱い私には御飯炊だのお菜ごしらへは、却つて運動に成つて宜い位だけれども、廣い〳〵家の拭き掃除と深い〳〵井戸の水くみあげて風呂を沸すのは、馴れぬせいか、ハツ〳〵と呼吸が切れさうだ。朝の仕舞からすつかり終るのが大抵十時、それから三時頃まではお姑樣の前でお裁縫。玉の樣なとお友達から羨まれた手も寒さに皹とあかぎれで見るかげもない。そこへ絹物をするのだからたまらない。雨の降る日などは氣が滅入りさうだ。町を歩いて見たい樣な氣がする。里の女中を使に出すと寄道をして困るとよく小言をいふたが、無理もない。夜分など神經が起つてねられず、歌など考へて明かす事がある。たまたま眠ついてもガタと音がすると直ぐに覺める、それも初の内で此頃はよく寢やうになつた。其上寢言を言ふ

たり罵られたりするさうだ。今時分は女中などの寝姿の醜いのは全く勞働過度のためかもしれぬ。

今日は何だか朝から風でも引いた樣で頭が重かつたので、夜分早くから床に入つたが、横に成つたら咳が頻りに出で氣兼な位。お姑樣は次の間からお湯でも上げようかと仰つて下さる。玉子樣が砂糖湯を持つて來て下すつた。全體私は至つて氣が小く、枕下でとやかくと劬はつて下さると、生家の親でも氣の毒でたまらないのだが、ランプもない暗がりでは淋しい。で色々な事を考へる。お膳に玉子樣から食事の時、澤山と召上がれと仰つたとやら、此度貰ふ姉さん（弟嫁の事）はお荷物も澤山で賑うねといはれた事などが妙に氣に成つて寝られない。嫁は元より金滿家といふではないが、生活の度の低い田舍のことだから何不自由もなく一人二人の女中は絶えず居たのである。此家に來る時もお母樣はあれもこれもといろ／＼と心配して下すつたけれど、皆な斷りした。今思ふと、彼れと比べて貰つて置けば少いといはぬ斗りに、あんな事もいはれまい、肩身も廣いに、と後悔して居る。然し表を通る華族のお姫樣のお荷物と比較にされてはたまらない。御互に身分が違ふのだもの、とは言ふもの丶、私だとて學校時代には、自分の才も顏も棚の上にあげ、高臺の輝やく斗りのお手車か、あはよくば馬車にでも乘り、都大路を狹しとばかり乘り廻して見たいとの理想を抱いた事もあつた。其頃は快活との評判で、いつも先生や、お友達にお家にどんな愉快なことが有りますといはれた位。イキ／＼とした動作であつたが、今は心から笑ふ樣なことは藥にしたくもない此間もお友達に逢ふたら、惡阻かといはれた。何故と聞けば、だつて顏色が惡くて、沈んで元氣がありませんもの、成程さういはれて見ると一月餘の間に指環が右の中指に嵌てもズルズルに成つた。

で私はつく／＼悟つた。一體嫁たるものが、現在の境遇よりも勝つた處から望まれたなど丶話しては、どんなに良人の感情を害するであらう。それと同じく姑や小姑などが嫁の前で他家の嫁の華美を餘り讚めて貰

ひたくない。折柄良人は歸つて來られて、服のまゝ部屋に入らして何だ暗がりおやないかと仰つた。終日待ち焦れし良夫のお聲を聞いて何だか涙が溢れた。

合嫁

親類の大久保彦左衛門といはれる人の發議で、弟夫婦は別居する事となつた。お姑樣は不愉快であつたが、同居程宜敷ないものはない。殊に一家の生計を立つるに差支へぬものは別居がよろしいといふので詮方なく承知された。弟嫁は學習院女子部の出身で下田式のしやなり／＼とした、時計でも指環でも私のやうに名斗りではない。それは／＼驚くやうな物斗り。一體弟は夫と違ひテキパキとした方だから、體面に關するとかで下女も居れば、日曜など



はいつも二人連れで上野、日比谷と散歩に出掛けるし、ほんとうに理想通りだらうと浦山しいやうである。未だ來ぬさきから弟嫁の善美な事斗りを言れたが、此頃は大分耳に馴れて始め程氣にもならぬやうになつた。或日私は據所なく弟の家へ行つた。マア何から何までハイカラな事。ヤレ瓦斯だ、天火だ、之れが村井式の何々だと、私などには名も覺え切れないで只吃驚する斗り。同兄弟でもかうも違ふものかと、思はれた。弟嫁の口では、姉樣は何もかもよくお出來遊ばすつてお姑樣が始終褒め遊ばすといふたので、私はハヽアと悟つたが默つて歸つて仕まつた。夜分弟が珍らしく獨りで來た。月末のお拂ひが足ぬといふ。聞けば呉服屋からも寶石入りの半衿とかゝ取て有るさうだ。私は來て半年からになるのに、まだ足袋一足買つてもらはない。それに一月に成るや成らずで二十圓近くの買物なさるとは、隨分思ひ切つた方で、お姑樣も始めてお氣が付かれたらしく、御機嫌たゝならぬ。不斷眠さうにして眺められた姑樣のお眼が今日は猫のやうに圓くなつて一體彼女は何をして居るのかと仰しやつたから、弟が明日から里の別莊に行くといつて仕度をして居ますと答へる。私は此方で獨り思つた。永久に圓滿なれと。

アヽ釣あはぬは不緣のもと、之れとは反對だが、お友達の芳子サン、校内一の才色兼備との評判むなしからず、卒業後間もなく一代の金滿家に嫁がれたが、結婚式披露の席上で、はれの御紋附汚さじと、ハンケチをお膝の上に廣げられたとやらで、御主人は來客の手前赤面せられたと、僅にそれが原因で、終に離緣となつた。二度目は陸軍青年士官に嫁がれたが、仲むつまじく美人の評判隊内にかくれなく、其れでも下女もつかはず朝からバタ〳〵と勝手を働さつてゐらつしやるとやら。

何人も身分といふことを忘れてはならぬ。私も今の境遇に安んせねばならぬ。只かよわい自分には、やがて生れん子を育つるに、身體の丈夫を神に祈るのである。



老婆心の過ぎたる育兒法

福迫龜太郎

小兒を強壯に育てるには、第一に丈夫な子を生まなければなりません。それには母たる人の身體が先づ丈夫で無ければなりません。丈夫な母と云ふのは如何な婦人かと云ふと、ヒステリーとか、神經衰弱とか、神經過敏とかで無い者、即ち神經質でない婦人であります。で然う云ふ病的婦人は如何なる種類の女に多いかと云ふと、多く學術を主とした高等教育を受けた者に多い樣であります。つまり處女時代に極度に頭を使つた婦人に多いので、かういふ母には大抵弱い子供が生れます。之れを見ても女子に高等教育を施すのは考へものと思ひます。

それは普通の時でも學問讀書に日を暮して運動をしない人達ですから、姙娠しては益々運動をしなくなり、胎兒はいよ〳〵弱くなるのです。之は十分御注意を願ひたい私の知人に一人娘で非常に愛されて育てられた婦人が、嫁入つて姙娠した處が、何でも大事に〳〵と云つて少しも動かさずに居ましたが、その中に生れた子供は殆んど不具に近い弱い子で、醫師の診斷に因ると白痴性の子供であつたと申します。之れは間も無く死にました。が二番目に生れた子供も亦同樣弱い子で、これも亦間もなく死にました。

又今の上中流社會の婦人は哺乳させると母親の美を損じると云ふ心配の爲めに、全く之をなさない人があるが、此れは大なる誤解であらうと思ひます。醫者の說に依ると哺乳させれば美を損じるものではなくて、食事も進み、新陳代謝が盛になるから、却つて身體を丈夫にし、色艶を美しくすると云ふ事である。

次に母親の虚榮に依つて誤られてゐる育兒法とも云ふべきは子供に美しい衣服を着せる事です。日露戰爭以來甚しく目に付く事で、非常に華美になりました。が之れは全く無用な事で、たゞ母たる人の虚榮心の爲めに小兒を犧牲にして居るとより外見られません。一體小兒は殊に湯水を多く飲みたがるもので、從つて新陳代謝も分泌も盛んであるが、其樣云ふ者に絹布を着せるのは如何であるかと云ふと、強い事は強からうが、地が緻密過ぎて發散を害します。其の點に於ては粗雜な木綿の方が遙に勝つて居ります。其上に洗濯も自宅で出來るし、萬事に都合が好い故に、小兒の衣類は綿服のみを用ふると云ふ事に改良したいと思ひます。

何も分らぬ赤子にいくら立派なものを着せたとて何の役にも立ちませぬ。從つて或家に子供が生れたにしても衣類の立派なのを贈る事をやめて、金で送るか又は他に方法を講じたいと思ひます。

又干渉の弊も注意すべき事と信じます。一體物品を破損して見たり、不行儀で暴れたり、喧嘩をしたりするのは小兒の本性であります。それを一々何をしてはならん此れをしてはいけぬと干渉するのは如何かと思ひます。例へば客來などに際して間々見受けるが、小兒に大人の通りの挨拶をさせたり、或は難題を吹きかけて小兒が答辯するを非常に母の名譽でゞもある樣に思つてゐる人がある。之れは非常な心得違であります。又例へば障子は子供の爲に丁度好い玩具に出來て居る。それを只破るなと叱るのはよろしくない。もし破らせまいとすれば布片を張るとか、高い窓にして仕舞ふが好い。玩具とても其の通りで矢張り破損する樣に出來て居るのであるから、干渉しないが好い。物を破損したがるのは時期があつて、決して永續するものではありません。一定の時期さへ來れば自然に止むものですから、成丈小言を云はぬ樣にするがよい。あまり消極的にすると獨立心が失くなつて、遂には一々人に判斷を頼まねばならぬ樣な人間になります。

玩具には一寸好いものが見當りませんが、昔からある彼のダルマなどは却々好い思ひ付で、云ひ知らぬ中

に、倒れても〳〵立つ、即ち不倒不屈の教訓をもふくんで居るから、若しあれをゴム製にでもするならば誠に好いものが出來ませう。今の女學校などで心理學とか哲學とかをやるも好からうが、夫よりは母親になる準備として玩具などに注意をさせ、生徒自身も進んで玩具會でも起す位であつて欲しい。それを今日の女學生達は其んな事は大嫌で、やれ小說を書くとか哲學だとかと云ふ。小說を書くなど〻云ふ事は隨分六ケしいもので、一葉女史の如き境遇の人なら知らん事、普通の中流以上の家庭に人となつた婦人に社會人情の機微をうがつたものが出來よう筈がない。誠はお伽ばなし的の



ものを作るのならばまだ宜いかも知れぬ。それも家庭小說の教訓が教訓にならぬと同じで、教訓を主としたおとぎばなしは教訓にならぬ。教訓を元としてない方が反つて教訓になる。小兒は玩具の犬の足の折れたのを痛からうと案じたり、彼の月や星を取つて呉れと言たり、遠近と云ふ事も分らないし、草木動物も言語を云ふかの樣に思つて居るものであるから、動植物にも物を言はせて小兒の友として意味のある樣なおとぎばなしが必要であらうと思ふ。

話はつい側道へ這入つたが、何しろ子供はあまりに大切々々として無暗に保護すると云ふ事は過ぎた

るは猶及ばざるが如し」で、反つて薄弱な子供にしてしまひます。病氣の時などにも、一寸した事をヤレ藥ソレ醫師と騷ぐが之は却つて子供を害します。小兒には出來得る限り服藥させぬが、好いと思ひます。餘りに大事に保護すると折角に「なほらう」とする力が「なほすし」といふ力の爲めに減じます。私は昨年は子供に腹卷きをさせましたが、何ともないのに當てさせて置くと、反つて其の爲めに皮膚を弱くして、一寸如何かして取た時には直ぐ腹を損じる樣だつたから、今年はつけさせません。或は失敗するかも知れんが、まアやつて見るつもりで居ります。

西洋の詩に、乳母が幼子をつれて公園の木蔭の涼しい處で彼れよこれよと遊ばせ乍らそよ吹く風に面をふかせて芝生の上に横になつて居ると、つい心地がよくなつて、何時とはなしにトロ／＼と眠つてしまつた、處が何も知らぬ幼子は乳にも飽きて乳母のふところからソロ／＼と這ひ出した。その中向ふの古井戸の傍に美しい赤い花が咲いてをるのを見付けてそれを目掛けて這つて行つた。乳母は少しも知らぬ。相かはらず心地好さゝうに眠つて居る。幼子は遂に花の傍に辿りついて、その一つを摘んで、又井戸に向つて這ひ出した。實に危い處だ。乳母はまだ眠つて居る。と幼子は次第に井戸に近づいて、遂にもみぢの樣な愛らしい。小さな手を井戸の側に懸けた。が乳母はまだ醒めぬ。見る人も無い公園に此の無心な幼子の此の有樣を引きとめるものは、眠つて居る乳母より外には無い。やがて幼子は身體を延して半身を井戸にさし出してのぞくと、下に自分と同じ樣な子供が花を持つてニコ／＼して居る。幼子はアヽと聲をかけて見た。下からもアヽと答へる。此の危機一髮のあり樣を乳母はまだ知らずにゆるやかな夢を見て居る。幼子は暫く見つめて居たが、遂に手に持つて居た花を下に投げて見た。と忽ち靜けさを破つて、寫つて居た子供の顏は波紋の爲めに見えなくなつたので、幼子は漸く井戸側から手を離して元の花の處へ向つて這ひ出した。その時に乳母はやうやく眠りから醒めた。と云ふ意味のものがあります。鄭

ち保護者たるべき乳母が疲勞の爲めに眠つた間に、小兒は非常に危險な行動をしたのであるが、こう云ふ時は保護者は無いけれども、其代りに自然といふものゝ保護があると云ふ意味である。此れは勿論極端な一例

です。又醫師に訊いて見ても育兒と云ふ事は大變な心配なものである。けれ共あまり包み込んで育てた子供よりは、放任主義で育てた子供の方が反つて丈夫な傾きがあると云ふ事も注意すべきだと思ひます。





夏子の誕生日

母の日記

去る二日は夏子の誕生日でしたので、前日から我等の家庭は隨分賑かなことでした。一日の朝、當年十二になる姉娘の靜を手傳はせて例の忠實な老婢は朝飯の用意をして居ますし、私は赤ん坊に乳を與ると、二階二間、下の四間を掃除して、新らしい朝の空氣を入れました。梅や櫻の青葉にさや〳〵と風が渡つて小暗い下蔭けの芝生はまだ夢から醒めぬものゝやうに曉がふかくて何だか斯う秋らしい心地、子供たちは最早眼醒めたと見え寢室でガヤ〳〵と騷いで居る樣子なのでソツと覗いて見ますと、一郎と夏子の二人が赤ん坊の眞ちやんに自分たちの寢衣を着せてかつぎ廻つて居るのでした。私の姿を見ると突然夏子が、

『阿母ちやん、私獨でお衣服をきましたよ。ほら。』とあのクリ〳〵した眼を上げて胸の所を見せました。從前は兄に着せて貰つて居たのです。

『あゝ左樣かえ。お誕生日から獨で着るお約束だつたんだねえ。』と云ひ乍ら左まへで背すぢの曲つた可笑しい姿を微笑みますと夏ちやんは、

『明日のお誕生日のお稽古なの。』と莞爾します。

『二人ともお手水を使つてらつしやい。』といつて赤ん坊を抱き上げ臺所の方へ來ますと後で一郎は兄らしくシイツを椽側まで持ち出してバタ〳〵と拂つて居る樣子でした。

臺所は最早チヤンと片附いて茶の間のチヤブ臺の上には味噌汁の湯氣が濛々と昇つて居るし、私の部屋へ行くと靜が獨で髮を結つて居り、老婢はセツセと玄關の雜巾掛けをして居ました。暫くすると一郎が子供部屋を掃除したものと見え、鷄舍を開けて遣り、夏子と

手水を使ひに湯殿へ行きましたので唯最早主人の帰宅を待つ許り。主人は平常手水を使ふと直ぐ園内を見廻つて猶時間があれば門外を散歩するのが習慣でございます。

朝食の時一郎は、

『阿父様、僕の南瓜を見て下すつて？』と諾きますと、主人は莞爾莞爾として、

『然、見たよ。大きく成つたね、一郎のは大變出來が良好、阿母さん後程見てお遣りなさい。一番良く世話が行き届いたらしいよ。』と謂ひました。

『綺しいなア。綺しいなア。彼れを阿母様と



姉さんと老婢に上げよう。』と云へば老婢は赤ん坊をあやなし乍ら聞いて居ましたが、

『眞個におうちの坊ちやま位お優しくつて、わけのわかつた御子は御座りません。』と今更らの様にいつもの口癖を呟いて、老人の涙もろくも袖をぬらして居るのでした。六時に御飯が濟むと、静と一郎は子供部屋で勉强。主人は間もなく外出。老婢は後仕舞ひ、私は夏と赤ん坊を連れて一郎畑の南瓜を見に出掛けました。

未だ熟しない梨子だの柘榴だの、柿を仰ぎ、

拇指位な柿の青い顔を覗き／＼畑へ出ますと、茄子、胡瓜、夏大根、隱元豆などが、各持場々々を爭つて居る傍に、玉蜀黍が軍人のエポレットの樣に勇ましく行列をして居り、お誂への南瓜は雷神さまの樣にごろごろと横に寢て居ります。いづれも家内中の持場が定めてあるので、假りに父樣の畑、母樣の畑、靜子の畑、一郎の畑と名附け、又丁度茄子の苗を植ゑ附ける時分に遊びに來て居た親戚の娘の君子さんの領分を姉樣畑とも、目白の女子大學にゐるから目白畑とも云つて居るのでした。なる程一郎のは何れも之れも立派に成長して居ますが唯茄子だけは葉ばかり大きくつて實が稀いのは少し肥料が多すぎたのだらうと思はれました。夏子は嬉々として菜園の閒を飛び廻りながら、

「母ちやん。明日の御誕生に何を御馳走してあげるの？　お父ちやまや兄ちやんや姉樣に。」

「左樣だね、其れは阿母さんが考へてあげますから又御手傳ひをしてお呉れ。」と云つて明日の献立てを考案ながら夏林檎の下へゆきますと、最早大抵熟したらしくあの一種の爽快な甘酸い匂ひがしますので手近かなのを三つ四つ摘み採りました。夏子は、

「勉强してらつしやる兄さんや姉さんの御土產ねえ。」

と羨しさう。

「あゝお前にも上げますよ。」といひます。滿足らしう點頭いて廻らぬ舌で唱歌を歌ふのでした。十時頃になると赤ん坊は眠りに入りますし、子供達はお復習も濟むで三人、鷄に餌を與り、賑かに表庭の芝生の方へ行きましたので、私は昨日の縫ひ掛けを持ち出して縫ひ初め、老婢は糊付け物をして居ります處へ來客の聲が致しました。縫ひ物を捨てゝ玄關へ出て見ると、目白畑の主人公でした。連らしい女學生と一緒に、海水浴で大分日にやけた顏の汗を拭き／＼白い齒を出して莞爾笑ひ乍ら、

「又來ましたよ。」と靴をぬぎかける。

「もう歸つて來たんですか。」と訊けば、

「海水浴なんてつまらないから矢張り休暇中此家の家庭の一人になりますのよ。この方は藤野樣てお友達で

すが二三日泊めて上げて下さいな。いゝでせう叔母さん。」といふ次第。お蔭で明日の紀念日も賑やかに出來るし、子供達も姉樣が二人殖えてさぞ喜ぶでせうと。二階へ案内すると君子さん早くもポンポンと手を拍つて庭の子供達ちに合圖がある。ブランコをして居た連中は耳敏く且つ眼ざとく見附けると「ワアー」と凱歌の聲を擧げて二階へ突進するといふ騷ぎ。晝食は子供と來客ばかりを二階でさせ、老婢には一時間の午睡の時間を與はし、私は赤ん坊を抱いて寢室へ。賑かな連中は後園の果物畑へ進入して行つた樣子でした。

三時頃主人が歸宅してお茶を喫べる時、



「俺も明日の贈り物を買つて來たぞ。」と子供らしく莞爾々々して居ました。勿論私にも見せませんでした。

夕食は靜を手傳はせて私がする樣になつて居るのが、今日はお手傳ひが多かつた爲め、一郎の仕事迄も(鷄を鳥屋へ入れ、門を閉ぢること)早く片附いたので六時頃に樂しく飯をすませ後は小音樂室でオルガンとバイオリンの合奏といふ順序の所、靜と一郎が明日の贈り物を買ひに行かね

ばならぬと云ひ出しましたので姉様連中も左様々々私達も左様しませう。と四人ははしやいで町へ出掛けて行き、夏子は獨ふり殘しに逢ひました。いつもならば泣くべき所作ら最早明日は滿四ッになる姉様が辛抱せねば成らぬと思つたものか、だまつて、

『母ちやん。』と私の顔を見上げた其顔。堪らない程憐れつぽいものでした。

『おゝ夏子は御主人様だから明日の御用意をしなきやなりませぬね。母様。』といへば忽ち涙ぐんだ眼に歡喜の笑みを湛へて、

『あゝちまらよねえ。うれしい〳〵。』明日の献立ては、牛肉のビフテキ、魚の刺身、大根の妻、鯵の鮨、五色玉子、くわゐのきんとん、桃のゼリーの口取、赤茄子シチュー南瓜の甘煮、玉牡丹の吸ひ物、茄子の新漬け、お菓子は夏子がお好物の蜜柑飴、栗饅頭、果物種々。肉と魚の他は皆自園で出來たものでした。

やがて皆が歸つて來ると各自に買物を隱し合つて又一しほの賑ひ。

『藤野様は必つと何か金物になすつたのよ。』と靜が云へば、

『何故?』と君さん。

『だつてもぢつと金物屋の前に立つてらつしたわ。』

『アラ噓。彼れは他の人を待つてたんぢやありませんか。』と笑ひ〳〵云はれると一郎が、

『やあ、鼻が笑つてるから噓だ。』といふ。何でも四人、某所を集點として別れ〳〵になつて買ひ物をしたのださうです。斯う云ふ風で大分顋を痛くして寢に就いたのが九時半。私は老婢と戸締りをして平和であつた今日を謝し。明日の幸福を祈つて瓦斯燈を消しました。翌日は子供等五時に眼を醒し、殊に夏子は餘程氣がもめたものと見え、例の左前に着物を着てねむい眼をこすり〳〵ヒヨロ〳〵と臺所へ出て來ました其姿を笑はずには居られませんでした。睡眠時間が餘り少いのでなだめてもう一度寢床に這入らせ、其代り二階の姉さんや一郎を起して靜と四人で會場を作らせることに致しました。朝飯が濟むと賑かな連中は果物や野菜

をつみに後園へゆき、主人は花を剪りに表へ出、夏子は會塲の椅子につい、くねんとして未だですと云ふのに御馳走が出るのを待ち焦れて居ました何と云ふ小さい、爾して又いやしい御主人役でせう。其中に臺所は女連五人の大立ち廻りことに女子大學のお二人よりも靜の方が却つて役に立つ位でした。

十一時がうつ頃には何も揃ひました。會塲は六疊の音樂室と食堂の打つ通し、中央にピンボン臺を据へ白布を掛けた上には撫子が投げ挿しにしてあり、オルガンの上にはダリアの花が異紛でした四圍の柱には二兒が手製の各國々旗がヒラ〳〵として居ます。正面が父と私、次席左右が新來の家族、つぎが兄姉、父母に向つて下席が老婢と主人役の夏坊。赤ん坊は。搖籃に入れて私の背後に寢かせて置いたのでした。御馳走がズラリと並ぶと皆溶けさうな笑顔で椅子に就きます。君



さんがオルガンを、、プーとならす。一同起立、お辭儀をすると夏子が、姉さんや兄さんの誕生日の眞似をして何か云はうとして云へないので、

「皆アノウ、、お召り。」と云ふなりペコンと眞先に坐つてお箸を取る始末に、一同大笑ひで椅子によると靜がツト立ち上つて、

「夏ちやんのお誕生をお祝ひします。」と大きな聲でいふ。目白の姉さんも立ち上る。夏子は呆れて眼をクルクルさせてると一郎が見かねて、

「夏ちやん、有難うつてお辭儀をするんだよ。」と敎へました。夏子はお箸を放さず、無言のまゝお辭儀をしてにつこり。

一郎がお目出度うを云ふと夏子は、

「未だ喰べちや不可の？」と尋ねました。

「あゝもう少しお待ち。好いものを皆が下さるから。」と私が云つて朝から匿してあつた大袋を持ち出しました。これは皆が目をつむつて少さい口から手んでに入れたので、誰れのも彼れのもごつちやになつて居て而してお互に知れぬ樣にしてありましたのです。皆は私の手元ばかりを見つめて居ります。先づ手を突込んで引き出すと赤の三吋幅の長いリボンでした。

「まあ奇麗、誰さんのでせう。」と靜がいへば流石は女の子、夏子は頬を眞赤にして嬉しさうに、

「母ちやん私が貰ふの？」

「然。お次ぎは何でせう。おゝ可愛い人形。」

「あら。あら。」と夏子の歡びはたとへるにものなし

それから繪のした小箱が出る、奇麗な繪双紙が出る、色彩をしたゴム毬が出る、最後にヒヨイと飛び出したのはあらまあ、オカメの面。

「ワア……。」と一同は大騷ぎ笑ひくづれる。

夏子はもう堪らなくなつて箸を放り出して、手を拍き乍ら夢中になつて歡んで居ります。さてそれの名明しをするとリボンと人形が目白の姉さん、小箱は靜子繪双紙は一郎、ゴム毬は老婢、オカメの面は阿父樣といふ事がわかりました叉一しきり大笑ひ。食事が始ると阿父樣はオカメの面について一ツの敎訓談を面白く

話して聞かせられました。

食事が濟むと演説がはぢまつたのでしたが、中でも一番面白かつたのは姉さん方の海水浴失敗談に、老婢の子供の時分の話でした。老婢は幾度も〳〵涙を拭いて、

『どうぞまあ、お孃ちやまがお嫁入りなさる時分まではかうしてお誕生祝ひのお招伴がしたいものでございます。』といひました。

最後に唱歌、其れが終ると頼んであつた寫眞師が來ましたので、庭の涼しい木蔭で一同撮影して、後は鬼ごつこ。

ほんとに樂しい一日でございました。

（加納[illegible]雨子）



◎南瓜料理

女子大學卒業生某の考案になれる南瓜一色料理の献立及び其料理法と云へるを聞くに、

献立　南瓜飯

椀　南瓜豆腐、莢隠元……清汁

皿　黄金焼　瓜羹

小皿　あられ南瓜、おろし…三杯酢

菓子　南瓜饅頭

▲南瓜飯　南瓜を程よく切りてゆで裏漉にかけ醤油にて濃く味をつけ別に飯米に酒を入れて炊き吹上ろ頃裏漉をして南瓜を入れ暫くむらして後飯櫃に移す時に混ぜて出す。

▲南瓜豆腐　同じく南瓜をゆで裏漉にかけ薄く味を付け別に玉子をときてだしを入れ南瓜を交ぜ醤油にて味を付け湯煎にす莢隠元は鹽ゆでにて細く薄打ちになし置き豆腐と共に椀に盛り清汁をかけて出す。

▲黄金焼　ゆでたる南瓜を裏漉かけ味醂醤油にて味をつけ別に白味に魚に鹽をなし金串にさし兩面に付けて焼く。

▲南瓜羹　南瓜をゆで皮と肉とを分ち肉は裏漉し皮は細く刻み砂糖にて味を付け別に角天を煮て其中分に肉味の方を入れ流し箱に入れ少し冷へたる頃外の中分に皮の方を入れ上より流し込みて冷す。

▲あられ南瓜　南瓜を三分程の賽形に切り鹽ゆでとなし別に大根おろしを造り三杯酢にかけろ。

▲南瓜饅頭　葛まんぢうと同じ作り方にて餡に南瓜の裏漉したるものに砂糖と鹽少々にて甘味を付け煉りたるものを用ふ尚其際食卓の飾りには南瓜の葉に花をよき程にあしらひ平たき籠に盛れば更に妙。

個人思想と家庭の動亂

某博士

◎

個人思想が滔々として社會の各方面へ浸潤してゆくのは、これは止むべからざる大勢でせう。然しそれと共に一種の共同主義といふものが又一方に發達しつゝある。その消長と關係とが問題になる事でせう。兎も角も個人思想が最う家庭に尠なからず影響してゐる事は言ふまでもない。親子別居などは最う不贊成を唱ふ人は無いでせう。私などにしても子供に懸らうなどゝは夢にも思ひませんね。姑と嫁との關係なども最う問題ではあるまい。否、少なくとも最う將來の問題ではない。

◎

個人思想が善くも作用すれば惡くも作用する。否、個人主義と言ふ條實は利己主義なのが多いので、それに婦人は兎角利己的なものと昔から大抵相場が決つてゐます。世間でよく夫婦共稼ぎの人がある。現に私の知合にも例がありますが、さて其の細君の稼いだのといふものが、實際家計に組込まれて補足をするかと言ふと然うぢやない。家計は夫の稼ぎで立てられて、細君の取つたものは細君一人で使ふ。まあ大抵這麼ものです。そりや亭主が車夫で女房が女工といふ様なものは、必要に迫られて兩方打出して了ふでせうが、夫は會社員で細君が女事務員といふ様なのならば、決して最う細君の所得は家計の補足にはならない。私などは實例を幾干も見てゐます。

◎

此の様な個人思想か増長していろ〳〵に跋扈して來ると、果ては家の礎が動搖するやうな事にもなる。此頃新聞に出てゐた一木大尉とやらの一件なども其れでせう。果して妻が惡いか夫が惡いか其麼事は知りませんが、何せよ夫の出征中に秘密の負債を細君が澤山作へたとかいふのです。夫に秘密の負債を作へる！個人思想も然ういふ所まで進んだのでせう。然うして離縁

騒ぎが初まつて何か大變紛亂してゐると出てゐましたね。何にしても氣の毒なものです。

◎

イヤ私の知つてる事で一木大尉事件などよりも更に更に適切な例があります。尤もこれは細君が單に自分一個の爲にしたのではなく、家の爲にと思つてした事ですが、矢張夫の知らない負債を起したのです。然るに思ひきや其の負債の爲に一家が破滅の運に陷らうとするのです。さあ細君の胸の内は掻き廻すやう。夫も同樣――。一面には夫婦の關係、愛の關係、精神的の關係といふものは尊むべきもの、又子供もある以上はその點からも、旁以て財産や金錢などの物質的の事で二人の間を何うするといふ理もない！　恁う考へる一方では又祖先傳來の家名を傷ける、家運を傾ける、といふやうな苦痛を感ずる。細君は猶以て申譯ない、辛い、苦しい……。

主人の頭腦がいろ〳〵に亂れて決せぬので急速に結末は付かない。すると何處も同じ例で、恁ういふ一事象が湧いて來ると、それが其の親戚知人といふ一圈の問題になる憂慮になる。摺つた揉んだといろ〳〵氣を腐らしてゐる間には健康も損はれる、遂には婦人などはヒステリーの揚句が自殺――私の知つてる實例が既に其麼結果を見たのぢやないか――といふ樣な事もあらう。或は肉體的の自殺或は社會的の自殺、いろ〳〵の悲慘な結果が思ひやられます。畢竟するに個人的傾向の齎らす現象といつてよいのです。

◎

親戚と言へば此の「社會」などゝいふ程大きくもなく又「家庭」よりは廣い此の一種のサークルの間で、常に利己的の眼を以て暗々の裡に爭ひ合つてゐること――所謂暗鬪を斷えず行つてゐるのは、最う到る處然らざるなしといふ位である。又外からは淸麗に見えてゐても、其の實眞正に美しい家庭は何れだけあるか。まあ十軒の内五軒までは紊亂的でせう。そして其の五軒の内一二軒が、とう〳〵襤褸を出すのです。まあ一般に健康體の人でも多少のバチルスは必ず體内に入つてゐ

るやうに、まだ著しい事件として顯はれて來ないまでも、個人思想といふものが總ての家庭にいろ／＼の狀態で潜伏してゐる事は否み難いことだらうと思ふ。

◎封建時代からの武士道的精神の猶行はれてをる處へ横さまに個人思想が西洋文明と共に流れ込んで來て擡着つたのだから、其の餘りに相違せる二つのものに度を失ふのも無理はありません。恁くして猶新舊思想の衝突に累はされてゐる人のあるのも亦無理はありません。兎も角も個人思想の作用は家庭のみならずあらゆる點から深く注意すべき問題である。

生兒に關する新研究

「男が產れるか女が產れるか」に就て之を決定すべき何等かの法則あるものなるか」といふ問題に就て、ロンム博士は多年研究の除斷く新理論を發見したりとて、之を近刊のヲ、レヴユー雜誌に掲載せり。

是より先き、シエンク博士又本問題に就て苦心研究を重ねたりしも、何等の結果を得ずして止みたりしが、ロンム博士に至つて途に、「男兒は兩親中父親の方が弱い時產れ女兒は母親の方が弱い時に產る」と云ふ結論に到達し、「自然の法則に依りて子は兩親中の何れか弱い方に似るものにして、決して强い方に似るものにあらず」と斷言せり。

其理由としてロンム博士は曰く、「通常何れの國に於ても男女出產の割合は男兒一〇〇に對する女兒一〇五若しくは一〇六なり。但し此數學的確實なる統計を破る者は戰爭なり。大戰爭の後は必ず男兒の出產が多い。亞非利加及びオセアニア邊の蠻族の間にありては戰爭常に斷えざるを以て、男兒が非常に優勢を示して居る。之れ實に最も强健なる男兒は戰場に出でゝ或は殺され或は傷かれて斃り、弱き者のみが後に殘りて生存するが故なり。之れ常に男女の平均を失せしめざらんとする自然の法則に據るに外ならず。之を以て老人が若い妻を持つ時は、女兒よりも男兒の出產が多く、妻が夫よりも老ひたる時は此反對に女兒の出產が多い。

更に之を數字にて示せば、女兒一千人に對し男子の割合は、

父が母よりも弱年なる時	八六五
父が母と同年なる時	九四八
父が母より　一ツ以上六ツ年上なる時	一、〇三七
父が母よりも六ツ以上十一年上なる時	一、二六七
父が母よりも十一以上十六年上なる時	一、四七四

而して實際に於て夫婦が全然强弱を異にせずと云ふ場合あるべからず。不時の疾病精神上の苦痛其他些少の事故と雖も之に影響するが故に、夫婦間の强弱は常に定まらざるものと見做さゞるべからず」と論じ、且つ其實例とし各國主權者の王子王女の數を引顯し來り、「獨逸のカイザルは六人の男を持つに露國の皇后は四人の女兒を持つ」と解し、「余は余の知れる限りに於て以上の法則の誤らざるを見る」と云ひたり。

登錄商標



アクチナ

主治効能◎眼・耳・鼻・咽喉・船暈・汽車暈に苦む人は本具のあるを知らぬ人なり

一個を備へ置けば
●家族應用の便あり
●本具は攜帶至便なれば何れの場所にても用ひらる

◎醫藥にて治せざる病は如何にすれば全治するか!!

登錄商標



サンデン電氣帶

（說明書無代進呈）

主治効能
●神經衰弱諸症●神經痛諸症●中風●リヨーマチス●脚氣●脊髓炎●糖尿病●遺尿●胃擴張
●胃下垂●消化不良●常習便秘●慢性腎臟炎●男女生殖器虛弱●不眠症●遺精●夢精●早漏
●手淫の諸害●貧血●憂鬱●ヒステリー●月經不順……其他男女共各病後の衰弱

變光電燈球

本電球は一燭と八燭、一燭と十燭、一燭と十六燭の三種あります明るくしたり暗くしたりするに左右に捻りさへすれば誰にも容易く出來ます在來の電球に覆を附けて暗くするのは熱の爲に火災の出來る恐れが有りますが本電球はそんな事はありません極めて安全で便利であります本電球は病院旅館待合等は勿論一般家庭用として極めて便利で且つ最も經濟的のものです

●營業品目

●電燈●電話●電鈴●表示機●電球●避雷針●探檢電燈●懷中電燈●電池類●其他一式●醫療器械●製糖分析機具一式●

電球は各種共製造致居候間特約販賣仕候

本店　東京京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋四一二三番
支店　大阪市心齋橋筋一丁目西側
支店　横濱市相生町四丁目六十三番地　電話横濱一九三一番

サンデン電氣商會

女（その一）

女(たの二)

永井荷風君著

あめりか物語

本書は著者が明治三十六年の秋より米國に遊びて其四十年の夏佛國に向ひて紐育を去るに莅み前後五年間の見聞實歷を書き綴りたるものを取り集めたるものにして文明國の裡面を描きて遺すなし

目次

●船室夜話●野路のかへり●岡の上●醉美人●長髮●春と秋●雪のやどり●林間●惡友●舊恨●寢覺め●夜の女●一月一日●曉●市俄古の二日●夏の海●夜半の酒場●落葉●支那街の記●夜あるき●六月の夜の夢●附錄フランスより○船と車○ローン河のほとり○秋の巻

洋裝四六判美本
紙數四百九十頁
每編二色版寫眞口繪入

正價金六十五錢
郵稅八錢

東京本町 博文館

登録 商標

室内及物品消毒用一壜金廿五錢
防臭消毒兼用一壜金二十錢

▲この消毒液を室内にふりまけばいろ〳〵の病毒をうちけし升

▲この消毒液を便所その他わるき臭氣のある處へふりまけばすぐに惡臭がなくなります



●内務省東京衛生試驗所及び東京市衛生試驗所の殺菌消毒力の試驗證明報告あり

●醫學博士藥學博士及び專門諸大家の證明と稱贊を得たり

使用法は本劑に詳細なる說明書添付しあり請ふ一瓶を試み玉へ



製劑發賣所 (縮野式電話消毒器付及販賣元)

鈴木商會

東京淺草區松葉町八十八番地
電話下谷(一五五六)振替口座(一六一二五)

發賣元藥種問屋

里村三治

東京日本橋區本町三ノ十一
電話長本局(七四四)振替口座(二五六五)

佛國ジー、ギベール原著
陸軍教授兼文部省參事官 牧瀨五一郎君閲
帝國教育會監修
前田長太君譯

品性論

全一册 洋裝菊判並製紙數約百七十頁 正價金三十八錢 郵稅六錢

教育の目的は智、感、意を完全に發達せしむるにあり、而して此三者を養成する智育、體育、德育なるものは孰れも皆な必要なりと雖も、强き人、賢き人よりも正しき人と云ふ順序より見れば德育を以て最要とせざるべからず。換言すれば教育の最高目的は德育の完全に發達せる品性の人物を養成するにありと云ふことを得べし、本原書は即ち品性の性質、必要、理想、淵源及び修養等を說き盡して遺憾なし、帝國教育會此書を以て現時の教育上に最も有益なる資料參考と認め之を譯述して世に公にせらる苟も其任務にある者は勿論一般人士も亦た採て品性陶冶の資とせざるべからざる好書なり。

博文館

佐々木弘綱翁遺著
佐々木信綱君校訂 正價金廿八錢 郵稅四錢

[illegible]

全一册 洋裝四六判美本 紙數約二百五十頁 正價金廿八錢 郵稅六錢

本書は明治の歌壇に多大の功勞ありし故佐々木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き、或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歴史として、作歌の模範として、獨習用に、また高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。長く草稿の儘秘藏せられしを、今年翁が十七祭に際し、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ年表系統圖等を附し、殊に卷末には、末松、木村、小杉、井上、芳賀博士の追懷の文章を添へ、出版せらる。江湖がこの好著を驩迎せられむ事は、弊館の信じて疑はざる所なり。

東京本町 博文館

女(その四)

第二高等學校教授

岡澤鉦次郎君著

教科參考

日本文典要義

全一册

此書は、日本語の特性と東西百家の語學書言語學書との研究によりて、最實用的にして、わが國語の本性に適合し、最科學的にして何人も爭ふべからざる、語の分類と文の分解法とを開示して、日本文典の要旨を明にし、古來日本語の研究に於いて動かすべからざるものと認められたる一切の障碍を、其根本より拔き、人をして晴天白日を睹るが如くならしめたるものにして、一般の教師、やゝ進歩したる學生、及び、國語學に志ありて適當なる案內書なきに苦みたる一般人士の參考書として無上の價値を有する羅針盤たるべく、之を階梯として進まば挺身して深遠なる國語界に入るも望洋の歎きなかるべく、內外國語の比較研究に從ふも順風に帆懸くる思ひあるべし。時世に後れざらむと欲する者は、速にこの書を讀んで語學界前途の進運をトせらるべし。

洋製菊判上製
紙數約四百五十頁
正價一圓廿錢
小包料八錢

島田三郎君序　小野田翠雨君著（速記者の見たる）

現代名士の演說振

無くて七癖有つて四十八癖、現代各名士の演說振りも種々樣々の癖がある、癖の違いと違いの、態度風生の善惡、速記者泣かせ五人男など著者が二十年來の經驗に依り、其速記眼に映じたるものを、公平に率直に忌憚なく素破拔き、演者自身でも已れに此樣な癖があつたかと本書を見て始めて覺る位で、先きに讀賣紙上で大評判を取つたものを、今回增補訂正したものです、本書は演說研究者の好材料となるは勿論、一度本書を讀んだ後で、諸名士の演說を聽きて、彼是比較して見ると餘程の趣味があらうと思ひます、誠に近來にない面白い本です、而して本書所載の人名は左の六十四名である

全一册四六判洋裝美本紙數三百廿頁口繪寫眞版數十個

正價金四十五錢　郵稅六錢

所載人名

島田三郎○花井卓藏○西園寺公望○角田眞平○三宅雄次郎○田尻稻次郎○鳩山春子女史○江原素六○横井時敬○松本君平○辻新次○坪井正五郎○尾崎行雄○山本權兵衛○本多靜六○細川潤次郎○田中正造○高木兼寛○成瀬仁藏○望月小太郎○肝付兼行○伊藤博文○大岡育造○樺山資紀○谷干城○鳩山和夫○澁澤榮一○井上あくり女史○竹越與三郎○下田歌子女史○釋宗演禪師○芳賀矢一○田代義德○巖谷小波○三輪田眞佐子女史○棚橋絢子女史○海老名彈正○嘉納治五郎○戸川殘花○加藤咄堂○高田早苗○北里柴三郎○高島平三郎○松村介石○近角常觀○重野安繹○德富蘇峰○宮川經輝○田川大吉郎○石川半山○圓城寺清○井上豐太郎○木下尚江○幸德秋水○安部磯雄○南條文雄○長谷川泰○田中喜一○山路愛山○中島觀琇師○嘉悅孝子女史○鷲山彌生女史○大町桂月○新渡戸稻造

販賣用電話本局二千六百廿番　東京本町 博文館　振替貯金口座第二百四十番

女（その五）

英語世界

第一號以下數版を重ぬ ▲每月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密畫數頁挿入

女(その六)

第六號要目

●ブラウニング英詩「勇士」譯註(小日向定二郎)●短篇夫婦喧嘩譯註(深澤由次郎)●英語子音の發音法(岸本能武太)●佐久間信恭氏筆蹟●英譯血判取(武信由太郎)●コナンドイル講義(今井信之)●句讀法(茨木清次郎)●英國々歌吟誦法(酒井勝軍)●讀本々位解譯練習(增田藤之助)●山口神商試驗成績談(奈倉次郎)●英語の形式(伊藤獨門)●最近科學奇問(長井氏晸)●神戶高商試驗詳解(深澤由次郎)●神戶高商受驗談(一合格生)●英作文法(武信由太郎)●略語の複數(喜安璡太郎)●和文英譯と入學試驗(今井信之)●如是我ペン(長井背郊)●同志社英語評判記●文法練習の經驗談●時文研究●少文通信●英學大家著書機●讀者研究壇●懸賞披露及新題

第七號要目

●新渡戶博士の英文筆蹟●六月施行第七高等學校入學英語問題詳解(深澤由次郎)●ブラウニング作英詩譯註(小日向定二郎)●和文英譯血判取(武信由太郎)●英文句讀法(茨木清次郎)●解釋練習(增田藤之助)●米國々歌吟誦法(酒井勝軍)●神戶高商入學試驗成績談(小久保、小川兩教授)●短篇小說講義(今井信之)●數詞の文典(喜安璡太郎)●最近科學奇問(長井氏晸)●英語の形式(伊藤獨門)●譯註夫婦喧嘩(深澤由次郎)●關係を表はす句(武信由太郎)●言葉の使い分け(SK)●入學試驗と國文英譯●第四高等學校英語評判記●外國語學校受驗談●英語研究の仕上げ●學生用會話●時文研究●英學大家氣焔錄●英文通信●英讀者研究壇●英語遊戲法●懸賞文發表●同新題●英語倶樂部等尙本號より

第八號要目

●英文探偵奇談講義(今井信之)●英譯血判取(大尾)武信由太郎●英語と修養(安部磯雄)●リーダーに現はる夏の島(畔柳都太郎)●譯註追剝(マーク、ツエーン)(石川林助)●英文句讀法(茨木清次郎)●ナイヤガラ瀑布のイルミチーション(長井氏晸)●第一高等學校入學試驗答解(深澤由次郎)●解釋練習(增田藤之助)●東京高師競爭パノラマ●子音の發音(岸本能武太)●英語の形式(伊藤獨門)●東京高商入學試驗成績談●佐久間信恭氏英文筆蹟●語句の省略法(武信由太郎)●數學式の文法(喜安璡太郎)●會話作文資料(經岡民次郎)●時文研究●學校英語だより●英文通信●讀者研究壇●懸賞文披露及新課題●初學欄(英語の平等點差別譯讀・英作文應用設問等)

第九號要目

九月五日發行

●滑稽毛生へ藥譯註 深澤由次郎●英譯今昔物語 野口米二郎●偶像破壞奇譚講義 今井信之●子音の發音 岸本能武太●譯註追剝大尾 石川林助●英文句讀法大尾 茨木清次郎●讀本々位解釋練習 增田藤之助●英吉利自然談 畔柳都太郎●最近科學奇聞 長井氏晸●慣用句法英語の形式 伊藤獨門●入學試驗と國文英譯 今井信之●花輪高商教授英文筆蹟●東京高等商業へ入學試驗答解 深澤由次郎●第一高受驗談●時文研究●英習字の練習 片山義行●語句の省略法 武信由太郎●同志社英語評判記●英文通信●學校だより●讀者研究壇●英語遊戲●懸賞發表●懸賞新題●初學欄(ABC講座、解釋、英作文、應用設問等)

第一號以下取揃應高需 ▲正價金拾錢 郵稅壹錢 前金(十二冊金壹圓拾錢 六冊金五拾六錢外要郵稅)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君著

歌學論叢

全一册　洋裝四六判總クロース　紙數約五百五十頁　近刊

歌學論叢は、佐々木信綱氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講ぜらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。研究の深邃考證の精細は、これを『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等に見るべく、見識の卓抜はこれを『萬葉集私見』『人麿と赤人』『紀貫之』『香川景樹論』等に見るべく。趣味津々汲めども盡きざるものには、『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等あり。又『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等、未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるものなり。其他『時勢と和歌』『歌學に就て』『上世の和歌』『歌格の研究に就て』『山家集の後に』『金槐集の終に』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』『和歌の將來』等、すべて廿編。國文和歌に興味を有する人々にとりて、必讀の好著なり。

東京（博文館）本町

太陽記者　長谷川天溪君著

非常の好評

自然主義

全一册　洋裝四六判美本紙數約四百頁　正價金五拾錢郵稅八錢

著者白す、學者的の文字が難有き人、或は理想的を衣裳とする諸氏より看れば本書は外道の筆であらう。若し飯を食はずに生活する法を知つて居る人から見れば、三文の値打もあるまい。僕には惡魔となる氣もない、野心もない輕薄に新奇を衒ふのでもない。唯現實に立脚して見ると夢の醒めたやうの氣がしたから裸體の人間として考へた儘を書いたのだ。故に御化粧好きの人や、虛言を繁昌せしめやうとする人々からは讀んで貰はうとも思はぬ。

東京（（博文館發行））本町


懐中
要薬
清心丹
清心丹特有の効能は常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
登録商標 高木
東京市日本橋区元大坂町八番地
本舗 高木與兵衛


パール
美顔料
毛髪料
コールドクリーム本舗 東京濱町 平尾分店

(その八)



女事務員となりし私の經驗

齋藤きく子

第一日の感

私はいろ〳〵の都合から、女學校を卒業すると直ぐに電話交換局の交換手になりました。宅は修業中の兄妹が多いのに父が病氣で臥せつてをり、母が一人で苦勞するのを何うしても傍觀しては居られませんので、「ナニ心配なさる事はないわ。私も何うとでもして……」と申して潔く願書を出したのです。愈〻出る事になつて今日が第一日。

其日は蕭々と春雨の降る日でした。傘を手にして袴を穿いて姿は例の通りですが、今日は行く先が違ひます。「あゝ女工になるのだナー。」恁う思ふと胸が堪らなく一杯になつて參りました。(實際私は其時交換手も砲兵工廠の女工も同じ樣に思つてゐました)自分の心が淋しいと其處此處の籬の内に咲き匂ふ櫻も、さては江戸川緣一帶に雨に濕ふ紅雲の艶なる眺めも、悉く傷心の種で厶いました。「あゝ世間には咲き匂ふ花やかな運命に誇る人も澤山あるに。」とつと學校のお友達の事など考へ出すと、淚が我知らず頰を傳はつた。「あゝ私だつて學課では人に遜色は取らなかつたに……元來何の爲に學問をしたのだらう? 懷かしい母校を卒業したのは恁うして女工になる爲か。」

いろ〳〵に同じ事を反覆し〳〵思ひ亂れて、頭はガンガンして來る。雨には濡れる。つく〴〵最う情けなくなつて來た頃には、何時か知らず番町交換局の前

に立つて居りました……。

快活になれぬ次第

交換手には女學校出の人などは極く少なく、まあ殆ど無いと申してよいのですが、貯金管理所の方にはボツボツ然うしたお方が被居るさうです。女子大學出のお方も一二被在ると伺ひました。其後フト其の一人にお近附になりましたが、それは私よりもズッと年齢のお方――美しいお方です。學校を卒業後結婚なされた甘美の懐も束の間で、間もなく良人に死に別れ、いろいろの事情から地方で小學校の敎師など務めて居られたのですが、三年程前に管理所の方へ入られたさうです。その入られた當初のお感じ。

其の部は女子が唯八人に男子のお方が澤山居られたのです。學校で可愛いゝ兒女を扱つてゐるとは違ひ、何となく顔をヂロ〳〵見られる樣な氣がして落着きません。何かの拍子に若いお方は男子の方から難嘗され言葉などに膨れたり涙ぐんだりして被居る。其の方などは年長の方だつたので割合に鄭寧に扱はれたさうですが、それでも時には頭からがみ〳〵と男子の方に叱られる。其時の口惜しさ、詰らなさ。「むゝ最う這麼事は止めて了はう。人の人格も何もあつたものぢやない。」と、時々に歎息を吐かれたさうです。

然し今日では男子の方も大變鄭寧になり、まあ其の方も相變らず勤續して被居います。此間も、「最う止めようかとも思ひますが、さて止めて何うといふ心當もありませんから、まあ其儘にしてをります。妙なものですね、最う惰力的になつて、何となく器械同樣に働いてをるのです。」と淋しく笑つて居られました。私は之を伺つて辛い樣な氣が致しました。

喉元過ぎれば何とやら。私も第一日の感も何時か薄らぎ、眞逆進兵の女工とも違ふと分つて、不覺暫時通勤して居りました。けれど暫時できる生命保險の事務員に轉勤致しました。

無言の業

交換局では絶對に談話する事を許しません。尤も一時間毎に十五分づゝの休憩時間がありますので、其の休憩室では話さうと笑はうと騷がうと一切放任ですが……。イエ、それでも無ければ到底遣り切れは致しません。休憩室は綠島(オーシス)です。まあ何か相塲の變動でもあるとか、火事でもあるとか、電燈でも消えたとか申す時は、最うバラバラ、バラ〳〵と札の落る事目も眩むやうです。さういふ時は最う一切夢中で手と口とは瞬きする隙もなく動かし續けるのです。宛ら最う戰塲の心持――。然うして疲れ切つて休憩室へ入ります。ホツと一息吐いて漸く〳〵蘇生つた樣な氣分がして、そして緘せられてゐた口も漸く〳〵開けて、お互同士の話したい事も話し合はれます。中に若い――十四位の――無邪氣な方でもありますと、一同面白がつて妹でも調戲ふやうに調戲つて、ワイワイと騷ぎ立てるのです。それで漸う〳〵驟雨に洗はれた樣な心地になつて再び事務に就けるので御座います。



その休憩室以外は一切談話禁斷。執務中は勿論寢室もさう浴塲もさう。で、「何番々々」と器械的の聲は始終出しながらも、其の實は辛い無言の業で執務し

てをりますが、さて時に閑隙があつて眞正に茫乎と無言の業である時があります。さういふ折に動もすればハッと胸を打たれる樣な慘ましい光景を見受けます。イエ、私なども澤山然ういふ容子を見られてをりませうが……。

どうせ交換手ですもの。何れ失意の境遇を歎つものばかり……。それが閑で沈默に落ちてゐる刹那です。フト將來の暗い運命に思ひ入つて了つて、悄乎と沈み込んで了ふのも無理では御座いますまい。頭はあの受話器に嵌まれた儘で、凝と考へ込んでゐる姿を見れば、私は身につまされて幾度も泣きました。

重役附の婦人

保險會社の方へ變つてから、聊か世界が明るくなつた樣に感じました。交換局の方では同僚が百五十人もありましたが、會社では十七八人。それで女學校出の方も二三人あります。正教員の免狀も持つてゐますが、氣詰りな學校よりもといふ樣な譯。又或る華族の家令の夫人で、女中の二人も使つて被在るのに、道樂半分に務めてお出でになる方などもあります。一體に皆樣が淑やかで女らしいのです。勤務も樂で收入も幾干か宜うございます。

交換局の方は監督の男子が二三人きりですが、社の方は男子の方が澤山で、其の間に少數の女子が交つてをるのです。それはお互に「感じのいゝ方だ」とか、「いけ好かない人だ」とか、或は「厭な女だ」とか、朝夕接觸してゐる間にはいろ〳〵の感じも胸には浮びませうが、然しそれだけの事です。男女お互の香りに接し合ふは言ふまでもありませんが、それ以上何でもありません。淡泊したもので御座います。

けれど何處にも妙な事は起り勝ちのもの。重役付の一婦人――此の地位は皆樣に羨ましがられるので、簿記だの統計だのと小面倒な事とガラリ變つて、重役室の机の上でも拂ひ、重役方やお客さんに外套を着せてあげたり脫がせてあげたりする位がお役。其の婦人――美人といふ方ではなく、所謂表情美に富んだお方

でした——が大層家が苦しいのに善くお勤めなさる、親孝行だ感心だといふので、重役の一人が新聞にまで出されたので、方方から惠金が行くといふ樣な事、社でも其の發起があつて一同幾干かづゝ醵金致しました。

何でも其の方は下谷の龍泉寺町から呉服橋まで電車にも乘らず、毎日歩行て通勤になるといふのでよく遲刻はなさる、歸は病人が家に在ると言ふので早退をなさる。隨分の我儘を例外として許されて居りました。處が其實御病人も大した事はなく、お母樣は金を貸して被居るとかいふ噂。それが矢張重役方などへは分らないのですね。一同「馬鹿々々しい」と蔭で呟いて居りました。



つまり重役方に同情されたので御座いますね。けれども恁ういふ同情を寄せられ又甘んじて受けるのが果して幸でせうか不幸でせうか。

これが私の務めてからの妙な一事實でございました。

退社の事情

社の務めは概して苦勞な方ではなく、午餐の時に一時間、午前と午後に十五分宛の休憩が御座います。其の鐘の響き渡るを合圖に、一同出て行つて、ピンポンをしたり談話をしたり雜誌小説を讀んだり、それ／＼に遊ぶのです。

保險契約高が五千萬圓になつた祝ひとか、或は社の創立十年の祝典とか、然ういふ時はいろ〳〵賑やかで、餘興に重役方の謡やお能があつたり、貞水の講談、杵屋連中の長唄、西洋樂、さては福引など却々盛大で御座います。其の他新年式とか何か特別の祝ひとか、或は遠足なども催します。

で、まあ女子の從事する務としては結構なものですから、不覺私も暫時居りました。けれど今度は斷然罷める心算に致しました。それには差迫つた事情もありますが、又一つ、幸か不幸かと考へる譯があるからなので……。

女事務員の中には必要に迫られて止むなく出てゐる方もあり、或は迫られるのではないがまあ結婚まで遊んでゐるよりもといふ方もあります。何れ廿歳前後の方が多いものですから、良縁さへあれば罷めて婚嫁く考なのです。私の社で二十代を超してゐるのは前申す會計の奥さんと、そして受付をなさるお方(卅一歳)と此のお兩人だけで御座います。

處が此の受付のお方はそれは〳〵美人で被在るのです。女でも惚々するやうな御縹緻。何う見ても廿三四と外思はれぬ光るやうなお方です。ですが最う一番古く此社にお務めで、未だに御結婚なさらないのです。「何うしてゞせう?」と皆お噂しますが、別に深い故障もないらしく、御身體も健康です、「つまりお望みが高いからだらう」と母なぞはお噂しますが何うも然うらしく思はれます。

ですから目前に、差したる苦勞もなく獨立の出來るといふ事も幸でせうか不幸でせうか。女は心の小さいもの、少しばかりの技倆に慢心を起し過ぎて、婚期を過る樣な結果になるのは私は不幸ではないかと存じます。私などゝ同年輩のお方にも一寸然ういふ傾向が見えてをります。で、まあ私は母の申すに從ひ今度退く事に致しました。これで女事務員としての私の身の上も終る譯で御座います。同じやうな境遇にあるお方の爲に、幸福な運命を得られるやうに祈つて筆を留めます。





和久良葉日記

さわらび女史

死美人

　好な樣な、嫌ひな樣な、面白味のない樣な、ある樣な、暖かさうな、冷たさうな、一種異樣の感想を每年自分の心に起させるその紫陽の花が又咲いた。

　自分が此花を見てこゝろに浮べる幻は、折にふれ、時によつて極端より極端まで移り變るのである、白百合を谷の女神に、紅薔薇を妖艶な美女といつた樣に、一定の品評が出來ないのはこの紫陽の花の色である。夫が又自分でも氣になるので、話しの出る機會に誰にでも訊いでみる。それで人の云つた事に面白い節でもあると、夫が又忘られないので、又一つ新らしい事が殖る。斯樣な風に種々異つた感想が寄集つて一つになると、丁度太陽の光線の樣に何といふ事もない無色の物になつて終ふ。

　自分が最初此花を見たのは以前向島に住んで居た或る繪師の庭で七歲計りの時であつた、丁度錦繪のお姬樣の前髪にさす簪の樣な美しい花だと思つた。十歲位になつた時同じ程の友達に、

「あなたは何の花が好き」と問はれて、

「幾度びも色が變つて何時までも咲いて居るから紫陽花がいゝわ」といふと、

「おゝ厭だ、あれは死んだ人の臭ひがするとお祖母さんが話したわ、だから御寺に澤山あるつて」と散々にけなされた。今思ふと此時に、自分の心の花園にある物の種子が落ちて、夫が知らぬ間に成長してゐたらしい。稻妻や浮草のそれの樣に定めない戀心に喩へられて居るのも聞いたが、此花に對してはもう少し同情が

あつた、決して操の無い花だとは思はなかつた。

何時の頃か忘れたが彩色美くしい暁に、ひとり庭に佇ずんで此花を見た時は、圓い鏡の様な花に深空の色が映るかと見えて、此世の物とは思はれなかつた。夫から後、暫くは斯様な夢を見て居た。紫陽花は日の神の寵児で、年に一度其父の最も近くある其時に、此世界へ天降るのであるから、汚れた地に根を宿しても御空の雲を彩つた故郷の手振を忘れず、七色の配合美くしく、折々に染めかへて心遣りにして居る



ので、朝な／＼の消息を父に齎らす御使は、必すなほな露がする。後れて覚めた千種の花に、再び眠れといひ渡す野分の風の夢より先に、父の御許に歸つて終ふ。

又或る闇の夜の事であつた。何處からか一ツの螢がふわ／＼と飛んで來たので、團扇を持つて庭に下りると、風より輕く空中に漂ふのを、池の汀の木の繁みに追つて入ると、靜かに闇を破つたのが紫陽の花で、自分より丈高い木に恐ろしい程大きい花が燐の色に咲いてゐた。一寸手を觸れてみた

ら、冷たかつた。螢はと見ると何時の間にか山の上の大樹の梢を人魂の樣にかすめながら及ぶまいといふ樣に、だん／＼高く飛んで行つた。此時に見た紫陽花を太陽の子と思ふ事は如何しても出來なかつた。鬼の館の門飾りにふさはしい此花の根は、下の下のずつと下の陰府までも續いて居て、凄い色した花房は魔女の手鞠になるのかと思はれた。友達が此花を評した中で面白いと思つたのは、小さい虹。可憐な處女。紫の雲。古への戀の夢。美くしい我妻の幻を追つて衣ばかり替へて居て、外に趣のない女。等である。

　此夕暮にふと見たのは香織川の流に添つた小さい家の庭であつたが、薄瑠璃色の紫陽花が重げな花を破垣に凭せかけて、下行く水に淋しい影を落して居た。自分は只何とはなしに死美人の樣だと思つた。

　　紫陽花はなき戀妻の花のあと

看護婦

「まあ一心と云ふものはひどい物ですね、橋本は昨夜中縫すに頂戴した浴衣を縫ひ上げましたさうです、今日それを着て歸るのだと申ましてね」

　と鶴やが云ふ、橋本とは親戚から預かつてゐる子供が病氣の爲つけて置た看護婦で、濱町邊の某看護婦會から來て居たが、病人も最早大分快くなつたので今日は歸る筈になつて居る、來た日から今日まで十二日間、よく氣をつけて與れたその禮に遣はした浴衣地に就ての事である。抑もこの看護婦がその浴衣を着て歸るといふに就ては大いに言はねばならぬ譯がある、自分の處で看護婦の入用な場合にはいつもこの看護婦會から差閊のない時はこの橋本氏に來てもらふのである。年齡は廿二三、丸顏の、快活で、親切な、無邪氣で、正直な人であるから、家の人々も皆讃めてゐる、此人が幾日かゐて歸る時には必ず御禮のしるしとして詰らぬ物でも持たせて歸す。すると其翌日は必ず其處の會長から厚く禮を述べた文が來る。

　或日の事、私の家から產婆學校へ通つてゐる女學生が、看護婦の生活の有樣を此橋本といふ人に訊いた、

先づ入會の手續から、食費とか被服費とか病氣其他の費用等は如何いふ風になつてゐるとか云ふ樣な話しから、つひに貰ひ物の事に及んだのを又聞きに自分は聞いたのであるが、隨分可愛相な者である。初め幾年と云ふ約束で入會する、夫から病家へ派出する樣になると、其日々々の日當の全部は勿論會長の手に入るので、夫が毎月の食費といふ事になる、其外患者とか、又は患者の父母とかゞ夜の目も寢ずに看護して呉れた禮にと云つて、浴衣地とか帶側とか、帶止とか、襦袢の袖とか、何かしらん與へて歸す、それには私初め其人に似合ひさうな柄をいろ〳〵苦心して見立てそれを喜んで身に着けて貰ふ積りで贈るのである。けれどそれは悉く會長の手に取り上げられて仕舞ふのである、ぢみ過るとか派手であるとか貰ふ時の心盡しは水の泡となつて終ふではないか。夏冬に只一枚



づゝの仕着せの外は、被服費は自分持で、月に壹圓のお小遣ひ、病氣になれば保證人に癒るまでと引渡される、其上に途中で會を出樣と思ふと、たとへ如何樣な事情があつても、入會した其時から出るといふ其日まで毎月六圓づゝの割で會費を拂つて行かねばならぬ、まあ何といふ不利益な約束だらうと自分は思つた。

それで或る日橋本氏に、

「私しは少しの物でもあげるのはあなたに上るので、會長さんにあげるのぢや無いわ、私しが貰つたのですといつたら如何なの？ 夫でも矢張りよこせと云はれるの」、と訊くと、

「はあ矢張出さなくちやなりませんの」と笑ひながら云ふ。

「だつてひどいわね、人の貰つた物を、それぢや與た人の心盡が無になつて終ふ、私し是から與ない事にし樣かしら會長さんに與たいんぢや無いんだからね」

「はあ然きましてもね、同じ事なんですから御心配下さいません樣に」と氣の毒相に云ふのが又氣の毒でならぬ。

「ぢや何も貰はないつもりでゐたらいゝでせう、默つてあなたが持つてゐて、夫だつてあなたが貰つた物に違ひないんだから、惡い事はあるまいと思ふわ、取り上る方が惡いんだから」

「左樣しましてもね、矢張心が咎めましてね又はたから知れでもしますと夫こそは大變ですからまあさういふ事になつてるのですから致し方がございませんよ」

我が物を我がのにするでさへ、人知れず持つてゐるのは氣が咎るといふ此人の清い心のうちを思ふと「出さずに置いたら」と云つたのさへ愧かしく思はれる。

夫から四五日經つて橋本氏の歸る時に、此度はおもいれ派手な、會長がとても着る氣にならぬ樣な、水色の糸を織り込んだ。がすの樣な、太物を贈つた、例の通り二三日過ぎて會長から、何よりの品下されて橋本は大喜び、厚く御禮を申上て與れる樣、私しまで申出ましたと云ふはがきが來た。

暫らくして又橋本といふ人が來たので、

「此間のは如何なつて？」と訊くと、
「はあれも矢張」と苦笑する。
「まああんな派手な着物でも會長さんは着るの」
「いゝえあれは橋本には似合ないから私しが他へ遣ひ物にするから、其かはりに、これを上げようと紺がすりの様なのを」貰ひました。
「左様まあ」と自分は後の言葉がつげなかつた。夫は前に會長から來た端書と今此人の云ふ事とくらべて見ると會長の意の中が見え透くので、橋本氏が會長に出さぬのは氣が咎めると云つたのを聞いた時とは正反對の心持がした。愈ゝ今日は歸す日なので昨夜又お禮のしるしに疋田形の浴衣地一反橋本氏に贈つた。其時に「あなたへのお禮ですから自分で着て下さいよ」と云つたのを守る爲に徹夜で縫つて着たのだと聞いた時は人の事とは思へなかつた。あゝ歸ると又直に知らぬ病家へ廻されて、患者の枕邊に夜もすがら働かねばならぬのだらうか。たとへ如何なに眠くつても。

懸ざめと虚榮

今日は掃除日なので、起ると早二三人の手傳男が來て居る、植木屋と疊屋、それに内の車夫、朝食を終ふ頃からそろ〳〵疊をあげはじめて、一間二間と段々に居間が減つて行くので赤ン坊も、猫も、さては座敷犬も追立てられては彼方此方にうろ〳〵して居る、風下にならぬ方の室一ツを殘して此處に愛らしいものを皆な入れた、自分が何かやり始めると、男の人が其處へ飛んで來て手取ばやく埒をあけて終ふ。一體自分の持役は書籍係、助役には弟が控へて居る、是が却々の大役である、良人のと自分のとを合せると約そ三千冊ばかり、其中には組合はせねばならぬのもあれば、種類を別けねばならぬのもあるので、思つた樣に樂ではない、しかし又役德もあらうといふ譯、その役德といふのは、撰り分けながら隙見をする事、其役德が却つて後の骨折を増した次第で、日は暮る、心は急ぐ、本はまだ山になつて居るといふ面白くない結果になる、

夫は度々繰り返した事で、今初まつた事ではないが久しく手に觸れなかつた面白い本でも見つけるとちよつと開いて見たくなる、見ると又くぎり迄讀みたくなるといふ風で、手拭被つて襷がけのまゝ一寸と思つて讀み始めると二十分や三十分は夢の間に過ぎて終ふ、氣がついて見ると弟も向ふの角で鉢卷にシャツ一枚、立かけて何か讀み入つてゐる。

『さあ疾く片附てお仕舞な』と聲をかけると『姉樣』もといつて跡はあはゝゝゝと笑ふ、それから又一しきり精出して働らく。風通しのよい廊下の隅に青い金網の鳥籠が置いてある、中に居る文鳥が、水を浴ふて、羽ばたきの飛沫が貫とめた玉の樣に籠の中を飾つたのに華かな朝日が映してキラ／＼してゐる、彼の天上に白玉樓成ると聞いた李長吉の夢を夢みて、美艶な事をおもつてゐた、軒下に敷た薄緣の上には色々の本が並べてある、緣に近い處で後向の男が何か一心に繙いてゐるので、上から一寸のぞいて見ると日本美人帖、自分は今、明治時代の小說をそろへ始めた、先づ樗牛と紅葉の全集をそろへ終つて、淀殿、原田甲斐、高野聖、思出の記、由井の正雪、白髮鬼、奴の小まん、不如歸、聖人か盜賊か、湯しま詣、蛇いちご、つばき姬、草迷宮、其次に虛榮が出た、自分が見た中では是と戀ざめ程、いやに思つた小說はない其の又いやだと思はせるのが技術の上から云ふと上手なのかも知れないが、いやらしい老人の癡姿や、自尊心のない男が、水で手紙の字をにじませ、淚と見せて婦女子を弄ぶといふ樣な卑劣極まる事柄が見る人を一方ならず不快にする、ここに再び云ふ不快にすると云ふのが即ち作者のうでのある處で、寫し得て妙とでも云ふのかも知れぬ、兎もあれ不快の物はいやになる、それで勢ひ其反對の方面に進む事になる、其處にいひしらぬ趣が籠つてゐる事となる、それを讀み得る人の無いと云ふのは歎かはしさの至りであると、自然派を代表して誰かゞ自分に抗した事がある、夫は或はさうかも知れぬ、併しさういふ逆勝手よりは矢張美くしい形容詞や、恐ろしい光景や、悲しい樣や、嬉しい情が、いろ／＼に描きなされ

て中には勝つて見たい様な心も深く徳も高い人格をあらはした物が自分にはいゝ、戀ざめは見たいと云ふ人に贈つた、妄詠は如何しよう、男の人には見せたく無い、女學生にはなほ更の事、人には遣れず、自分はもう大嫌ひ、いつその事と破つて終つた、見えなくなつた元良親王の歌集とポーの話しの本が出て嬉しかつた。

朝の散策

もう遠い前からの約束なので、今朝は夫と駒を並べて近い入谷の朝顔を見に行く朝露の晴れぬ間にと思つて居たが、少し用事が出來た爲八時頃になつて終つた。



夫の乗つた、栃がゝつた栗毛に、流星の馬は大層格好がよい上に、温順いけれど、横鞍を嫌つて自分を一度落した事があるからもう乗らぬ、自分が今乗つたのは美くしい猩々栗毛で何處となく可愛らしい四歳駒である。

道灌山の森を出て、夏草しげる細徑を過る程、見下ろせば古への武藏野は、見渡す限り鮮かな青田、たえ〲の松杉はたゞ黑く、紬の様な早乙女の田植笠、處々に三つ二つ、筑波は霞に沈んでゐる、露深い笹の葉分けてなほ進むと山越を思ふ様な切割の下り坂、夜は追剝が出さうな處、夫の乘つ

てゐる馬の後を追つて戯れかゝる自分の馬の口を、馬丁が取らうとしたら、路の端へ急に寄つたので、馬丁は赤土の穴に落ちた。

下りきると又上つて日暮の里に出る、先の馬が驅け出すと自分のもかける、彌久く乘つて出なかつたので反動があべこべになつて妙だつたが、上野の山に着いた頃は、最早大分によくなつた、線路の方へ下つて踏切を越え樣とすると、折あしく汽車の摺れ違ひがあつた、二三歩後へ引返したので別段馬は驚かなかつた、八百屋の荷と芥取車で、もう一杯の樣になつてゐる細い道に漸く入ると、丈高い職人體の男が水色の麗はしい朝顔の小さい土鉢を手のついた籠に入れて、大事さうに持つてすれちがふ。

『未だ大丈夫ですね朝顏は』と先に行く馬上の夫に聲をかけると、振返つてうなづいた、左に折れて少し行くと入又の前に出る、路巾のせまいのに大勢の人、馬が馬がと云ふ聲に連れて、女の人など怖がつて逃げまどう、大變な處へ心なく乘り込んだのを今更に後悔したが、下りたとて繫ぐ處が無い、仕方なしに其儘行つた、瘤の出た樣な丸木の門を入ると、子供が二三人遊んで居たのがばら／＼と逃げて行つた、小さい俛のそば迄行つて『庄野さん／＼』と親戚から預つてゐる書生さんの名を呼ぶ、一寸のぞいて『まあよく』と云ひながら奥へ入る。程なく母様と末の弟とが出て來た、夫も下馬する、自分も下りた。今前を過ぎたのを何處から見たものと見えて入又の庭男が案内をするとて自分等を迎いに來て吳れた、馬は其處に繫いで置いて、入又に行つて見る、和洋さま／＼な草の花がもえる樣に庭一面を彩つて居た。見樣といふ目的の朝顔は葭簀で圍つた小屋の内にあるものゝ外は大概萎れて居た。

溫室には電話草、時計草など或る派の歌の樣な名のついた物の外は殆んどジョレニアンばかりと云つてもよい位、目に付いたのは西洋の蓮の花で、白に黄に藤紫の三色であつた、色なしでは好きな藤紫も此白と黄に比べては何となく品が下る、純白の蓮の花が池の鏡に其影を落した處は、女神が水を上つた樣だと思ふ

と、自分の庭の山蔭の清水湧く池の邊りに是非浮して見たくなつた。夫に相談して見ると、『如何だらう第一あんな木の下で日が柴の間からまばらに射す位なものだから、花がよく咲くかどうか』と庭男に問ふと『左樣で御座いますな矢張日のよくあたる處を好みます樣で御座います、昨年此近所の植木屋



で、簀の子をかけてやつて、見ましたら、秋口に最う花は駄目でした』と答へる。折角の理想の女神が幽邃な境を嫌つて都會住ひを好む樣な心持がして何となく恨めしかつたが、又山間に世を厭ふすねものでないかはり、美の根源の日の神を常に仰ぎ見て、長閑な詩をうたふかと思へば、捨がた

い聲もある、ませ垣の中の縁で茶を飲み、松風の聲が、琴の音でも聞えさうな奥の間で、心ない蓄音器俗謡をしきりに唄ひ續けてゐる。

小さい盆栽の七草を一つ買つて母樣の家に歸る、夫は本所に訪ねる人があるので、電車まで車で行つた、自分は再び馬に乘つて歸る積りではあるけれど、馬丁が夫の馬に乘ると、自分は未だ馴れもせぬ馬の背でもし暴れでもしたら困ると思つたので一頭預けて歸らうかと云ふと、庄野さんが乘つて一緒に行かうかと云ふ送つてもらへと母樣も云はれたので『では仕度して』と自分がいふと『袴もはいてゐますから此儘でいゝんです』男は本當に氣輕で身輕、其儘直に飛び乘つて丸木の門を出たら、却々熱くなつて來た、坂本の通りへ出ると、庄野さんの馬が駈けだした、自分のもそれに續いた、少し面白くなつて來る、調子に乘ると馬も又調子づいて、すこしやけ氣味に成つて來た、馬丁の田中は後から『大勒をつめて被下大勒をつめて被下』を心配相な聲を張り上げて追かけながら叫ぶ、漸々馬は靜かになつて上野の森にさし懸ると涼しい風が吹き通つて、大樹の蔭は何となく深山の旅を思はせる、庄野さんを先に並足で進む、音樂學校の横へ來ると、ふつと聞えたピヤノの音が再び耳を欹てた時は、もう少しも聞とれなかつた、自分の心は何となく空に憧がれて、彼のキーツの詩『イーヴ、オブ、セントアグネス』の第三章と第廿九章を心に浮べて、限りない趣を深く深く味はつてゐた。惠みの風は絶えず吹いて、馬上の人を慰めたが、流石に日影は熱くなつた、自分の馬も庄野さんのも、暴れずに戯けずに、おとなしく家に着いた。

朝顔の生命

夫は大勢家族を連れて今朝葉山に行くと云ふ、誘はれたけれど昨日久し振で馬に乘つた爲、からだ中が痛いのに、少し調べたい物もあるし、日歸りならば待つて居た方が涼しさうなので、家に居る事にした。行く人々を玄關まで送り出すと、朝顔賣りが澤山の花を擔

いで來た、それは本當に美くしい、紅や、白や、紫や、空色や、さまぐの花の輪が今を盛りと咲き滿ちたのに露が一杯置て、活々とした朝の色を充分に表はして居た、昔の人は多く佛教の感化を受けてゐたから、一切が悲觀的で、此朝顏を見ても先美くしいといふよりは、花の命が短いとか、照らす日影がつれないとか、たゞもう憐れにはかない物と觀ずる方がさきだつ、今は亡き自分の和歌の師も、その心して詠めよといはれた、けれど自分は如何しても其反對に考へられて仕方がない、鏡の樣に咲きそめた夏の初めから、葉がくれに段々と輪が小さくなる秋の半まで、朝每に新らしい色を開く此花が、如何してはかないのだらうと思つて、腰折れを詠んだ事もある。而して朝每の花の盛りの短かいのは何よりも嬉しい事で、是が又廿四時間咲き續けて秋までも有つたらば、夫こそは詰らぬもので、名も忘られて終ふかも知れぬ、總じて永くとゞまらぬ物に美くしい物が多い、赫奕たる華の露は手にとれば忽ち消え、壯艶な空の虹は瞬間に跡もない。

　　飽かでこそ思はむ中は離れなめ
　　　そをだに後の忘れがたみに

と古の人は詠んだ、矢張そんな物かしらむ、澤山買つた朝顏を植木屋は庭の方へ持つて來た。

「何處から出て來るの」

「龜井戸から參ります」

「今頃此處へ來るのには餘程早く出るのでせう」

「家を出るのは三時半頃で御座います」

「まあ、では未だ花がつぼんで居るでせう」

「左樣です」

「では途中で開くの」

「左樣です、かれこれ四時と云ふ頃に」

「見えるの開く時は」

「へい每日見ますよ」

「如何な風に開くの」

「へえ別段變つた事もありません」何だか妙だから默つてゐると、

「音なんか致しませんよ別に」と顏を見る。



『ねぢれる樣に開くんでせう』
『左樣です先づよりが戻る樣なわけで、へえ、開きます時には花が一寸動きますよ』
自分は此答へに滿足した、未だ小暗い夏の朝、人の見ぬ間に開くと云ふ此花の寢覺の姿を、充分に想像する事が出來た『花が一寸動きます』と云つたのが何だか詩の秀句の樣に思はれて、氣に入つた。つぼ紫といふ名がよいので詰らぬ花を一鉢買つた、紫は其實の色で小さい可愛いものが生るといふから其時を待つて見よう。



鎌倉見聞記

政子

▲大偉人が後世に及ぼす力程素破らしいものは無論ないが、賴朝の、例の握り主義が、七百年後の、所謂鎌倉ッ子によりて遺憾なく發揮されて居るのも可笑しい。彼等は、貸別莊の四五軒は持ちながら、自分等は、四疊半の物置同樣の家に、親子六七人で起居し、亭主は日傭取り、おかみさんは人仕事、娘は毎日子守に出すと云つたやうな鹽梅式で、もつと細かいのは、十以上の男の兒を、學校が退けてから、近處の酒屋へ借して小僧代りをさせる、暑中休暇一杯は、無論、其酒屋なり何なりに奉公に出し、或は、郵便局の配達夫とさせる等、それは〳〵御念の入つたものであるが、彼等大頭公式は、借別莊黨を罵ッて曰く、何だ髯が有つたつて家も無い癖にと。なかに、鎌倉で氣負ひなのは、あの鰹ばかりですよ。

▲三井高保さんの、たしか總領息子さん、德大寺の姫樣を奧方にして、からだが、何だか斯う弱いために、競爭塲裡へは背中を向けて、何時も此長谷に閑居の有樣、然るに姫樣が結婚して、十三年目とか十四年目とかに、始めてお小さいのが出來たと云ふわけなれど、此またお小さいのが、母アさん酷似で、其美くしさと云つたらない。

德大寺老侯、此お兒を見て歎じて曰く、

「これで成長くなつてから身が持てようか」

と、但し男の兒。

▲何だか意地穢しの御話であるが、坂の下の力餅（權五郎社前）の女夫饅頭が、鎌倉中で、一番美味しいとの評判、遂ひ近處に住ひたまふ、華頂宮御殿にも、毎日のやうに御用ありしを、何處かの弱りめか但しは惡

戯か、新聞に力餅のかみさん、顔色が悪し、大方病氣は、鎌倉名物の一件だらうと吹聽してより、宮樣の御用もなく、賣行きも大層少なくなりしとは氣の毒千萬鎌倉は、うかと悄氣て歩ける處でなし、況して店先へよくない顏は禁物々々。

▲鯛は鯛なり、何處の小僧か知らねど、古びたる番傘のはぎつぎ幾つとなくしたるを大事さうにさしたるを行き違ひさま能く／＼見れば、これは何樣、東伏見宮別邸と墨黑々の六つ文字。

▲鎌倉の名物は、横濱やら東京やらから、兒供に、女中位を附けて別莊、或は借別莊に寄越して置くことなり、われら如き氣の小さなものは、餘所事ながら心配でたまらず。

▲八幡樣の横から、建長寺へ行く途中、何處となく古びのかゝッた、昔床しい家居の眞正面の玄關には、うやうやしく御簾のかゝりたるがあつたり、果して大宮司箱崎氏の住居。

▲此地に遠からずして田谷の穴と云ふ穴あり、隨分古くから、此邊の人は云ひ囃す穴なれど、割合に天下に名なし、穴の中は上つたり下つたりして居て、其岩の天井、或は壁に、巧に佛像、龍鳳の彫刻せられたるものなり、往年東伏見宮樣御微行にて此處に渡らせたまひ、例の如く印半纏のきたないのを着たまひて、穴に入りたまひし由、岩石の旅館などゝ、何處やらの事を仰々しく書き立てる新聞は、宜しく此穴の探檢をやり百餘年前の、丹念なる老翁老媼二人を閃耀されたし。

▲圓覺僧堂だの、建長僧堂だのと染め拔いた頭陀袋を懸けて、これより麻の衣に圓ぐけの帶と云つたやうな托鉢の小僧を見ると、一種敬虔の念が生じます、釋尊の古へもかくやありけんと。

▲どの御寺も斯うなつて來たのなれば仕方がないとしても、中にも觀音樣を以て聞ゆる長谷寺が、全然お茶屋と早變りし、お客が祝儀を出せば、住職が、其處へ出て來る禮を云ふ……なんて來るのだから、いくら澆季末法の世でも目も當てられず。

▲長谷の雜貨店に、轉法輪商會と云ふのがあり、何

は日蓮上人が、此鎌倉で、法輪を無暗に轉じられたにしろチンポーリン商會では、あんまり破天荒過ぎると君は能く看板を眺めた處、傍にチポリ商會それにしても、何だか、、、、こじつけ臭いので、欲しくも無いものを買ひに入り、御宅の御苗字は、随分御珍らしいのねえ、とやすつけると、亭主未若いので、少々赤い顔をしながら「ハイ手前共は佛像が御座いますので……へ、、、まア何で御座いますね、大佛の出店、と云つたやうな塩梅式なんで、へ、、、、、」



▲縁の無い事で無いから、こゝにも並べて置くのなれど、甲州身延山、久遠寺の大管長が、チヤキ〳〵の江戸ッ兒で、しかも例の、雁食豆で有名な、蓬萊屋の息子さんと聞いては、有り難いやら、痛快やら、

▲我等の近所に、骨董屋のお爺さんにて面白い人あり鎌倉の夏の客を罵つて曰く、

「あいらは豚客で御座りましてナ……何故と云つて御覽じ、南瓜だの、芋ばかりを食べに來るので……別にかうと云つて金はつかひませんからなア」

こゝに於て二週三週の避暑客啞然。

饒舌　ゆかし

「呀入來まし。さあ情願おあがり遊ばして、ほんとにお久し振りで御座んすわれ。まあお孃ちやま、はいゝらつしやいまし。お怜悧くつていらつしやること。大層成長おなんなすつて、お髮も大變お伸びになりましたぢやございませんか。お召服だつて何時もお綺麗でゐらつしやいます。はい否まう手前の子供なんざ全くほつちらかしでございますよ。でもまあ什麼やら此頃は男の子ながらに人樣の前へ出まして甚い不作法も致しませんで……其れにいたしましてもお孃……。」

漸つと今、玄關に上りし許りの處なるに劫き辭子か一禮したる爲め、かく浴びせかけられぬ。

「この暇は旦那樣が御風邪を召しましたさうで、是非一度御見舞ひに參らなきやなりませんのを……。」と云ひいづるを引つたくり、

「否貴女、什麼いたしまして。實は左樣大した事でも御座いませんのでしたけれども先あ左樣でも申して體よく御斷り致しませんとね。ほゝゝこれはこの場丈けの御話で御座んすけれども。さお當てなさいまし。お孃ちやまもお敷きあそばせ。ほゝゝ眞箇良いお子樣でお羨しうございますよ。手前共のは男でございますから什麼も亂暴でねえ貴女、併し男子は矢張り少し元氣な方が先でよくなりますとか奧樣、其樣なものでございませうかねえゝゝ。松や、まつう。」

と呼び給へばやがて襖をさらり、例の不作法なる女中の松、立膝して

「はい。」とお客樣なる自分には會釋もなさゞりき。

「お茶をれ、其れからあの戸棚の右の側の方のお菓子でも……そして今に旦那樣もお歸りになるんだからよく用意をして置くんだよ。」と仰らる。うなづきて足音荒く去るを奧樣ヂツと見たまひしが、

「什麼でせう奧樣、あの通りでございますかられえ。眞箇に只今の女中は無作法で困ります。いづれ茲二三日の中に暇を與る都合でございます。貴女、其して何かと申すと直ぐ膨れますんですから……丁度河豚でござんすよ。體ばかり肥りましてね。あれで白粉をつけますから可愛ぢやございませんか。ほゝゝゝ。」

自分は幸か不幸か人並よりも肥りぬ。しかも今日は他家を訪問すべきなればとて些少白きものさへ嗜みたるを奧樣何のお氣も附かで腹立たしげに松を罵り給ひしが、ふと正氣附き給ひけむ、

「松なんか第一色が眞黑でございますもの、お色の白い方でお肥りなすつたのはキビ〳〵と什麼に小氣味が可かしれやしませんよ。私こそ此樣に瘠せつぽけで見られた姿ぢやあございませんけれど横須賀へ嫁いて

居ります妹なんか其れは氣持ちよく肥つて居ります。只今は衞生美人とか申して肥りましたのが流行るのでございますつてね。」

いよ眞面目なるに、吹き出し度きを堪へつゝ、

「左樣でございますかねえ。さう致しますと私なんかは日本一の美人かも知れません。ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。」其内にお菓子は出でぬ。風月のカステイラなり。子供には紙に包みたるを持たしめ給へば、しづ子は嬉しげに禮したり。

「おゝお怜悧なこと。召し上れ、貴女にお似なすつてお色が雪の樣でございますわねえ。眉の邊りなんかは旦那樣にそつくりでゐらつしやいますね。キリツと遊ばした……。手前の主人などは最早鬚ばう〱で厭に成つちまひます。彼れで若い時分は新橋あたりで騒がれたと申しますからねえ、ほゝゝゝ。全く誰れでも左樣美しい人許りも御座いません。唯手入れをするか、しないの段でございますよ。私なんかも始終放つちやらかしなんでございますからついねえ。奧樣はお手入れが、よくお屆きになりますことねえ。何時もさう申しますんですよ、什麽して河田樣の奧樣は彼樣お美しいのだらうつて。いえ全くお世辭ぢやございませんよ。さう致しますとね、主人が、

お前だつて毎日手入れさへすれば可んだと申しますけれど……左樣左樣子供のあるお母樣がお粉飾ばかりもしてられませんしねえ。」

顏より火の出るやうに覺ゆるを、

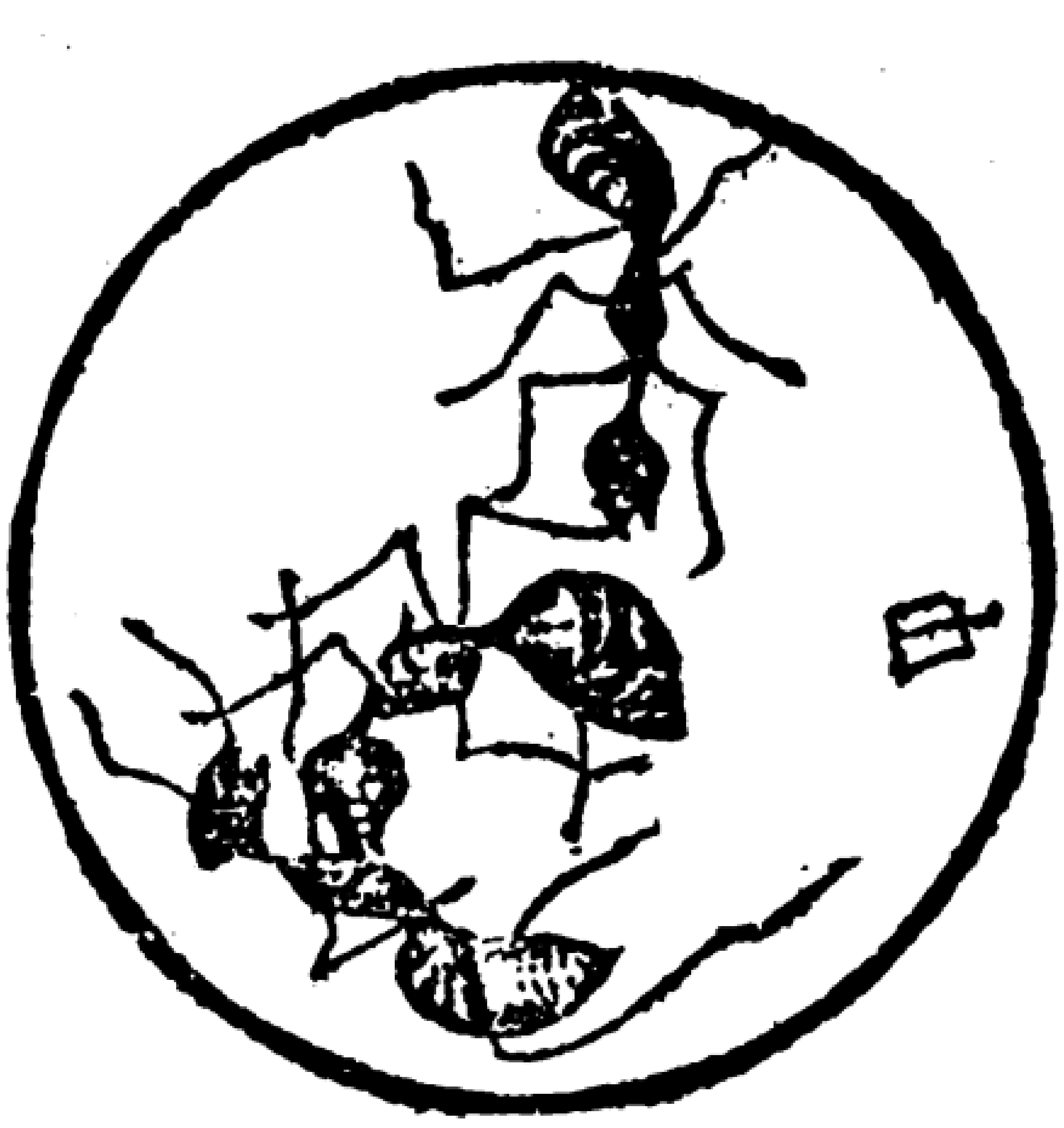
「何時も主人にさう申すんですよ。さう仰る貴郎も少し遊ばせな。折角實の持ち腐れぢやありませんかつてね。ですが男なんかどうでも可ございますわ、腕さへ利けば可ござんすから。主人などはあれで隨分人の世話も致して居りますよ。社の方でも古顏で御座んすから、其かはり下らない苦勞も致しましたよ。」「左樣でございませうとも。上役の方は其れ丈け御心配もねえ。主人なども此方樣がお引立て下すつたお蔭樣でございます。」と漸う云ひ出づるを、

「否れ、お宅のは大層腕がおありなさると申して居りました。主人はもうそれは信用致して居るのでございますが、其れに致しましても世間には不分漢が多うございまして世話の仕甲斐の無い人がございますからねえ。河田さんの前に居た古野なんて人は貴女、妻君もどちらも只の一度だつて御機嫌伺ひに參つた事がないでございますよ。呆れるぢやございませんか。否れ、何もあれつ位の人に來て貰はなくたつて構ひませんが其れでは義理と申すものがねえ……貴女。」

挨拶に困る折柄、旦那樣のお歸宅となり。勿怪の幸に土産物など差出して座を立たんとすれば、

「まあ、よろしいぢやございませんか。是非御夕飯でも一しよに……ねえ奧樣さう遊ばして。おや頂きますんでございますの？どうも濟みませんねえ。でも又主人に叱られますからどうぞ折角でございますがお持ち遊ばして、ね、どうぞ。」と形式ばかり突き返さるゝをよき程に聞き流して門を出でホツと息を吐けば靜子、莞爾と見上げて、

「母樣、あの小母樣よく御話する人ね。」



解決

秋雨女

男の手紙

提君足下

前夜暴風雨でもあつて寝られなかつた翌朝は太陽を見ても生氣が出ず、只うつら〳〵と生欠伸ばかり出るもの。

僕の近狀は恰かもそれなのだ。生きてゐるのかゐないのか生に對する興味といふものが、全然認められなくなつて終つた。

君。おふみはまだ健康だよ、恐らく益〻健康であらう。かれは長命の相をそなへてゐる。そして僕に對する態度も常の如く、從前の如きやさしきおふみだ。しかしおもふても見たまへ。

結婚してから今日迄已に六十日を經過した、此の間箱根の福住に送つた二週間を省いて殘る四十餘日の生活を日記にしたら果して幾文字をきざむことが出來よう。單調といふてもあまりに單調だ。

五時半起床、十時グードナイト、此兩極點をつなぐ鐶の波瀾は毎日律にゆくから情けない、洗面、牛乳をのむ、新聞をよむ、味噌汁を吸ふ、辨當が詰まるそこで時計が八時に出勤の宣告を下すと靴をはき、洋杖脇挾み、シガーを燻らして格子の外に吐き出される。此の格子一重を僅かに浮世の限界として、しかも兩者とも無意味なる一日を過して來るのではないか。好い人間はこの無意味なる一日をも働きと稱してゐる、苦苦しい。

夕食後例の並木を散歩する。これも今は甚く意味がない、六十日以前におふみを連れて散歩した時は、一

禍の快を覺え、ことに、途中同僚になぞ出會した時は無聲の誇りに胸を跳らしたものだ。それがどうであらう、今は旅にゆくのに鞄を下げてゆくのと同じ位な氣よりしない。

それは酷だと君はいふかもしれぬが實際を暴露してさうなのだから仕方もなし。

なほ此の狀態が今後つゞくとすれば人生こんな悲慘なことはないどちらもがみじめだ。

傍觀者は「氣の持ちやう」と一概に解決を與へるであらう、が當事者は「なる程さうか」と無邪氣にはうなづかれぬ。

「どうにかせねば」此の語を成してしかもこれを爲すものは少ない、僕は事實を擧げて、赤裸々なる現在を君に話して、「爲して」見樣とおもふ、試みる、きつと試みる。



故に懺悔の罪は既往として咎めてくれたまふなうつら〳〵あとがくるしい。

S生拜

女の手紙

美代さん

此の頃はちつとも訪ねて呉れないのね、逵見が出勤してしまふたあとはたつた一人だものさびしいのよ。それに今のうちは別に縫物もなし朝の十時から午後の三時迄は何して好いかわからないの、これでは勿體ないと

思つと何かしようとするとねむくなるし、身體がすつかりだらけてしまつた。

もう休暇でせう、美代さん、とまり掛けで來らつしやいな。良人のはちつとも女には關はないから、といつてつんけんな人でもないし、まあ平凡の人なのだからすること丈けは整然とするし、釣の外には道樂はなし、此の頃は何だか人が變つて來た樣、前には隨分さわいだものが、私が前の姓を捨てゝ蓮見を頂だいしてから妙に人間が沈んでしまつたらしい。よく人と物を買ひに行つて一とつ物を兩方から執心して、その結果我ものときまると何ともつかぬ氣のすることがあるでせう？。まけた方は忌々しいと思ふにちがひないけれど、勝つた方だつて決して快だなんといふ人はないものよ。きつと何か不安なこゝろ持がするものよ。

良人のもそれからぢやないかとおもふの。わたしは知らなかつたけれど蓮見、ともう一人牧野さんといふ人と、もとは親交がよかつたのださうよ、それが競爭したのですつて、でもその時分の私しは蓮見さんを只好いた人とおもふてゐた丈けで別に戀しいともおもはなかつたもの。それが、陰で競爭をやつてゐるものだから蓮見も一生懸命、今迄とかより以上に親切になつたのでせう。來るものは日に近しでもと〱憎くない人だからそのまゝにしてあつた、なにしろ牧野といふ人は財產家だつた相なの、それで直接にうちへ申込んだ處が、その當時最も私の嫌いなのは財產家と「やきもちやき」それでピーンと斷つてしまつた。父や母は惜しいの、減るのとさわいでゐたけれど結局私は可笑しい人等だとわらつて居て、一方には蓮見さんとの運動を開始したの、すると蓮見さんの方は貧乏だから、もと〱情を以て武器としてゐた、この武器はお金の力に勝つてとう〱私も蓮見の獨占物になつたと云ふ次第。さうなると蓮見もそろ〱不安になつて來たのでせう、きつと。

男なんて存外氣のよわいもんでね。蓮見なんぞも近頃は金佛さまみたいにすまして居るのですものやりきれやしない。俗にいふ煩悶でもして居るのでせうよ。

とにかくゆつくり來て下さいな、飛んだ下らないことを今日は申しました。

ふみより

再び男より

堤君足下

どうしようます
ます不可。今度はおふみまでふさぎ出した。何？　僕は決してわざとらしいことはしやしない。先達て君にうちあけてから僕は出來る丈け意味ある一日を送らうとおもふて努めて見た。それも極めて自然にやつたつもりだ。所がどうだおふみ君すつかりはねてしまつた。おふみの親友の美代さんといふのが昨日遊びに來た。するとおふみはそこにつき切りで僕と一言もまじへさせないそして美代さんが何か心配して注意したらしい、と

「何よござんすよ考へ込んだ人の傍へゆくとろくな話しがありやしない」

僕は度膽を拔かれてしまつた。

かうなると、いよいよ以て家がをかしくない。あんな無邪氣だつた、ふみさんが何故あゝなつたかとかなしくなる。牧野と競爭した時分の僕は理想郷に醉ふて居たのだ、只前途の



樂園を夢想して居たに過ぎなかつた、といへば餘りに薄弱なありふれた考へと笑はれるかもしれぬがその當時は頗る眞面目なものである、まじめでなくて戀が出來るものか。

牧野といへば近々妻君を貰ふさうだ。今になつて甚だ男一匹が罪を作つたことを慚愧する。慚愧したと云つて悔ゆるのではないむしろ笑止におもふのである。

世間かくのごときものを家庭とするならば結婚は眞に墓石ではないか。

S生拜

再び女より

美代さん

此の間は飛んだ苦勞な思ひをさせたのねえ、でもあれくらゐ窘めつけて遣らなきや正氣になんてかへれやしない。一體此の頃癇癪に障る容態ばかりするのですもの、何つて、自分がつまらないのに極つて居るくせにわざと人の前でにこ／＼して居るのです、なんと水臭いのでせう、あんまり不自然なはなしね、何するのも最早いやになつたのよ、どうせ戀から成り立つた夫婦ですもの何時かは褪める時も來るだらうとおもはないではなかつたけれど、それにしてもあまり氣が早すぎるのね。

それはさうと、美代さんもいよ／＼ね、私はどう考へても不しぎでならない、逸見と女一人を取りつこして、そのまけた者が、とられた女の親友をもらふ、牧野さんといふ人、知つてか知らずにかとにかく面白い事になつた。しかし美代さん、あなたもあの人を好きの厭ひのとおもはない人なら、この話しは纏めた方が得策でせうよ、ホヽヽ美代さんの結婚式に女敵の人をよぶのもちよいと異なものですからねえ。何にしても處女時代とはちがつて新らしく世帶を持つといふものは存外面倒なものにはちがひない。

牧野さんて一體どんな性格の人かしら。

ふみより

三度男より

堤君足下
今僕はまだ何ともいはぬ、成行にまかせて居て見る
君の忠告は有難く感謝する。
牛乳は何時も乳白なる色だ、何物をも交へぬ牛乳は人にあかれずのまれてゐる、併し一度玉子と衝突しメリケン粉と同化して成つたビスケットは飽かれ易い。

S生拜

三度女より

美代さん
もう學校が初まるのね、また白堊の塵に埋まれる積り？　牧野さんの方は如何しました？
どうも身體の具合が惡くて好きな小豆餅ものどに通らない。今度來て下さる時はあまくないものをお土産に持つて來てね、床の中で書いたから讀みにくいでせうけれど。
蓮見は人一倍心配して世話をしてくれますよ。きのふから乳母やがきたので、臺所の方は心配なし。

ふみより

四度男より

堤君足下
此の十日ばかりおふみが寢てゐる、病氣は時候のかはり目にあてられたのもひとつだが、今一とつはとにかくうれしい聲が日ならず僕の耳に入ることゝ思ふ。
たとへば平らなる海に土用波が立つたといふ格だ。
から此の間廊托する所でなくおさんどん代理店の臨時開業だ。しかし「靜」の不安にあらむよりは、たしかに「動」の無辜にあるをよろこぶ。

S生拜

四度女より

美代さん
はやく十日が來ればよいとおもふのよ。牧野さんも

よく捌けてわれ〳〵を御招待下すつたのね。良人のなんか氣が小さいから、席上で仇うちでもされやしないかなんて馬鹿を云つて居るのですよ。

お蔭でわたしもすつかり氣もちよくなりました安心して下さい。

每日蓮見とお祝ひの相談、好きな物あげてよろこぶ美いさんでないから非常な苦心なの一生に一度のおどかし仕舞に意表に出ますよ何だか此の頃の胸の中、出來るかぎりの大口をあいて、臟腑の出るほど笑ふて見度い。

ふみより

解決

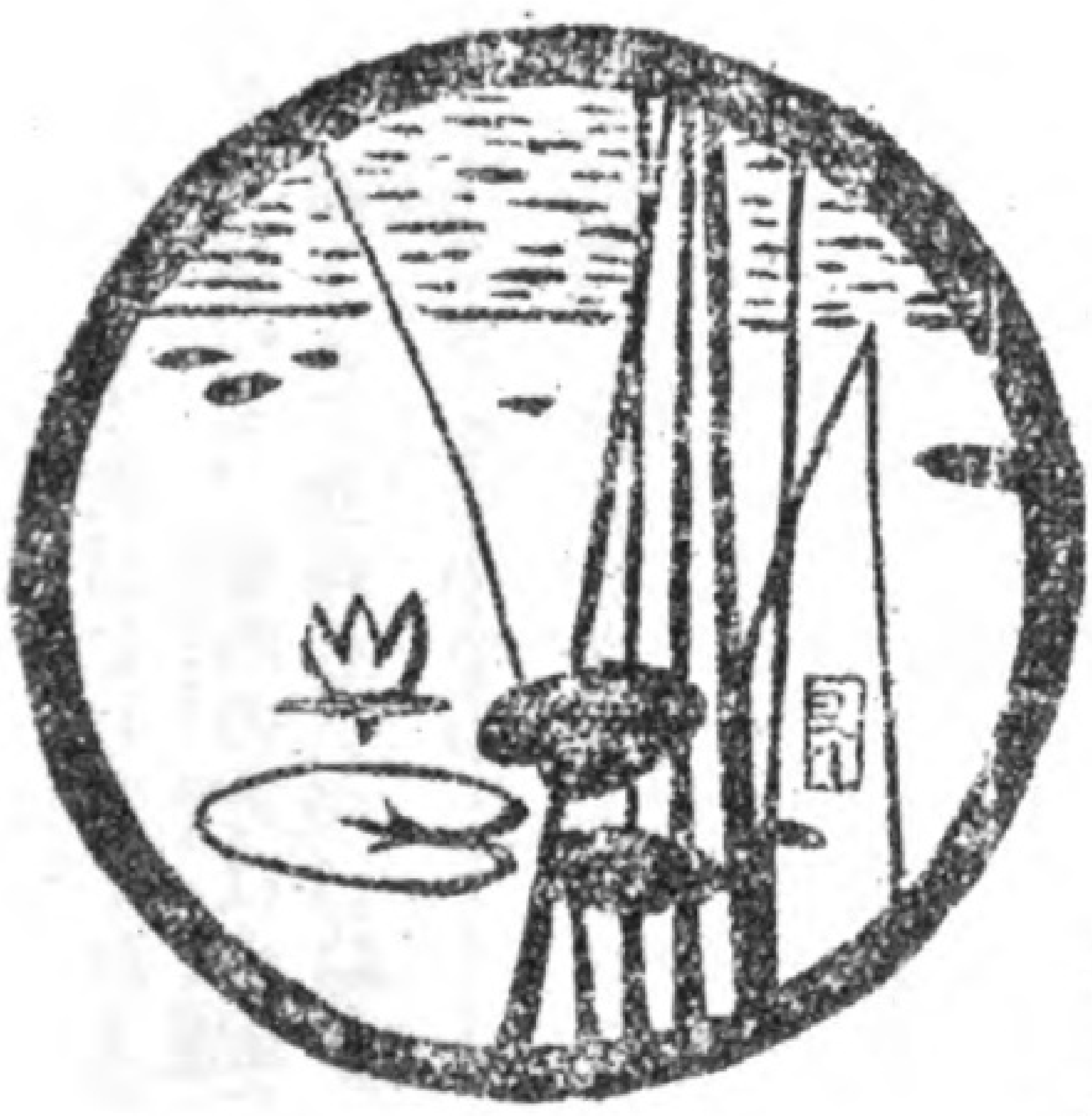
堤君足下

長々下らぬ事實を打ち明けたが近來漸々僕が一解決をつけ得たことを擧手してくれ給へ。

新世帶に倦怠を生じて欠伸をしたる無經驗無鐵砲の若き人間は、こゝに少なからぬ損失をして始めて人生の幾分を味はふた、しかし此の損失はむしろ、大いなる物を求むる利得の一階段であつたとおもふ。これに依つて僕は、僕が今迄此の世に於ける位置の餘りに靜餘りに平凡であつたことを見出し得た。倦怠の報酬は努力の彼岸を敎へてくれた。

來らんとする四十二年よりは今一人家族が殖えるのである、これが、兩極端の調和者たり靜に安んずるうつけものゝ覺醒者たり得るものと信ずる。今夕牧野の結婚式におふみと行く。その節、君に久々で握手する。

S生拜





田園生活

芙蓉

武藏野は未だ一面に何處となく新綠の色を失はぬ頃の夏の月夜でした。然も滿月で、空には纖塵もない眞の夏夜……。圖らずも斯ういふ夏夜に不如歸の作者蘆花さんの宅を訪れたのです。

午后五時頃から出る駄馬車に雨後の凸凹な田舍道ー―甲州街道――を揺られ〳〵て二時間程、上高井戸といふ處で下り立つた頃は最う夕暮。其處らの、藁葺の田舍旅館に頼んで夕飯を濟まし、さて志す千歳村字粕谷の小ヤスヤナポーヤナへと、高い竹藪の茂つた農家と農家との間に小徑を曲つて、通り拔けて、愈々田圃路に出て見ると、おゝ

滿圓な――纖靄のひずみも曇りもない月が、和らかな黃金の色に東の森の上に懸つてゐます。ほかりと空中に擁出されてふわつと其儘留つて靜止したものゝやうに、いかにも平安な、溫和い姿。

四邊は未だ眞正には暮れ終らないので、一面の武藏野に夕靄も罩はず、黃昏の餘んの光で月光が强くない。それに風もなくて實に平和な夕です。

見渡す田圃には百姓夫婦のまだ草取に勤しむ姿。――手甲、脚絆に菅笠といふ扮裝のが彼方にも。此方にも……
……。

高い梢から急に鈴を振落すやうな蜩の聲。

かくて田圃路の長さも忘れて何時か蘆花氏のお宅近く辿り着いた頃は、最う夕靄が餘程立迷ひ初めてゐました。

◎夫妻の野良姿

田圃路は東西南北縱橫に付いてゐますので、同じ路を通つても何時か違つた路を辿つてゐて、是で三度目の今日も又しても違つた路で、今日はお宅の後の菜園の方から入る事になりました。

と氣付いたのは淡き夕靄を隔てゝ蘆花夫妻の野良姿が見えたからです。身長高い蘆花さんは例の白の上衣に黑のヅボンの古洋服を着て、頻りに鍬を使つて居られる。夫人は前掛を掛けて襷をして手甲を嵌めて鎌を手にして、瓜畑か何かの草を取つて居られます。それが屋後の防風林を隔てゝ歴然見えて來た頃には、彼方でも氣附いて鍬を留めて居られるので、急ぎ樹の間を潜つて園へ入ると、「ヤア久濶」と蘆花さんの隔てない溫かな調子。夫人は嫋やかな笑顔で御挨拶になる。



主人は鎌を、夫人は笊を――胡瓜の入つた――とを持つて台所口の方へ行かれる。昨日の雷雨の此邊は殊に激しかつた事などを伺ひながら跟いて行くと、裏口で主人が振返られて「此處に泰山木の花が咲いてをりますよ」と指さゝれる。見上げると眞白な、大きい、裕如として然も氣品の高い花が一輪今を盛りでした。

◎淋しき孤屋

蘆花さんは跣足のまゝで、今度は屋前の菜園へ頻に水を興つて居られる。夫人がバケツで白水を運んで來られます。私もお手傳ひして一バケツ提げて來る。

南瓜や西瓜へ水を興りながら農作の話景色の話などして、「此處も却々風流でせう」と蘆花さんが言はれます。月の光に四邊を見廻すと蕭然たる藁屋でも初度の時の六疊二間きりとは違つて、今は浴室か納屋か渡病棟の新築も出來、初めから有るオルガンの外に本箱、机、椅子なども大分整頓してゐます。その勝手山から洩れる火光も人の懐かしいやうな燈き、庭と菜園との間には四ツ目垣を結つて、其の菜園も屋前のと屋後のとで稍々廣やかに、そして實は今ば花園になつてゐる。いろ〳〵の草花がとりどりの色香に匂ふ。

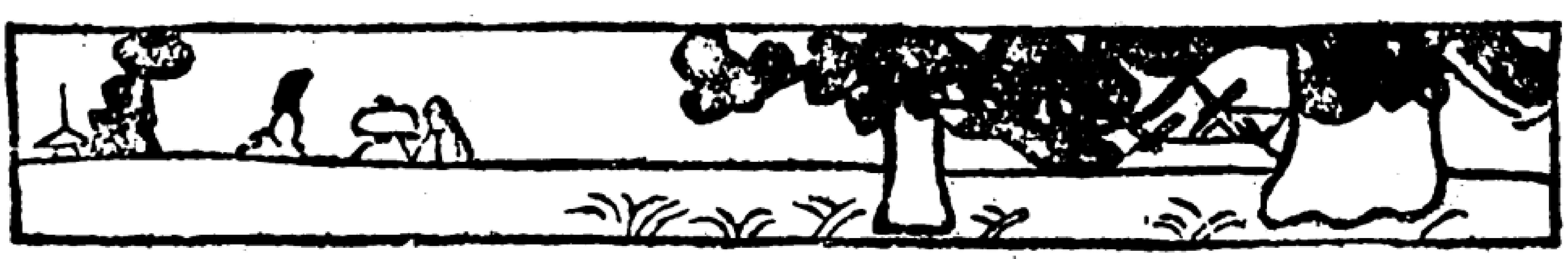
やがて「貴方御飯は」と問はれる。「最う済んで參りました」。「眞正でございますか……では一寸失禮致します。どうか其れへお掛け遊ばして」と夫人が静やかに會釋して一同食卓に就かれた樣子。お澄さんといふ、中年の婦人が東京から遊びに來て被在いました。食前の祈禱は何方かお聲が低くて分りませんでした。

庭へ入つて縁臺の邊りをぶらつく。庭の彼方は菜園を隔てゝ萬頃の青田で、たら〳〵と淺く廣い路になつてゐる。今は霧が最う低くそれを立ち罩めて、霧の底からは一面の蛙の聲、稍近き流の音。其處らには地蟲の啼く音。仰げば月はいよ〳〵澄み上つて、今は白銀の光が徐々と霧へ延びて來る。霧の上面が光を受けて仄と白々と見える。

森の彼方にガラ〳〵と車の音。草を山と積んだ農車の歸り後れたものであらう。續いて起る農夫の唄――。見るもの聞くものに言はれぬ穏和かな氣が充ち滿ちてゐる。

◎縁臺の上に四人

「失禮しました」と蘆花さんが出て來られました。集る蚊を。パタ〳〵と拂ひながら、縁臺に腰掛けてお話して



ゐますと、やがて夫人もお澄さんも出て來られて、ブランケツトを緣臺へ布いて一同四人其の上へ坐りました。「今夜は眞正に佳い月ですねえ」と夫人が又も月を仰がれると、「エー、愈々佳くなつて來ますよ」と董花さんが言はれます。お澄さんは氣爽によく辯ぜられる方です。「もう直きにお盆といふのが來るのですね。草市だとか、お精靈様の棚を飾るとか、お迎へ火だとか、いろ〳〵な事がありますね。私なんか如彼いふ手續は一向最う分らないのですよ……」。

それから宗敎の話、迷信の話と枝がさいた末、「此の邊は寂しいでせうねえ、冬や秋は殊に……。隨分怕い位でせうねえ」と其の婦人が言はれます。

何處からか若者の弄ぶ笛の音が聽えて來る。星が一つ流れた。

「夏の、今夜のやうな晩は賑やかですが、そりや秋から冬へかけては、隨分寂しい夜がございますよ。それに雨の蕭々降る晩などは眞正に寂しうございます。殊に一人でゐる時—其麼時などは最う早くから戸締りをして了ひ又格別過ちも起りませんが、それでも寂しくて怕いやうでした。先般など良人が逗子の兩親の處へ遊びに參つて、そして長逗留をされたには閉口致しましたよ」。董う言つて夫人が董花さんの顏を一寸見る。董花さんは笑つて居られる。

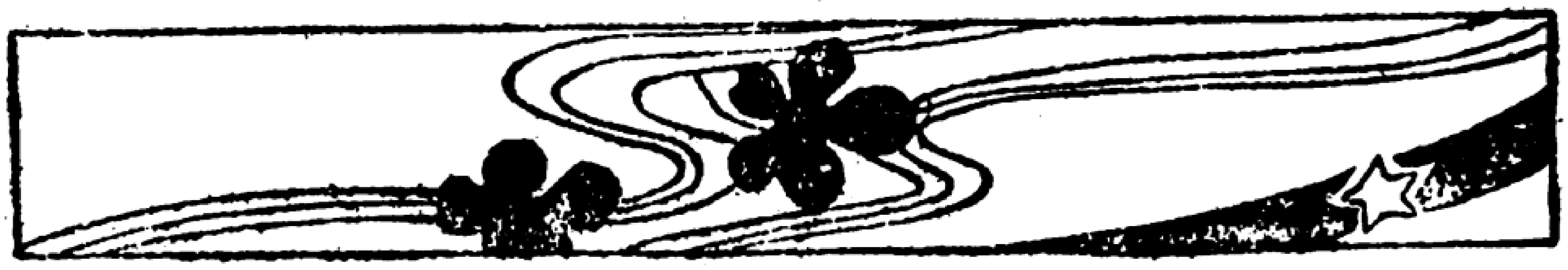
「過時は遊びに來た書生さんに數日の留守を賴んで、二人で東京へ出掛けた事がございます。すると餘り寂しいものですから、二日目か三日目に逃げて行つて了つたのですよ。毎時書生さんに留守を賴むと、私共の歸らない内に逃げて行つて了ふのですよ。それにいぢらしい物ぢやありませんか、これが（と夫人は犬を顧みて）其の書生さんがヒシヤ〳〵戸締りをすると、一生懸命飛び付いて袖を咬へて引張り、何うか歸らずにと願ふらしかつたさうです。犬も寂しいのが辛いのでせう」。

「過時も良人が多摩川の方へ遊んで來ると申してぶらり出たきり、夕方になつても歸つて參りません。心配して居りましたが、まあ戸締りなどして待つて居りますと、夜になつても歸りません。もう心配で堪らない。これは屹と何かの變があつたに違ひないと、靜坐として居られなくなつて、私は提灯を點けて見に參りましたよ……」。

夫人が纎弱い姿を一點の火に照らさせて、田圃路の露踏み分けて迴つた樣を想ひ浮べ、又興に浮かれて飄然として歸つて來る董花さんの樣を想ひ浮べてゐると、

「よくまあ怕いも忘れて出かけましたね」とお澄さんが





感歎した面持で言はれました。

是より先元さんといふ青年が庭口から入つて來て、蘆花さんに「又時計が止りましたが」と懐中時計を見せてゐました。「では最う一度私が預かつて試ませう。何うしても不可つたら、矢張取換へさせなさるが可いでせう」など、時計の世話など焼いて居られる。

日曜毎に蘆花さんは村の人を集めて（基督教の）話をなさるのです。かと思ふと農夫。かと思ふと時計の世話など。かと思ふと又――今夕も見受けた入口の「黒潮社」といふ小さな木札、それが證明する文筆の生涯。あゝ第二の「不如歸」、否、新たなる、より名品の「不如歸」を早く見たいものではある、などゝ思ふ處へ何時か夫人が、パインアップルの罐を持つて來て、切つて、五ツの皿へ盛り分けられました。

「さあ」と勧めらるゝ儘に戴きながら、暫時は元さんが然も蘆花さんに傾いた調子で、「徴兵に行く」話などするを聴いてゐましたが、やがて歸つたので今度は文學談、人物談――

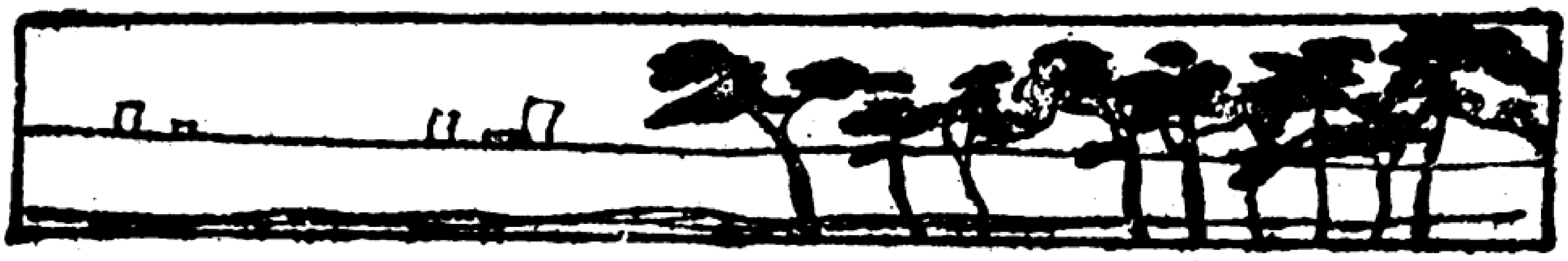
折々は夫人も話の中に入つて合槌を打たれる。お澄さんは菜園へ出たり入つたりしてゐる。不覚語り耽つてゐて思はずも更けた様子。若者の笛も何時か止んで、月も追々中空高くなつて來る。蛙の唄は愈々田の面に降るやうに満ち渡つた。

時計を見ると最う十時。興は盡きないがお暇にしました。すると、これから東京へ歸るのだと聴いてお澄さんが吃驚しました。夫人が「ナニ東京の書生さんが幾干でも被入るのですよ。其麼に十里なんて！お澄さんは大變脅かされて被在るのですよ。三里ですから近くもありませんが、書生さんは歩行て被入いますとも、三四人も連立つて被入る方が澤山ありますよ」。

お別れして門前から直ぐの田圃路を歩き初めました。曲り角で今一度この孤屋を回顧つて見て、さて歩きながら蘆花さんの家庭生活を　清淡、平和、風流、自然の恩寵・宗教的、詩人的など考へながら、何時か田圃路に我が影を踏み盡して高井戸の街道へ出ました。月は明ながら夜半の浮雲が彼方此方に。フト路傍の農家の厩で耕馬がコツ〳〵と床を蹴る音……。







詩中の女性

兒玉花外

河原姫

妾しや淋しき河原姫、
いつか生れし露知らず、
水の鏡の遠くして、
顔も姿もまだ識らぬ、
時行くきけば「河原姫」

見よ蕭條として熱の夢、
小石も砂も灼りつゝ、
雨せば共に濡れぬべし、
たゝずむ花の目の痛し、
魚は沈むか水底に。

あゝ陽を掩へ雲の被衣、
あるかなきかの萱焼けて、
丹き唇紅乾く、
むこの岸なる川柳、
緑の長き髪潤む。

水は流れて限りなく、
草は哀しき根の運命、
鶺鴒背は黄、赤蜻蛉、
日暮れてどこの巣に還る、
せゝらぎ涼し笛吹いて。

薄羅匂ふ裾の風、
橋な下りて緋鼻緒の、
やさしき人の寄りもせば、
花は涙にほゝゑみて、
さらば語らふ「撫子」と。

雪の袂

庭の朝顔露帶びて、
花も泣くのか女どし、
離しき仲をはなれたる、
縁には雪の袂かな、
小額見えず、前髪の。
夕の星のみゆる時、





儂の天地に鈴蟲が、
たゞ悲しうとすゞを振る、
門に秋風吹く頃に、
かの巡禮は詠ふらむ。

内と外

門の大榎に蟬鳴ける、
町の曲りの高格子、
建てるは小き機屋かな、
終日絶えぬ細き歌、
今宵も明く燈火射す。

むたみに面は見知られど、
中には響く筬の音、
外を通ひし靴の響み、
絹蝙蝠の影みえず、
夏の休暇に母の膝。

蟲ばかり

氷の素足・裾赤ら、
冬の夕陽に遲々たりや、

女、肌に纏く海松布、
色は浮世の波に染め、
風の亂しゝ髮の、
小指にあぐろもさだまらず。

塵の海底、巖にまた、
心し千々に碎きけめ、
浪なかつぎて魚の侶
蜑女ぞ双手に眞珠握る、
ああ、神見ませ三十女の、
獲たるはからき潮にかり。







令孃紀行

吾亦紅

大月より吉田まで

大月より吉田迄五里の路を馬車に乘る。

一臺の車に十四人、一行は私共姉妹、外に監督者として叔父さんと今一人、都合四人、ギッシリ身動きも出來ないやうに乘られる、と云ふよりは寧ろ詰め込められた方だ、夫れを一頭の疲せ馬が牽いて行かうと云ふのだから、幾程レールが敷いて有るからと云つても却々骨の折れる仕事だと先づ以て馬に同情を寄せる。

切符を買つて漸との事で馬車に乘り込んだ迄は好かつたが、ヤレまだ人數が足りないの、病馬が出來たのつてイサクサが堪へないので却々發車迄には間が有りさうだ、太陽がカン〳〵照り返つて汗がにじみ出る、私は堪らないから扇子を拔いてハタ〳〵と襟元に風を送つて居ると、漸く馭者が馬を曳いて來た、耳だけ出した妙な小さな笠を被つた、鞭の跡の顆々とついた見るから痛ましい馬が懶うさうにのそり〳〵と曳かれて來る。

「此車ア十三しか入つてないせ、最う一人詰めろ」と背後で出し拔けに大きな聲がするから吃驚して振り返つて見ると腕捲くりして髯だらけの大男が人の頭を荷物か何かのやうに、指先で遠慮も無しに一二と數へてゐる、是れは世話人らしい。

「オイもう出すぞ」

「まだ〳〵」

「馬が揃はねえんだとよ」と前の馭者と後の馭者との話聲だ、すると一人白い着物を着た登山するらしい老人が息せき切つて私達の方の馬車に驅け込んで來た、

まだ乘せるのかと誰だか小さな聲で云つた者がある、後の方から乘らうとすると、

『前へお廻りよ、此方は一ぱいで乘れないからね』と云はれて又慌てゝ前の方へ廻ると。

『オット此方も駄目だよ』と云ふ、老人困つて迂路迂路して居るといづれも銘々の占領地を侵食されまいと一生懸命に頑張つて居るのは、これも、やはり生存競爭の縮圖の一つであらう。どうも甚だ同情心のない事だと思つたがこの塲合どうも仕方がない。



『さつさと乘らないんなら出しつちまへ、何愚圖々々してるんだ』と、流石に終ひだけは小聲に先刻の世話人らしいのが八の字を寄せて云ふ、老人は急いで前の方から乘つて背延びしながら後の馬車を見遣つて。

『オイ子供はどうした、伜は乘つてるか』と一生懸命に聲を張り上げる。

『此處に居るよお父さん』と一つ置いて後の車の中で是れも背延びして此方を見て居る、十三四ばかりの男の子である。

『大丈夫だ大丈夫だ』と云ふ聲に安心したらしく老人も隅の方に腰を下す。親子の愛は流石である。

馭者は却々氣どつてゐる、お粗末ながら洋服だが暑いのでチヨツキばかりになつて居る。

イザと云はゞ一稼當ようと云ふ身の構へ、御當人達

は餘程ハイカラの積らしい、中にはニッケルの時計の鎖を巻き付けて居るのも有るし、洋銀の指輪を小指にはめて居るのも有る、恐しいダブ／＼の長靴を穿いて居るのは私達の方の馭者である。

私は退屈であつたから車中を見廻すと何れも富士登山の人ばかりのやうで、何となく貌に喜びの色が溢れて居る。丁度私の左隣に腰掛けてるのは指の太い首の短かいツンテルの夏服を着て居る、先づ中學の先生といつたやうな方、どうやら腦を激しく使ふ人と見えて、何しろ大變な若白髪だ、其隣に洋傘の握に兩手を重ねて少し前屈みになつてゐる卅五六位の商人風の男、氣のきいた身なりから持物等の樣子から見ると下町邊の相當の商家の主人とでも云ひたいやうだ、向ひ合ひに腰を掛けてる五六人連れの學生是れは高等學校の生徒らしかつた。

やがて七臺の馬車の用意が出來て、眞先の私達の車が馬に一鞭當てるとガラ／＼と動き出す、後の車を見ると一間ばかり隔たつては續いて來る、大抵は白い着物を着た人ばかりであつた。

氣の故か動き出すと大きに涼しいやうな心持がする、繭を煮て居る薄暗い軒や、糸を取つて居る若い女の家の前を通ると、向ふ側に筬の音がする機を織つて居るのだらうと思つて見ると、赤い襷を掛けた卅ばかりの女が織つてゐる、藍色の糸が美しく張つて有る、織れた處は格子縞だつた人に聞いたら名產の甲斐絹だと云ふ、白の綸甲斐絹を織つてる家も有つた、奇麗な物だと見ながら過ぎる、此若い人達が織つて而して着るものは都の人だと思ふと云はれぬ哀れな感じがする、併し何事でも然うだ美しい白米を穫る百姓は黑い玄米を食するといふ。

ガタ馬車が一臺追ひ越して行く、乘つてる人は珠數で襷あやどつてるのも有るし、腰に鈴を下げて居るのやら、中には後鉢卷の勇しいのも有る、無論登山する人だ、萬歲といふ聲がする、それから三人五人一組になつて吉田まで徒步で行く足の達者な人も見える、樂い者だと思ふ、これは丁度六月から同じ時刻に出た四

人達の書生であつた、一人は長髪で根を元結でギリギリと巻いて居る、背格好から髪の工合まで團右衛門に酷似だと私が云ふと妹は豈夫可哀想にと云ふ、髪を長くして居るだけに目に立つ、馬車が遲いから其人達は後になり先になりして行く。

私は始めて此様妙な馬車に乗つたのだから見るもの聞くもの珍らしいで逸ひキロ〳〵する、蛇度土地の人が見たら田舎者だなと心に思つたかも知れない。

馭者がラッパを吹く、全然豆腐屋のやうだ、暫時するど向から二臺の馬車が來た、只つた一筋しかないレールで斯う兩方から往合つたら一體如何なるんだらうと思つてゐると、馭者はドウ〳〵と云ひながら手綱をぐい〳〵引張つて車を止めて仕舞ふ。

然うするとまた少時の間はガヤガヤ何を云ふのだかよくは分らないけれども、一時やかましくなると、馭者はひらりと飛び降りてガヤ〳〵の仲間入りをしてお客を置去りにされて仕舞ふ、よく幼さい時分餘り大きな聲で物を云ふと馬子のやうだと云つては笑はれたが今思ふと全く馬子



といふものは一種特別な妙な聲を出すものだ。

「さア乘りかへです」と馭者が歸つて來て云ふ。

「オイどれへ乘り換るんだ」と人々はいふ。

「向ふの先のへ」と馭者は指さしで敎へて呉れる、私は洋傘を杖きながら降りて皆の行く方へついて行く。

「此處へ乘つちやア不可ませんよ」と一番先の車に一足乘りかけた商人風の男は後へ戻されて仕舞ふ。

「何故だい」と早口に云ふ。

「どうしたんだ」

「こんな處に立往生させられちやアやりきれないぜ」

「ガン／＼すらア」

「腦が惡くなるぜ」と是れは高等學校の生徒らしいのが云ふ。

漸つとの事で二番目の馬車に乘せられた、立往生よりはまだ益しだとは思つたけれども、是れも止まつて居られちやア却々暑い、すると自分達の馬車の直ぐ傍を通つて一番先のへ乘込んだ一組がある、僅か人數は六七人しか見えないで氣樂さうに乘つてゐる、夫れに引換へて此方はギユウ／＼鮨詰めの苦しい思ひをさせられてゐるのは妙な譯だと思ひながら、其人達の方を氣を付けて見ると、オヤ／＼と思つた、眞白な洋裝をした婦人、年の頃はどう見ても廿七八位の處だらう、丁度此方を向ひて坐つた、細面の白粉をこつてりとつけた、如何にも洋裝には不釣合の貌だ、夫れに一つは着こなしの故も有るだらうが十五六年前によく繪なんかで見た日本人が洋服を着た、丁度あれを思ひ出させるといふ風だ、それと並んでハイカラな色の白い肥つた男、荒い縦縞の洋服に恐しいもみ切りだつた、連れの人は皆妙に色の靑白い者ばかり、七臺の馬車の中で異彩を放つて居る、屈んで向ひ合ひの洋裝美人に何か話かけてゐるのは四十ばかりの色眼鏡を掛けた、是れも垢拔のしたまア一寸見た處は待合の女將か藝者やのお母さん位な處だらうと思つた、車中の目は悉く前の馬車の中に集つてゐる。

夫れにしてもまだ分らないのは洋裝の婦人である、一體何者だらう、貴婦人とは無論見えず、夫れかとい

つて横濱邉りのかとも思つたが夫れにしては連れの人達の様子が不思議だと思ふからこつそりと妹に、何者だらうとさゝやくと、
「分らなくつて？」と妹はくす〳〵笑ひながら、
「ありや、ほら何んでせう？　ね？」
と低聲で云ふ、あゝ分つた歌舞伎の若手俳優の中でも評判の好いのと其妻君、つい此間まで新橋で左褄を取つてゐたあゝあれかと思ふと、先は知らずとも何んだか貌なじみなやうな氣がする、よく雜誌やなんかに元祿姿の仇なので口繪を賑はした女だ。
　成程夫れてこそ讀めたと思ふと妹は私の袖を引いて。
『ちよいとあの子が此方を向いたら見て御覽なさい』
と云ふ、夫れは十四五ばかりの男の子だのに伊勢崎銘仙の荒い飛白の袖の長い着物に、博多の角帶を結んでゐる、色の白いのは眉を落してゐるのや、白足袋を穿いてる様子やどう見てもいよ〳〵違ひなしだ。



　五里の路と云へば短かいやうだけれども、却々長くつて乘り草臥れて仕舞ふ、幾程行つても、まだ二里だとか、あと三里半あるとか云ふので最う飽き〳〵する、と彼方でも此方でも欠伸の聲がする。
『長いなア』と隅の方で又欠伸交りの聲。
『一體最う何里位あるんだね』
『然うですな、あとざアと三里』と馭者は譯も無く云ふ。
『えつ？』と商人風の男は眼の玉が飛び出る程吃驚して。
『まだ三里？　え？　馭者さん串談ちや無いせ先刻から幾度訊いても三里々々つて』

「田舍の一里は、東京の五里位も有るぜ」

「一體此處の人達は嘘を云ふのが誠に上手で誰れに訊いても嘘ばつかり云つてやがる」と少し中腹で云ふ。

「お前さん何處からお出でなすつたね」と皺くちやな紺帷布を着たお婆さんが訊く、小さな丸髷の付髷の上に埃が眞白にたかつて居る。

「濟町さ」

「え何ですつて？」

「何有に江戸だよお婆さん」

「江戸の眞中だよ」

「然うかね、遠い處からお來でなすつた、矢張お山へお登んなさるんさ、お婆さん一體何處の人だね」

「私はつい此の谷村の者ですがな、まア今日は降なんで好えが昨日は大降りだつたに」

抔と話合つてゐると又しても馬車が止まる、奈したのかと窓から首出して見ると此度は馬を換るのだらうだ、成程馬だつても然う／＼はつゞく者でも有るまいと思ふ。

奇麗な水の流れが有るので皆降りて顏を洗ふ者、手を拭ふもの、皆ホッと一息吐いた、水の近い故か風がそよ／＼と冷たく頰を撫でる、好い氣持で眠くなるやうだ、前の車では例のハイカラと其細君とは並んで何かしきりに喋舌りながら歩いてゐる、丁度休憩時間を散歩といふ格好だ、恰も眼中に人なしといふ婦人の樣子も誠に結構な事ながら、此人いやしくも和歌でも作らふといふ心懸の好い女だから、常に斯ういふ風に尊大に氣取つて構へてばかり居て呉れたなら、多少はその高尙と迄は行かずとも、自ら品位は備りさうなものだけれども、什麼に借りきりの馬車の中とは云へ大口開いて袋の中から出したお菓子を食べるやら喋舌り散すやら切角の洋裝も氣取つてるのも臺なしになつて仕舞つて、行き違がひの人にまでツンと鼻の先で笑はれる、斯うなつてはハイカラにする甲斐が無い、一層の事なまなか素人臭い眞似なんかせずと、拔襟でつぶし島田にでもする方が好い。

馬車の都合で巳むなく俳優の一行が後れた、すると

レールの二筋になつて居る處まで來ると六臺の車は停められて仕舞つて、例の馬車がずうと追ひ越して眞先に進むまで待たせられる。

『奴等此樣時でなくつちやア頭ア上げられないと思つて威張つてやがる』

『黃金の勢力を持つてやるんだつて勝手な眞似をするが好いや』

と度の強い近眼鏡を掛けた高等學校の生徒が忌々しさうに云ふ。

『然うだ奴等なんかには黃金より尊いものは無いんだ』

『借りつて大きな札でも下げとけ』

『貌附からして癡痴氣だ』

『歸つてから借金取りに苦しめられないやうにするが好い』



『五厘やるからパッハと使へなんて馭者を侮辱するんだらう』

『何有に奴等何だよ、此奴を與るから先の馬車追越しちまへなんて二錢玉の一つも投り出して江戸つ子の氣前を見せてやるんだらう』

『馬！　早く行け、シッシッ〳〵』と口々に云ふ

豈夫其爲でも有るまいが馬が二足三足歩きかけると。

『豪いぞ、馬も敵愾心を起してる』

『しつかりやれ』

其内に馭者が來た、またガラ〳〵と動き出す先刻の歩いて行く四人連れの雲右衞門に似た人は最うずつと遠方へ行つてゐる、是れぢやア徒歩の方が早く着くかも知れない、と思つて居ると同じ思ひの人も有るもの

と見えて。
俳優が先へ行くのはまだ我慢も出來るけれど、歩いてく奴に追ひ越されるなァ癪に觸るね』と云ふ。
『併し僕等は迚も駄目だよ、幾程遲くなつたつて馬車でなくつちやァ、此樣路歩けやしないからね』
『よつぽど達者な足だなァ』
『舶來だらう、和製にやァないや』
『兎に角恐しい足だよ、馬より早いつて云ふのァ事實だからなァ』と愚にも附かぬ事を云つてゐる、兎に角高等學校時代が一番元氣が好くつて見て居ても氣持が好い、尤も得意な時代なんだ。
あと十五町だの十町だのと云ひ出してから一里も有るかと思ふ程長かつた、馬も五六度換つて漸く日が西へ傾いて風が冷たく、何んだか時候が急に變つたやうな氣がした、富士の裾へ來たから此樣に涼しくなつたのだと誰れだかゞ云つてゐた、例の妻君は洋服の上からすつぽりと鼠地の縞の有る膝掛にくるまつて寒さうな貌を出して居る。
丁度五時過ぎに漸つとの事吉田といふのに着いた、最う立てない程すつかり草臥れて仕舞つてゐる、是れから又車が無いといふから一里餘りの山路を歩かなければならない。
馬車から降りた人は大抵茶店に入る、此茶店の光景は一種特別な趣きがある、皆草鞋のまゝで上るのだ疊が五六疊程も裏返して置いてある、是れから登山するといふのだから、其元氣つたら無い、獨りで景氣づいて唄をうたつてる人も有るし、謠曲をうなつてる人もある、彼樣勢の好い風をしてながらお山へ行きやァもう眞青になるんだ、等と惡口を云つてる人もあつた、涼しいけれども息つきに氷をのんで茶店を出た。
（以下お環の初旅につゞく）



料理と經濟

此頃は何でも經濟といふ事が重く見られて來まして物を敎へ、覺えるのでも第一時間の經濟といふて早く習ひ終らうとするので、昔のやうに年中お稽ひなしで覺え込むといふ事は頓とありません。經濟といふものが最少勞力と最少の費用と時間を以て最大の效果を見るものであるとすれば、現今は家庭に於ける料理は何處までも經濟的にやりたい、といふ考が湧いて參ります。つまり仕出し屋に申しつけては高價く付く物を、早く甘く、安上りに家で間に合はせるのがよいので、家庭料理に經濟といふ物は始終聯絡して、目に見えぬ處まで上手に繰廻して行かればなりません。ですから料理を習つて居る者が、もし父兄から家の經は料理を習ふやうになつてから物計り使つて、御飯一つ焚ない、お芋一つ煮ないと言はれる樣な事が有てはならぬと云ので、料理法を敎へる時いつも無駄のたぬ樣、料理法を習つてから以來賄方の費用が係らなくなつたと言はれる樣でなくてはならぬと申して居ます。料理を習つて家事經濟を豐にする計りでなく、料理法を習ふ夫れにも器用な覺えかたをして應用を利かす樣にしなければなりませぬ。例へば甘口の物を習つて辛口の拵へ方を考へて置くといふ樣にして行く事で、序だから申しますが、料理は初學の內に甘口を習つてはいけませぬ口取や何かの前から拵へて置ける物は急場の入用がありませぬ。家庭に主婦となつた以上は主人の處への來客に一寸一杯お香の物でも、酢の物でも、付けて出せる位にするには、初めつから甘口ばかり習つたのではいけない、主婦の治庖上の務めとしてまだ一つ缺くべからざる者があります。それは齒の惡い老人に喰べられる物を拵へる事で、お酒のみ肴や老人の口に合ふ物は家々の臺所によつて違ひますが、まあ其位氣が利いて居れば甘口の方ばかりを習つてもよいでせう。奇麗にお甘く拵へるにはどうしても無駄が立つといふ程でなくても、少なくも圓い物を四角に切つたまはりとか大根を短册に打つた屑位は出ますから、其無駄を上手に使つて行くのは仲々面白い物で、例へは松魚節をかいて煮出しを取つたら、其だしの水氣を取つて、カラを毎日貯めて置いて、焙六で煎つて取つて置く。擂鉢を使ふ序に一寸それを當つて味醂と醬油で煮て置けば結構なでんぶが出來ますから、一寸お箸休めにもならうといふもの、生で皮をむかずに、慈姑をうで。皮と、芽とを煮て置いて喰べてもよし、秋刀魚の骨や鯛のの骨を洗つて出しに使つて、野菜を煮ると甘味く頂けるといふもので、是れ杯は前に言つた目に見えない方の經濟的手腕の一つでございませう。鹽引類などは殊に脊の使へる物でございます。總して昔しは長い時間を掛けて手のかゝつた物をよいとしたのですが、今は時間と品物を少し使つて一寸喰べられる物が一般の家庭へは歡迎されますから、私は今申す方針で敎へて居るのでございます。(龜井女史談片)



家庭談叢

白梅

▲重寶なる讀書會

今日は名ある都市又は學校等には大抵圖書館が設けられてある。讀者の中には之に依つて多大の利益を受けて居らるゝ方もあらう。が、是れは帶出するのに保證金が要り、さもなくば一定の時間に一定の場所へ行かなければならぬから甚だ臆劫な話である。玆に云ふのは讀書會と言つて、之れはさう云ふめんどうが無い數年前米國に初めて出來たのであるが、圖書館を臆劫がる人や其の設けなき地方の人が之を設けたら、大層便利かと思ふ。今其の會の規則を見ると恁う云ふ事を書いてある。

一會費は一ヶ年金五十錢とす。
一讀書費は一冊一週間金拾錢とし之を前納すべし。
一貸出は代金一弗五十仙以下の書籍に限る。
一貸出三週間以上に渉る時は、其書の代金を仕拂ふべし。
一貸出したる書籍に落丁又は破損ある時は全代金を辨償せしむ。
一會員は德義を以て書籍を借覽す可し、若し背く者は除名すべし。
一自己の借受たる書籍を他人に轉貸す可からず。

斯る規則の下に、會員には書籍の受渡を一々記入する通帳を交附し其藏書は每冊上覆をして會の名を明記し裏表紙には廣告を掲げ、內側には其の會則を記してある、そして此會は三百人を定員として居るが、日々申込があるので、何時も滿員だと云ふ事だ。

▲人の名とものゝ名

我國では上古未開の頃は、平郡鮪、蘇我赤魚、大伴鯨、凡黑鯛、河原堅魚、とか或は大鷦鷯、平郡木菟

巨勢猿、佐伯伊太智、阿曇樊虫など、魚や鳥獣の名を、其儘人の名にしたもので、其外に仁賢天皇が大脚と呼ばれ給ひしなど、色々珍らしい例があるが、彼の漢文の輸入以來我が文明は非常な影響を蒙つて、我閉阿彌陀、衣縫孔子、文釋迦、大宅朝臣君子、縣犬養老子、長谷部文選など云ふ風に崇敬す可き人の名とか書籍の名とかを用ゐて、多少道義を解し道義を喜ぶ様になつて來た。

或は地名を名としたものが少くはない、古くは蘇我入鹿の父なる蝦夷、近くは福原越後勝安房などが夫れである、地名を人名にする事は明治初年に禁止されたが、夫れでもまだ男には仙波兵庫、婦人には須磨子など色々ある。平安朝には伊勢、相模、或は和泉式部周防内侍、ぶし柴の加賀沖の石の讃岐、などゝ云ふのである、之れは父兄や夫の官名などから取つたもので、今の何子と云ふ様な通稱は別にあつたものらしい

茲に面白いのは國學者本居宣長翁の子女で、皆日本の國名をその名として居る、先づ長女が飛彈子、末女が能登子、その中の娘が美濃子、とは實に奇拔である。又翁の實弟の娘に壹岐子と云ふのがあるし、その又娘が伊豆子と云ふ、これらは皆翁自身の命名だから、何か理屈あるであらう。

あし手もやう



濃お納戸絞りぞめ

▲官營の湯屋

煙草だ、鹽だと、日本にも追々官營のものが多くなつたが、未だ湯屋の官業は見られない、けれ共外國で

はさうでない。

露國には村立の共同入浴場がある。又英國では、市立のものがある。これは前世紀の頃に、倫敦に初めて出來たので、その後追々數を增して、今日では倫敦丈でも三十箇所位はある。其他大抵の都會に出來てゐる、又獨逸を見ると、五十五ヶ所の都會中四十ヶ所迄は皆此の風の浴場がある。巴里、維納などにも無論ある、市立と言つても多少の入浴料を取つて居るが、米國丈けは之を取らぬ。

▲接吻の由來

米國のホブソン將軍は曾て旅行をした時に、一萬人の婦人に接吻されたと云ふ、又維納の一閨秀音樂家は或慈善音樂會で、壇に登つて樂器を手にする前に、一回十弗を以て接吻を許したら、聽衆は爭ふてその周圍を圍んだので、結果巨額の金が會の收入になつたと云ふ。

接吻は日本では何だか可笑しい意味に解釋られてゐるが、西洋では深き愛を表はす唯一の方法として何とも思はず行はれて居る、その由來に就て、米國の博士ロンブロッーの說明を見ると、これは古代未開の代に於て我々の生活の必要上から起つたものであるといふそれは烏に反哺の孝ありなど云ふ哺の字に當るからの事で、未だ充分に器物のない時分に、母が子を養ふに何でも口移しにした、それが漸次に變化して今の樣なものになつたのであらうと云ふ。

▲公設の質店

歐洲大陸の諸國へ行くと、市で管理して居る質店があることは數百年前からあつたものだが、前世紀以來益々其數を增して來た。盛なのは白耳義、和蘭、獨逸佛蘭西等で、目的は勿論貧民に對して金子を融通するにある。白耳義には此の融通機關のある都會が十七ヶ所もあつて、市會で其管理者を定め、其資本は市か或は慈善團體から供給して居る。

何時の年かの調べに、白耳義で此處から、金を借りた者は殆ど百萬人、其總高は五百萬圓ばかりで、其の中二圓以下の者が大半を占めて、二十圓以上を借りた

者が僅かに百分の四に過ぎなかつたと云ふ、其利率は最低五朱から最高一割六分位である、和蘭には同樣の設備のある都會は二十五ヶ所あつて、同じ年の調べに貸附總額は白耳義と略ぼ同じであるが、平均した一人の貸附金額は白耳義よりもずつと少ない。

獨逸にも斯う云ふ設備が澤山にある。佛蘭西には此の設備が四十四ヶ所あつて、何れも管理者の外に、顧問委員が數名ある、此等の人々を任命するのは縣知事で、其の三分の一は市會議員から、他の三分の一は慈善團體から、其他は何處から採ると云ふ樣になつてゐる。尤も首府の巴里丈は格別で、以上の任命を内務大臣が自らしてゐる、資本の大部分は寄附金で成り、別に國庫と地方團體から幾らかの補助がある。そして其貸金は時には利子を附けないことがある。

○東京女子音樂傳習所の新學期　九月一日より新學期を開始し音樂の素養なきものも入學を許可すと云ふ 同校は主として小學校教員及び東京音樂學校入學志望者の爲めに 唱歌及びヴアイオリンを教授する由。 麹町區飯田町二丁目



糠味噌を味好く作る法

くりや女

砂のまじらぬ極く新らしき糠一升に、鹽二合の割合に水六七合入れてよくこね、水氣のたまらぬ位の程度にピタ〳〵にこしらへ、其れに唐辛子の粉二合、山椒の實二合をまぜ合せて、入れ物は成丈大きなものがよろしう御座います。一體糠味噌と云ふは大抵一年で捨てゝ仕舞ひ、たとへにも糠味噌臭ひなぞ云ふ樣に、と變な匂ひのするものと大方思つて居られますが、今申す糠味噌は一年で捨てゝ仕舞つてはいけません、十年でも二十年でも乃至百年でも手入れをよく大事にしますと、なまじお魚などの御料理よりおいしい御香之物

が食べられます。甘しく食べるのも不味く食べるのもその人の忠實と不精なのとに依つて糠味噌は遠慮なく變味して仕舞ひます。始め申上た割合にして美しき四斗樽へ仕込みますと、最初一ケ月計りは馴れませぬから、何となく鹽辛く糠臭う御座いますが、半年經ち一年經ちすると古くなればなる程味がよろしくなります今時なら茄子、胡瓜、白瓜、キヤベツの新漬、冬ならば白菜、大根、蕪など、又澤庵の酸くなつたものを底深く漬け込んで、他日、細くこまかに、胡蘿蔔や、胡瓜、茄子の漬け過ぎと(おかくや)にきざんで二三回水で洗つてしぼり上げて、花鰹節かけて食べますとまことにお甘しう御座います。併しこれは水にはなして鹽出しをしては味がぬけて仕舞ひます。この(おかくや)用にする胡瓜、茄子は出盛りに澤山漬け込んでおきます。胡蘿蔔は大抵一年程漬けてきざみます。その他牛蒡、獨活、新しやうがも新漬には一寸おつで御座います。出昆布を漬けてこれも半年程して頂くと云ふに云はれぬ妙味があります。此の糠味噌をこしらへるには漬ける品は勿論、手も美しく洗つて桶も朝夕内外を拭き込んで、糠味噌は美麗にたゝきつけて少しゆるくなつたら、(四斗樽の割合ならば)糠五升に鹽唐辛子、山椒の實をまぜ合せて又お入れなさいまし、そして毎日一回は必ず下からかきまはさねば臭くもなり、味も惡くなります。九州地方ではこうしてこしらへた糠味噌を糠味噌汁とて鰯などを入れて、味噌汁にして食べますが、風味の好いもので御座います。よく人樣に依るとお汁の殘りだの、魚の煮汁などをお入れになりますが、あんな不潔の事をなさるから變な惡臭がしますので、こんな事なさると折角の風味が損じます。古糠でさへ不可ませんのです。兎に角手まめにかきまはして、清潔に水たまりの出來ぬ樣にしなければ不可ません、また澤庵と昆布の外はお漬けなさるときに鹽を撒りかけてお漬けなさいまし。

懸賞 晩餐三品料理

東京割烹女學校　秋穂益實選

第一等　黒鯛（一尾目方八百匁を五人前に作る）

芝區　黒部せい子

一、コロッケー。

先づ鯛の皮、頭骨を取り置き、片身と今一つの片身の二分の一を以てコロッケーを作ります。それには深き鍋に材料の鯛の肉をいれ、水を被る程入れてザット煮立ちたる時、酢と鹽胡椒とを少し入れ、肉のよく煮へし時、おろしおき、別に刻みし玉葱をバタにてよくよくいため、前の鯛の肉もいれ、メリケン粉も加へてかきまぜながらいため、粉の色づきし時スープ又は白湯を加へ、鹽胡椒少量にて味をつけ、牛乳五勺を徐々に加へ、鍋を下し置き、じやがいも二つを鹽うでにしてつぶしたる物と、玉子の黄味一つとをませし物を加へ、鶏卵位の大さにつくり、玉子一つの汁の中にころがし、パン粉をまぶし、熱したるバタ又はヘットにて揚げます。添合せには薩摩芋を小三本位皮をむき、ふかして裏ごしにし、砂糖大匙程と鹽極少しとを加へて、清きふきんにてつまみ、一皿に二つ位つけます。

二、すり立て汁。

鯛の頭及び骨を深き鍋にて、水よりよく煮出してスープの如く爲し置き、コロッケーにせし殘り片身の二分の一を焼きて、すり鉢にてすり、白味噌をも加へてよくすりつゝ前に煮出せしスープを幾度にも加へて味を見、よき程に至らば深鍋にうつして、こげつかぬ様よくかき交せて煮立てゝ下します。椀やくみには、新せうがの梅ずづけ、しそ、めうが、ねぎ、焼のり等を皆きざみて添へて出します。

三、皮なます。

鯛の皮を焼きて小さくきざみ、よくいりし黒胡麻と酢醤油にて味つけしおろし大根にて和へて出します。

評　總て嶄新なる調理法にして、特に廢物を利用してすり立汁、皮なますを作るなど最も巧妙を極む、家庭料理の上乘といふべし。

第一等　豆腐（十丁にて五人前）

新潟　伴きよ子

一、吸物

味をつけた煮汁へ葛を引き、豆腐二丁を切りて入れ、

普通の豆腐汁を作る、豆腐は縦に半分にきり、それを二分程の厚さに小口より切る、盛る時には椀の底へ卸し山葵を置き、その上へ汁を注ぐ。

一、フライ

豆腐四丁を、一寸四角づゝに切り、布巾へ載せて、よく水氣を去り、葛の粉を兩面へ叩きつけて、油で揚げ、薬味醬油にて食す。

一、ひらめ羹

先づ寒天二本を、ぬるま湯に浸し置く、そして別に豆腐四丁をゆで、布につゝみて輕く水氣を搾り、直ちに裏漉にかけ、さて先に湯に浸し置きたる寒天を、堅く搾りて、三合の水と共に、鍋にちぎり込み、火にかけて、煮解けたる後、白砂糖四十匁を加へ、食鹽少しをまぜて、味加減をなし、それより裏漉にかけ、それに右の豆腐をまぜて、再び鍋を火に架け、二分間程も飯杓子にて煉りまぜ、それで流し箱又は重箱中に流しよく冷したる後、抜き出して適宜の大さに切り、山葵醬油をそへて食す。

評 豆腐料理として家庭料理に趣味ある獻立なり、仕方の容易なるを賞す、併しフライに辛子を添へたらば最も妙ならん。

第二等 黒鯛（一尾百八匁位にて五人前）

本郷 近藤琴子

一、吸物 スープ仕立 鯛の身、しようろ、そぎゆづ

黒鯛を三枚におろして、あらに鹽をふり、水七合ばかり、玉葱一個、にんじん一個入れて二三時間煮る、四合位に煮つまりたらばこして置く。

身はさしみと燒物にする分をとりのけて、のこりの肉を少さく四角にして鹽少しふり、一寸ゆがきて用ふ。

松露もゆがきて用ふ、一椀に三粒ぐらゐ。

柚の皮一二片そぎ用ゆ。

二、さしみ細作り いり酒

黒鯛片身にて四人前作る、他の一人前ばも一つの片身より取る。

以上の肉を、皮、小骨、うす身を去り、細く作る。

つまはめうがの小口切り、わさび、紫蘇、其他妻みのもの、味醂を煮立て、其煮立ちたる時、附木に火をつけ味醂に近づくれば、みりんはもゆ、燃え終りたる時醬油少しさし、さまして用ふ。

三、バター燒き

片身の內、さしみ一人前とりたる殘りの肉の形よき

ところを四角な切身として、皮の方へあらく布目をいれ、鹽胡椒して二三十分置き、バターを兩面へよくぬりながら燒く。

評　黑鯛の料理法として刺身に煎酒を用ひたるは用意周到と云ふべし。されどバタ燒に添合せなきは妙ならず、晩餐料理としては粉吹、馬鈴薯、又は其他の添合ありて然るべき所ならん。

第二等　鮑四つ（目方總計八百匁位にて五人前）

神戸　黑柳謙子

原料の撰擇及び用意

四個の鮑は、極めて新鮮にして勢のよき、又、成るべく、大なる雌貝を擇び、先づ、肉の表面を、生鹽にて揉み、汚物を洗除し、後水にて鹽を洗ひ落し、薄刃にて、肉を貝より離すべし、此際、靑腸の破れぬ樣、叮嚀に取扱ふべし。

一、吸　物

鮑の肉二個を鍋に入れ、重曹十匁水一升を加へて、文火にかけ、凡そ五時間程煮るべし、水が煮詰りて五合位になりたる時、竹箸にて肉を刺し、柔かなれば、鍋より引揚げ、布巾に取りて、十分水氣を去るべし、次に、肉を厚さ三分位に、横に切り、之れを玉子の白身に浸し、適宜の大さの淺草海苔にて包み、更に其上を白身にて塗り、後之を熱湯の中に投入し、白身の白くなるを度として、金杓子にて掬上げ、能く水氣を去るべし。

吸物汁は、鰹節にて仕立てたる、澄汁凡そ六合程を作り、味加減は少しく辛らめになし、汁の沸騰せる頃、鮑の肉を入れ、暫らくして、椀に盛るべし。靑身は枝豆の若きものを、さやより出し、凡そ一合程、ざつと、湯煮き、柔かくなりしものを、椀の中に入れ、蓋をなし、別に小皿に、山葵おろし少量を添へて出すべし。

二、和もの

鮑の肉二個を、山葵おろしにてすりおろし、鉢に入れ、此れに玉子の黄身二個を加へ、よくかき交ぜ、更に、味醂を小猪口に二杯、煮返し酢三杯を加へて、ドロドロの加減となるを度として、置くべし、別に、獨活、木茸を細かに刻みて、ざつと湯煮き、又胡瓜、茄子を薄く切り、之れは一度鹽揉みをなし、後水にて洗ひ鹽をおとすべし。以上四品を、前の鉢に入れて、和へるべし。

出來上りたらば、中猪口に盛り、更に香料として、

青紫蘇葉を細かく刻み、その上に撒布してすゝむべし。

一、鰤煮

銅鍋に、醬油一合、味醂八勺、水一合を入れ、炭火にかけ先づ煮るべし。汁の沸騰せる頃、鮑の鰤四個を入れ煮るべし。鰤の煮固まりしを見計ひ、鍋を火よりおろし、其内鰤一個を、竹箸にて破り、青膽を煮汁に溶解させおくべし。

別に、丸茄子の新らしきもの六個を撰び、厚さ五分に輪切をなし、一度水にて洗ひ、水氣を去りて、前の鍋に入れ、再度火にかけ煮るべし。今度の火加減は、前より弱めになし、トロ〳〵と約二時間も煮れば、煮汁は大方失せ去れば、之れを度として、鍋を火よりおろし、蓋のまゝ三十分間程むし、後取出し鰤は厚さ八分位に輪切になし、茄子と共に平皿に盛りすゝむべし。

以上五人前の分量なるが、三品とも、特殊の風味ありて、鮑料理としては、之れにこすものあるまじ。

評　調理法並に材料の使用上に於て優に一等の價値あれども、普通の家庭に用ふる晩餐料理としては時間及び手數を要し、加るに鰤煮に銅鍋を用ゐたるは衛生的の價値に疑ひなきを得ず。

第二等　茄子（三十にて五人前一人六個當）

群馬　甲斐榛枝子

一、茄子バター燒

茄子二個を二分位の輪切りにし、兩面にバターを塗り、串にさして火にあぶり、バターの茄子に浸込みて色づくを度として串をぬき、皿に盛り、おろしシヤウガとソースを添へて出す。

二、茄子餡肉

茄子二個をたてに半分に切り、中の種をくりぬき、その中に叩きて味つけたる鷄肉をつめ、元の形に合せ干瓢にて結び、味醂と醬油にて柔かく煮る、皿には百合の酢煮（白砂糖、食鹽及酢にて煮る）を程よく添ふ。

三、茄子吸物、

茄子二個を、皮をむき、兩端を切り落し、同形の薄き短冊に切り、玉葱を少し加へ、一個の卵とよくかき混せ、煮立ちし汁の中に三ッ位二分けに落し、浮き上ると同時に鍋を下し椀に盛る。

評　ベタ燒、餡肉、共に料理法嶄新にして、家庭の晩餐には試に適當ならん、併し吸物に柚子又は茗荷などの吸口を用ゐざるは惜し。

第二等　茄子（茄子三十にて五人前）

本郷　近藤翠子

一、なす初茸清汁。茄子三。はつ茸十四五。

先づなすを縦に細く切り水にはなちてあくをぬく。次にはつ茸を鹽水につけてよく洗ふ。以上をにだしに、醤油、鹽みりんにて味つけたる清汁にて煮て用ふ。

二、燒茄子胡麻酢。茄子十五。白ごま一合。

茄子をぬく灰に入れて燒き、直に水に取りて皮をむき、皿にもりそれに胡麻をいりよく摺鉢にてすりたるものに砂糖鹽を入れ酢にてどろ〳〵となしたるものをかける、但茄子はへたを一寸五分か一寸位つけて置く。

三、茄子揚物　なす十二。めりけん粉五合位。

茄子を縦に少々斜に厚さ三四分位に輪切り鹽水につける、揚げる時は布巾にてよく水をきりて用ふ。

ころもはめりけん粉を水にてとき、くわゐ大五個をすりたるをまぜる、玉子ならば尚よし、一ッにてもよろしけれど、多ければ尚よし、但玉子を多くする丈け水はひかへる。

煮汁に醤油みりんを加へたるつゆにて用ふ。おろし生姜を添へる。

評　組合せ方及び仕方共に先づ普通。

第三等　牛肉（三百匁にて五人前）

芝　荻野つゆ子

一　ビフテキ　附マッシポテトー

厚二三分の大切とし、両面へ鹽をふりおき、別に燒鍋にバタを入れて溶し、それへ右の肉を入れて幾度も返して燒く、金串がスッと通る位を度とす。マッシポテトーは、じやが芋を皮むきて鹽ゆでにし、よく潰し、鹽、胡椒、バタにて味をつけ、附合す。

一　吸物　附茗荷の子

通常の清し汁を仕立置き、別に牛肉を細かにたゝきて團子とし、沸騰したる湯の中に入れ、浮上りたるを孔杓子にて掬ひ上げ、茗荷の子を細く引き、此の二品と共に右の清し汁に入れ、一煮立したる時おろす。

一　時雨だき

牛肉をよき程にきり、鍋に入れてからいりの如くなし、肉より汁の出る時分に醤油と砂糖少しにて味をつけ、生薑の針に切りたるを入れてよく〳〵煮込む。

評　製法簡單にして家庭料理に適せるも「ビフテキ」と時雨だきは味

ひに變化乏しく獻立の精神を缺けり。

第三等 茄子（三十にて五人前）

千葉 山口秋子

茄子の胡麻汁、（茄子五個）

まづ白胡麻を炒り、之を擂鉢でよくすりつぶし、白味噌を入れて再び擂り、昆布の煮汁にて暖め、味噌漉で漉し、火にかけて煮立ッた處で、茄子の輪切りにしたのを入れる、盛ッて出す時萵苣の小さくきざんだのをばら〳〵とふり掛けます。

茄子の餡かけ、（茄子十五個）

大きい樣な茄子を採り、蔕をはなして、胡麻の油の煮立ッた處に丸の儘入れ、やわらかく成つたら、目ざるに引き上げ、熱い湯をかけて油氣をぬき、味醂と醬油で煮上げて皿に盛り、それに葛粉に玉子を加へてこさへた、餡をながします。

茄子の刺身、（十個）

茄子の蔕を取りまして、軟らかに煠で、爼板に上せて杓子で押し平め、水氣を充分に取り、細かに庖丁を入れ、そして茗荷の小さくきざんだのと一緒にして芥子酢で食べます。

評 茄子料理としては最も妙、味ひも宜からん、併し說明の足らざるは惜し。

第三等 鷄卵（廿五個にて五人前）

小田原 鍋島壽美子

一、卵豆腐の椀盛（吸物代用）

材料

卵 五個
鰹節煮汁し 卵全量の五倍
古生姜 少量
葛粉 極少々

製法

鷄卵五個を割り、よく攪拌して、夫から卵全體の量を計つて、其の五倍の鰹節煮汁を取り、夫を二つの鍋に、一方には卵の三倍、一方には卵の二倍と云ふ割合に分けて、先づ三倍の方に食鹽と醬油とで吸物の汁より少し辛目に味を付けてよく冷して、前に交せて置いた卵を皆入れて、成る可く泡の立たぬやうに掻き混ぜ、夫から平たい丼に入れ、其まゝ靜かに蒸籠に入れて程よい火で二十分間蒸す、之を蒸してゐる間に、前に分け置いた煮汁へ程よく味を付け、葛を少しの水で溶かして入れると、少しとろりとしたる汁が出來ます。夫

から蒸せた豆腐を椀に盛り、汁を入れ摺生姜を豆腐の上へ少しのせて出すのです。

注意、蒸す時強火だと豆腐にポツ〳〵穴が出來見苦しく成ります。之れは椀盛ですから、中身をずつと多く入れます、從て汁は此の分量で餘る位です。

一、卵のオムレツ

材料

卵　十個
キャベツ　五枚(中位の物)

製法

先づ五枚のキャベツに少しの食鹽を入れてゆでゝ置き、別に卵を皆割つてよく攪拌せ、食鹽で味を付け、又よく攪き交せ、夫からフライ鍋へバタを充分引いて火にかけ、それへ卵を一人前だけ(即ち二個分づゝ)注いで箸でグル〳〵とまはすとふくれます。夫を庖丁で柏餅のやうにしそれに前にゆでゝ置たキャベツをよい程に切つて付合せに致します。之にはソースをそへて出します。

注意、白砂糖をホンの少々卵の中に入れゝば味が大そうよく成ります。

一、丸蒸し卵

材料

卵　十個
西洋人參　大一個
白いんげん豆　三勺
枝豆の剝たもの　三勺
食用青粉　極少々

先づ人參の皮を剝きて薄く切り、白砂糖と食鹽とで味を付け、柔かに煮て裏漉しにして置く。次に白いんげんをゆでゝ裏漉しにして白砂糖と食鹽で味を付て置く、次に枝豆もゆでゝ裏漉しにして白砂糖と食鹽で味を付け少しの青粉を入れて薄青色に致します。夫から卵を皆ゆでゝ丁寧に皮を剝き尖らない方を横に切つて黄味を取出し、其の黄味を裏漉しにして前の人參に程よく交せ、夫を又卵の中へ三分一程つめ込み、次に白いんげんの裏漉しを詰め、次に枝豆の漉したのを詰め込んでピッタリと白身の蓋をして、十五分間位蒸すと切り口がうまく付いてしまいます。夫から皿に南天の葉か笹の葉を敷いて、尖つた方を上にしてのせ、洋刀をそへて出すのです。

評　オムレツに添合せのキャベツはバタ煎にしてオムレツ中に混入する方宜し、又丸蒸は手數と時間を費し普通家庭料理には不向なるも一寸面白き製法なり。

第三等　黒鯛（一尾八百匁位にて五人前）

牛込　紳作きよ子

黒鯛を三枚におろし、骨や筋をとり、一人前一切づつの割にフライをとり置き、他を刺身と吸物に用ふ。

一、椀盛、フライを刺身にとりしあとの身を適宜に切り、一寸鹽をふりて湯煮し置き、蓴菜を生ならば湯煮し、壜詰なれば熱湯をかけ、茗荷を四つ切にして下煮し、共に椀にもり、適宜に味つけし汁を注ぎ入るゝなり。

一、フライ、よく洗ひたる切身をフキンにてよく水氣をとり、鹽、胡椒を振り、それよりメリケン粉をつけ、それを玉子に水を少々入れてかきまぜたる中につけ、更にパン粉をつけてヘットにてあげる。之れにホイルドポテートを添合す、之れは馬鈴薯の中位のを七ツ八ツ程に切り、湯煮し煮へし時湯をのこらずこぼし一寸火にかけ、鹽を少々入れて蓋をなし、強く上下に振りうごかし、後ち取り上げて盛り添ふるなり。

一、霜ふり刺身、皮のまゝ二分位の小口に切り、敷笊に入れ、鹽少々入れし沸湯の中で、搖して白い表皮の出來た時手早く水に冷し、笊で水氣を去つて、皿に盛り入れる、添合せは芋のずいきを湯煮し、水にとり、堅く搾り、適宜に切りて用ゆ、あしらひに蓼二三本、山葵醤油にて出す。

評　椀盛をあらのうしお煮に變更せば申分なし。

第三等　南瓜（一個目方八百匁位にて五人前）

芝區　勝部久枝子

一、南瓜飯

南瓜を半分に切り、皮と核を去りて煠で、擂鉢にて擂る、それを御飯のふき上りし所へ御したじと共に入れてむらし御はちに取る時まぜる。

一、酢のもの

四半分を千六本に切り、お酢を入れ、それへ木くらげを細かく切りて入れ、砂糖味醂にて味をつける。

一、皿のもの

後ののこりを煠でくずし、キャベツを湯でしものともり合せ、白ソースを注ぐべし。

評　珍らしき料理なれども説明不完全なるは惜むべし。

第三等　玉子（廿五個にて五人前）

芝區　勝部清枝

一、吸物

玉子一個づゝを破り紙に入れ、口をひねり一寸こよりなどにて結び七分間位煠で、取出して水の中にて紙を取る、根三つ葉を煠で一寸位に切り、つまとす、汁をかける。

一、シチウ

玉ねぎ二ッを細かく一分位にきざみ、バタにていためお湯を二合ほど入れ、コンシターチを小匕に一杯入れ、尚ほセリー酒と鹽胡椒を入れ、別に玉子をお湯の中に破りおとし半じくに成りし頃、前のねぎの煮たるを皿にもり、其の中央に玉子を一ッ置く。

一、玉子やつこ

玉子十個をよく擂り、お汁の鹽をからめにしたるを少しづゝ入れてとかし、それを小丼に入れて蒸し、蒸し上りたらば取出して水にてひやし、適宜に切り新生姜をのせ、御茶碗か浮盃に入れて進める。

評　献立は甚だ宜しけれど玉子に紙を包みて蒸る如き一寸面倒の感あり之れは鍋に流し込みて煮抜きたるものにて可ならん。次に玉子やつこは生姜醬油か柚子醬油を添へなば一層風味を増すべし。

家庭好み 晩餐三品料理 懸賞募集

一、三品料理とは一種の材料を以て三品に拵らへ分ける事即ち別項記載の七種の材料中より各自の好みに依り、随意に一種を選び、五人前の晩餐に供する料理三品の献立を作る也。

一、献立は日本料理、西洋料理、或は和洋折衷等孰れにてもよし、但し成るべく献立に變化あるべき事。

一、組合せの野菜は九月の季節物を自由に選び、且つ調味品及び鰹節等適宜に用ゐる事。

一、解答は一品毎に製法の順序を簡單に説明する事

來月の新題

▲栗　中粒　貳升五合

▲松茸　五百匁

▲新生鮭　壹尾　四百五十匁位

▲薩摩芋　八百匁

▲家鴨　羽鳥一羽　七百匁

▲八ッ頭芋　八百匁

▲生鰯　中　七十五尾

賞品　圖書切符

一等　金參圓　二名

二等　金貳圓　三名

三等　金壹圓　五名

〆切九月十二日

暹羅國の風習

従來日本人の暹羅に渡航せしものは萬を以て數ふるが、何れも首府バンコック附近を徘徊するに止まり遠く内地を踏査して純粹の土人に接し、親しく其風俗習慣を視察したる者は極めて尠ない夫故に暹羅の風習の日本に知られて居ないものが澤山ある。

△男女の關係――野蠻人の事であるから定めし風儀が亂れ、男女の間など何等の制裁も無さゝうに思はるゝが、決してさうでなく、暹羅では男は女の肌には指一つ觸ることも出來ない、若し一寸でも觸らうものなら忽ち法律の罰を受けて牢屋に打込まれる、凡て男女間の嚴格なことは想像以上で、現に今の國王の前皇后の如きは、偶ま水に落ちて將さに溺死しさうになつても、從者が皆な男であつたので、皇后の體に觸ることが出來ず。爲めに皇后は其儘救はれずに崩御せられた位ゐである。

△結婚の風習――男女の間の極めて嚴格なるにも係らず結婚は毫も壓制的でない。先つ雙方合意すると始めて手を握る位までは許さる。其後談が進行すると親に申込む。親は之を親類に相談して若し異議がなければ玆に纏まるのである。民間では血族結婚は餘り無いが、王室では兄弟でも構はず自由に結婚が行はれる。現に國王の儲けられた御子は八十有餘名の多きに達して居る。

△早婚の風――女は十三になるとコンチユツクと云つて日本でいふ元服をやる之が一人前になつた印で、卽ち結婚の資格が出來たのである。法律上では十六歳以上と定めてあるけれども大概十三歳になると結婚する。男は如何に齢取つても一旦坊主にならなければ一人前になれない。故に結婚前には必ず坊主になる。又坊主にならなければ學問も知らない樣な譯で。此坊主は短いのは三ヶ月其他一年坊主二年坊主とあるが、坊主中は朝と晝の二食で、女も酒も禁ぜられて居る。

△安易生活――暹羅では習慣上女は棄てられるものとなつて居るから若い時から大に働く。上は大臣の奥方より下は賤が家の女房に至るまで、獨立經營の途を立て、其收入を以て指環だの耳環だの或は腕環など購ふのであるが之れは必ずしも盛飾の爲め計りではない。彼國では年中半裸體で着物に金が要らぬから、彼等の唯一の財産と云へば如上の指環類である。そこで之れさへ持つて居れば、縱令良人に棄てられても困まらぬといふ用心の爲めでもある。而して男は常に遊んで暮らす、遊んで居ても食ふに困まらぬ。白米一斗の價値が僅に三十錢。鷄が一羽八錢以下、それに澤産物は多く、菓物は年中實つて居るし、生活に就ては何等の努力も要しないのである。



子供の衛生

◎飲食物の注意

子供の病氣の過半は呼吸器病と胃腸病である。そして呼吸器病は冬に最も多く胃腸病は夏に多い、是等は概して親の不注意に基くもので有るから、其原因を求めて適當なる攝生の法を取る時は、豫防する事は必ず出來るのである。夏分は子供に限らず、總て身體の各部の作用が緩慢に成つて居て隨つて消化器の作用も冬とは趣を異にして居る、其處を參酌せずに物を食するが爲めに、不消化を來すのも一の原因を爲して居る。又食品の温度不平均、不平等なるが爲めに胃腸の害を被る事は一通りで無い、從來の習慣として熱い物を食して、其後に直ぐに冷い物を喰べる、是も大なる一原因である。次に子供が暑い日中外へ出て遊ぶ、是が既に惡るい處へ持つて行つて、夜分に成つて又夜露に打たれる、寢冷なする極端から極端の温度に接するのであるから微弱な子供の身體には非常な刺激で只、此一事丈でも確に病氣の原因をなすのである、また氷の濫飲も原因である、子供は大人を小さくした物では無い諸器官が未だ弱いのであるから、其積りで取扱はねば成らぬ。

親たるものは成可く注意して平等な温度の食品を與へ、平等な大氣に觸れるやうにして、十歳以下の子供ならば八時頃には寢させる事にする、暑いからと云つて夜縁日等に手を引いて出掛ける事は止めねば成らぬ、其歸り途に御馳走等と云ふ事は最も宜しく無い、又冬期に比し食物を節せしめ、店屋に並て賣つて居る品は一切食べさせぬやうに、成可く家庭で新鮮なものを調理して與へねばならぬ。又最も攝しなければ成らぬのは市中に見る果物である、其多くは既に發酵しかゝつたもの許りで、危險は甚だしい、のみならず夏蜜柑等は大人にも酸味が多過ぎるものであるから、子供の腸胃を刺激する事は非常で、親は之を心得て子供に食べさせぬやうにせねば成らぬ。（鷲山彌生女史談片）

◎牛乳の扱ひ方

牛乳は腐敗し易いから注意せねばならぬ。世間では一旦煮沸したるのを罎に入れて水中に入れ、其桶の水を時々取換る樣であるが桶の水は時間が經つと温度が變り、又水を取換へる毎にも變つて却て腐敗を招くから流れて居る川の中か、若くは穴藏のやうな涼しくして温度の變らない所に置くのが安全である又煉乳は熱湯に溶解すれば差支なきも、冷めた湯でするのは面白くない、一旦溶解したのを直ぐ罎に入れ栓を堅くし

て冷まし、夫から小兒に與へる樣にして餘つたのをもつたいないなどゝ二度飲ませては消化不良症に罹るから注意せねばならぬ。又夏季に蓋を開けると空氣に觸る、部分は黴菌がつき易いから直に脫脂綿で蓋を包むが宜しい、夫れも三日間位しか保たない。尤も冷藏器があれば牛乳でも煉乳でも保存上便宜であるが普通の家では餘程注意しないと危險である。寢冷については衛生寢衣を奬勵するこれは先西洋婦人の寢衣と見れば差支ない、大抵五六歳位の小兒には伊太利ネルを大巾丈け三尺一寸袖を縫目なしとし、襟方三寸五分前一寸位開放し、ゴム紐とし背を六寸五分開けとし作るのであるが、之ならば決して寢冷の心配はない。

（小原頼之氏談片）

◎齒を磨く習慣

子供には含嗽の習慣を付ける事が大切で、未だ齒の生へぬ赤子の中には母親が怠らず硼酸で舌や齦を奧の方まで好く拭いて遣り、少し物心の付く樣に成つた子供には三食後必ず硼酸水の類で自ら口を含嗽さする習慣を付ければならぬ。之は疾病を防ぐ用心である。

世間には能く頰を膨らしたり中耳炎或は耳下腺炎と云つて耳の邊を腫らしてゐる兒があるが、之は矢張齒が病源になつてゐる。則ち齒に溜つた食物の腐敗したものが黴菌と一緒になり咳をする折に耳下腺や唾腺を經て耳の部分を犯すからである。

其他蟲齒も亦た口中を不潔にした結果で齒の隙や凹處に潜んで居る黴菌が矢張齒間に腐敗した食物の滓に結合して醱酵し乳酸と云ふ劇しい酸性になる、此の乳酸が齒の琺瑯質を融して蟲齒となり色素黴菌が化合して味噌齒となるのである、結局昔の人が蟲齒と云つたのは實際に當つて居る。

其外に口中の不潔の爲にヂフテリヤ菌などが其處から侵入するもある。

又た口の掃除が不充分な爲に口中から嫌な臭を出す事も澤山あるが、之は口內に蟲齒或は腐敗した齒が殘つて、夫れに食物の滓が附いて腐敗作用を起した結果である。又た齦が膿んで其血が耳下腺其他を犯す事もある。之等を見ても母親は好く注意して子供の時から含嗽さする事を忘れてはならぬ。

子供に毛楊枝と齒磨粉で齒を磨かする年齡は出來るならば五六歳頃から習慣を付けさすが好い。毛楊枝の毛は豚の毛或は馬の毛を最も好しとする

子供の楊枝は何程か軟い方が好さ相に考へられるが、餘り軟か過ぎると齒の間の汚物が好く除き去られぬ患がある。又硬い毛楊枝を使うと、最初の中は稍もすると齒齦から血が出たり多少の痛みを感じたりする事もあるが、夫も僅かの間で、追々出血が止つて齒齦が丈夫になる。一寸血が出たと云ふて磨くのを止めさせる母親もあるが、左程に心配する事は無いであらう。



モデルの話

蓮花

小雨のしと〳〵降る日の午後「モデル」婆さんこと、宮崎きく女を、谷中初音町に訪れた。

きく女は、東京美術學校が始まつて以來、第一番目の「モデル」であつて、其後「モデル」をやめてからも、引續いて今日まで學校に出入して、「モデル」の周旋をして居るので、學校に關係のあるもので、恐らく、この婆さんを知らぬものはなく、此婆さんに「モデル」の周旋をして貰はないものはあるまい。今でも毎日、學校で要するだけの「モデル」を捜し出して來て、それを頗る上手に操つて、學校の用を達して行く手腕は、なか〳〵のものである。

話を聞くべく私は婆さんの家を探し當てゝ格子戸の前に立つて、聲をかけると、「ハイ」と元氣の好い返事がして、お婆さんの顏が見えた、「さあ此方へお上りなさい」と言はれたので、若かモデルと間違へられては大變と思つたのが、早速内に入つて、「實は私はこれ〳〵の者ですが、お差支なくばと、名刺を出すと、「あゝさうですか、先達學校の先生からもそのお話がありました、まあ此方へお上んなさい」と、座布團を勸められたのを機會に、早速上り込む。家は狹いけれどもよく片付いてゐる。若い立派な子息さんが居て、煙草盆を出し、茶を汲んで與れた。

お婆さんは、見たところ、七十歳以上でもあらう、流石はむかしモデル時代に磨きあげた面影が、何處やらに殘つて、瀟洒して小綺麗で、背は少し屈んでゐるが、風姿が好い、それになか〳〵快活で調子が面白い。

△試驗前のモデル

學校は一昨日から休みになりましたが、試驗前になると、生徒の方が一時に畫き出しますので、なか〳〵大變です、早くから着手てゐれば好いものも出來るし、故障も少ないのですが、何うもさうばかり行かないものと見えて、試驗間際になつて、皆が一期に急ぎ出すので、「モデル」にも種々故障が出來る、なかには病氣になるものもあり、何か用事があつて、出て來られないと云ふものも出來る、さうなると、途中で外のと換へる譯にはゆかず、といつて描きかけた繪を其儘捨てるのも惜しいし、と云つたやうな譯で、大變なことになるのですが、結局外のにして、更に初めから描き直さればならぬので、生徒の方にもお氣の毒だが、此方もさう急によいのばかりは見付からぬので、大變に困

ることがあります。それでも何うにかして、間に合せて行かねばなりません。

△年齢と容貌

「モデル」の年齢は大抵まあ、女は十五六歳から、二十五六歳までのうちです。七、八、と出るものは殆ど居りません。尤も男の方には、之は年齢には關ひませんで、若いのも年老つたのも種々あります。全體が「モデル」のことですから、さう一様に揃つて美しいのばかりでもいけません。中には變な顔のもあるし、武張つた顔もあるし、若いのやら、髯の生へたのやら、丈の低いの、、、すらりとしたの、いろ〳〵無くてはならぬのです。

△選抜の苦心

で、是等の人々を選び出すのもなか〳〵六ケ敷いことで、見たところが丈夫さうなものでも、強ち病氣に罹らぬと云ふ譯にいかず、弱々しいものに却て存外達者なのがあります。之ならばよからうと思つたのにも不意に故障の出來ることが度々あります。なに私は大丈夫ですなどゝ云つてるものに、案外自分の氣附かぬ病氣を持つてるものがあります。病氣としてはリューマチスなどは、殊に多いやうです。が、時に病氣に侵つては、差支へないものがあります。一例を擧ぐれば、眼を患つて居るものなどは、少し俯向き加減にして、草花でも弄つてゐる風にさせれば、「モデル」として一向差支へありません、さういふ工夫も折々するのです。體格等もいろ〳〵變つたものを選びます。一番最初には、油繪のことであるから、肥つたものがよからうと云ふので、肉附きのよいものを選びましたが、これでは骨組が……何處に何ういふ骨があつて、何んな形をして居るかと云ふことが一向分らぬので、殊に近來骨格の研究が八釜敷くなりましたから、變つたものを採るやうになりました、けれども、女としてはまあ矢張りすらつとした格好のよいのが宜しいです。

△日本畫と西洋畫

種類は先づ日本畫と、西洋畫との二つになつて居ります。日本畫の方は大抵裸體になることは無く、種々の裝束をつけて、女官にも成るお姫様にも成る、男ならば、兵士にもなり、鎧武者にも成りますが、兎に角裸體にはなりませんが、西洋畫の方になりますと、大抵は裸體になる場合か多いのです。裸體になることですか……最初は誰しも厭がりますが、段々馴れるに從つて。裸體になるお友達と自分との、顔の違ふことなどが解つて來ますと、終ひには自分から進んでなるやうになるのです。日本畫の「モデル」に使ふ裝束ですか、それは學校にも澤山用意してありますが、又別に損料で貸せるところがあります。時間は學校の方は大概、午前八時から正午まで、其れからは各方面の研究所とか、個人のところへ、それ〳〵雇はれて行くのです。

△世話の焼ける事

自分から進んで「モデル」臺へ立つても、急に厭になりますと、便所に行くとか何とか、口實を設けて出て行つて、それなり歸つて了ふものなどが幾人もあります。まだ樣子のよく解らぬものに、裝束などを着けませようとすると、厭がつて何うしても着けないのがあります。いつぞや或る會から頼まれて行くと蝦夷か何處かの土人の裝束を着せられたので、早々逃げ歸つて、彼樣なゴタ／＼した得體の分らぬ物を、人中で着せられるやうなら、もう二度と彼樣な會へは行かぬと云つて、困らせられました、仕方なしにとう／＼外の者を代りに遣りましたが、度々那麼ことがあります。

△雇ひ入れの困難

モデルを雇ひ入れるのはなか／＼困難です。諸方を歩き廻つて、此娘はよさゝうだと思ふと、まづ其娘の家の近所に行つて、それとなく樣子を探つて見る、一歩進んで人を頼んで大體のことを聞かせます。其上更に自身で懸合ひに行くのですが、よく事情を打あければ、大抵は承諾して呉れます。之についてをかしいお話は或る時、さる先生が途中で好い「モデル」を見附けたので、何在婆さんに限らぬ、誰が話をしたつて、出來るものは出來るし、出來ないものは出來ぬのであるからと云ふので、自身で短刀直入に其家へ當つて見た處が、見事撥ね附けられて、酷く怒られて、すご／＼返つて來られた、さあ婆さん行つて來て呉れと云はれるので、一緒に出かけて行つて、承諾させたことが御座います。

「モデル」に成るものは、大抵長屋住居のものが多いのです。下町邊の小商ひをしてゐる家の、娘さんなどもあります。當時は工場に出て居たものが、工場の方が暇と見えて、十人位宛一連れに揃つて使つて呉れと云つて來るのがありますが、何うもさう云ふ者には、餘りよいのがありませんで、十人來ても使はれるのは、二人か三人位しかありません、後のものは皆體よく斷つて歸してやるのです。只今では學校が休みに成つたものですから、皆一時に宅へ押かけて來て、此狹い家へ五十人も一度に來たのですから、大騷動でした。

△最初のモデル

モデルの一番最初は隨分困りました。其頃は西洋畫、日本畫の教室が各一つ宛彫刻の方が二教室で、都合四人のモデルがあれば宜かつたのですし、報酬も今と違つてずつと宜かつたのですが、それでもなかなか人が無くて困りました。無據お茶屋の娘さんなど、頼んで見たことがありましたが、それも一日來て止したり、一寸モデル臺に立つた許りで、直ぐ厭氣が差して、逃げ歸つたりして、何うしても長く續いて來るものがありませんでした。

△啞娘の失敗

之も其頃のことでした。こう拂底では困るといふので、一層變つたものを使つて見たらば、好からうと、一度は啞の娘を探し出して來ました。此娘ならば物を云はぬから、仕末が好からうと思つた處が、大違ひで、モデル臺に立つや否や、變な身振りをして、手を振つたり、體を動かしたりした。何程制しても些とも云ふことを聞かぬので、大閉口をした事があります。

△敎授上の今昔

昔と今と比較ると、何も角も大した違ひです。敎へ方でも最初は先生も少數で、「モデル」も、臺に立たせて置いて、生徒はたゞそれを一生懸命に寫すのみでしたが、只今では整然と先生が付いて居て、一々此處は斯う、何處は何うと講釋して聞かせます。其上、今では解剖學など云ふ八釜敷いこともあつて、全でお醫者樣と同じやうに、何の件は何う成つて居らねば成らぬとか、一本の線でも整然と、其在るやうに描かねばならぬので、如何して昔とは大變に違ふのであります。





小商人の妻の働き振り

みどり

「朝」

暖簾へ白く家號を染め拔いたガラス障子の小ぢんまりした諏訪町の角の家、軒からブラ下げた看板には名代奈良漬と古風な文字で書いてある。商賣物の煮豆、漬物の一切は勿論、罐詰、卵、鰹節、干瓢の類迄所柄が所柄丈けに拔目なく並べてある。それに又盆前なぞと來ると、白玉寒ざらしのボール箱詰めやら、そうめん、くづめん干しあんの袋類迄、往來の人へ見よがしにひしと押し並べて居る。お神さんは寢卷を着替へ乍ら雇人の小僧を起す、平常の例として、二聲三聲では却々返事がない、子供達の方が先へ目を覺ましてむづかり出す、雨戸をガチ／＼開ける、小僧はやつと起て出る。

朝第一に煮る豆が白いんげん、うづら豆、これは大抵朝たいて晩迄にうりつくすやうに分量を計る。もちこすと此頃の陽氣では堪らぬから、お神さんは細帶同然の姿で火をふき／＼一ッぺつゝいの下をたきつける。これでやつと飯が炊ける時分、亭主が起きて、子供の世話をしてやる亭主も雇人も着物と云つたつて手拭地のチヤン／＼コ同樣のものたつた一枚、至つて風通しのいゝなりである。

六時近くになるともう客足がソロ／＼ついて來る、大抵は造兵通ひの腰辨官吏又は職工で、「オイ、ぶだう豆を二錢こゝへいれて呉れ」、と瀬戸引の菜入れを出すズルト片方から「俺には、牛の佃煮を四錢入れて呉れ」「オイおかみさん、サクラ味噌と、ウヅラを三錢、」

ウ、ウヅラはたき立てだナ、此間の白いんげんのやうにプンと氷やアしめエナ」、「嫌ですねエ、今たいた斗りですよ、まだお釜も洗やしません、喰物商賣の店がお客樣を、そまつにしてなるものですか」、とぢな雇人より眞正直な亭主より誰よりお神さんが客あしらひにはなれてゐる。

朝の煮豆やは却々忙がしい。瀬戸引やアルミの辨當を小ぎたない風呂しきによろしく包んだりなぞ腰辨當の世話をやいて居ると、「おくんなさい澤庵を一本、鹽の茄子を二錢」、穴のあいた風呂しきをもつたり味噌漉を下げた鼻すゝりのお使者が來る。「おばさん黑豆を三錢、それからね、お父樣が飲むんだから三錢の卵一ツ中の明いのをつて……」、おたばこぼんに結つた九ツ斗りなのはとなりの人力車夫の娘。

朝の客は大抵こんな類でたてこむ。すると、一しきりスーッと潮の引いた跡のやうに客がとぎれる。かみさんはむれすぎた飯をお鉢に移したり、詰つた汁をゆるめたりチヤブ臺を拭いたり、漸と九時前後皆なの朝飯が初まる。跡片附と云つても茶碗や箸の洗ひすゝきは申譯程で、すぐ子供の髮を結つてやる。慈姑の取手の樣なお下げにそれでも桃色の七くどい巾廣リボンを嫌と云ふほどゆわへつけてやる、勿論女の子だからそれでおしやまに喜んで近處をはねまはる。晝はこれもチヤン／＼コに茜木綿の下帶一ツだから洗濯物の世話は割合に少ない。十時頃から又ソロ／＼かみさんは釜の下を炊き付ける。ひやかして笊に上げてある白豆をゴト／＼煮初める。ぶだう豆は晝が煮立てなのだ。雇人の茂は大きな箕でフウ／＼云ひながら頻りとザカザカ白いんげんやうづらのごみを飛ばして居る。亭主は詰めたり、かへしたり賣りに出る荷の仕度をする、其から商賣仕度に着替へてチリン／＼と小僧を相手に江戸川方面、遠くは揚場邊り迄荷を引出す、が自分の店の近處は餘り賣つて廻らぬ。まはつてもうれぬからで。

十一時近くともなると、ソロ／＼又客が立てこむ。鮒のこぶ卷を三錢に梅漬の生姜を一錢にぶだうを三錢

と云つた調子、午近くは大抵、近所の女房達が不性がてら世話なしを定めこんで駈けこむのである

「ねエおかみ樣、眞に昨夕の澤庵は酢ばかつたよ、お氣の毒だが少つと位高くつてもいゝ、下のを掘つてお呉れナ」、厚皮屋の女髮結のお金が毛筋立を髮へ突込んだまゝ小言だらだらで飛こまれてもそこは却々如才のない女房。

「商賣ですもの、そうお前樣の樣な勝手を吹いたつて……とついから云ひたくなる處だけれども、マアお氣の毒樣でしたねエ、下の方のは大きいの斗しで……生憎、



ちつとお高くなりますがねエ」、位の處で受けとめねばならぬ。紫蘇巻とうがらしは有りませんか、と種々交せて一錢五りん餅菓子を買ひに行く程のしまりやな束髮の御新造がのれんに顔を入れても……「御座いません」では色がない、「只今生憎きらしまして……何ぞ、外の品では如何でムいませう昆布かふきのキヤラ煮なら出來たてがムいます、又何ぞお味噌は、櫻も金山寺も……」、と云つた具合で却々外さない。「それぢや昆布を二錢斗り……」と云はせるやうに持ちかける。

午飯の總菜お客のとぎれでかみ樣は再び臺所

へ行つて明いた盤臺を洗ふやら、又片方では鍋をかけて、剝みするめを煮たり牛の佃煮をこしらへたり、何品でも始終切らさぬ樣に心掛けて居らねばならぬ。そちこちする中に一時がなる、亭主と雇人が歸つて來る。そこで晝の飯、と云ふ段だが、何も御馳走はない。大抵澁茶を煮出したお茶漬二杯に、口の曲りさうな程鹽のからい茄子のぬか漬位、又甘いものがあつたとした處で、朝の殘りの冷たいお汁位なもの、店の物は商賣物であるから一切手はつけぬ。

『晝』

晝後一寸の間は客が無い、洗ひものを型の如くして一寸暇があると、洗濯ものでもする、それも仕揚げて狹い干場へコシヤ〳〵襟肩やら袖やらを並べると、尻端折のまゝ漬物桶を見まはつてかびたものや樣子の變つたものやの整理をする。店へは此間卸屋がいろ〳〵來る亭主が談判をする、あとすぐ帳面と、かけすゞり、二一天作で、計算がすむと、客の來ぬ間を利用して亭主は小僧を相手にガラス障子のふき方やら戸棚の隈々手まめな掃除にとりかゝる。

他外の町屋であるとまづ一休みと晝寢の段取になる處だが、家中、却々横になぞなつて居られない。かみ樣は尻端折りのまんま、上り框へ腰を下して直ぐ縫物繼物はぎもの、扨は、子供の浴衣やら襦袢の袖、樂しさうにいそ〳〵針を運んで行く。四時でも打つと、夕飯の仕度、と云つて、御馳走は唐茄子、十六サヽギ位が關の山、お魚でナマリぶしか干物、時々子供が駄菓子を買ふ可く一錢、と五りんとねだりに來る、これにはおかみさんが八釜しく叱るけれど子に目のない亭主はいつもアイ〳〵で賣溜から出してやる、正直なもので子供はおつか樣よりお父樣である。

五時頃からそちこち夕方のお客が來る、然し晝や朝程でない。多く一人者の官員樣だとか内に手のない、車挽とか、職工とかゞ、晩飯の菜を用意して行くにとどまる。然しかういふ人達は一錢二錢客ではない、冷でも一盃やらうなんどゝ云ふ連中は牛肉の鑵詰に海老

の佃煮の五錢も買ふ、序にあしたの朝の菜に困らぬやうとの注意から黒豆を三錢にからし漬の茄子を五錢といふ手合が多い。

此位なケチな商賣でも少なくとも日に五六圓はたしかに賣り揚げると云ふ、多い日は七八圓に及ぶと云ふで利益はざつと二割だが其の中から多少の薬り物がある。兎も角、二錢三錢のはした客斗からこの數となるかとおもへば侮どれぬものである。



『夜』

小僧が店へランプをつける。亭主は矢張り晝のまゝの着物で團扇を片手に蚊いぶしでもはじめる。かみ様は汗の浴衣を着替へて子供達にお化粧でもしてやる。客足も一寸止まつた七時頃夕飯のチヤブ臺が空氣ランプの暑くるしい下に廣げられる。

飯が濟むと一寸算盤が出て帳面がひろげられる。小僧は往來の軒ばなれへ縁臺をもち出して子供達を遊ばせる。おかみさんも臺所をしまふと、稍ゆつたり團扇をもつて涼みに出る隣りの人力やのお神さんも向ふかどの駄がしやの娘さんも、ソロ／＼おしやべりに出てくる。話題は大抵お天氣がどうの、投身が新聞に出て居たの、あしたは舊のおぼんだなぞこんな處でもちきる、少し世帶がゝると、ひでりできうりがお高くなつたの、おさつの新がまだ細くておいしくないのと云ふ位のぐちになる。

日本婦人の美點

妾は日本の習字は一種の美術的のものと感じて、西洋婦人がピアノ繪畫等を學ぶやうに是非とも日本婦人は之れを修學せればならぬものと考へて居ります。夫れ故本校では毎日四十五分宛は必ず習字をいたさせる事にしてありますが、一體習字は美術的であるばかりでなく、之れを爲す時は人の心を温和にさせる事が出來ると云ふ徳があります。夫れから日本の家庭では高等女學校程度の修業を了ると、後二ケ年位は茶の湯・裁縫・活花等を習はせて置いて結婚させる習慣になつて居りますので、大抵十八九歳にして早や人の妻になるのが多いやうです。別ても日露戰爭後は結婚を急ぐ傾向がありますが、之れは早い事と思はれます。十八九歳ではまだ身體も充分に發育して居りません。思想も固まらず興味も廣くないので、若し不幸にして早く良人に分れる樣な事があつたならば、子女の教育に困るのみか處世の方法を知らぬ爲め、生活も出來ぬやうな苦しみを受ければなりません、妾の考へでは先づ日本婦人の結婚期は早くも二十一二歳が適當の時期であらうと思はれます。夫れに日本婦人は教育を受けると直ぐに男子と同樣の權利を有する事と心得るのは心得違ひも亦甚しいので、女は女として其本分を守らればなりません。歐米の婦人は男子と同樣の働きを爲て居て自由に活動すると思ふのも亦誤解です外國でも良家の處女は決して獨歩きをすることなどはありません。又父兄の許しのない男子とも交際するなども勿論ないのですが近來日本の婦人は西洋では那樣斯樣と云つて其の惡い所ばかりを眞似て居るのは困つたものです。

（プラツセア孃の談片）



お嬢さんの初旅

（令嬢紀行につゞく）

むらさき

吉田より船津へかけて

吉田へ着いた時はもう五時過ぎ、何々講々々。と染め抜いた手拭の澤山下つてゐる茶屋で一寸休む。此處に休むで居る人は、大方白の着物に脚絆掛の登山する人ばかりらしい。皆な甲斐々々しい扮装をしてゐる中に、私達丈が、下駄穿きで、大きな包を持つた形は餘り意氣地が無さゝうだ。決つして外見好くはない。車を雇つて船津迄行く心算の處、生憎此處には車が一臺しか有りませんと云ふ。止むを得ず持つて居る荷物大車に乘せて、草臥た人が乘つて行く事にする。私達は降車て了つたが例の貸切の札の丈は何だかガヤ〱し乍ら其處に止つて居る。すると皆んなが彼の馬車のは俳優だ、と云つては子供や何かゞ馬車の廻りをぐるりとりまく、奈何して直ぐに然う分つたのかと一寸不思議に思つた。私も初じめは誰だらうと思つたが、ああよく寫眞で見たあの○○だと分つたのにと思つてゐると、馬車は軈て橋を渡つて左へ曲つて了ふ。私達も茶店を出て右へ折れて淺間神社の前を通つてだら〱坂を登りかける。道は可成惡い、車に乘つてゐないから佳いやうなものゝ乘つて居たら船津へ着く迄は屹度お尻の皮が剝けて了ふだらう。始終ガタン〱と輪が石に打突かる音がして振り返ると車は大搖れた。車夫は大きな笠を被つた又馬鹿に顔の黄色い男だ。東京等では滅多に見た事が無いから私も氣の毒だけれどもつひ幾度も振り向いて車夫の顔を見るやうになる。が肝腎の御當人は一向平氣で熱心に車を挽いて御座る。人は極く好さゝうだ。道は兩側とも疎らな木立で、草が澤山に生へてゐる。石は皆な火山石だ。幅は三尺も無

い位のホンの人力車が一輛漸つと通る位の極く狭い處で、折々に摩れ違ふのは草を背負つた男か、職人位なもの、人通りは數へる程しかない。草の中には河原撫子の薄紅の、ヒヨロ〳〵と火山石に添つて生へてゐる工合は畫も及ばない趣がある。濃紫の桔梗が草に交つて咲いてゐたり、五瓣を膨りと押へた花の蕾や、女郎花。釣鐘草や澤山の秋草が咲いて居る。初じめの内は珍らしかつたので火山石の上を飛び越えたり。草を分けたり散々お轉婆をして折つて見たが。幾程折つても〳〵取り盡せぬ許りか然う手にも持てないので半帕でぐる〳〵とまいて、取るのは止して見て過ぎる事にした、木立の續く道を出るとズッと前は展けて道も廣くなる。車夫が今日は曇つてゐるから無効だが平日はよく富士が此處から見えるといふ。

四方悉皆り山で圍まれてゐて、もう暮れかゝつた四邊は遙かな山々が噬ツレかと思はれるばかり、茫やりとしてゐる。近い山はまだ明瞭と暴く。木立の綠も見える。山に添うて奇麗な流れが幽かな音を立てゝゐる

私は驅け出して行つて顏を洗つた。水を掬ふと手が冷たい。道が二岐になつてゐて別の道から人が大勢來る何だらうと思つて見るとお葬ひだつた。小さな柩を舁いだ男が此方を見て種々無駄口を叩き乍ら行く。暢氣なものだ。柩を舁いで行くのは嚴肅であらねばなるまいに、笑つたり何ぞして隨分だと思ふ。其後ろに十二三の男の子が位牌を持つてつゝくと、七八ッから十位の女の子が十人程皆な手拭を二ッに折つて被つて、各自に紙で製らへた。何と云ふのだか、上を紅く染めた登夫マンドでもあるまいが、一寸ソレニ似たやうな物を持つて後れたものは冷飯草履をヒタ〳〵と埃を立て乍ら驅け出して行く。後は四五人の大人が續く許り。極く淋しいものであつた。

「彼れも之から船津迄行んです。」と車夫が云ふ。

「然う之から、夕方からのお葬式？大變子、子供が死んだのね。」と姉さんが御仰在る。

「法華です。」と敎へて與れる。何だか這麽お葬式は初めてだから妙に思つた。其影が漸く薄れて行く頃振り

返つて來た道を見るとまア淋しいと染々思はせるやうな景色、連山寂として聲なく皆黄昏の帷帳の中に隠れて了つて。殘つてゐるのは目の前のばかり。

「姉さん鳥渡御覧んなさい。ね、あの山は茫乎として了つて佳いですね。」と私は幾度も振り返つてゝは佇止つた。後ろから鍬を昇いだお爺さんが、「貴女方は中屋に泊つて被居るお客様かね。」と聲を懸ける。

「否、之から船津へ行く所なんです。何所か景色がよくつて佳い宿屋はないんですか。」ときく。

「まア中屋だらうねえ。中屋が一番佳い。」と云ふ。車夫も然うだと云ふので其處に極める。道に材木伐出所とか云ふ小さな建物があつて、道に材木がコロ〳〵と轉がつてゐ



る。木の挽き屑が澤山にあるので、歩くと下駄も草履もゝぐつて了ふ。其處を通り抜けると道は平坦になつて居てソレカラ小さな町へ入る。此の町が船津だといふ。車夫も一晩中屋に泊めて歸りに又荷物を持させる事にする。珍らしくもなからうに後からゾロ〳〵子供や子守が何だか小さい聲で話し乍ら從いて來る。家々の灯はもう燈つて居た。薄暗い町を抜けて左へ曲ると又石の多い坂にかかる。右に折れて幽かに灯の見える家が中屋である。周圍は寂として、靜かな家らしいが、見るとあまりぞつとしない宿屋だ。此宅の娘だらう二十二三の中丈の温乎した顔立の、髪を引詰めて束髪に結んだのが洋燈を點けて、私達を案内して呉れた。髪を引詰めて居ても毛が濃くつて生額が富士額だから却て佳い。恐しく

聲の佳い、ハキ〳〵した女である。私は悉皆り氣に入つて了ふ。部屋は二階の外れで佳い座敷だと云ふ。危險い梯子段を登ると部屋へ行く間の板の薄さ。私見たいに肥つた者が乘ると直ぐにめり〳〵とこはれるであらう。座敷は今迄閉め切つて有つたものと見えて入るとムッとする。小さい男の子が座布團を持つて來た。一間の床に一間の違ひ棚、床には應擧と銘のある元祿風の美人畫。障子を開けて縁側へ出る。欄干に倚つて見ると直ぐ目の前は河口湖で、八日許りの月が薄く中空に懸つては居るが。雨模樣のやうな、ドンヨリと曇つた空合で。湖水の涯も分らない。遙か向ふに灯が一つ見える。唯ソレ丈で見渡す限り。一面に薄墨で掃いたやうな。如何にも靜かな景色であつた。涼しい風が習習と吹く。ギイ〳〵と云ふ音が聞えるのでよく見ると直ぐ先を三人位でボートを漕いで居るのであつた。少し黑い物が幽かに動いて見える。ハーモニカの音が聞える。

「這麼夜に、ボートでも漕いで居たら嘸ぞ面白いでせうね。海と違つて、如何にも靜かだから嘸ぞ佳い氣持だらうと思つてよ。」と餘り羨やましかつたのでつひ口に出る。黑い影は湖水の中程迄來たのだらう、もう水の色と一つになつてよく〳〵眼を睜つて見なければ分らない。唯黑い物があるか無いか。端艇の中から唱歌を歌ふ聲が絶え〳〵に聞える。月は隱れた。

隣りの部屋には外國人が居るさうで、片言の日本語が聞える。女中の蓮葉な聲で、

「如何もお客樣が立て込みましてね、ソレに手が少ないものですからつひ疎忽許し致します。」

此度も又女の聲だが、少し落着いた物言ひで、

「否、何有にお給仕はよう御座んすよ。私がしますから。」

「おやア奥樣濟みませんがお願ひ致します。」

と云つて笑ひ乍ら私達の部屋を啓けた。奥樣は日本人らしい。お茶盆と浴衣を持つて來て又手が廻り兼ねますと云ふ。肥つた銀杏返しに結つてゐる女。私達はお湯から出て浴衣に着換へてゐると御膳を運んで來た。

お腹が空いてゐるが食べ物が不味いのでつひ一膳で止して了ふ。

「貴女方は東京で被入いませうね、私もつひ先日迄東京に居ましたんですが。」と云ひ出す。道理で此女は獨り東京言葉をイヤに遣つてお湯に入る時もヤレお白粉の石鹸のと世話を燒いて呉れて。「あのこのお白粉は何卒レートでおとき被下いまし。」なんて私達の知らなかつた事迄敎へて呉れる、道理で自分獨り東京通を以て威張つてゐるのだらうと思はれた。

「東京は何處に居たの。」と訊かなければならないやうになる。



「日本橋に居りましてね。」と云ふ。

「ちやア此處へ來たら淋しいでせう。でも夏は涼しくつて佳いけれど。」

「えゝ淋しいの何のつて、食べる物は無し見る物はなし眞實に詰りませんよ、夏ならばまだ佳いんですが之が冬にでもなりますとね、イヤな處ですよ。日本橋に居たのが這麼法螺の貝の袋止りのやうな處に來て了つて。」と云つて笑つて居る。

お膳を下げる時に繪葉書をと云ふと、直ぐに持つて來た。見ると富士登山の紀念葉書ばかりで切角だから一組買ふ。内儀さんが禮に來た。娘によく似た言葉の明

形した四十女で。細面に色眼鏡をかけてゐる。

○湖水の晨

寢る時は蒸暑かつたので蒲團を掛ずに寢たら目が覺めた時は寒くつて顫えてゐた。蒲團は何處かへ遣つて了つたし其内に姉様も起きてお終ひなすつたから私も顫え乍ら起る。手なんぞ冷え切つて了つて、よく之で風邪を引かなかつたと感心する。雨戸を繰つて、

「アラまア、佳い景色。」と仰在るけれども私には目がまだよく開け切らないから何だかシヨボ〳〵する許し幾程見ようと思つても眩しいやうな氣がして見えないが。強いて見れば成程奇麗だ。東の空は幽かに朱をぼかしたやうな色になつて、湖水の面はまだ明け切らない。一面に靄がかゝつてゐるのだらう。茫然と水が唯白く見える。佳い景色とも何とも唯無意識に欄干に凭つてゐたが之ぢや無益と着物を着替て顔を洗ひに行く何處で顔を洗ふのかと思ふと、湖水でお洗ひ下さいと云ふ。下駄を穿いて降りて湖で顔を洗ふ。冷たい朝風が氣持よく面を撫でる。何處かで鶯がホ、ホケキヨと鳴く。オヤヤア鶯が今頃と思つて居ると今度は續け樣に、ケキヨ〳〵〳〵と鳴く。湖の晨は靜かだ、久濶く其處に立つてゐると、漸く明けかゝつた湖水の面に、今迄知らなかつた島も浮ぶ。山の麓に家が幾軒もある上るやうに道も出來て居るらしい。登つて見たいと思つた。小波を靜かに立てゝゐる湖の靜かさを眺めてゐると、其小波が金色になる。太陽が登つた。昨夜灯の見えた處は河口と云ふ小さい町ださうな。

「まア其處にまだ居たの、御飯よ。」と姉さんが被來る

「然れぢやア行きませう。佳い景色ね。」と云ふと、

「其處に居て湖畔詩人でも氣取つてゐたの、何日迄も此處に居ると佳いわ。」と仰作る。

「豈夫、餘りだわ。」と二人一緒に宿へ入ると、恰度大勢が草鞋や金剛杖を持つて出かける處だつた。浴衣を着た西洋人に擦れ違ふ。

御飯が了だ頃船頭が來ましたと云ふ。姉さんや監督者の叔父さん達は先へ被入る。私は帶がよく結べないので困つてゐると宿の娘が手傳つて結んで呉れる。何

だか嬉しかつたから幾度もお禮を云ふ、舟へ乗ると主人が傘をお持なさいと云つたけれどゝうも邪魔になるから佳いわと云つて傘なしにする。車夫が蚯蚓を澤山掘つて蕗の葉に包んで隅の方に置く。釣竿を五本借りて舟は出る。山に添うた靜かな一寸太陽の影になる邊に小舟を留めて糸を垂れる。氣の短かい私達には奈何したつて釣れよう筈が無く終ひには厭になつたから舟を出て。淺い處を跣足になつて入る。誰も釣れずに船頭が五尾桴鯊を釣る。小桶に入れて又舟を漕ぎ出す。ザイ、〳〵と艪の音が、幽かな山彦を返



す。「靜かね。」と私は同じ事を云ふ。

　幼さい時分、山に近い家に居て、夕方なんぞ、霞か雲か。と云ふ唱歌を大きな聲して唄ふと、山彦が聞える。何だか急に恐く〳〵なつて家へ駈け込んだ事や何か古い記憶が胸に迫る山彦は相變らず聞える。湖の中程に島がある。其處に舟を留めて置て皆んなが登る。お宮が有るから輕く低頭しておく。白百合の花が澤山に咲いてゐた。車夫が折つて與れる。茨の實がまだ青いが、小さい時を思ひ出したので取つて袂に入れる。駈け出すと袂の中で幽かな音がする。水の上を

燕が飛んでゐた。舟へ戻つて又漕ぎ出す。大きな樹には澤山藤が絡んでゐる。春花が咲く時分は佳いだらうと思ふ。恰度木の下邊りに小さな木片れ見たいな物が浮かんでゐる。何かと思つて訊くと鰻を取るのだと云ふ。

「一寸上げて見たら、不可なくつて？」と訊くと、

「不可ない〳〵怒られて了ふ。」と堅く首を振る。主は五十の上を越したらしい頑丈なお爺さんである。

「澤山とれて？」と又云ふと、

「澤山取れるの何のつて、此處のは大きな奴で五升樽の太さが有る。」と云ふ。豈夫那麼大きなのが捕れたら氣味が惡くつて食べられもしまいにと思ふ。空が好く晴れて仰ぐとキラ〳〵とするやうだ。傘を持つて來ればよかつたと後悔する。止むを得ず扇子で間に合す。富士山が明瞭と水にうつる。頂いた雪迄が、

「逆さ富士ね。」と仰在つてしきりに悦こんで被居るが矢張り逆さよりも正面の本當の富士の方が好さゝうだ

「彼處を降りる人が見えて？」と餘り目の前に見えるからつひ訊いて見る氣になる。船頭は煙草をスパ〳〵吸ひ乍ら、紫の煙を出して、

「何有に見える處ぢやア無い、極く晴れたお天氣の佳い日に、それも時によると眞白な着物を着たのが、百人二百人とかたまりて降山る時にやア恰度雲のやうに唯白いものが降りて行く位にしきア見えやしない。」と落着いた調子で云ふ。

「まア人間が雲のやうにしきやア見えないの。」と思つて私は何だか妙に感じた。

何だ彼だつて豪ら相な事を云つてゐる人間が富士の前に立つと大きな自然の力に壓されて何の價値も無くなつて了ふのぢや無いかと思つて獨りで笑つた。鶯が又鳴く。湖の波は漸く荒くなつた。手を浸すと身體も一緒に流されて行くやうな氣持がする。軈て船は元の處に着く。宿屋の女が出迎へる。鮠はピン〳〵跳ねてゐる。向ふの家に七夕の笹が立つてゐる。昨日は舊曆の七夕さまだつたさうな。皆なを連れて宿へかへる。

櫻井るい女の一族



子孫八十七人の高齢者

奈良縣宇智郡牧ノ村大字中之六拾貳番地農櫻井彦藏祖母るい女は同村大字北川新城源藏次女にして、文化九年十一月に生れ、本年九拾七歳なるが、天保七年九月櫻井磯右衛門に嫁し、夫磯右衛門齡六十四歳にして死亡の時には二男三女あり、其長男重藏は實家を相續して今や子孫十四人あり、次男貫一は維新の際御親兵たりしが、明治五年除隊後同郡五條町に分家し、同じく子孫十四人あり、又長女こいのは吉野郡白銀村大字大堀神職岡田德義に嫁して子孫貳拾四人を有し次女ぬいは宇智郡宇智村大字岡農山田宇吉に嫁して、是又子孫貳拾五人を有し、三女とらゑは同郡牧ノ村大字釜窪農辻本林藏に嫁して、子孫拾人あり、右るい女の子孫に配偶者六人を合す時は八拾七人の多數に上り、孰れも健在なりと云ふ、誠に目出たき一族と謂ふべし。

今祖母るい女が日常生活の一般を聞くに、毎朝未明に起きて家事の手助けをなして、朝食に就き、家業の餘暇あるときは、俗に云ふ下三里に灸をすゆれば心地よしとて毎朝之を怠らず、而して常に子孫に向つて、人は兎角明日の事を今晩より心配するも、こは取越苦勞にて明日となれば前晩思ひの半ばも出來るものにあらず、故に夜分は成るべく心を落ちつけて安眠を計るべしと教へ、自身安眠の出來ざる時は少しく酒を用ふる事もありと云ふ食は極めて質素にして、麥飯の柔かなるものに、野菜又は雜魚等を好み、又餅は大に滋養ありとて何時も絶やしたる事なく、之を味噌汁にて毎日四五個づゝを喰せば聊かの胃病位は大抵癒ると言ひ居れりとか。



雜録

◎宮中の女官

宮中女官の數に就き當局の語る所に依れば高等女官二十人にして其内典侍二人權典侍四人掌侍一人權掌侍七人命婦一人權命婦五人なり判任女官は廿九人にしてその内女嬬十三人權女嬬十六人にて總女官の數は四十九人なるが猶この外に雜仕とて所謂雜用を勤むるもの十一人ありこれは局の部屋に屬するものなるが猶ほ女官の私の召仕ひあり是は女官の家來とも云ふべきものあれど是等女官及び其れ等を合せて百人に足らず前に三百人など傳ふるものありしは傳ふるものゝ誤りなりと確かめ得たり。

さて其の家來なるもの、御主人に對する禮儀作法の一端を記せば大奥に奉仕する所謂高等女官は大概夜の十時に交替あり時として十一時十二時までも退出せざることあり短き夏の夜の此頃なれば「マア本眞にお眠むうございます」と息を切つて洩らすことなれど宮仕へせし身は堪へに堪へて各自御主人の寢込をさへ/\怠りなく右の手の甲を下にし左の掌に靜かに捧げ頭を垂れたまゝ一時間なり二時間なり御許の下るまでは御部屋近く待つが常なりされば初の中は此作法一つにても容易に堪へ得るものにあらず元來大奥の禮式は其昔は如何なりしか知られねども目下行はるゝ萬事米の洋式にする際にて指を折つて手前に向け疊につけて禮をするなり此は爲に清淨を旨とするものにて若し掌を下に向け疊につくれば是と同樣穢れる恐れあり物を取扱ふに不都合なりとは某伯爵の奉人が語りし處なり。此れに就き宿下の時など母親に怪まれお前の手はどうしたのかと尋ねらるゝもあり畢竟平常にても掌のまゝ膝に載せて動かさゞるを以つてなり禮儀の一端はこれにても解せらるべし猶ほ序に草履について記すれば大奥にては草履といふ語は忌みてにや金剛と呼せり金剛は女官の階級に依つて二枚重三枚重とそれ/\異なれるがこの金剛を脱す時手を廊下に下さず己のが穿物の種を以て直すとなり此も必竟その手を穢れぬやう注意せしものなりとされば御主人持ちなる人の衣裳の裾は通常の裾より幅廣く作るとなりかく清淨と嚴格を旨とせる禮式の許に生活せる女官のことにしあれば假令風呂を使ふにも一度普通の湯を使ひたる後更に穢れを滌じる白湯を全身に浴びて清めること民間にては思ひ及ばぬことなりと。

◎米國に於ける日本料理店

米國にて日本料理を開店せる先驅の十人忠兵衛氏は目下歸京中なるが今米國に於ける日本料理店の模樣を聞くに紐育市ウヱスト二十一丁目に開店し同地の日本倶樂部と相並びて日本料理の名聲高く、間口三間半奥行十間五階立の建物を借入れて店舖に充て居れり、店内の裝

器物等は大抵日本式を保守し、調理法は凡て純日本式に依り居れど、唯だ其の異る所は一定の時間に多人數一度に會食することなれば日本內地に於ける割烹店の如き趣異なることにては間に合はず、故に同地の習慣と便宜により午餐は正午より二時まで、又晩餐は午後六時より八時までと限り居れるが、其時間內には一時に顧客の來集するもの五六百名に達することなれば隨て調理の鹽梅加減等は幾分か粗末になるの傾きあれど、成るべく客の意に投ぜんことを注意し調理し居れりと。又日本料理となれば第一の原料なる醤油味噌の如き總て特種を以て本國より取寄せざるべからざれば、隨て其價の不廉なるは云ふまでもなく、例へば龜甲萬の醤油の如き一樽五弗半(我十一圓に當る以下之に準ず)味噌五貫目に付き四弗、酒正宗瓶詰四打入二十三弗(一合の代價殆六十錢に當る)にして總體に不廉なる價格なれば其調理も甚だ仕難くきものあり、又鮮魚の如きは彼地にて使用出來るものはトラブと云ふ魚にて、是は我國の鮎、やまめの類に似たる魚なるが其味甚だ美にして一尾の價一弗位なり、伊勢鰕も却々多くありて味も好く鯛は特に廉なれども味は不味き方なり、鮭は多く產してシヤトル及び英領バンクーバーより輸入し來れり、昨今の夏季にはエボ鯛が多くあるも味は極て惡し、其他鷄肉は味宜きものあれど牛肉は總て不味にて、價は何れも割合に廉なる方なり、野菜類も種々なるもの多くありて特に佛蘭西より輸入する胡瓜は殊に味好く、形大にして中子のなき一種の瓜なり、同地產の隱元豆の如きも細長くして奇麗に揃ひ、味甚だ好く水菓子は林檎葡萄等最も普通にて其他種々あれど調理には多く右の二種を使用せり、葡萄はカリホルニヤより輸入し來るもの價甚だ廉にして、一斤一志二分一位、佛蘭西產は一斤三志より一弗位なるが佛產は美味にして實は大に、到底カリホルニヤ產の及ぶ所にあらずと。

食事は一人前大一弗より三弗位に止まり、日本倶樂部にては三品付一食の價二志なれど食すべきもの少しとぞ、料理人雇入の如きも東京にて五六圓の月給のものも彼地にては五十圓を給し居り、家賃は三百坪弐階の建物には一ヶ月七十五弗を拂ひ、極て安く借入れ居れど家主は價格の二分位の利益を得るのみなりと云ふ、要するに料理は地所料及び調理人の給料等に比較し割合に廉價なりと云ふ

◎眞珠の流行

歐羅巴では目下眞珠が大流行で、巴里の如きは夜會には眞珠を用ひた婦人でなければ幅が利かぬ相である。此の風習はダイヤモンド本位たる米國にも及んで、近頃は多額の眞珠を輸入されるとの事、日本でも此の頃は大分流行り出して貴婦人間には之を用ひるものが多く成つて來た

▲眞珠の產地　元來眞珠は熱帶地に多く出來る物で、印度、濠洲は世界有數の產地だが、日本でも可成に取れる。我邦の重な產地は志摩の英虞灣、肥前の大村灣、土佐の高岡灣、能登の七尾灣、その外對馬、沖繩などであるが、是等で出來る產額は年々約十萬圓で、其半分は海外へ輸出せられ、此外御木本氏の養殖眞珠も產出せられる。

▲眞珠の種類　眞珠は大體天然と人工との二種

あるが、形は種々樣々で一概に云ふ事は出來ぬが、先づ大抵圓形のものが尊重される。色澤は銀色、金色、桃色、瑠璃色、黑色などの數種あるが、中でも銀色のものが尊重されてゐる。

▲大きさと價格　此う云ふ奢侈品は一概に何匁幾何と云ふとは出來ぬ。色や形や大きさによつて區々であるが、最下等の藥用品が一匁五圓で純金と同一相場である。上等品に成ると一匁二千圓位だが、對の有るものと形の大きなものとは高い。最大の物は徑七寸位、最小の物は蚤程しかないのも有るが、細工に使ふのは徑五厘乃至二分の物を用ふるのが例である。御木本眞珠店の徑六分桃色の眞珠は價格一萬圓だ相な。形の揃つたのは滅多に見附からぬもので、西洋婦人のチックに使ふものは五六萬圓以上のものが幾何も有る相である。

▲裝飾品の値段　一體裝飾品は未開國程金屬を尊ぶが文明國になると寶玉本位で、此處數年前迄は歐洲諸國に於てダイヤモンドが貴重されてゐたが、現在では夫が眞珠に成つた。日本はまだ純金尊重の時代にあるが、此頃ではぴか〳〵光るのを厭うて艶消の金を用ふるとに成り、裝飾の本位を寶玉に置いて來た。無論價格は金よりも高く懸る。御木本眞珠店の調査によると、ブローチは百圓乃至三百圓、腕環は五十圓乃至三百圓、ピンは十圓乃至二百圓、指環は廿圓乃至二百圓、櫛は廿圓乃至二百圓、タボ止は廿圓乃至百五十圓、時計の鎖は五十圓乃至三百圓位である。

▲眞珠の用途　一般に裝身具として用ひる事は無論であるが、從來は殆んど簪に限られてゐた樣である。然るに此節では用途が擴がつてブローチ、腕輪、ピン、指環、帶留、タボ止、櫛、時計の鎖などに用ひる。此の外また首飾さへ拵らせば何にでも用ひられるが、先づ現在の所では以上の數種に限られてゐる。

◎英國の個人主義

英國に留學中なりし安井哲子女史の談に曰く、

「我國で第一に感心した事は社界教育の進歩して居る事で、地方の大寺の中には三ヶ村位持つて居るのがありますが、一ヶ村毎に學校は勿論の事、圖書館迄も設けて、地主の娘共に極めて質素な服裝をして管理の爲め毎日出勤し、本の出入れまでして居ます。そして其娘等は皆館内の圖書の多からん事を競爭し、村内の小川に絲を垂れ魚を釣るものには五錢宛徴收し、古物脚を賣りなどし、其の金で圖書を買つて居ます其の他娛樂室、音樂室などを設け、村民を成るべく惡い方に誘ふまいと勉め、冬期は屋外の遊びが出來ぬ爲め、教育の目的で通俗講話會を開き、興味の中に知識を涵養せんと植物學の講義とか、旅行談、探險談等の幻燈を寫し、知名學者の講話等あり。知らず〳〵知識を注ぎ込みますから、婦人は勿論、工夫の如きに至るまで意外の事まで知つて居ます。

本國は個人主義ですから親子の關係からして違て居ます。元來本國では殴れぬ子供はない、子供は殴たれば役に立ぬと言ふ位で容易に母の言葉を聞きません。之は獨立心養成の爲でもありませうけれど、日本の家庭とは全く違て居る所爲でせう。我國では生れながら親を尊び君を尊ぶ紀綱があります。或博士が『日本では家族制度が滅せぬ限り國家は強固だ』と申されましたが、私も眞に同感です。英國では教育ある夫婦が子供を置去にしてお茶の會へ出て行くのを誰も不審に思はぬ、從つて子も亦親に向つて孝養の義務を喧しく言ひません。だから養老院の必要があります。近頃は愛國心や家族制度養成の方針を取り、ビクトリヤ女皇の記念日には色々の祝をして居ますが、宗教家は反對して居ます。



醫學上より見たる白色法

糸左近

俗說に對する批評

小生が「衞生顧問」を擔當して以來「色を白くする法を敎へよ」との手紙は一々數へても見ませぬけれど恐らく萬に達したでせう。さりながら、正直に申せば、小生はその法を知らなかつたばかりでなく、根が色の白い人を好まぬ所から、何時も諸姉が滿足せらるゝやうな答を致したことが無い。然るに偶々某粹人に遇つて色々とその秘法を聽いたのと、且つ古書を繙いて、圖らず見たのと合せて十五法を覺えたれば、爰に惜し氣もなく、諸姉に紹介し、且つ之を批評して見るのである。色白法に就てこの位澤山集めて書いたものは、恐らく他に有るまいと信ずる。請ふ虎の卷として御熟讀あれよ。

◎白色法　其一（楊貴妃の例）

某書に曰く『今は昔支那に楊貴妃となん呼べる婦人あり。その皮膚雪の如くに、玉の如くに、白く且つ鮮かで彼女が一たび笑ふ樣を見れば、如何なる英雄豪傑も忽ちに恍惚となつて、彼女の爲には、身も命も何の物かはといふ氣になる。されば畏れ多くも萬乘の君たる唐の玄宗皇帝も之に迷ひ給ひ、遂には忝けなくも、立てゝ皇后とまで爲し給うたる其の曰く因緣を尋ねて見ると、彼女は先天的に美くしかつたその上に、楊貴妃玲瓏散を塗つたからである。楊貴妃玲瓏散は色を白くし且つ艶を宜くする秘藥である云々』と、もつと長い勿體を附けて書いたその末にその處方を掲げてある。

楊貴妃玲瓏散の處方

蜜陀僧二兩　白檀二兩　蛤殼粉五兩

この三品を各〻細末にしてから、又善く混和し、鷄卵の蛋白を入れてトロ／＼に煉り、之を面に擦り込み、暫時經てから糠を塗けて洗ひ落すべし、之を今日も明日も、一日に二回づゝ續けて行へば、白く且つ艶の出ること妙なり。

そこで予はこの藥の成分を一々研究して見るに、蜜陀僧と云ひ、白檀と云ひ、乃至は鉛の粉と云ひ、何れも皮膚の色を白くする効力なきのみならず、却て顏の皮膚を荒すに違ひない。されば楊貴妃の美しかつたのは、この藥を塗けた爲では無くて、後人が根も葉も無い空言を傳へたのであらう。

◎白色法　其二（徐世賓の例）

これも前者と好一對の話である。今より二百餘年前、佛國の皇帝奈破翁第一世の皇后徐世賓は、その容色艶美、當世に並ぶ者が無かつた。色が白くて艶があり、膚が細かくて軟かく、その上滑かで、實に大理石の如く、羽二重の如く、誰として之を羨まぬ者は無い。そこで雲井に在らせらるゝ御方のことなれど、如何にもして彼女が美しうなり給うた秘訣を知りたいものだと、下々の婦人達が、それからそれと手を盡して探つたれば、成程一つの秘法がある。曰く

菫の花を莖と共に牛乳の中に入れ、二三時間も煮出し、この汁を以て顏なり手なりを洗へば、右の如くに白く且つ滑かになるのである云々。

之を聽いた婦人達は、鬼の首でも取つた如くに打喜び、傳へ／＼て文明の今日でも西洋一般の婦人、殊に俳優共は大に實行してゐる。所で左程の効あるものかと、よく／＼研究して見るに、成程間接には皮膚の枯燥を豫防する爲にはなるけれど、色を白くするなどゝは眞赤な嘘である。大方、徐世賓皇后は、性來色が白かつた上に、之を塗けた所から、話は段々轉々して遂に色白藥となつたのであらう。

◎白色法　其三（小野小町の例）

これも小野の小町が發明したとかの來歴談はあるが、煩はしければ之を抜にして、直接その方法を申せば、

冬瓜（東京地方にてはトウガンと云ふ）　一個

右を細かに砕いて、酒一升の中に入れ、文火にて煮詰め膏薬の如くになつてから、布に包みて搾り、滓を去り、其液を臨臥に顔に塗り、小町の夢でも見ながら夜の明けるや否や、水で洗ひ落すこと半年も續ければ、白く且つ艶々しくなること妙であると。

そこで之を熟々考へて見るに、植物の液汁と酒精分との混合なれば、幾分か皮膚の枯燥を防ぎ、強ひて言へば、滑かに且つ艶を宜くするかも知らねど、色を白くすることは斷然無い。

◎白色法其四（瓜と牛乳）

これは獨逸の民間に行はれる法であるが、何れの國の人も女といふ者は色を白くしたいものと見える。それは兎もあれ、その方法は、Melone 瓜と譯す を細く切つて牛乳に浸しておくこと一夜。夜明けてから之を布片にて漉し其の液を以て顔を洗へば日を經るに從ひ、段々白くなつて行くものだと。

之を學理上から論ずれば、殆ど前者と同じ道理で、白くなるなどゝは誰が何と言つても、法螺たるを免れぬ。



◎白色法其五（薔薇油）

硼酸二瓦　薔薇油二滴　溫湯百瓦

右の溶液が冷えてから、之を以て顔其他の皮膚を洗へば、皮膚病を豫防し、皮膚の理を濃か

くし、月日を經るに從ひ、白は雪の如く白くなる。これは薔薇油が色を白くする性質を有つてるからであると。

併しながら、薔薇油が何うして皮膚の色素を退げるかを、化學的に說明して無い。予は思ふに薔薇油は芳香を放つものであるのみならず、薔薇の花は其色の美しい所から、爰に何者かゞ牽強附會の說を流布したものであらう。兎に角色を白くするの一事は更に信ずるに足らぬ說だ。

◎白色法　其六（山葵の汁）

これも西洋で行はれてる法であるが、山葵を磨つて粉にし、之を顏なり手なりの皮膚に塗つて、稍暫揉みたる後、水を灌いで洗ふことを、每日實行すれば、年月の經つと共に、次第に白くなると。

これ亦學理上より說明出來ぬのみならず、予の知れる婦人の實驗談を聽くと、白くならぬばかりでなく、皮膚が粗糙になつて鮫膚の如くに變じた所から、之を敎へた人に不平を述べたら、「貴女は日本產を用ゐられたからです、西洋よりお取寄せなされば宜かつたのに、惜しいことでしたな………」と、恣々しく笑つたさうだ。危險千萬な世の中である。

◎白色法　其七（冷水洗滌）

これは甚だ簡單な法である。其法は、湯で顏を洗ふことを、一生の斷物にし、每朝每夜一日に二度づゝ冷水を灌ぎ、手を下方より上方にのみ向けて洗ふことを三百六十五日颶の吹く日も雨の降る夜も缺かさず實行すれば色の白くなること妙々と。

成程表皮の細胞は上方より下方に向つて、死を積み重ねたやうになつてるから、垢を落す上に於ては、此の方が或は宜いかも知らねど、斯る單純なことで、色が白くなるなど〻、大袈裟に言ふは、實に滑稽の極である。されど顏を湯で洗はずに、冷水で、而も朝夕の二度洗への一事は衛生上大に贊成である。或は之を實

行さぬ爲に、何人かゞ色を白くするなど、一つの方便を設けたのかも知れぬ。

◎白色法　其八（檸檬汁）

謂れ因縁を略して直接にその法を言へば、

檸檬の液汁を塗れば皮膚の色が段々艶麗になり且つ白くなること受合であると。

前にも述べた通り、植物の液汁は皮膚の粗糙を防ぐの性質があるから、皮脂の少い人や、老人が之を用ふれば益あつて害なけれども、色が白くなるとは何處までも贊成出來ぬ。



◎白色法　其九

毎朝冷水にて顏と手とを十分に洗ひたる後更に清水を汲んで其の中へ倔里設林五瓦程を落し、よく攪き混ぜてから、之を以て皮膚に擦り入れるやうに洗ひ輕く拭いてから、暫時戸外の風に當らぬやうにして居ることを、日復旦と續ければ何時の間にか色が白くなるばかりでなく、皮膚病の豫防にもなると。

幾分かは皮膚病の豫防にはなれど、色を白くするとは

素人欺しの法螺である。

◎白色法　其十（鷄卵）

鷄卵　一個（二度分）

を以て皮膚に擦りつけ、然る後水で洗ひ落し、絹手巾を以て拭き居れば、日を經月を累ぬるに從ひ、顏の色艶が宜くなるのみならず、玲瓏雲の如く白くなるものだと。

その蛋白は塵埃や垢を吸收する性質があるし、その卵黄は脂肪を多く含んでゐるから、皮膚の枯燥せる人には幾分か滑澤にする効能は有るけれど色を白くする點に至つては到底不可能である。さはれ結構な滋養食品を、顏を洗ふ料に用ふるとは、實に勿體ない限りだ。予にして若し神なりせば　卵で洗ふやうな人の顏を、即坐に黄色くして遣らうものを嗚。

◎白色法　其十一（鶯の糞）

某粹人鼻動めかして曰く、

鶯の糞

を皮膚に擦入れてから、水を以て洗へば色の白くなること奇妙である。

これは我國では昔から言ひ傳へてゐることでもあるし、化粧に浮き身を竄す輩は今でも實行してることではあるが、之を余は皮膚專門の醫師に糺したれば、その人答へて曰く。刺戟性の強いもので、芫菁の如く、幾分か毛生藥に用ひられるけれど、色を白くするなどとは、咄、如何なる矯欺者が言ひ始めたことであるか、而憎しとも而憎しと言つて居らる。然るに斯る虛欺者の言を信じて、一生懸命に汚い糞便を塗つてるとは、實に笑ふべきの至である。鶯をして之を見せしむれば、嘸や「ホ、ヲカシイ」と嗤くであらう。

◎白色法　其十二（小豆粉）

某粹人又語を續けて曰く、

小豆五合　滑石一匁　白檀四匁

の三品を粉末にし、絹にて篩ひ、毎朝顏を洗ふ時毎に、之を撒布し、然る後滑水にて洗ひ落せば、數月數年の後には、何時の間にか白くなつて來るとは妙でごわせぬかと。

斯る粉末を暫時撒布して、間もなく洗ひ落すことが効ある道理なし。されば之れ亦一顧の價値なき愚法である。

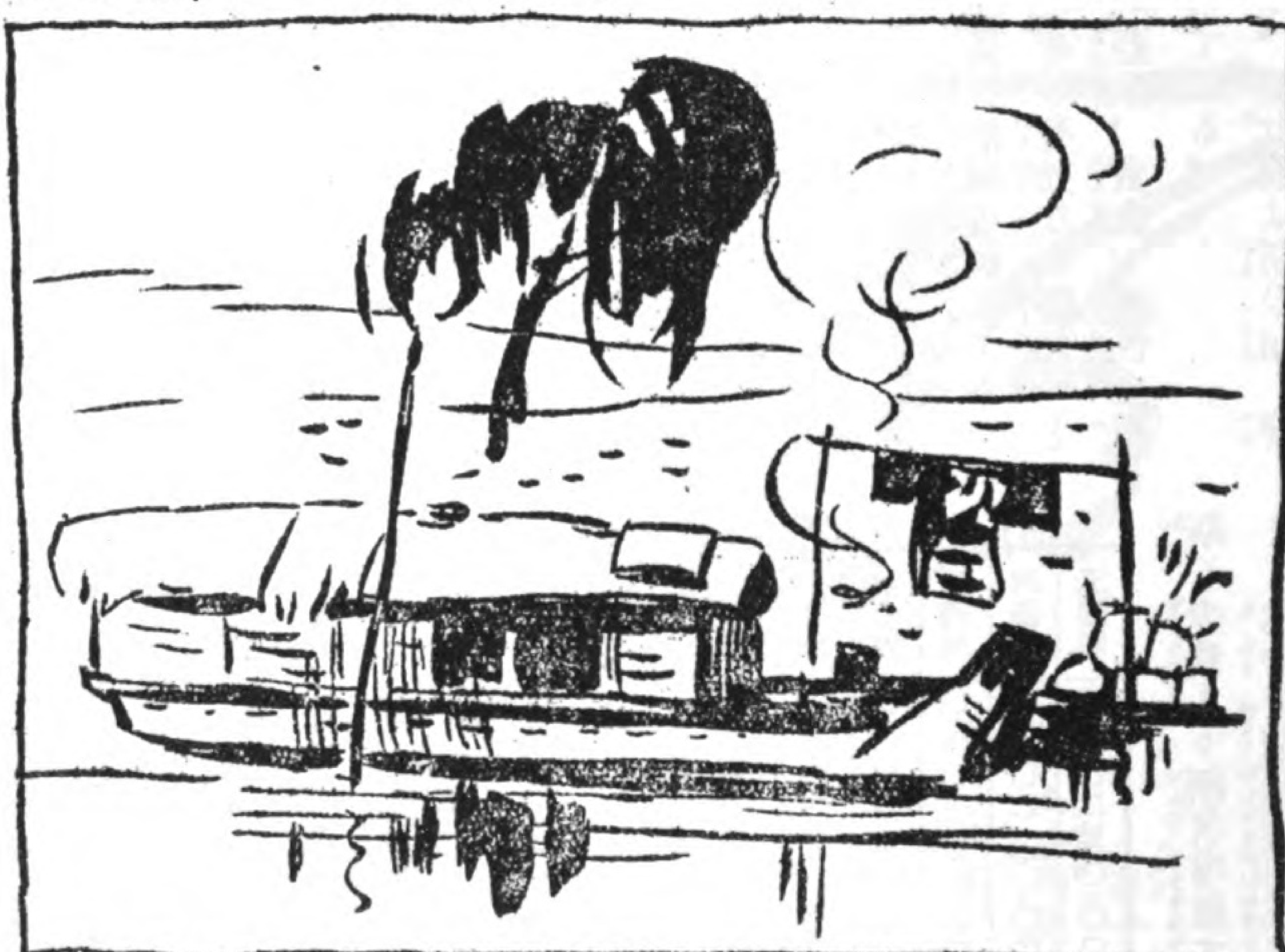
◎白色法　其十三（米泔汁）

粹人更に語を次で、まだあります。

米　泔　汁

を以て皮膚を洗へば白くなる上に、皮膚病の豫防となる、お錢を出して買ふ物でもないから欺されたと思つて實驗して下さいと。

白くなる道理は何と考へても有るべき筈は無いが、乾燥せる皮膚を幾分か滑澤にする効は確に有る。小兒老人には



廢物利用法として之を沸し、夏などは行水に使つた方が宜からう。

◎白色法　其十四（豆腐殼）

粹人考一考して曰く、もう一つ知つてゐます。その法は

卯の花（豆腐の殼）

を顏に塗けては洗ふことを續けてる中に、年月の進むに從ひ艶の美くなるは言ふまでもなく色も亦白くなることを保證いたしますと。

これも米泔汁と殆ど同一の効はあれど、色を白くするとは更に理由の無いことである。大方色を白くすることに煩悶せる人を慰藉する爲に善い加

減な事を言つたものであらう。

◎白色法　其十五　（砒石劑）

砒石劑

砒石劑とは如何、曰く現今主に用ふる所の物は亞砒酸と法列兒水との二品である。亞砒酸は著名の毒藥で、化學的に言へば、三酸化砒素、或は無水亞砒酸で、極めて少量を內服すれば、始め食道及び胃に於て温感を生じ、饑餓及び渴意を起し、心臟作用は增し且つ强くなるなどの良果あるとのことなれど、久しく續けて服むか、或は初より大量に用ふるかすれば、諸般の器官に障碍の兆を呈はし、甚しきは一命に關するものだ。而して之が効能は、醫師社會に於て二說に分る。甲は「確然たる良効なるものでないから、斯る毒藥を用ふるに及ばぬ」と撥ねつけ、乙は「變質强壯劑の親玉であつて、諸藥中でも嶄然頭角を表はせる有効なる藥だ」と稱へ、神經病者、頑固の麻剌利亞病、貧血、慢性皮膚病、淋巴腺腫などに頻りと用ゐてゐる。

そこで又、其の乙者の中には、亞砒酸は斯の如く變質劑で、而も皮膚に作用を及ぼすこと著しいものであるから、皮膚色の黑い人が左の分量に依て連服すると、次第に黑質を變じ白質になることを得と稱へ始めてから、佛國の婦人中には往々之を應用し始めるやうになつた。その用量は始め大量を用ひ、漸次減量せよと主張する說もあれど、それは危險中の危險である。それよりも用ゐるならば、最初極めて少量を用ひ漸次增量し、而も食事の直ぐ後でなくては宜しくない。用量の表を示せば、

日數＼分量	一回量	一日量
一週間	〇・〇〇〇五	〇・〇〇一五
二週間	〇・〇〇一	〇・〇〇三
三週間	〇・〇〇一五	〇・〇〇四五
四週間	〇・〇〇二	〇・〇〇六
五週間	〇・〇〇二五	〇・〇〇七五
六週間	〇・〇〇三	〇・〇〇九
七週間	〇・〇〇三五	〇・〇一〇五
八週間	〇・〇〇四	〇・〇一二
九週間	〇・〇〇四五	〇・〇一三五
十週間	〇・〇〇五	〇・〇一五

斯く少量より漸次增量するものであるけれども、それでも途中で消化障害或は心臟の鼓動が高まるやうなこ

とが有つたら、一時その服用を中止し治つてから、再び始めるが宜い。又其等の中毒病狀更に無くとも、十週間に達したら約十日間休んで、五週間目位の分量より繰返すのである。

法列兒水は亞砒酸末一分、重炭酸加僧謨一分蒸餾水十分を混せて製方したる液體で、生理的作用や効能は亞砒酸と異ならぬ用量は一日〇・〇五（一滴弱）より始め、漸次增量すること前者と同樣である。乃で右二者の處方を示せば左の如し。

▲亞砒酸〇・〇〇一五　還元鐵〇・一五　甘草羔、亞拉比亞護謨漿各適宜
右三丸と爲し食後一丸宛



▲法列兒水一滴　桂皮水五〇・〇　水五〇・〇
右一日三回食後分服

▲法列兒水〇・〇五　桂皮水五〇・〇　水五〇・〇
右一日三回食後分服

余の經驗＝＝『色が黑くて困ります。何うか亞砒酸の處方を與へて下さい』と切に賴んで來る人の中で、健康な人には悉くその請を謝絕し、薄弱な人には第一の處方に依て、少心翼々連服せしめた者が數人有る。その中で、或癇癖な女は、二週間續けたけれども、更に効が見えぬ所から、一時に四日分を頓服して中毒を起し漸とのことで命だけは助かつた。乙は余の指揮通りを守つて連服したれば、大に健康にはなつたれど、顏色の黑さは從前通

りで、黒は矢張黒だ。丙は從來よりも黒くなつたやうだと、不平を溢してゐる。されど余は初より保證して勸めたので無いから、余に責任は無い。丁は白くはならぬが、幾分か赤味を帶び健康相になつた。戊は一度分の處方を持つて行つたきり一年餘り來らなかつたが、或日突然來りて「お蔭で大分白くなりました、實に有難うございます」と過分の謝金を呉れた。されど、余はその謝金を返して曰く、「貴女は亞砒酸服藥中に難產をなし、多量の血液を洩したる爲貧血に陷り、從て皮膚一般に蒼褪めたのである、白くなつたのではない。されば亞砒酸の力は毫も與つては居らぬ。然るに人の衰弱を見て謝金を受取るは竊盜するよりも罪が深い云々」と。その外色を白くする目的でなくて、神經衰弱者や腺病者などに變質强壯劑として連服せしめたのが幾人あるか數ふるに遑が無い。そこで先方は無邪氣で居るけれど、余の方では色が白くならぬか知らと、常に注意してゐる。が併し何うも白色劑になるとは思はれぬ。

右の通りであるから、先づ白色法は無いものと諦めて頂きたい。されど余は他日、確實なる皮膚艶麗法を責任を負うて論ずる積である。

衞生顧問

（いゝ面皰の療法）問 面皰を藥で治す方法を敎へて下され。（緋鯛にきび女）

答 この問には屢々答へましたが、今回又非常に多くあることなれば、茲に簡單なる方法を記しませう。

ヘットを以つて皮を軟化しおき、齒刷の刷子を石鹸水に浸しては擦り、然る後酒精で洗ふが宜い。ひり〱沁みるけれど、治ること妙なり。

▲伊豫の一女へ——前答を試みられよ。

▲大阪府のＨＩ生へ——酒精は顔に塗けても害はありませぬ。

（いゝ汗疹の療法）問 妾は非常の汗性にて俗に申す「汗も」のため、苦しみ居申候その療法を。（齋藤 アセか女）

答 豫防法としては、衣服身體を清潔にし、發汗すれば之を拭ひ去り、且つ屢々冷浴溫浴を實行する位であるが、斯うしてゐても發する場合には左の藥を、目の荒い布片に包んで、其の部を叩くが宜い。

[illegible] 一〇〇　[illegible] 三〇〇

（月經不順の療法）問 本年二十歳、十六歳より月經不調にて、隔月又は三月位に經行あり身體は肥滿して居ります。何卒その治療法並に藥法を御教示下さい。（北海道肥滿女）（兵庫縣岡萬女）等。

答 この問も毎月五十を下つたことが無い。故に屢々答へたこともあれど、更に新讀者の爲に答へておきませう。類々月經の不順は身體に幾分の病氣がある所から來るもので、その病根を除けば、月經も亦自然に規則正しくなるものである。されど中には身體の何れの部分にも故障を見出すことが出來ないで、唯月經だけが順當にならぬのもある。斯る人は（一）運動をする事（二）精神を愉快にする事（三）便通を調ふる事（四）光線に觸るゝ事（五）毎夜寢際の腰湯をする事（六）月經の有るべき一週間前より左の藥を試みる事

蘆薈末、[illegible]　甘草末　各、五〇

右混和して百五十丸となし、朝夕二丸乃至三丸づゝ。

（妊娠と授乳と）問 生後一年六ヶ月の兒に、授乳中の所妊娠致し候、就ては何ヶ月頃まで授乳を續け居り候て差支なきや、又離乳後牛乳を哺乳器にて哺まざる場合には、如何致して宜しきや。（大阪府下るゐの讀生）

答 生後七ヶ月頃れば、追々離乳して育つものである、況んや一年六ヶ月に於てをや、妊娠すれば同時に授乳を禁ぜねばなりません。されば哺乳器などで、牛乳を與へるの必要はありませぬ。消化し易き流動體の食物を順々に與へて授乳を斷然廢せらるべし。

（母乳とミルク）問 本年四月、男子を分娩致し、乳汁少なき爲め、生後四日目から鷲印コンデンスミルクを飲ませ居り候處、五月中旬より乳房を啣ましむれば、鬼にでも逢ひたる如く泣きわめきて飲みません、ミルクなれば喜んで飲みます、されど發育甚だ不十分に候何卒ミルクの飲用法、及び、母乳の多く分泌する法を教へ下され。（和歌山縣岡糸子）

答 コンデンスミルクを以て育てるには左表に依て稀釋せねばなりませぬ。即ち

月	ミルク	水	月	ミルク	水
一ヶ月	一	二三	七ヶ月	一	一六
二ヶ月	一	二二	八ヶ月	一	一五
三ヶ月	一	二〇	九ヶ月	一	一四
四ヶ月	一	一九	十ヶ月	一	一三
五ヶ月	一	一八	十一ヶ月	一	一二
六ヶ月	一	一七	十二ヶ月	一	一一

但し、水は一旦煮沸したものでなければならぬ。母乳を多く分泌せしめんとするには、乳汁の分泌せぬ原因を探り、原因に應じて處置せねばならぬ。藥品としては歐洲各國で古來左の處方を素人療治として用ゐるのみならず有効無害なれば掲げておく。

假性麻僂涅矢亞　二・〇　茴香　一・五　白糖　適宜
右分三包一日三回一包づゝ。

（皎肌の療法） 問 身體一般殊に下肢は皎膚に候が、之を普通人の如くに、滑らかにする方法を教へ下され。（紀州の蜜柑女）

答 漢方藥なれど白芷といふ藥入瓦を粉末にし、僞里般林百丸と善く混和して、一日に三四回づゝ一ヶ月も塗れば、美事に治るさうである。

（病人と梅干） 問 病人に梅干は、誰が定めたとなく規則の如くに古來なつてゐるやうですが、その効否如何。（土佐の姉病生）

答 その酸味は幾分か胃の蠕動機を刺戟し、食欲消化を促すものなれば、病人に與へて有効無害なれども、なるべくは湯煮として皮を剝き取りその肉のみ與ふるが宜し。

（肺病豫防法） 問 親類朋友などに、肺病の人有之、交はらぬ譯にも參らず候が、之を傳染せぬ豫防法を教へ下され。（神田の肺病嫌）

答 肺勞患者の室内、器具、夜具、衣服等には、肺黴菌の附着してゐる恐れがあるから、之に接するには可成呼吸機械を以て鼻口を蔽ふが可なれども、これとても必ず安全といふべからず。されば近寄らざるが最も宜し。肺病人の住んだる室、又は家に轉住する場合には、一千倍の昇汞水を用ゐてその内外即ち天井、柱、障子等に至るまで消毒すべし。疊の如きは日光消毒を行ふが最も簡便である。親類又は朋友にこの病あつて、看護等を爲さねばならぬ場合には、肺毒の散亂せぬやう二十倍の石炭酸水を壺に入れ、この中に喀痰せしめねばならぬ。患者の器具衣服、手拭等は熱湯に浸して消毒し、食器の如きは凡て嚴重に特別にし、使用後は必ず熱湯を以て洗ふこと肝要だ。次に我が身體を極めて强壯にしておけば、不幸にして肺黴菌を呼吸しても、黴菌は痰と共に吐出されて傳染することが無い。

（子宮内膜炎の徴候） 問 本誌上にて子宮内膜炎の療法は度々伺ひましたが、一體本病は如何なる徴候を顯はすものに候や。（甲斐の富士根女）

答 急性と慢性とあるが、急性の方は惡寒に引續いて熱發し、腰や腹が牽張られるやうに痛み、これより子宮にも痛みを覺え、膣部が紅く腫れ、薄い水樣の物を漏し、後には黄色の濃い液體が出るやうになる。慢性の方は、惡寒も熱も出ぬけれど、多量の粘液が漏れ、子宮口に潰瘍が出來、月經が多量になつたり、或は少くなつたり、或は閉止したり、或は月經時外に出血したりして、姙娠することが甚だ困難となるのみならず、治療の方法が惡いと、次第々々に身體が衰弱して痩せ、精神は鬱々として僻み、呼吸ぎれがし、食欲進まず、心臟の動悸が高ぶり易く、直に生命に關係は無いが、長命は迚も覺束ない。一刻も早く治療を受けねばなりませぬ。

（月經困難症の處置） 問 私事十五歳の時に、始めて月經を見、今年二十八歳に至るまで、月經時毎に下腹が劇しく痛み、腰から膝までにも影響し揚句に頭痛を催し、果は飲食物を吐くことさへもありますそれが爲か、姙娠も致さず候が如何に處置すれば宜しきものに候や、御

垂示を乞ふ。（安房の農漁女）

答 先天的に子宮の頸管が狹く且つ小さいからでせう、果して然らば專門醫に就き、子宮頸管大術を施して貰ふが宜し。姑息療法としては膣部に濕巴布を當て、左の處方藥を服んで試ますか。

繖草丁幾四・〇　阿蘭丁幾三・〇　葛斯篤留謨丁幾二・〇　單舍八・〇
水一〇〇・〇
右一日三回乃至六回分服。

逆食症に就て **問** 十六七歳の頃より食物を牛の如く反芻する癖あり如何にすれば之を止めらるゝものに候や。（北越の持病女）

答 診察せねば何とも斷言は出來ぬけれど、察するに輕症の胃擴張であらう。又中には食後直に運動したることが原因となるもあり。何れにしても食後一時間は靜止して、然る後徐ろに運動するやう實行せられたし。藥用としては、

含糖百布聖　三・〇　ヂアスターゼ　〇・三
撒里矢爾酸　〇・一
右分三包一日三回分服食後一包宛

は却々効あることを實驗せり。

緩和軟膏の義 **問** 嘗てお示しになつた白髮染の處方中に硝酸銀二瓦炭酸安母尼亞三瓦緩和軟膏六十瓦とありますが、此の中緩和軟膏を何處の藥店にても知らず候が、これに代用する物を是非御教へ下され。（横濱のたれ）

答 緩和膏とは之に接觸する身體部分を軟める目的となす所の藥物の總名であつて豚脂・蠟・牛脂・刺納林・華攝林・巴拉賓・備里設林などは皆緩和軟膏となるのだ。されば緩和軟膏を交へられても宜いのである。之を知らずして藥劑師になられる答は無い、察するに貴女の買ひに行かれた藥舖に生憎藥劑師が居なかつたからであらう。

灌腸器使用法 **問** 灌腸を一人にて行ふ法且つ溫湯にて致すものに候や如何、御高教を願ふ。（山里の無學女）

答 灌腸器をお求めになればその使用法も自ら解るであらうが、簡單に説明すれば、その金の喞筒部を藥液の中に入れ、金の注射部を肛門に入れて固い護謨の部を手で、締めたり、緩めたりすれば、藥液が肛門に入るのである。而して注射部を肛門に入るゝ前に油を塗つておかればなりませぬ。藥は大抵微溫湯で溶すけれど、その藥の何たるは目的に依て違ふ。貴女のは何の目的に灌腸せらるゝのか今一度詳かに記してお尋ねあれよ。藥の分量から微溫湯の分量まで敎へて上げませう。

茶に就て **問** 昨夜入れた茶を今朝になつてまた出るとて飲むは毒になるとか、又一器に入れて三年も經つた茶は毒藥に變ずるとは何れも道理の有ることに候や。（新潟縣の好茶女史）

答 昨夜入れたる茶を宿茶と申しますが、宿茶は多量の鞣酸が浸出せられるのみならず夏などは腐敗する憂があるから飮まぬ方が宜い。又一器に入れ三年も經つた茶は如何なる毒藥に變するかは知らねど、その器にして少しでも空氣の入る以上は黴が生へて有害な物になるに違ない。

まれば最も新しき物を飲食するが衛生の大道である。

卵の成分防腐法等に就いて

問 鶏卵の黄み白みは如何なる性質の物に候や、之を生中熟煮焼何れが最も効力あるか。腐敗してあるかゐないかを鑑定する法。及び腐敗を防ぐ方法等御教へ下され度。（北豊島の愛讀者）

答 卵黄は主に脂肪質から成り、蛋白は主に蛋白質より成る。然るに病人には蛋白が消化し難いといふことを聞いて、ピン〳〵としたる健康者が卵黄のみを食して、蛋白を捨つる者がある。實に滑稽の至である。卵々蛋白は身體の大切なる筋肉を造るものなれば、兩者相用ひ始めて卵の効用を完からしむるのだ。次に病人にこそ生とか中熟とかの必要あれ健康者には煮て食べようと、焼いて食べようと、滋養の如何には何等の關係ある譯では無い。次に卵を日光又は燈火に透して見て、暗色の點があつたり、不透明であつたり、又動かして音のするもの、又は水中に入れて浮ぶのは、何れも腐敗に傾いてるか或は腐らうとしてる兆候である。次に防腐法は蠟を一面に塗つて、その尖りたる方を下にして、穴の開いた板に嵌め、風當り宜き北窓の許に吊しておけば、大に腐敗を防がれるものだ。何となれば卵の殻には微細なる無數の氣孔があつて、空氣はこれより卵中に入り、空氣中の黴菌をして、内部を腐敗せしむる所を蠟を塗つてその氣孔を塞ぐからである。

口内炎か舌炎か

問 三月上旬より舌一面に糜爛し、十分なる食事洗浴も出來ざるにより、治療を受け居れど、今日まで全快せず、適當なる療法をお教へ下され。（肥前の愛讀子）

答 貴女の外之に類似の質問は都合九問あれど、皆本誌者を詳しく書いて無い。故に口内炎であるか、黒毛の舌炎であるか、確たる事が了らぬ。兎に角舌炎とすれば、亂剝法の手術を受けねばならぬ。口内炎とすれば、鹽剝或は硼酸の含嗽或は硼酸綿の塗布も必要であるが、今一應御地の醫師に診察を請はれよ。

問 産褥熱に罹り、先月治り候へ共、以來口中の方々舌までに小さな白點が一面に生じ、之を爪にて剝せば取られ候へ共、又生じ、口中は焼けるやうな感覺を生じ、その爲か少々下痢し、水落が時々痛みまして困り居り候、當地の醫師は鵞口瘡なりとて、その療治致され候へ共、治らず、人々の申さるゝには鵞口瘡は小兒の病にて、大人にあるものでないと、本當でございませうか、何卒その療法御教示下され度候。（涼岸の■岸女）

答 容態を詳しく書いてある。諸姉も之を手本に致されたいものだ。之を讀むと原因から現時の狀態までが、眼に見えるやうである。即ち産褥熱が原因で、オイジューム、アルビカンスといふ黴菌が口内に生じたのであるといふことが了る。此は小兒に多くある病なれど、大人とて之に罹らぬとは申されず。罹れば右の如き病狀になつて、下痢したり胃痛があつたりするものだ。療法は（一）喫煙飲酒を禁じ、（二）飲食後は必ず水に浸せる清潔なる布片を以て拭ひ、（三）常に氷を含み、（四）頸の周圍に濕布繃帶をなし、（五）2%位の硼酸 液を塗り、（六）2乃至3

父の薬水を以て一日三四回含嗽すべし。若し此等の療法は御地の醫師が指導して居らるゝのであらうから、醫師に依頼して居られたら、日ならず治るでせう。

問 昨年の夏より下唇の周圍が爛れ、一見非常に厚く赤くなり、水が滲みます。これに就き諸所の新聞や雜誌に幾度も質問したれど、皆々答へて下さらぬのに、失望してゐます。未だ全く妾が心を哀れと思召して其の療法を御教へ下され度。（岩手縣伊藤まつ子）

答 此の文面だけでは、不得要領であるから答へぬのでせう。何が原因になつたのか覺えはありませぬか、例へば熱い物を食べてからなつたやうだとか、或は歯が障つたとか、或は毒蟲に刺されたとか、或は水銀劑を服んだことがあるとかの覺えがありませぬか。何れにしても外科醫に就て手術を受けられよ。姑息療治としては沃度丁幾を塗つて見るのですが、故障してる中に重くなると容易に治りませぬぞ。

右にて口中の病十二問は悉く含まれてゐる。

月經が長びく **問** お恥かしいことでございますが、月經の繼續期三日程で、後二日も休んだり、又一日有つたり、或は四日目に有つたり、甚だ長びく時は、五回もございます。それが爲か、神經は高ぶります。何卒長引かぬ法を教へて下され。（三重縣林實輝子）

答 （一）常に臍下腹から股へかけて温包してる事。それには腹卷も必要なれど、其上猿股着けて居れば尚一層宜い（二）平生に運動をなして血液の循環を宜くする事（三）肥過ぎてる人は痩せるやうにする事（四）痩せてる人は肥える法を講ずる事（五）精神を過勞させぬ事（六）便通を整ふる事、即ち一晝夜に一回宛便通が規則正しくない時はその療法を醫師に就て受ける事（七）入浴を怠らぬ事（八）神經的の病氣あらば其先に治する事（九）手前療治の通經劑或は血の道劑などを無暗に服まぬ事（十）家内和合睦まじく暮す事。

月經時定らず **問** 一寸お尋ね申します。身體は健全ですが、月經が定まりませぬ、打捨て置いても害なきや。（大阪の萬龜女）

答 身體に何等の故障無くば打捨ておいて可なり。

月經中止 **問** 本年二十歳十五歳に始めて月經を見、三年間規則正しく有り、それより今日まで閉止して居りますが、身體に少しも異常ありませぬ、打捨ておきて宜しきや。

答 打捨ておいて可なり。

無月經は害なきか **問** 本年二十五歳、人樣は月經と申すもの有るさうですが私は未だ嘗て一度も有りませぬ。十九歳の時に母が心配して婦人科醫に診察を受けしめられ、恥かしながら、診て頂きましたが、身體の發育極めて完全なれば後日有るだらうとの事。その翌年結婚致し二十三歳の時、女子分娩致し候へ共、矢張り月經を知らず候。不思議の身體なりと姑も母も申し居られ候て、何となく不安の念に堪へませぬ如何致して宜しきか。（東京府無月經女）

答 身體健康で、發育完全の婦人が、一生涯月經閉止などいふは稀であるが子女を分娩してから、始めて月經を見る例は往々ある。某婦人の

如きは穴間も分娩し、漸く三十一歳にして始めて懐妊した人さへもある。故に貴女も早晩有るに相違なければ、不安の念を起すに及びませぬ愉快に月日を送られよ。

月經閉止と妊娠 問　去る五月結婚致し候處、毎月廿日前後に有るべき月經が今に何の徴候もこれなく、一同懐胎ならんと申され候へ共、確信致し兼候。先生の御意見承り度。（伊丹の新夫人）

答　妊娠すれば月經閉止が伴ふけれど、月經閉止したからとて必ずしも妊娠とは言へぬ。而して妊娠一二ヶ月の診斷ほど六かしいものは無い。況や單簡な文句を書いた葉書の墨色に依て、易者的の診斷を下すに於てをやだ。

（波の千鳥）（福島縣十九歳女）等へ――（三重縣松葉露子）に答へたる十ヶ條を守られよ、月經不順も月經少量も皆治ります。

月經と白帶下 問　年齡二十五。幼時より身體弱し。十二三歳より白帶下あり。月經常に不順。二十一歳結婚。其後ヒステリー症に罹る。少しの事に泣く、悲しむ。一昨年春頃より月經前後に子宮出血あり。入院二ヶ月にて出血止む。白帶下は洗滌すれど止まず。後月經五六ヶ月閉止す。時々腹痛す。ヒステリー益々募る。昨年八月女學世界に書かれたる我が家の温泉中なる、鑛泉の沸し方及び何か宜き治療法を御教示下され。（愛知縣つみ子）

答　鑛泉の沸方は、精製硫酸鐵五十瓦食鹽六十瓦硫酸曹達九十瓦を水二石中に入て沸すのである。水を一石にすれば右の藥品は勿論半分で宜い。一石あれば全身浴の出來るものである。貴女には最も宜しからう一年も續けて行つて御覽なさい。その他に硼酸一瓦を個里設林一丐に溶し、其中へ脱脂綿を浸した物を少しづゝ子宮の方へ挿入して試られよ。月經の不順は子宮が治り、身體が整へば自ら規則正しくなるであらう。又ヒステリーも子宮の全快と共に消滅しませう。何しろ子宮が原因をなしてるやうだ。御地の醫師は何と言つて居られますか。

蘆薈葯剌巴丸 問　蘆薈葯剌巴丸は大阪の何處に賣つてゐますか。（大阪市悩れ女）

答　大阪の少し大きな藥店ならば、何處にでも賣つて居ります。尚その製法を申せば、蘆薈末葯剌巴石鹸末甘草末の三品各等分に混ぜ、大約〇・一の重量ある丸藥にするのである。一回二丸づゝ、朝夕飲めば月經不順の藥となる。

薔薇油が無い 問　薔薇油を賣る所お教へ下され。（香川縣尋ね人無經）

答　三都の藥店ならば何處にも賣つてゐます。新しい薔薇の花に水を和ぜ、之を蒸餾して得たる揮發油である。之を塗ければ色を白くするとの說もあれど、信ぜられぬが、香の芳しいことは受合である。

龍眼肉に就て 問　龍眼肉を一日に二匁づゝ三回に用ふれば、一ヶ月位で身體肥たるものだと、或書にありましたが、果して然りや。（攝津なでしこ女）

答　余は未經驗なれど、道理上然ることなしと信じます。

撒里矢爾酸曹達の異名 問 胲薬を買ひに行きましたら、撒里矢爾酸那篤僧謨を呉れましたが。同薬でせうか。又白糖とは白砂糖でありますか。(福井縣の百姓男)

答 然り。尙其外撒曹。水楊酸曹達、水楊酸那篤倫(那篤倫も那篤僧謨も曹達も同じ)水曹、楊曹などの別名がある。日本藥局方の白糖は精製したる白砂糖で普通のとは違ふ。けれども普通のを代用して差支ない。

右の外澤山有るけれど餘り頁が多くなるから他日答へませう。

診察を受ける心得 問 醫師に診察を乞ふ心得をお聽かせ下され度。(東京の歴患者)

答 醫師に診察を受ける法――(一)前醫の惡口を言はぬ事。何の利益なきのみならず時間を空費し、且つ現醫をして不快の感を起さしむ(二)職業年齢住居の有様を言ふべし。醫師の診斷上大に助けとなる(三)父母祖父母兄弟などの健否遺傳等を醫師の問に應じて包まず語る事(四)幼時よりの記憶に留まる病を言ふ事(五)現在の病の來歴を語る事、即ち何月何日に斯ういふやうになつて、それから今はこの樣に苦しい。而して便通は斯々、月經は云々、疼痛の有無、氣分の感覺、食欲の有無など醫師の參考となるべき事は詳しく話す事(六)原因と思ふことは必ず言ふべし。例へば斯樣に蕁が出來たのは、蟹を食べた爲ではないかと思はれますと言ふが如し(七)急病等にて往診を乞ふ場合には豫め病の容態を告げるが宜い。何となれば醫師はその準備をして行くからである。(八)他醫の惡口をする醫師は正義な醫師でないと思ふべし。例へば「手後れになつてゐます、今少し早ければ治療の方法も有つたらうが、まあ何たる下手な療治でせう」とか「彼は大學卒業したばかりで、何の經驗がありませうか、、」と言ふやうな醫師は却て藪であることを前以て知つて居らればなりませぬ。(九)富貴に諂ふやうな醫師に信賴してはなりませぬ。斯る醫師に「轉地したら何うで御座いませう」と尋ねると心の中に轉地の可なるを思ふも、轉地せしめては己の利益にならぬと考へ「溷地せざるも拙者の名藥で治しませう」など言ふものである。(十)同等なる醫師を同時に招くものではありませぬ、徒らに甲論乙駁の種になり、患者は惑ひ、醫師は赤此を寵めぬやうになるものです。





和歌

三宅花圃女史選

（天）旅　　京都　美智子

歌に繪に家なる母を慰めん
　名ところめぐる旅の宿より

評、優しき心ばえめでたくて。

（天）夕立　　岩代　遠藤耶子

露はかりかゝりてはれし夕立に
　草いきれするもりのしたみち

評、實景のままみゆ。

（地）　周防　小田龜代子

昼飯の種ともせんとて千草と共代に暑中月謝をたけるはしに

うつろはぬ波の花かも嬉しは草
　かきあつめたる筆のしつくは

評、ゆかしき趣余なるべし。

（地）草花先秋　　豊後　加納豊子

夏衣ぬきかへもせぬ袖垣に
　ほころひそめし秋萩の花

（地）秋野　　琴音

八千草におくしら露と身をかへて
　やとらまほしきのへの八千種

（人）夏やすみ　　紀伊　松島千枝

旅もせすふみもひらかで夏やすみ
　早くもすぎて秋たちにけり

評、あるべききまなり。

（人）秋山　　下谷　深田小［illegible］子

力なくすゝきそよぎてゆふつく日
　入る山のはのあはれなるかな

（人）墓詣　　松山　森川［illegible］子

亡き人の奥津城所来て見れば
　つゆ草さけり花筒のあたり

（人）海邊月　　静岡　河合［illegible］子

汐あみし人はかへりて月ひとり
　淡路をてらすすま磯のそら

（人）庭放虫　　名古屋　星野ふさ子

庭のおもにはなちおきたるすゞ虫の
　をり〳〵なくそうれしかりける

佳調

夕顔　名古屋　江口めい
さしのぼる月の影さへさしそひていよ〳〵しろし夕顔の花

失題　豊後　木村緑子
たみのひし稲田のはてにむらみえてけむり豊かにあさけたくなり

滞京五月雨　東京　荒浪清子
あまのたくもしほの煙たえはてゝ浦わさひしき梅雨のころ

初秋風　岩代　木口ゆき子
月桐の葉は白露のきわたちに裏ふき返す初秋の風

行舟夜已深　越後　野口よし子
白波の花を散らして行く舟の片帆に月の影しらみけり

朝顔　名古屋　江口きみ
朝夕になつくしゝ甲斐ありてまがきにさきぬ朝顔の花

失題　函館　石田きん子
雲の上に高くそびゆる不二の根はわが敷島の道しるべなり

朝顔　青山　高木すゑは
あさぎりのかすめる庭におりたては朝顔ひとつ白うさきけり

月　石川　木下紅子
遥かなる月眺むれは今むかしおもひ流さむ限なかりけり

月前雁　福井　池上小芳
江の南真くる雁井の一つらの雁おとつれて月静なり

折にふれて　新居濱　山崎くま子
名にしおふ若屋の瀬戸の灯も消し銀波にきらめく十六宵の月

高殿　美濃　梅川たか子
巻き上げしみすの緋房の風にゆれて舞の袂の花と亂るゝ

白百合　千葉　大野愛子
塵の世を遠くはなれて奥山にゆかしく咲ける白百合の花

しぐれ　岡山　富山千登勢
秋風の庭の芭蕉におとづれてしぐれ淋しくなやみなくふる

夏涼み　滋賀　山岡しげ
生き返る心地ぞすなる夕まぐれそよ吹く風に涼むかはゞた

失題　神戸　堀資子
うす霧のうつしゑとこそ見えにけれ雨に霞める沖つしまやま

ほとゝぎす　山口　藤井きくの
久方の月もさやけき夏の夜に青葉がくれにほとゝぎすなく

夏の月　長崎　天野春子
夏草の露の結ひて玉となり落ちゝる水にゆらく月かけ

題しらず　兵庫　野田時子
都人いさみにきませわかやとにほころひそめぬ萩の初花

音樂　秋田　佐々木恭子
乙女子がてなれの小琴かなづれは芝生のむしもなき出にけり

夏月　筑前　内野ひさな
夕立のふりにしあとのくもはれて光り涼しき夏のよの月

夏休み　静岡　石野豊子
十六夜の月をあひつゝはらからが縁に語らう夏休みかな

折にふれて　長崎　西村春子
どろ鉄はかたへに置きてせの君とめでにけるかな星川の月

失題　福井　吉田梅子

くゝとなく鴫の小足に文讀ふ人美くしき朝の窓かな

奈良に遊びで　大分　財前千鳥

さるさわのしつけふ池にすむ魚は世の荒波もしらてすむらむ

幽居蟲　佐賀　出雲よを

秋たけて夜ごとにむせぶ蟲の音にたもとつゆけし蓬生の宿

一夜ともし火の下にて　東京　黒部清子

むらすめに蟲の音きこふこの夜中を姉が形身の小袖とくかな

立秋　山口　末田竹子

桐一葉おつる音にそしられけるわか窓にたつ秋のあはれは

山井　美作　佐登千嘉子

落葉朽ちて汲む人もなき山の井に月は哀れをのぞき見るかな

秋雨　尾張　さみしきひと

こほろぎの泣くれもたえて夜もすがらまどうつ雨のさむき夜中かな

失題　本郷　藤田豐子

四つの袖ふりたへて來し玉川のむかしの夏ぞ戀しかりけり

折にふれて　横濱　鈴木まつ子

いつにてもかはらぬものはさやかなる月にむかしの涙なりけり

夏の山里　京橋　遠藤はる子

夕されば蚊遣の煙なびくなり端居涼しき小山田の里

夕顏　京橋　萬子

つくろはぬ賤が垣根の夕闇になほ暮れ殘る夕顏の花

郷に在りて故郷の君を戀ふ　大阪　山岡ふで子

心有らば君につたへよ我が慕ひふるさと過ぎむ加賀川の水

失題　横濱　吉川香都子

亡き母か遺墨のうたのおもはれてそゝろ戀しき秋の夜中かな

失題　熊本　石原朱泉

秋の夜や親にきせし綾衣の美き香沈みて村雨のふる

失題　牛込　遠藤義子

橘の花散る里をほとゝぎすたちかへりゆく五月雨の空

夕立　芝　村井八重子

たちまちに一村雲のうきたちて浮世を洗ふ夕立の雨

秋の雨　函館　靜田なろ子

をやみなくのきに小雨のをとづれて哀れ身にしむ秋の夕暮

夏の歌の中に　岩代　遠藤邦子

こずゑふく音はかりたに涼しきを園にもかぜのあまる夜中かな

百合　熊本　安田文子

姫ゆりの花もまじりぬ夏の野はこゝろして刈れ里のあげまき

水邊蛙　讃岐　森君江

せき入るゝ苗代小田の水口を我もの顏に鳴く蛙哉

庭の萩　備後　渚子

ましゝ世に父の植ゑにし萩の葉に今年もつぐる秋の初風

なでしこ　滋賀　古田濱華子

昨日今日なげき沈める吾の身を慰めくるゝなでしこの花

夏富士　靜岡　中村志賀子

ふりさけて見るめもさむしみる月のてるひにみかく富士のしらゆき

旅のうたの中に　東京　飯田榮子

わき出つる木かけの清水一村のいのちさゝゆと樂はかたりぬ

失題　筑前　ひで代

美しきみどりの森を動かして袖にさゝやぐ朝の風かな

すゞ蟲　安藝　日下かず子

うゑこみのかなたにすたくすゝ虫の初音をきゝぬわき立つらしも

亡母上初盆會にて　豊前　賀來文子

さだめなき世と思ひつゝ今更にさだめなき世のかこたるゝかな

夏木立涼しきかけに休らひて三年ぶりなる友と語りぬ

失題　愛知　福島田鶴子

今月貴行の御繪をみて　岩代　法子

つれともはみえれとそれよなとめ子の繪とあふみて枝とたのみて

萩　美作　性全紫女史

露しげき萩吹く宿の夕風におつる涙もとゞめかれけり

○　豊後　江口波津子

滿ち潮や華やぐ島の夕照りを横りて歸る白帆幾むれ

折にふれて　河内　田中八須子

波風のあらき浮世にくらふれは八重の汐路もわたりやすけれ

雨後月　本郷　西岡古代子

夕立は峰のあなたへすき去りて庭の梧桐にやどる月影

失題　長崎　倉田まさ子

夕立の雲吹き拂ふ山風に下葉涼しく啼く蟬の聲

夕立　埼玉　土生津つき子

消えのこる雲間に月の影さえてしつく涼しき夕立の空

夏草　伊勢　佐々木らく子

まのあたりさくりあゐかん此の夏は文にのみ見し古きいしすゑ

蓮　鳥取　榎本鈴子

にこりなき心を花の色に出て匂ふはちすの清くもあるかな

郭公　名古屋　土屋たま枝

さみだれも今よひは晴れてめづらしく月になくなり山ほとゝぎす

河骨　熊本　安田文子

涼船棹さしのぼる岸の邊にゆらぎて匂ふ河骨の花

夏花　東京　白井春子

夏の日のかたふくかたにかたふきていろ美しきひまはりの花

母なき子　河内　竹内久子

立居にも父のあと追ふ幼子を見れは悲しも母なしにして

夏の野　麻布　宮城友子

ひるかほのゑまひやさしき夏の野にあかきゑひかさうつくしき哉

白百合　長野　荻原ふく子

ひたなけゝる君がせをなでなぐさむる心地して見る窓の白百合

折にふれて　岩代　遠藤ひさ子

よきてたに絶ぬあつさの日さかりを參うつ神のおときこゆなり

朝風を讀みて　大阪　大村優子

荒海にそゝぐ信濃の流れ口のぼる白帆に朝風ぞ吹く

胡蝶をあはれみて　越後　石黒利由子

夕立にぬれし胡蝶をあはれみてわかもつ傘をさし與へけり

初秋　磐城　秋子

貸しや札とり拂はれてお向ひに灯ともされぬ初秋の宵

弟の特待生となりけるをよろこひて　大分　財前千歳

ひらうなは如何なるにほひはなつらむまたつほみなる庭のしらうめ

妹のこたひ韓國に行く別れを惜しみてよめる　市ヶ谷　たしろいと子

ぬらしつゝわかつ袂のをしけれとまた逢をりを待や渡らむ

濱邊　丹後　旭のりゑ

水戸しめてまたうがれいつる夕顔や袂にかゝる露のまづかせ

納涼　埼玉　島田いま子

あつき日も岩間をくゞる清水の音すゞしかりける

夕顔　近江　内田絹香子

暮りぬる野守が庵の小夜まくらわすれずぬ淋しき秋のともしすり

月下琵琶　三重　戸富靜子

更けて月はすゝめども夕立のなごりの木々にやどす白玉

午睡　東京　白井文江

やゝしばしまどろむまゝにけり窓の月ちかき蝉の過く音に

夏月　徳島　大久保梅子

吹く風に軒てゝ涼し呉竹の簾にうつる夏の月影

白菊　紀伊　向井いく子

朝な夕なつもかよふ女のまごころあらそへてぞにほふ園のしらぎく

秋夕　静岡　原田梨園

何ゆゑにかなしき秋としられねど夕風ふけば涙おちけり

獅子に行きし時詠める　京都　松井芳子

獅子の音のかよふ獅子の寝床になみのつゞみしらべてけり

霧　山口　末岡貞節子

吹く風にゆられながらもはらす露のおきまじとする萩の白玉

秋の日　和歌山　中嶋秋子

秋の日の奥家の花に照ずりて七草共殿ぶ面わやつれし

白百合　信濃　青木露

けふも又かたよ遊びて五葉まむ一輪咲ける白百合の花

虫　信濃　藤木於才

野に鳴く虫ひとまよりしうき秋の寂び音に鳴く虫のすゞ虫

紅葉　竹原　岩田夢子

ときはなる松の色まへ染めしかと見るはかりなる峰のもみぢ葉

泉　三重　水谷郁子

耳なれし清水のおとも夏くればこゝろにくまぬ日そなかりける

折にふれて　岡山　兵藤敏子

木ぬの下ほと走る音清澄川鮎得て帰る夕まくれかな

螢　大阪　渡邊花子

漁殿の所のともし火かせにゆれて下ゆく水にかげそうつれる

夏の月　徳島　みどり

漁殿や浦の娘の笑顔して照まず夏の月かな

夕顔　高崎　華園女

なまめ千が草つむ袖にこぼれけり風のなみだかあはれしらつゆ

折にふれて　埼玉　荻野くに子

故たふひ松にいこひてうたゝねの夢に懸しき人を見し哉

涼　越後　伊倉田鶴子

しばしとていこふかけ茶屋川に涼ひて風に柳に吹そよく哉

涼風　前橋　渡邊松子

滝の音も近く聞えて青葉さすたにふところの風の涼しさ

蛍見　尾張　飯田かなめ

うまずらかひるにのぼりてわかひけるひくかまゝにもあそひける哉

月前彈琴　横濱　服部花子

琴の音のしらべまえゆく月かげにすまの松風しのばるゝかな

家々納涼　金澤　安原そと子

家ごとにいよすかゝげて涼むなり夕風そよげ人々のため

雨　尾張　きみしきひと

露すますみてらはあれて蓮むしゝ鳥羽城どころ蓮の花咲く

蓮　露　　大阪　松川すて子

風渡る池のはちすの葉より葉にこぼるゝ露のおとぞ涼しき

夕　立　　鎌倉　小倉家藤子

いかばかりわびしからなんまなびやのかへるに出あふ夕立の雨

笑　顔　　青森　三浦愛子

夕月夜庭の笑顔のゆらぎに露に匂ひし月の影散る

危篤なる電報に接して　　埼玉　鈴木もと子

悲しさのまづ先立ちぬ針がれの便りは露の命つたへて

折にふれて　　香川　三村早子

わけ入ればいよ〳〵遠くなりにけり神代ながらの敷島の道

水　泳　　四谷　松田春子

うなゐらの泳ぎもあきて浜砂路へ造りあげたる富士の山かな

蝶遊花　　熊本　栗畑みつ

雨ほそく庭の牡丹に傘させばしばしな蝶の出でゝ舞ひけり

夕　顔　　備前　児島鈴子

雲の上に立てる神あり馬と弓とる驟降りぬ夏の夕暮

夕　風　　小倉　武藤緑

都なる君が上など噂さと語りてすぎぬ濱の松原

庭前の萩　　名古屋　花岡二三子

ほこりがに垣の白萩さくみれば都のあしたの心地こそすれ

朝　顔　　東京　琴子

たより無き身をはまかきにもたれつゝほこり顔なる朝がほの花

夏　衣　　麻布　三浦美沙子

草の風近くそよぎぬ風鈴と身見る人の團扇の風に

夏　　韓國　波奈子

端居して月のひかりを仰ぐときひるの暑さはゆめとなりけり

月下花　　神戸　得村みれ子

月の夜の花のにほひをなつかしみ文よむ窓もすゞで窓に見

夕　顔　　三河　山田經子

すむやたれ夕顔さける竹垣のうちこそことにゆかしかりけれ

亡き兄を慕ふ　　茨城　金谷秀子

別れにし其日は又もめぐりきぬ遠きにし君やいつかへりこむ

夕　風　　牛込　平塚白百合

夕そらに山門たかし護國寺御陵のあたりほとゝぎすなく

女郎花　　靜岡　すみれ子

ふみかよふ野末の露の女郎花手折らぬ先にぬるゝ袖かな

夕　風　　長崎　小坂部鳳子

背なの子をゆすぶりながら賤の女のせこの細帯のほつれつくらふ

納　涼　　京都　四辻清子

端居して月をまつまの夕かぜにしばし夏をもわすれけるかな

祖翁の八十八賀に　　千葉　松元のぶ

いろかへぬ竹のみどりのふしごとに君がよはひのかずぞこもれる

池頭蓮　　大阪　西田きみ子

雨はれし池のはちすのたち葉よりうき葉にかゝる露ぞ涼しき

折にふれて　　神戸　今西操子

露の身の儚なき夢と知りながらなど空し名に憧れぬらん

松下泉　　神奈川　小川房子

立よれば暑さもよそに忘れ草生ふるふる枝のまつの下水

磯のうの花　　金澤　木下紅子

嵐山に垣のうの花咲きしより沖津白波色置ふらん

高樓の月　　東京　瀧子

高殿の宴ははてゝおはしまにさし入る月そ更け渡りける

樹上蟬　　あららぎ

けふもまたてる日あつしとあしたより樹の蟬のつけてなくらん

夏の月　　東京　竹下きよ子

白濱の砂に畫がきし松影は夏の月夜の畫繪なるらん

紅葉水に映ず　　德島　湯淺倭子

谷川の岩根のかへでもみぢして清き流れに姿うつせり

夏の朝　　埼玉　近藤ふち子

朝がほのほゝゑみそめしあけぼのに星かげうすきなつのそらかな

萩　　美濃　花橋はる子

白萩に細き野の路埋れて分け行袖に花は亂れぬ

入學試驗不合格の人を慰めて　　大阪　紫水

凄べかし夜中の嵐は世のならひ花一年のものにあらねば

折にふれて　　橫濱　鈴木まつ子

いまはたゞ憂きことのみのかさなりてすぎしむかしぞこいしかりける

我が子の歸省　　靜岡　石野くに子

夏休み君も忘れていとし子のかへりを門に待ちわびにけり

夏の月　　淺草　宮内春江

かけみむと雨戸をくればみじかよの月ははやくもかたぶきにけり

失題　　信濃　赤羽喜多子

池の面に咲き亂れたる白蓮の風に動きて匂かぐはし

蟲の音　　前橋　小松露子

鈴蟲の聲にあこがれ端居してにしにかたふく月を見にけり

待郭公　　牛込　胡蝶子

去年はとくきゝにしものをほとゝきすいつまでなかむはつれなるらむ

夕立　　群馬　桂木秀子

名ごりなく夕立晴れて涼みするはし居に夏を忘れはてけり

日課　　神戸　今西操子

よきにつけ惡しきにつけて日每とる筆のすさびぞせわしかりける

山居月　　羽前　大沼龜子

山深く浮世はなれてすむ宿のまどにさし入る月の影かな

折にふれて　　神奈川　飯田白露子

雨の日を外出もならでをさな子のむづかりつゝも睡にれにける

行路萩　　京都　三浦しげ子

蟲籠は子等にもたせて道すから尾花糸萩いざ手折らなん

月前琴　　同　人

一人たち二人とまりて妹か門月をあびつゝきく小琴かな

ひとりしづけく月を見て　　安房　大山まつ子

けかれなき光りに我身たえうせていつか來にけむ月の宮居に

夏期旅行しける時金山峠にて汗ながらによめる　　下野　吉村敏子

一里餘は蟬の聲なる峠路や口紅を忘れてくみしゝ清水

朝顔　　神戸　園子

朝戸出でゝねむりさまさむいろふかくまがきに咲ける朝顔の花

月夜の雁　　神戸　山邊きくの

吹きしなるみやまおろしにさそはれて月を橫ぎる雁の一列

送別　　新潟　須藤晋和

止まらぬ妹に似ませる君なれは花にわかるゝ心地こそすれ

失題　福井　吉田梅子

亡き母の手にいだかるゝ心地しぬ草を折しく故郷の野邊

撫子　神戸　足立あさ子

涼しむ露をうけてそ咲にける神の森のなでし子の花

水鷄　山口　末田貞節子

螢火をほそめて月のかけまてはおはしま近く水鷄なくなり

雨後夏月　千葉　吉野りう

夕立はいつしか晴れて木の間よりもるゝうれしき夏の夜の月

夏月　山梨　古谷喜代子

風ならで涼しきものは松かげの淸水にやどる夏の夜の月

暑中休暇過ぎて都にのぼる時　相州　岡部あい子

ゆめにのみ見しふるさとにひとつきをゆめとくらしてまたもわかれん

山路秋行　神奈川　内藤千代子

月匂ふ千草の露をふみわけてたどる山路に蟲の音しげし

郭公　新潟　木曾歌子

菩提寺にみ法を聴きて姉とふたり歸る山路にほとゝぎす鳴く

失題　姫路　尾田四鶴子

五百ひろの大白鐵の琴たてゝ涼しさを彈く夏の瀧かな

螢　長野　池田和代子

夏けぬるに黒川あたり螢狩せし歸りなるらん

氷賣　山口　末田竹子

めせ〳〵とすゝむる聲も涼しきは街にひさく氷なりけり

江上納涼　四坂島　渡邊梅子

くたけなん影さへ惜しき舟はたゝ涼しき月のさすにまかせん

渡守　在米　蘆澤なほ子

あつさをば水に流して河つ瀬をこぎわたる人やすゞしかるらん

折にふれて　信濃　松尾節子

河風に四つの穂をなびかせて歌がたり行く月草の堤

失題　西須磨　有村紫芳子

香たいて涙に君のみ名よへはたゝみあかしのかけそゆるさぬ

失題　河内　竹内敏子

朝がほのさくにまかせて眞芝垣とりつくろはぬ宿そゆかしき

濱邊にて　千葉　石崎錦

いそ松にぬぎしころもをかけおきて潮あみすなり濱のわらべ等

遊學　名古屋　廣瀬とみ

一すぢに學びの園につちかひてよき民草をおほしだてなん

蟲　函館　村田りよ

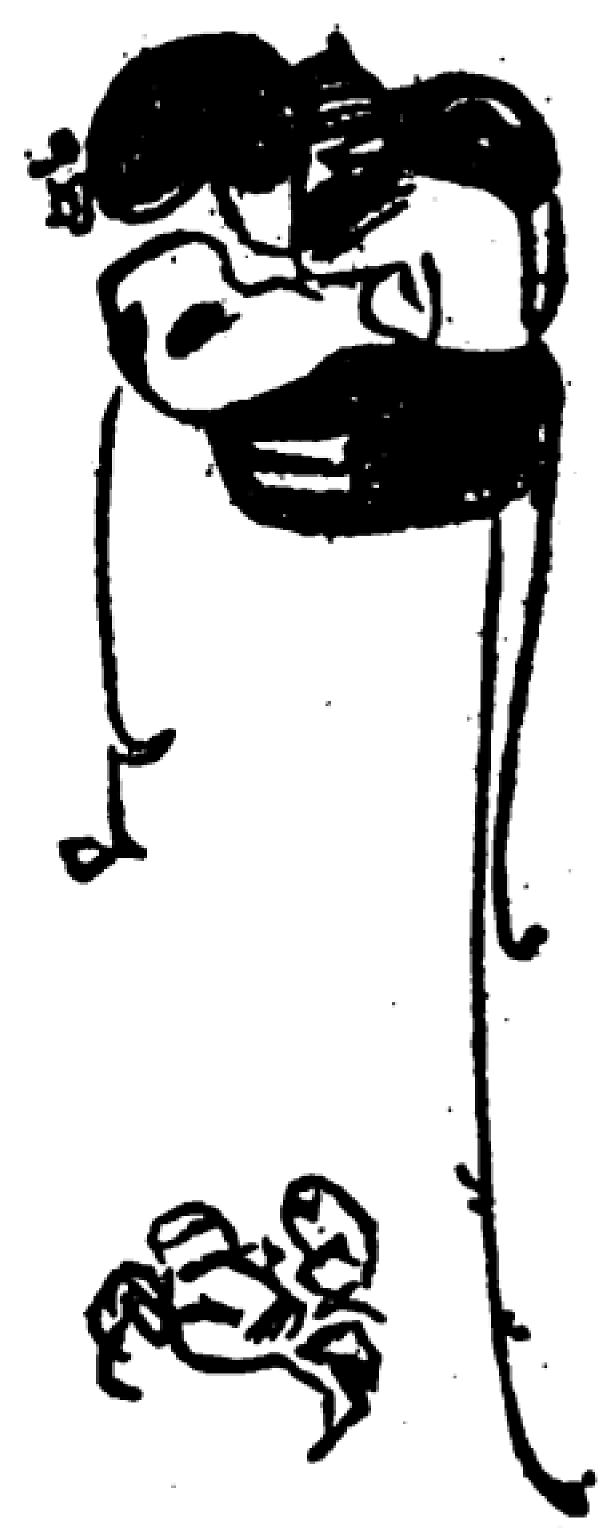
さま〴〵の蟲の音色を綾にしてまかきは萩の錦なりけり

夏季音樂講習會に入會してよめる　大阪　西村千代子

くろ金もとけなん暑さよそにしても學ぶ身そたのしかりける

◎櫻井女塾の料理講習

九月より毎週一回の西洋料理講習會を開く、第一部は火曜日の午前中に三時間位にして、主として妻君達か或は他の學校と時間の衝突せざる人の爲に實地に料理法を教ふるもの、第二部は金曜日の正午頃にして主として外國婦人と會食しつゝ英語を習ふを目的とするもの、第三部は土曜日の午後に三時間位にして、他の學校に通學中か或は其他の事故の爲に以上の二部に出席する事を得ざる人の爲に特に開くものなり。而して以上孰れの部を志望するも、料理の材料費其他の分として一ヶ月總計貳圓五拾錢を納むれば足ると云ふ。講習期間は凡そ三ヶ月にして、大體に通ずる事を得。（本鄕彌生町三番地）



短文

甲賞

避暑地より

神奈川　内藤千代子

懐しき御玉章飛び立つ思ひに拝見致し候、仰せの通り随分よく色上げが出來、これでも今年の御正月に藤紫の振袖を着た我身かと思へば、さすがに情なき感も起り候。毎日二回の海水浴は決してかゝさず、尚折々宿の娘達とまぢつて草刈や松葉かき等も試むる故、只さへ、きやしや立ならぬ指先の、やがて久々にてお琴の師をとはん時、琴爪はめるが恥かしからむ、それのみ心がかりに候、あの折靜子様も御一緒にとあれ程おすゝめ申せしに、どうしても伯母様は御聞入れ遊ばさゞりしが、今となつて思當り候。

甲賞

親切

伊勢　山川りやう子

朝から足が妙にだるい、其うちに頭がしく〳〵痛みだしてきて、目まひがする、之ではとてもおきては居られんから、お母さんに御いとまをねごうて、六疊の風通しのよい處へころぶやうに臥ころぶ、處へ兄様がいらつして、頭が痛むのなら先達醫師に、もむことを教へてもらつたから、さあ起きなさい、と右の手で前の處を痛いほど押して左の手で、ひたひを押さへて、二三度もんで、下すつた、之で少しく痛みが去つた、御禮を云ふて、また寢ころぶと、姉様が、いつのまにやら氷をかひに、やつて下さる、御粥を下さる、頭をもんで下さる、其れは〳〵親切にして下さる、今更ながらしみ〴〵と兄様や姉様の親切を嬉しく感じました。

乙賞

母のなさけ

北海道　伊佐敷清子

今日は何といふ暑苦しい日なのかしらと机にもたれてうと〳〵すると、山中さんといふお宅は此方ですかと、如何にも聞き馴れし聲がする、見れば國の隣の叔母だ、きのふ上京したが頼まれて來たとて渡されたのが洗濯せし羽織と、新聞紙に包みしもの、それに母よりの手紙、開いて見ればいつも變らぬやさしき水莖のあと、冷風たゝば此の羽織着よ、暑さあたり、食あたり、さては水あたりすなとて梅干迄もそへてある。

乙賞

別荘の友に

筑前　ひで代

漸くお日和になりました、朝顔の花は毎朝浴々として開きます、夏の暑さも今位だとほんとにいゝのですけれども、これからが思ひやられますよ。

みどり美しい松原のお住居、どんなに御結構でございませう、暮れては打水したお庭の草の香も心地よう、お部屋の青簾より洩れくるお琴の音などおゆかしさはと、幾百の煙突の下に瓦斯に埋れて住んで居る身の、御うらやましくてなりませぬ。

乙賞

女の子

福岡　永野朝子

やう〳〵乳ぶさはなれし頃なるに、はやいみじう姉様顔して、たれを見まねてか、父上の土産にたまひし京人形や祖母様のえさせたまひし紙びなをかず〳〵並べて、これは父様、これは赤子と、乳ぶさふくまするまねして、片言まじりに子守歌うたふなど、かぎりなくおかし。

丙賞

蛙

京都　美智子

行水をすまして草に水をやり、あした咲く朝顔の數をしらべて居ると、躑躅の影からいつもの蛙がのそ〳〵とあらはれた、早速さきのあまりの水をかけてやつたが、一向ありがたさうな顔をしない、そして始終口をぱくつかせて蟲をたべてゐる、悠々としてせまらず、どことなしに豪傑風のあるところは馬鹿に氣に入つたと御父様が仰しやる。

丙賞

紋付

壹岐　和田すみ子

御風呂をあびて浴衣にきかへ、お縁側で涼んでゐて、ふと、思ひついた、まあ、かう澄んだあの納戸色の空の様な地に、ちぎれ〳〵に漂ふ雲と、淨くぼーとした山を裾模様にして、さてあのまんまるな御月様を紋にした様な着物をつくつたらどうかしらと。

丙賞

留守居

麹町　なでしこ

縁がはに立つてぼんやりして居ると、今日の名殘りの蟬の聲がジー〳〵と聞える、隣のおぢいさんがまたうたひをはじめた、耳をすませば、何處からかラッパの音がひゞいて來る、時々電車の音がごー〳〵とかすかに聞える、前の植こみはもう噴嚙になつて、今日咲いた白桔梗がきは立つて白く見える、外を行く子供が大きな聲で何かうたつて行く、母様はどうなすつたのだらう、もうお歸りになりさうなものだ。

丙賞

濱茶屋

姫路　鈴木ふじ子

ゴーと後ろの松林が鳴る、妾の坐つてゐる廣闊には、澤山着物が脱いである、茶屋のお神さんは一心に氷をかいてゐるが、赤地に氷と白抜きにした旗が風に吹かれる度に其顔が見える、ほつれ毛が風になぶられて額にかゝる、太陽は波を射てキラ〳〵と光つてゐる、近くの家島が、日の當つてゐる所は褐色に、陰は濃紫に、劃然と彩つて見える、其前を白帆が通る、遠淺の先の所に、赤い頭が豆の様に列んで、其傍に船が二艘ついてゐる、船の中の白シヤツの腕が動いたと思ふと、暫くしてトン〳〵とかすかに太鼓の様な音がする、「中學校の游泳はほんとうに綺麗です子」「僕もやつたんだよ」と傍の若い夫婦連が言ふ、直ぐ濱際では肉色や、白色の海水浴衣を着た婦人が一様に大笠を被つて水につかつてゐる、子供はキヤツ〳〵と水かけをしてゐる。

同賞

臨終

郡山　花子

今日も梅雨模様のうつとしい天氣である、今は算術の時間で生徒は皆熱心に筆をはこんで居る、自分は、今朝別れた、友の上を考へてぼんやりして居る、キーと戸の開く音がする、友の家からの使であつた、程遠からぬ道を急ぎかけつけたがもうだめであつた、目も見えさうもない、口も動かない、あゝ之が別れかと思ふと、とめどなく涙が流れる、其内、醫者は注射した、五分ばかり靜かに目を開いた、そして辺りを見まはしたが、私の顔が見えたものか、急に私の名を呼んで手をにぎつた、そして泣いた、あゝ之が此の世の別れである、あゝやさしい聲も、美しい顔、もう見る事が出來ない。

或夜

甲府　そよぎ

窓越しの月が疊に紋をなして居る、こんな晩には兎角人懐しくなる、急にものしたくなつて燈火を付けて硯を引きよせる、集る小蟲が夥しい、書いて行く筆先にも、油を吸つて死んだのがくつゝく、バラ〳〵と障子に觸れて居たブン〳〵蟲が勢よく飛び込んで來てバツタとホヤにぶつかつた、ほつと暗くなつたと思ふと、蟲の羽根が焦げて居る、燈火は消えた、月の光はいよ〳〵美しい。

秋の夜

駿河　天野ふじ子

月は今前栽の梢に昇つた、さゝやかなる園ながら、男萩女萩が咲き亂れて、葉末の露は美しう煌いてゐる、窓の前には碧梧桐が五六本、靜かな晩で風さへ吹かぬ、何處かに蟋蟀が啼き出した、訴ふるやうな愁へるやうな聲が身に泌みる、やがて其の音が消えると、スーツと風一陣、木の葉は戰いで何か囁く、桐の一葉がズイと空へ舞上る、あゝもうほんとうに秋だと我と我襟掻き合せたとき、また蟋蟀がころ〳〵となき出した。

軒端の葡萄

名古屋　江口きみ

日頃はさまで心にもかけざりし、軒端の葡萄の蔓延び葉茂りて、所々に露したゝらむばかりの紫の房の、和風に吹れてゆらくはいひ知らず美

し、あはれこの實この露なくば慰るゝ眼のありなんものを、今は却つて涙痕の種となりしこそ悲しけれ、げに果敢なきは人の命なり花にやどれる白露の朝日を、待たぬそれにも似たるかな、我妹の運命はそれなりき、秋風もとのまゝに吹き、葡萄は昔ながらに實れども。あはれ去年の人は在らず。

茄子

府下　富美子

びろうどの様な美しい大きい茄子がやはらかい土にふれて居る、おいしさうなのを目籠に一パイ取つた、光チャンはこをどりして喜ぶ、それを小川で奇麗に洗つて夕飯の時に初なりだからとて、祖母様に差上げたら、大そうおいしいと言つて食べられた。

日記の一節

神戸　操子

いつもの如く炊事一切私が爲す、今日こそはと思つて居たが、さて手を下して見ると却々うまく行かない、御飯は賞められたが、お料理はしたたかお父様に冷笑された、次の日曜こそはと又も密に心に契ふ、夕方親しい友が見えたので、共に濱邊を逍遙す、友に別れて歸つたら遠路の友から消息が來て居た、繰返す事三度、郭公が泣く、涼しい濱風が頬をなでる。

白百合

奈良　大西恭子

白百合が咲いた、花は何か話たさうである、お池に寫つてゐる花の影に金魚がキスをしてゐる、花は岡先生がお自分で鍬を執つてお植ゑなさつたものだ、そして私と船木さんとがお手傳ひをした、「百合は別して可愛いねー、來年は早く咲けばよいが」と先生がいはれた事はよく覺えてゐる、花は咲いたが先生はこゝに居られない、此の世の萬事はわからんものだ、今し胡蝶は花を慕つて戯れてゐる。

夏の夕

東京　妙子

湯あみして浴衣に着かへた時の心地よさ、今日の暑さはまるでうその様、風鈴は涼風のまに／＼さやかに鳴てつゐる、月が出た、庭の草葉は葉毎に其光をやどして銀色の光を放つて美しい。

夜

栃木　絹子

床に就くと、柱時計がチーンと眠たさうに一時を打つた、女中部屋からは鼾さしりや寐言などが、丁度電話の混線したやうにゴチャ／＼と聞える。

目は益々冴えてどうしても眠られない、思はずホーと遣る瀬ない吐息をすると、蚊帳ごしに螢が一つ夢のやうにすーと納戸の方に飛ぶ、籠をぬけ出したのであらう、青い物凄い光りにふと亡くなつたお母様のやつれたお顔が空に浮んだ、と早鐘のやうに動悸が打つ、耳がシーンとしてかすかにおやさしいお聲が聞えるやう、螢は情無き人の仕打ちに疲れし身を、又も思ひ出の涙に泣き明す。

花守橋の曙

青山　酒井温子

名も美しい花守橋、さては清い小川も野も畑も森も濃い朝霧にふつくりとおほはれてゐる、水車場から流出づるゆかしい細いせゝらぎの音も、身も心もそゞろに引入れられる様で、思はず瞳をじつと凝せて たゞずんだ、空には淡い月が殘つて平和な里はほの〲と明けるのである、雜草の中に可愛いゝ撫子が一輪今咲きかけの半びらき、我が白き指にこき口紅の名殘の色のそれの様に。

まつよひ草

信濃　せゝらぎ

何といふやさしい名であらう、何となく想ひになやんだ人の面影がある、夏の夕ぐれ木の下やみに匂ふては伊香保の淑さんを忍ばせる。「あなた紀念に押して置いてよ」、淋しい悲しい身上話の後、友はかう云ひながら摘みとつた。あゝ昔なつかしい寄宿舎の窓、その友は今どうなつたであらう、花は年年咲いてゐる。

○

王子　芳子

月は細けれど、冴えし光を誇りがに、凉しき夏のよそほひを見ずやとばかり大空になげかくる様、たく蚊やり火のけむにむせつゝ斧ふり立て鳴く蟲の音、さら〱と葉ずれの音にばらりとばかり散る白玉、いづれかなかしからざらん。凉みの縁に浮世ばなしのおかしさうて、つい夜を更かしぬ。

行水

千葉　山口秋子

柿の木に着物をかけて靜かに浸がる、心持熱い、今日も暑かつたと思ひ乍ら、手拭でお湯をすくふ様にして身體の汗を流がす、ブンと蚊が來る、ぴたりと打つ、又ブンと、これではたまらないと飛び上がる、全身に月の光をあびて眞白に見える、小溝へ湯を捨てると、蟲の音がはたと止む、風がそよ〱と吹ひてたでの花が白ろくゆれた。

岡

大阪　木村はな子

やる瀬なき想を抱いて妾しは又岡に立つた、日毎夜毎の吐息は霧となつてかの君の、美ましき夢路を閉すであらう、三年の戀は今此にかゝる浮日の種を受ける爲であつたか、さても我が五尺の黒髪にくらべては、餘りに短き緣であつた、あゝつれなきは我が養父、偲ばるゝはかの君が身、思はるゝは我が身の行末、共に語らひし此の岡の、花も月も皆昔のまゝなるを、月澄める宵、空にそが懐しき面影を寫し給ずやと、西の空戀ふ妾が心は、はふり落つる涙にうなだれる。

親子三人

大阪　田宮輝子

母ア様もう寝ませうかと弟の久は言ふ、アヽと母様は御仰しやる、薄暗い洋燈の下で弟と妾は絵はがきの彩色を仕て居るのである、今日は天神様の宵祭りで、お隣の勇さんも君ちやんも良い着物を着て御詣りされたが、妾と久は相變らず斯して母様の手傳をしてゐる、今夜は嫌に蒸暑い夜で有る、と風も無いのに父上を祭り込てある神棚から榊立てが落ち

た、母様と姿は思はず顔を見合せた、御目は何やら奇しく曇つて見えた、弟は机を枕にもう眠つてゐる。

眞ちやん

牛込　高木きん子

此頃の暑さで眞ちやんは毎日水いたづらで夢中だ、今日も大へんおとなしいから又水いぢりかと思つてソツトのぞいて見ると、暑さとだるさで女中の清と仲が向ひあつて、仕事は膝の前にならべて、ゴツクリ〳〵両方でおじぎをして居る、其間へ眞ちやんが立つたりすわつたりして、両方の顔へお團子やらおひげやらを墨でかいて居る、やがて清の肩をゆすつてチイ〳〵臺所から居眠りするもんぢやないよと起すと、ハイ〳〵といつてしぶい目をこすつて起きたが、一寸仲の顔を見て、アラお仲さんと笑ひ出す、其聲で仲が目をさまして、又清の顔をみて吹き出す、眞ちやんは手をたゝいて笑ひ入て居る。

雨後快感

前橋　渡邊松子

久しく雨雲に隔てられて居つた赤城山も鮮かに儼然とした姿を顯はした、旭が足尾の連山の端より登し昇つて雨後の生々した青葉を照らすと、喧しい雨蛙の聲はばつたりと聞えなくなつた、子猫は嬉しさうに座敷から縁側を跳り廻つて、すだれの下から一寸顔を出して見せるなどなかなか愛嬌が有る、二階のおはしまに立寄つて向の井菲の家を見ると、屋根から煙の様に蒸氣が立昇つて居る、隣の板塀には早くも干物板が弥い切れを張つて立てかけられてある、庭には雨傘が乾してある、足駄が奇麗に洗はれて飛石の側に行儀よく列べてある、何れの家のはれつるべの棹も額に離いて、ざぶ〳〵洗濯物をする音が聞ゆる、庭の芭蕉が大様に扱いで、久し振りで濕り氣の無い心持のよい風が吹いて來る、と軒の風鈴が涼しい音を立てる、床の掛軸が聊か動ぎ、花瓶の檜扇の花がばらりと二ツ三ツこぼれた、靜に立昇つて居た香爐の煙は、風になびいて床置きの塑像の顔をかすめ、涼しく丸窓の方に揃れて行く、何とも言へぬ清々しさで有る。

避暑

廣島　小田ため子

宮島へ避暑に來てからと云ふもの、いつものお嬢様でも居られず、三度の食事は皆自分の手に炊て居る、兎角不馴なのでお米をといでもこぼす事夥しい、今朝も不馴なとぎ音を聞いて、かしこい雀は早速飛んで來た、でも今日は餘程注意したゝめに僅にかぞへられる程にしか無かつたが折角來た雀に氣の毒なので、こぼさんだけのお米を又投げてやつた。

あさがほ

麻布　ともこ

此春迄の伯父様に頂きしあさがほ、日毎培ひししるし見えて、昨日蕾を二ツと數へぬ、今朝いつになうはやく起出で見れば、うれしや三ツ綻びぬ、大きやかなる葉のかげにてそれと氣づかざりしものか、すこし小さきもいとほしうて、やがて露散ると見て、一片は例の詩集に、餘は花の心に任せぬ。

初秋の感

備中　大塚松子

秋は大方ものかなし、月すむ野邊の草むらに松蟲、鈴蟲等のなき出たる殊に哀深し、ふけ渡りて、かりがれのなき渡る夜、何處よりか、衣を打つ音トン／＼とかすかに聞ゆる等哀れは一入まさりて覺ゆ。

蟬刺

伊勢　綱野ふみ

「誰か此枝で鳴いたよ」

「ナア、彼の枝の下裏に居る、ソラー」

「靜かに、靜かにッ……、此方へ來てはいかん、オイ君靜かにッてば」、しなやかな細竹の先に、もちの練り着いたのをもつて、拔き足差し足忍んで行く腰付きのお可笑さ、やう／＼近寄つて樹隱れから蟬の背中を目掛けてつッと刺し込むだ、うまく覘ひ外れて松の皮目にもちがへばり着く、蟬はヂーッと一聲高く叫んで身體を横さまにして向の茂みに飛んで了つた、二人は茫然と恨めしさうに、「チエッ、馬鹿なッ、生命拾いめ」、

花ちやん

北海道　肥田みち子

淋くなつたお月樣をいたゞいて、私はいつもの通り背戸の柿の實をかぞへるともなくかぞへながら深呼吸をしてゐると、新家の花ちやんが可愛らしい聲でみつちやん御早うといつて通り過ぎた、こんなに早くどこへいつたのかしら、きつと鎭守樣へ御詣りにいつたのにちがひない、それにしても花ちやんの御母さんの病氣はまだなほらないのかしら、夜も充分にやすまないとみえて、御顏の色の惡いこと、ほんとにかわいさうだ、右の手に白百合の花をもつていたのも御母さんを慰さめるためなのでせう。

雨の窓

岡山　富山千とせ

雨がふつて居るので洗濯もできず、妹の人形の着物を縫ふ、晝からは女學世界の投書の原稿を考へたが、ひとつもでゝこない、あきてきたので窓からのぞいて外を見る、向ふの赤壁のうちの漁好きの兄さんが網をつくろつて居る、姉さんが縫物をして居る、一向面白くない、目を庭にうつすと、お池の中へ降る雨が美しく圓い模樣をいくつも書いて居る、時時緋鯉がはねて模樣をこはしてしまふ。

明方

岩代　華香子

お寺の鐘がゴーンとなつたので目がさめた、あの危い階だんを、作藏がねむい目をこすりながらがたり／＼と上つて、力一パイ放つた音だな、などゝ床の中で考へる、やがてあちらでも、こちらでも鷄がなく、車井の音がする、雨戸くる音がする、野良に出る農夫の鄙歌も勢よく聞える。

紀念日

滋賀　野崎あい子

今日は私の紀念日である、二年前の今日、私は初めて此家の門をくゞつた、初めて丸髷に結つたのも、初めて肩上げを落したのも今日であつた、實家を出る際、妹の幾代ちやんが前後不覺に泣いたのもよく覺えて居る、銀燭輝く下に、三三九度の盃を交したのも今日である、其夜早速良人とホネームーンの相談をしたのも未だあり／＼と腦裡に刻まれてある、あゝ二年前の今日こそ、私が一生に最も樂しみな嬉しい日であつた。

朝顔

河内　竹内敬子

夏頃にまいた朝顔がたく山蕾が出来た、私は朝夕欠かさず水をやり、時には日中の暑さも、いとはず手試な鋏縁采りしてやる事もある、其の度毎にこれは白かしら、紫かしら、或は切花なるかと、日々楽んで待つて居たが、今朝漸しくも淡色のゆかしい切花が一輪咲いた。

國を偲ぶ

大和　大西千玉子

月はまどかに美しう澄んで、東山の上へぬつと出た、今日は舊暦の七月十五夜、故郷のお盆だ、君らやん綾子さん等は面白いあそびをしてゐるだらう、内の武夫も随分腕白盛になつてゐるさうだが、同じあの月影に楽しい踊りの真似をしてゐるだらう、あゝ國が戀しくなつた、月日のたつのは早いもの、もう一年中、妾はなんでこんな所へ来たのかしら、早や他人の薄情な都住は嫌になつてしまつた、向ふの街の四つかどから三人の子供が何か綺麗な聲で歌ひながら出て来た、月は棺から一丈ばかり離れて照つてゐる。

○

横濱　長尾哲子

さと一しきり、夕立が蔵り合つた葉櫻に名残をとゞめて過ぎ去つたと思ふと、とぎれ／＼の雲間から光すが／＼しう月があらはれる、自分は湯上りの秋涼しうふみ石づたひに木の陰へ寄つた、一葉の露はきら／＼と美くしう、時々ひやりと襟元へ落つる心地よさ、それにつけても偲ばるるは去年の此頃、あゝ今宵の様に風涼しい夕ぐれは、共に楽しくたはむれ合つたが、此の庭も今は彼の女がかたみの一つとなつた、見上ぐる空は星かげまばゆう、木の葉の雫は涙の雨か、袂はいつしかしつとりなつた。

パン焼き

松山　のぶ子

パン菓子を焼いて見ませうと妹の發言に、早速妹はお隣で天火を借りて来て火を發せば、私は擂鉢に玉子三つを破り入れて能くかき交ぜ、白砂糖五十匁を入れ、擂木にてつぶのなくなる迄擂りて、ベキングポーダ二匁、とメリケン粉一升と、水少量を加へ、再び擂りてく濃くドロ／＼になりし時形箱へ流しこみて天火にのせ、ホツと一息吐くと、妹が姉さんパンは却々面倒ふだけれどもう安心〃と云ふ、ドーして是から　が大事〃、火加減が一番だから、斯して廿分時間程して天火より引出て見ると、パンは大きくふくらんで、玉子の匂ひのさも美味しさう、私は妹と顔見合して思はず微笑みました。

殘菊

甲府　古谷喜代子

大方の花は盛りをこそはもてはやすめれど、菊のみはなほうつろひたる程の匂ひなつかしさがいみじう心にしみて、あはれふかうおぼゆる、霜寒くなる頃ほひ、垣根の虫もうらがれて、蟲のこゑもたえ／＼なるに、こゝろながう咲きたるはいとうれし、時雨うつして、吹きくる夕風のかうばしきに、あたら其の香をとよませ給ひしかしこき御遊の昔さへ思ひ出でられてなん。

女學世界
定期增刊

女日用かゞみ

九月十五日 發行

今代婦人の爲めに雜草を刈りて學問の道しるべを爲す者は此日用かゞみなり、讀んで面白く、見て利益になり、婦人萬用の栞集めてこの内にあり。これを繙かば一日の智識を開き、これを閉づれば百年の寶を喪ふ、而かもこれ價の高きを要せず、僅かに化粧石鹼一個に代るべし。

▲女子修身問答
▲作法道しるべ
▲家政獨案內
▲衞生顯微鏡
▲料理四季節用
▲庖厨一百題
▲世帶萬用かゞみ

▲園藝家庭趣味
▲讀書獨合點
▲悍婦百本杭
▲産蓐心得艸
▲食養百味簞笥
▲遊藝玉手箱
▲年中行事古今くらべ

▲交際利害問答
▲衣食必用かゞみ
▲家婦修養燈下の說法
▲諸國風俗往來
▲渡世智惠袋
▲長命安全燈
▲手藝道しるべ

▲人事活断▼

石龍子

▲筑紫のみなし子女へ‖七つの燦爛たる金玉が今や土中に埋もれてあるの卦なり。金玉如何に土中に埋もるゝと雖も、之を掘り出せば其の實益變化せんや。この卦によれば御身等は今や困苦の中に在るが如しと雖も今より五年の内には各々出世して笑ひさゞめく時來ること疑なし。されば御身も婚期少し遅るゝと雖も五年間は二妹を愛して艱難と戦ひ品行方正その職を忠實に務めらるべきこと肝要なり。

▲神奈川縣吾妻萩の露子へ‖懸崖の松その位置危しとて之を他に移し植えんとするには非常なる困難の起るのみならず、移さば或はその上に麗はずして枯るゝやも計り難し。されば御身の良人も現職に留まり當分の内は他意あるべからず。凡て人は何職に拘らずその職を樂しんでその職に斃るゝ覺悟あることそ望ましけれ。然るに嗚呼我が職は前途望みなしなどゝ思へば厭倦の心自ら起り遂に自暴自棄の境界に至るものなり慎しまざるべからず。

▲岩手の薄望女へ‖占よりも寧ろ實地のお話を致すべければ請ふ左の全文を件上に讀み聞かせまゐらすべし。

石龍子も田舎の生れ今年の春久々にて故郷に歸省せり。歸省して見れば高等女學校出身の娘達は大抵悲境に沈めるが多し。これは如何にも不思議のやうなれども熟々その源を考ふれば大に原由ありて存す。乃ち田舎の農家或は商家等の娘達が高等女學校を卒業する頃は早くも十八遅きは廿一二歳、而して學校にて受けたる學問はそれより以上の學校に入るべき階梯にこそなれ、之を實地に應用するに至つては殆んど用に立たず手紙を書かしむれば國語の教師に學びたる、てけり、けん、つる的の花見紀行又は綴らるゝにもせよ込み入りたる談判事の手紙は到底書く能はず、數學は幾何代數の積分までも學びしが算盤取りていざ計算といふことになれば迚も村役場の吏員に及ばず中には「一坪三合五勺の地面」といへる語を聞きて三合五勺とは米を計る枡目の名ならずやと言ひて笑はれたる高女卒業生あり。香の物漬ける法は知らず新しき衣服を裁ち縫ふことは知り居るも破れたる衣服の應用法は解らう筈も無し。帳を持たせて田圃に出すも用に立たず店に坐らせて客の應接をせしむれば、生意氣な語調ばかりを交ふ。さりとて學びし英語を利用して西洋人と會話する程にも到り居らず、學びし漢字は之を綴りて支那人に示す程の力も勿論無し。而して高女卒業生は鋤鍬取る夫も持ちたくなし、店に算盤彈く商人にも行きたからず、小學教員は薄給にて好ましからず巡査や役場吏員にては己より以下の學力なれば夫として望まれず、畢竟するに高等官か實業家か乃至は少佐以上の軍人以上かに嫁ぎたき心起るや必せり、然るに此等の人は田舎に甚だ少きのみならず、稀に有りても先方は相手にして呉れず、彼是する中に年月は人を待たず婚期愈々遅くなりて遂に悲境に沈むなり。これ文部省が教育方針を誤れるより起ることなれども之

を樂みたりとて詮なければ賢い加減に我を折りて結婚せざるべからず。母上にして我が娘は學者なりとの自惚心を除き給はゞ今年中に良縁纏纏としてあり。若し然らざれば御身の言はるゝが如く一生オールドミスにて暮さゞるべからず嘆。

▲山口武久みつ子へ‖是非共四五年を待たざるべからざる卦なり、而して御身は其間正々堂々として淫靡の風に從はず、恰も蓮の泥中より出でゝ染らざるが如きの德を養はるべし。未來恭らず吉なり。

▲加賀再願の愛讀女へ‖庭梅花開かんと欲すれども蟲害交々至るの卦なり。この卦によれば貴女の錯亂せる心は蟲害に譬ふべきなり、故に精神を無邪氣にして來年能はずんば、その來年、その來年能はずんば、その又來年、飽くまでもその目的を達せらるべし而して未だ入學もせぬ中より卒業後の運命だの縁談だのといふことは必ず〳〵念頭を去らるべし。恰も八九歳の兒女が小學校に在るが如く無心ならざるべからず、斯く無心なれば遂に希望を遂げて後の運命縁談は思ひの儘なり、終りに一言す、學問する者は急ぎて急がず、急がずして急ぐの覺悟なかるべからず。

▲北海道から衣女へ‖石龍子より見れば貴女程樂しき身は多く有らずと思ふ。世には小學教育すら受くる能はざる者の多きに貴女は高等女學校までも卒業せり。世には兄弟姉妹の係累多き人も多けれど貴女は善き姉上を有せらるゝに非ずや、世には職なくして飢餓に迫る人も有れど貴女は已に貴き職に就きて、天眞爛漫の兒童を教育せらるゝに非ずや。世には年老いて身の不自由なる人も多けれど貴女は未だ花の蕾ならずや。世には身體虚弱常に藥瓶を離す能はざる人も多けれど貴女は健康なる身ならずや。世には不具の身に生れ緣付くことも出來ぬ人もあれど、貴女は完全なる身體ならずや。數へ來れば貴女程幸福なる人は多く有らず。貴女よく〳〵之を感ふて我が身の幸福を喜ばれなば日を追うて幸福續々來るべけれども不幸々々と歎ては不幸に陥ると知らるべし。

▲北海道秋山小夜子へ‖貴女より左の如き書状を良人に送らるべし。一筆染しまゐらせ候。和殿の御友人へ金子五十圓貸し與へよとの御事に候へ共學問を中途に止めて實業ならぬ山師的の事を爲さんとする人に、縱ひ一厘たりとも補助するは失禮ながら道に非ずと被存候。若し五十圓の資金を以て成功致し候はゞ萬一を僥倖するの心益々起らん、又失敗なさば本人は勿論私宅に於ても五十圓の金子は徒に泥中へ投げると同樣に相成るべく候へば御命令に背くの不本意を忍び斷り申候。これも家の爲、和殿の爲、又御友人の前途の爲、斯く取計ひしことに候へば惡しからず思召し下され度偏に御願ひ上げまゐらせ候。長男も日に增し和殿のお顔にお似申すことの嬉しく、淋しき月日もこれが爲に紛れ暮し居りまゐらせ候かしこ。

▲長野縣夏野ゆり子へ‖石龍子卜筮を取つて之を占へば御身に一點の誠なき所あつて存するが故に良婿に遇らざるなり。夫その次第を申さんに御身は良婿無きが故に他出し妹に其後を繼がせんと決心せられたるに非ずや、これ古語の所謂己の欲せざる所を人に施すものにして

貴殿こそ實に迷惑至極なり。されば御身は飽くまでも家に留まつて縫ひ一生を寡婦にて送らんとも亡兄の祭を絶さゞるの覺悟あるべきなり。眞にこの覺悟を以て萬事を處置せられなば日ならずして天は良婿を御身に與へ給ふこと鏡に懸けて見るが如し。何をか憂へ何をか悶へん。

▲山城吳竹女へ‖大木の將に倒らんとするを一本の杭にて支へあるにも拘らず人あつてその杭を取去らんとする卦なり。この卦によれば御身はその杭にして杭を取去らんとする者は言はずして明なるに非ずや、故に御身は纖弱き女性の身を忘れ飽くまでも男子的の行動を取り斷乎として人の干渉を斥け勇往邁進萬難を排斥し給ふべし。結婚も己の心に染まざる人は斷然跳ねつけ野心者の爪牙にかゝらぬやう注意せざるべからず良縁は來年中に纏まるべし。

▲迷へる母へ‖占はずして判ずれば言ふまでもなく同年の人と結婚するは宜しからざれども卦の上より活斷すれば同年の人と結婚せらる方將來吉なり、知らず何れに從ひ給ふや。

▲大阪辨作女へ‖順風に帆を上げたる卦なり。萬事頓々拍子に行くべければ兄上の成功言ふまでもなし。故に御身は父上の言はるゝが如く良縁を求めて結婚せらるべし、躊躇すべきに非ず。

▲山口田舍可憐女へ‖彈丸雨注の中に在る兵士の卦なり。この卦によれば御身はその兵士に譬ふべし。恐れて退くは身を守るの道に非ず、膽力を大にして奮進せざるべからず。故に御身は打たれても撲られても父の許可を受くるまで一歩も退かざるの覺悟を固めらるべし。父上も遂に御身の心の堅きを愛でゝ許さるゝや必せり。上京獨立は凶なり。

▲近江の從原時枝女へ‖行くべき道あるにも拘らず恐れて進まざるの卦なり。道は何くにあるか曰く衛生顧問の某氏にその事情を打明けて相談せられよ必ず御身の憂を除かるべし。

▲下野七年子無女へ‖卦の上にて判斷すれば必ず子の生るゝ兆あれども、之を設くる道に至つては前者と同じく某氏に相談せらるべし。

▲大和柳生の泣女へ‖眞に物の理非を辨へざる兒童が家に居れば養生に害ありとて菓子一つ呉れざるにも拘らず、外に出れば好むに從ひ珍菓の數々與ふる者あるに似たり。如何に夫を諫めたりとて家に居れば沈鬱に惱める御身の顏を見るに引換へ、外に出れば媚を呈して迎ふる者あれば遂に知らず識らず其方に向ふなり。故に御身は今暫くの間は夫の事を念頭に浮べず自然の成行に任せらるべし。即ち良人も珍菓の中毒否不徳の夢覺めて改心せらるゝ時必ず來るべければ何等憂ふるに足らず。

▲信濃の心配女へ‖御身の罪を數ふれば三なり、其一不不本意なる人に嫁したる事。其二は一旦嫁したる以上は(夫より命ずる外)實家に歸りて攝養するは愛の道に背くこと。其三は男子と兄妹の約を結び、如何に夫の許可ありたりとも交通するの不義なること。況んや手箱の中に在りて夫に發見せられたる手紙は夫の知らざる手紙なるに於てをや。古今東西に亘つて男子と兄妹の約を結びたる女子が、その男子と生涯潔白なる交をなしたるもの恐らく一人も無からん。

石龍子之を占ふに御身は兄として契約せし男子有るが爲にその男子の言行何から何まで甚はしく、爲に今の良人に嫁するに當りても不本意なりしなり、不本意ながら嫁したるを以て良人の言行一々意に滿たず笑へば男らしからずと思ひ、怒れば不親切なる人と怨み、朝に夕に爾々良人に對し、愛の一事は夢露なし、斯くて姙娠、間も無く家に歸りて攝養せんとの申出、良人心の中には我が家に在りて氣樂に攝養して呉れてこそ夫婦の情愛もあるなれと思ひしならんも御身の不平なる顔付を恐れて不心服ながら許しゝなり。而して良人は御身の歸りたる後物淋しきに伴れて世間の夫婦を見れば如何にも睦じきに我が妻は何故我に愛を傾注せざるか、これといふも妻は我が家に來らざる時、兄として契約せし男子あるが爲ならんなど考へ、圖らずも御身の手紙を見れば、こはそも如何に縷々情を籠めたる手紙、事茲に至れば聖人ならざる以上は石龍子とても憤怒の情起らざるを得ず。理非を辨別するの意志に富める貴女よ、位置を換へて男子の心になりて考へ眞に惡かつたと思はるゝならば良人に對し「何を隱しませう妾は今まで御身に愛を捧げざりしが、これより斷然心を改め滿腔の熱誠を盡し奉るべし。兄として契約せし男子へは立派に破約狀を送りこれが爲に先方立腹すれば却て妾の幸なりと喜び申さん。左候へば御腹立は御尤なれど生るゝ子の乳母と思召して生涯お側に侍らし下され度偏にお願申し奉る云々」と申し上げて見給へ、良人必ずや嬉し涙に咽びて御身の罪を許さるゝこと眼前に見るが如し。然るに貴女が飽まで我に罪無しと思び、且つ兄妹の約を結びたる人を慕はるゝならば天の同情を失ひ一生不幸に暮さるべし。これ自業自得如何ともし難し。

▲島津山下の女へ——自然の成行に任せらるべし。此を思ひ彼を思ひて徒に煩悶せんも何等の効なきのみならず却つて災を招くなり故に何事も運と諦めて無邪氣に月日を送らるべし、四五年の中に良縁ありて漸次幸運に向ふなり。

▲大阪浮瀬女へ——御身の行ひは古武士の妻たるに耻ぢぬ所あれども、「それとも他に婚するが善きか」と尋れらるゝその一言が未だ古武士の妻たる精神に違せぬ所あり。御身以て如何と爲す。

▲しのぶの不運子へ——東籬の菊花未だ時至らずして開かざるの卦なり。時至つて開かばその香馥郁その色艶美、人の鑑賞する所となるや疑なし。されば御身も今一二年を待たるべし。意外なる良縁ありて御身の心を滿足せしむべきなり。

▲若狹の病苦女へ——二十日餘に亘りて認められたる數十頁の御書面に依れば、御身は婦人の高山彦九郎的なり。然れども彦九郎は尊王愛國の精神に厚きと同時に總ての情にも厚し。然るに御身は尊王愛國の精神おさおさ彦九郎に劣らざれども良人に對するの情は大に薄し。抑々彦九郎が尊王愛國の熱情に驅られて諸國を遍歴せしは之を爲すべき事情ありし爲なり御身は之と異なり今や太平の御代に在りて徒に井底の蛙、憂慮に過ぐるの行動を取らるゝは夫に對して貞ならず親に對して孝ならざるは即て尊王愛國の精神にも背くものなり。

新刊紹介

△家庭百科全書第九編　佐方鎮子著

女子教育の進歩は近來の快事なるが、敎育の事は一に學校のみの責任なりと思ひ誤りて、家庭に於て注意すべき行儀作法の事などは打すて顧みる者なきに至りしは遺憾に絕えず、此時にあたりて女史の此著の出でたるは誠に喜ばしき事と云ふべし、座禮、立禮、物の進め方、受け方を初めとし、主客の心得、其他衣服、饗應儀式等に就て日常心得置くべき一般禮法を最も丁寧に叙述せられたれば、家庭の讀物として最も適當なるものゝ一なり、定價金四十五錢、博文館發行。

△算術倶樂部　後藤靜香著

著者は長崎高等女學校に敎鞭を執る人、其の豐富なる經驗的の智識を以て數學と文學とを調和せしめ、人をして艷麗優雅なる文學的興味より記帳面なる數學的興味に入らしめんとする最も珍らしき著述にして、巧妙なる算術遊戲あり、敎授參觀談あり、茶話會に於ける趣味ある數學談あり、讀む者をして覺えず倶樂部樓上の人たらしむ、定價金四十五錢、日本橋區本石町寶文館發行。

△小說露　大塚楠緒子著

先に萬朝報に連載して世に持て囃されたるものなり、二人の女學生あり、一人は人を戀し、一人は人に戀されて、孰れも煩悶する所を例の流麗なる筆を以て描かれたるが、その女學校生活は著者自身の回想錄とも見るべく、又乾物問屋を描くに就ては餘程苦心ありたるやに聞けるものなり程ありて流石に手に入つたものなり、定價金六十錢、本鄉區弓町照文堂發行。

△最新中等唱歌集　天谷秀編

在來の唱歌集は歌曲の調和宜しきを得ずして敎授上甚だ不便なりとは往々聞き及びし所なるが、本集は此等の點に就ては特に注意して其の不都合を避けたるが如し、主として中學校及び高等女學校用の目的にて編纂されたるものなれども、家庭の娛樂用又は小學校用としても亦適當のものと思はる、定價金五十五錢、京橋區銀座十字屋樂器店發行。

△あめりか物語　永井荷風著

著者が明治三十六年の秋亞米利加へ向けて出帆してより、昨年の夏佛蘭西へ向けて同地を出帆する迄の間の日記隨筆等を集めしものなるが、由來此種のものは各々獨特の觀察あり、又各地の人情風俗等をも知る事を得て、いくら讀んでも面白きものなり、定價金六十五錢、博文館發行。

△子供西洋服の拵へ方　松枝操子著

經濟と便利を主とする子供洋服は今後社交上の進步に伴ふて益々行はるゝに至る事なるが、この書は小兒服の裁縫術に多年の經驗を持ち、時流に率先して時に新案の工夫を出し、子供洋服の熱心なる傳道者として知られたる松江女史が現今世に行はるゝ一切の子供服に就てこの拵へ方を說明したるものにて寸法の取方、裁ち方より嬰兒服、少女用コート、男兒用水兵服、其外三十餘種の子供服の裁縫の仕方を一々圖畫を以て說明したるものなれば、一と通り裁縫の心得ある人ならばこの書を參考として拵らへ得らるゝ樣に詳しく記述したるものなり、榛正町興部書店、一圓五十錢。

讀者文藝投書歡迎（締切九月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以內）

▲小說（二十枚以內）

▲小品文（十枚以內）

◎和歌、短文は必ず楷書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲小說と小品文は詮考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……	金二十錢
四冊（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二冊）（增刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十三圓	四十五圓
一等	……	十九圓五十錢	三十八圓
二等	五十五錢	十六圓五十錢	三十二圓
三等	四十七錢	十三圓五十錢	二十六圓

▲等級の位置ハ切目等既照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金期切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十一年九月一日發行 第八卷第拾壹號

編輯兼發行人 松原岩五郎

印刷人 山田英二

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所

發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

電話 本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番 三千二百二十九番

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所ありり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衡 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
陸軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

◎胃弱家の根本療法……胃活或は胃活錠は根本より胃の疾病を治し消化液の分泌を促し胃の運動を盛にし以て造化の妙機たる消化機能を活潑ならしめ之をして食物の消化を完全にし鹽酸の作用に依て胃中に入り來る細菌を滅殺せしむる力あるものにして一時的消化藥其他の通常健胃藥と異れり

理想的 健胃劑



(注意)

◎醫藥用胃活錠……は胃活に二三の新藥を加味し目下歐米に實用せられつゝある新式の錠劑にして重に醫藥用として作られしが今回一般の需に應ず而かも其體裁高尚優美にして飲むに水を用ゐず携帶に便なり

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎腸滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	胃活錠
壹圓	壹圓
六拾五錢	五拾錢
四拾五錢	貳拾錢
二拾五錢	

●全國ハ郵送料●

發賣本舖 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

女(後附の二)

怒濤庵 江見水蔭君著　織田東禹君畫

冒險小說

大蠻勇

全壹册

四六判洋裝美本
紙數五百五拾頁
定價金五十錢
郵稅八錢

國民の新要求に應じて出でたる**文壇の大產物**は是なり。從來の冒險小說は、餘りに空想的なり、怪談式なり、變化有るが如くにして實は單純なり。著者此舊套を脫し、**新生命**を加へたる冒險小說を獨創す。基礎を**科學**に置き、又**文學上の價値**を失はざらん事を勉めたるを以て、或は難解の虞れを抱くもあらんが、著者が**老熟**にして若も**活氣**を失はざる**一流**の快文字は、全く此弊を脫却し得たり。故に**少年諸君**の喝采を博するや論無しと雖も、亦**家庭**に入りて**大人方**の賞賛を得るも必せり、殊に**大蠻勇の主人公**たる霧之助が、**百難と苦鬪**の其間に、**南洋航海**の遭難**熱帶地孤島**の生活、**北極近き氷山**の跋跡等の記事は、悉く實聞に依れるを以て抱腹すべき虛僞を語り、識者の嘲笑を被るが如き事は、萬無きを信す、實に是**科學**と**文學**とを結び、**事實を小說**に化したる**大成功の新著**として、江湖に推薦するを憚らざる也。

陸軍中將福島安正君題字　大使館參事官山座圓次郎君書翰

▷全世界探檢家　中村直吉君　押川春浪君共著◁

（蹤跡地圖壹葉挿入）

五大洲探檢記

（口繪は各地珍妙の風景風俗を網羅す）入頁

▷洋裝四六判上製美本◁

第壹卷　亞細亞大陸横行

紙數三百廿頁●正價金四十五錢○郵税六錢

踏破す全世界十五萬哩、歳月を費すこと六年有餘、此日本探檢家の足跡は五大洲到る所に印して、歐米の大旅行家亦た顔色無く、前人未發の大發見あり、鬼神も驚く大冒險あり、眞に破天荒の壯快旅行記は之れより續出せんとす、其第壹卷として現はれし『亞細亞大陸横行』は彼が孤劍飃然韓半島に渡り、支那内地を探檢し、進んで暹羅王國に入りし大旅行記にして、奇談百出、何人も快哉を連呼すべき珍書なり。

第貳卷は南洋方面の快著出づ!・

（後付の四）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

賜天覽

增訂 大日本建國史

木村鷹太郎君著

東京 博文館發行

全一册洋裝菊判總クロース體裁優雅高尚

紙數四百有餘頁

正價金壹圓五拾錢

郵稅十二錢

高崇なる精神、遠大なる抱負、進取活動光明雄健の主義、優美の好尚、勇壯の氣象を以て大日本帝國は創建せられたり。本書は宏大にして意味深重なる神話より筆を起こし、大化の改新を經て國家組織の大系統を成し、民族、國民、國家の自覺及び其れが發表に達するまでの歴史にして、國祖建國の大精神を發揮し、國家の抱負を述べ、國體を論する等、言辭堂々筆法森嚴人をして襟を正うせしむる者あり。建國時期の此民族生活、神話、信仰、道徳、倫理より社會、政治、經濟、實業等の事を記するや整然明瞭、帝王、將士、宰相等諸人物の性格は躍如として目のあたり其等人物に接するの思あらしむ。其の日本民族の優美性及び快活性を記する章の如き。趣味津々たり。本書は又勇壯なる男性のみの建國史たるのみに非ずして、日本女性の建國史たることを忘れず特に建國時代の日本女性に關する長篇の章を設き。女性の高き位置を有し、優美なると同時に有爲活潑又其事業の偉大なりしを叙せしが如き、用意周到と謂ふべし。又民族及び國家の自覺及び其發表を記せる章の如き、實に著者獨特の見識を以てせるものにして、國民心理、日本固有の思想主義、哲理、好向等を明にし、日本民族たる所以を明かにせり。今や帝國の光威八紘に輝き、世界を驚動せしむるに至れる理由を知らんと欲せば、日本建國史に遡るに非らざれば根本的正當の解釋を得ること能はざるべく、本書は實に其が要求に應ずる天下唯一の書たるなり。至醇高尚なる精神に充溢し其筆力の雄健に兼ぬるに文章の美を以てす。之を以て教育家、政治家、實業家を始めとし日本社會全般に通じて最も有益の書となす。殊に學校の教科書參考書たるは勿論、青年男女の必讀書たり。家庭の善良なる讀物たることを保證す。乞ふ陸續御注文あらんことを…………

女(後付の六)

婦女必讀の大全書

◎第一章 總論◎第二章 第一月●產れた時の體重●外廿三項◎第三章 第二月●微笑の愉快●外十二項◎第四章 第三月●一般の發育●外十項◎第五章 第四月●一般の發育●外八項◎第六章 第五月●一般の發育●外八項◎第七章 第六月●一般の發育●外六項◎第八章 第七月●運動術●外六項◎第九章 第八月●生齒と氷●外六項◎第十章 第九月●一般の發育●外十項◎第十一章 第十月●ベビー、アンダルの使用●外五項◎第十二章 第十一月◎小兒の獨り立ち◎外六項◎第十三章 第十二月●一般の發育●外七項◎第十四章 第二年の前半期●言語の增加●精神上及び身體上の發育●外五項◎第十五章 第二年の後半期●外十三 小兒の步行●外、項◎第十六章 第三年の前半期●外十七項◎第十七章 第三年の後半期●小兒の教育●外十三 項◎第十八章 ●第四年より第七年まで●發育の程度●外十一項◎第十九章 柔弱なる兒童●教育に關する知識の必要●外十四 項◎第廿章 ●小兒用食物の[illegible]品◎第廿一章 看病上の要領●體温●外十七項◎第廿二章 看病上の細目●藥布の拵へ方●外十四項◎第廿三章 患者の食物を拵へる心得●外廿項◎第廿四章 ◎諸病看護の注意●外十七項

第八編 簡易治療法

◎總論◎第一章 一般療法及驗溫法●驗脈法、外十五項◎第二章 應急療法●人事不省●虛脫●外十五項◎第三章 臨床療法●甲、消化器に關する病▲胃加答兒▲胃痛と胃痙攣▲外十二項●乙、呼吸器に關する病▲鼻加答兒▲咽頭加答兒▲外九項●丙、皮膚に發する病▲疥癬▲糜爛▲外廿九項●丁、腦神經に關する病▲腦膜炎▲腦振盪▲外十八項●戊、眼に關する病▲結膜炎▲[illegible]▲濕眼▲外八項●己、耳に關する病▲外耳道炎▲中耳炎▲外三項●庚、口內に關する病▲口腔加答兒▲齒痛▲外三項●辛、鼻に關する病▲鼻腔の病▲衄血▲膿漏●壬、婦人に關する病▲月經閉止▲月經困難▲外七項●癸、以上の外の病▲貧血▲腺病▲外十[illegible]項◎第四章 傳染病者處置法●甲、消毒法▲燒却消毒▲蒸氣消毒▲外四項●乙、傳染病の道路▲呼吸器▲消化器▲外二項●傳染病▲腸窒扶斯▲發疹窒扶斯▲外十九項◎第五章 精神病者處置法●甲、精神病の範圍(四項)●乙、精神病の種類(十二項)●丙、精神病者處置法(六項)◎附錄●甲、學校病(五項)●乙、職業的疾病(七項)

新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第九編 禮式と作法

●緒言●第一章 禮法を論ふに二つの目的あること●第二章 拜禮の事二項●第三章 行歩中の禮二項◎第四章 出入に就きての禮二項●第五章 物品扱ひ方四項●第六章 人に物を進むる禮六項●第七章 品物受け方及び進し方三項●第八章 來客相互の心得五項●第九章 衣服に就きて四項●第十章 書簡に就きて●第十一章 饗應に就きて三項●第十二章 儀式に就きて六項●第十三章 作法上一般に心得べき事●第十四章 家內の作法 附錄喫煙の仕方

女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 惣菜料理

●如何なる準備にして料理に取係るべき乎●料理用器具には如何なる種類を要すべき乎●火加減は如何にすべき乎●鹽梅加減は如何にすべき乎●煮出汁は如何にしてそれを取るべき乎●砂糖は如何にして使用すべき乎●味醂は如何にして使用すべき乎●使用濟みの器具は如何にすべき乎●芋類の調理法●蕪菁の調理法●蘿蔔調理法●胡蘿蔔及び牛蒡の調理法●慈姑の調理法●蓮根の調理法●筍の調理法●百合根の調理法●茄子の調理法●越瓜の調理法●南瓜の調理法●冬瓜の調理法●菠薐草の調理法●蕗の調理法●土筆の調理法●たんぽゝの調理法●紫蘇の調理法●蠶豆の調理法●隱元豆の調理法●大豆の調理法●海苔の調理法●茸類の調理法●栗の調理法●柿の調理法●柚子の調理法●銀杏の調理法●土當歸の調理法●蒟蒻の調理法●豆腐の調理法●鰯の調理法●鰶の調理法●鱚の調理法●さよりの調理法●鼠頭魚の調理法●鰆の調理法●鱸の調理法●鯖の調理法●鰹の調理法●鯛の調理法●比目魚及び鰈の調理法●鱧の調理法●あなごの調理法●鮭の調理法●鯉の調理法●鮒の調理法●白魚の調理法●鮎の調理法●烏賊及び章魚の調理法●貝類の調理法●鴨類の調理法●鶏肉の調理法●鶏卵の調理法●鯨肉の調理法●牛肉の調理法●肉類の鑑定法

宮內省大膳寮庖丁 赤堀吉松君
日本女子大學教授 赤堀峰吉君 共著
東京女學館教授 赤堀菊子女史

本町三丁目 博文館 ◀ ▶ 振替貯金口座 第二百四十番 ◀

今回發見せられたる肺病・肋膜・新劑

醫學博士佐藤勤也氏賞賛
京都大學醫學士原榮氏



肺活（はいかつ）

四週分で必ず全快す

効能　肺病　肋膜　肺炎　肺尖加答兒

二週分 壹ヶ五拾五錢　三週分 貳圓參拾錢　五週分 參圓七拾錢

ボン大學醫學博士カウベー氏

●賞賛の一例 佐藤博士は左の賞賛を爲せり

●近時新藥の製品甚だ多しと雖其効力疑ふ可き者多く吾人の持用に加へ得る藥品無かりしが今回發見の肺活主藥を入院患者に服藥せしめしに概ね皆全治せり

▲一例廿五歲女肺結核發熱セキ。はげしかりしが本藥二劑分服用發熱盗汗を治し非常の良効有り患者成績を見て肺病藥中第一の良藥なるを知る

患者姓名	年齡	病名	成績
中島 男	廿六歲	肋膜炎	全治
渡邊 女	三五	肺結核	全治
川本 男	二〇	肺結核	全治
加藤 女	五三	兩肺結核	全治
竹本 女	十八	左肺結核	全治
小森 女	三〇	右肺結核	微効
都築 男	三二	兩肺結核	無効
春日 女	三一	右肺結核	全治
新井 男	十六	肺尖加答兒	全治
山田 男	二一	肋膜炎	全治

諸博士肺病養生書入用の方郵券二錢添申込め

東京市神田區竪大工町拾三 振替口座壹四參壹九

村尾明治堂藥房

⦿生理的好訓練⦿

日本女子大學教授 白井規矩郎君解說

センチュリー式 歩調と行進遊戲

女學校。小學校に於ける

全一冊 菊半截判上製紙數七百頁 正價金六十五錢郵稅六錢

歩調を正確劉麗に行ふは女子に美容を得せしむるの基にして、又た下肢の運動として極めて適切なるものなりと雖、此種に關する著書尠少にして不便なり、本書は白井先生が米國ボストン府體操師範學校制定の歩調法に基き、日本女子大學及び部下の數校に於て實驗の結果各種の歩調法五百餘種を詳說せられ、併せて歐米に於て最近實用せらるゝ嶄新なる十八種の美的行進遊戲と八種の輕麗運動とを百二十餘の挿圖を加へて詳解せられたるものなれば女學校及び小學校用の遊戲として空前の好著なること本書を使用せられたるものゝ等しく首肯せらるゝ處なるべし

⦿運動會の好材料⦿

東京市日本橋區本町 博文館

女（後付の八）

女學世界
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可） 第八卷第拾壹號 （明治四十一年九月一日發行 毎月一回一日發行）

VOL. VIII. （東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所印行） No. 11.